

渋山池遺跡・原ノ前遺跡

(SHIBUYAMAIKEISEKI—HARANOMAEISEKI)

一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅶ

1997年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

渋山池遺跡・原ノ前遺跡

(SHIBUYAMA I KEISEKI—HARANOMAE I KEISEKI)

一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅶ

1997年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会



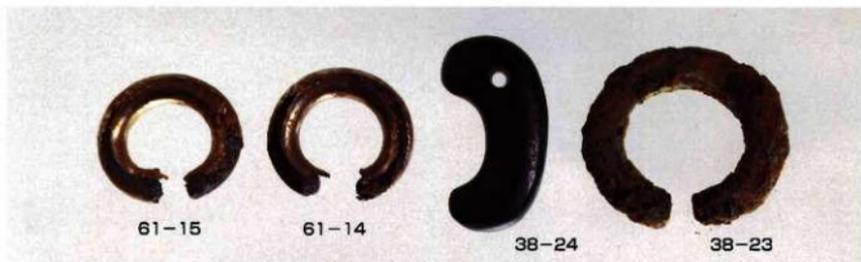
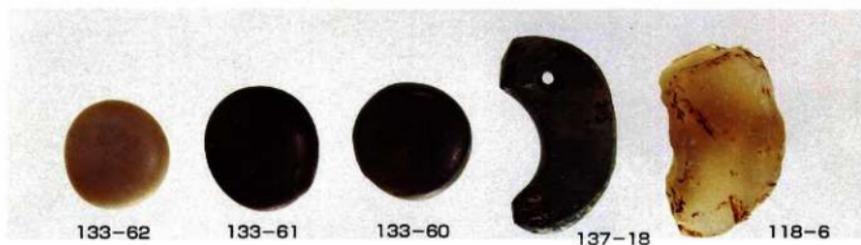
波山池遺跡 須恵器窯1



波山池遺跡 SB-15鍛冶炉検出状況



渋山池遺跡 SK-28 出土遺物



渋山池遺跡出土 碁石・玉・耳環

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして高規格道路安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当道路においても道路予定地内にある埋蔵文化財について鳥根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、7年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術並びに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへの理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた鳥根県教育委員会並びに関係各位に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成9年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 大石 龍太郎

序

鳥根県教育委員会では建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成4年度から一般国道9号安来道路建設予定地内（西地区）に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しておりますが、このほど報告書第Ⅶ集を刊行する運びとなりました。

本報告書は、平成7年度に調査を実施した洪山池遺跡と隣接する原ノ前遺跡での調査成果をまとめたものです。この地域は出雲の古代文化の中心的役割を担った意宇平野と安米平野の間に位置し、周辺では県内最大級の古墳時代の横穴墓群や、全国的にも知られる土作りの工房跡なども調査され、大きな成果を得ることができています。

両遺跡からは縄文時代の狩猟用落とし穴から平安時代の窯跡にいたるまで、古代の人々の生々しい生活の跡が見つかっています。これらは当時の衣・食・住・生産などを復元するうえで貴重なものと言え、この地域のみならず、鳥根県の歴史を考えるうえでも重要な資料となるものです。こうした成果を報告することで、埋蔵文化財を通して地域の歴史を学ぶきっかけになればと思います。

終わりに、調査にあたりご協力いただきました建設省松江国道工事事務所、東出雲町教育委員会をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

鳥根県教育委員会

教育長 清原茂治

例 言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、鳥根県教育委員会が1995年度（平成7年度）に実施した、一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺跡は八束郡東出雲町掛屋に所在する洪山池遺跡・原ノ前遺跡である。
3. 調査組織は次の通りである。

調査主体 鳥根県教育委員会

事務局 文化財課 勝部 昭（課長）、森山洋光（課長補佐）
埋蔵文化財調査センター 宍道正年（センター長）、佐伯善治（課長補佐）、
渋谷昌宏（企画調整係主事）

調査員 埋蔵文化財調査センター 宮沢明久（主幹・調査第1係長）、石倉敬子（教諭兼文化財保護主事）、椿 真治（主事）、林 健介（主事）、亀井彰子（講師兼主事）、松近正巳（臨時職員・調査補助）、大西憲和（臨時職員・調査補助）

遺物整理 石倉敬子、山本千草、門脇卓子、多久和文子、田中路子

4. 発掘作業（発掘作業員雇用、測量発注ほか）については、鳥根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会鳥根支部 布村幹夫（現場事務所長）、原 博明（技術員）、
木村昌義（技術員）、小川剛史（技術員）、高木由佳（事務員）、高崎益美（事務員）
加藤道忠（事務員）

5. 遺物の実測および写真撮影は調査員で行なった。
6. 発掘調査、ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言をいただいた。記して謝意を表しておきたい。（敬称略）

山本 清（鳥根県文化財保護審議会委員）、池田満男（鳥根県文化財保護審議会委員）、
田中義昭（鳥根大学法文学部教授）、渡邊貞幸（鳥根大学法文学部教授）、片岡詩子（玉湯町教育委員会）、新納 泉（岡山大学文学部助教授）、河瀬正利（広島大学文学部教授）、
菱田哲郎（京都府立大学文学部助教授）、和田晴吾（立命館大学文学部教授）、
大谷晃二（鳥根県立八雲立つ風土記の丘学芸員）

7. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。
8. 挿入図中の方位は、国土調査法による第3座標系の軸方位である。
9. 挿入図中の縮尺は図中に付した。
10. 本書で使用した遺構記号は以下の通りである。

S B（建物跡）、S K（土坑ほか）、S D（溝状遺構）

11. 本書の執筆編集は、調査員が協議分担任して行った。
12. 出土遺物及び実測図、写真は鳥根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

插图目次

第1図	洪山池・原ノ前遺跡調査区配置図	3	第37図	SB-09・加工段3実測図	39
第2図	遺跡の位置	4	第38図	SB-09・加工段3出土遺物実測図(1)	40
第3図	周辺の遺跡	6	第39図	SB-09・加工段3出土遺物実測図(2)	41
第4図	調査前地形図	8	第40図	加工段4実測図	42
第5図	遺跡全体図	9~10	第41図	加工段5実測図	43
第6図	縄文時代の落とし穴	11	第42図	加工段5出土遺物実測図	44
第7図	縄文時代の遺構配置図	12	第43図	加工段6実測図	45
第8図	落とし穴実測図(1)	13	第44図	加工段6出土遺物実測図	46
第9図	落とし穴実測図(2)	14	第45図	加工段7実測図	47
第10図	落とし穴実測図(3)	15	第46図	加工段7出土遺物実測図	48
第11図	落とし穴実測図(4)	16	第47図	SD-01実測図	49
第12図	石器実測図	18	第48図	SD-01出土遺物実測図	50
第13図	弥生時代後期の建物調査風景	19	第49図	土器溜まり実測風景	51
第14図	弥生時代・古墳時代中期の遺構配置図	20	第50図	古墳時代終末Ⅱ期の遺構配置図	52
第15図	SB-01実測図	21	第51図	SB-10実測図	53
第16図	SB-01出土遺物実測図	22	第52図	SB-10出土遺物実測図	53
第17図	SB-02実測図	22	第53図	SB-11~14全体図	54
第18図	SB-02出土遺物実測図	23	第54図	SB-11実測図	56
第19図	SB-03実測図	23	第55図	SB-11出土遺物実測図(1)	57
第20図	加工段1実測図	24	第56図	SB-11出土遺物実測図(2)	58
第21図	加工段1出土遺物実測図	24	第57図	SB-11出土遺物実測図(3)	59
第22図	加工段2実測図	25	第58図	SB-11出土遺物実測図(4)	60
第23図	加工段2出土遺物実測図	26	第59図	SB-11出土遺物実測図(5)	61
第24図	斜面部の調査風景	27	第60図	SB-12実測図	62
第25図	古墳時代終末Ⅰ期の遺構	28	第61図	SB-12出土遺物実測図	63
第26図	SB-04実測図	29	第62図	SB-13実測図	64
第27図	SB-04出土遺物実測図	30	第63図	SB-14実測図	65
第28図	SB-05実測図	31	第64図	SB-15実測図	66
第29図	SB-05出土遺物実測図(1)	31	第65図	鍛冶炉実測図	67
第30図	SB-05出土遺物実測図(2)	32	第66図	被熱土坑・土坑実測図	67
第31図	SB-05出土遺物実測図(3)	33	第67図	SB-15出土遺物実測図	68
第32図	SB-05遺物出土状況	34	第68図	SB-16実測図	69
第33図	SB-06実測図	35	第69図	SB-16出土遺物実測図	70
第34図	SB-06出土遺物実測図	36	第70図	SB-17・加工段8実測図	71
第35図	SB-07・08実測図	37	第71図	SB-17出土遺物実測図(1)	72
第36図	SB-07出土遺物実測図	38	第72図	SB-17出土遺物実測図(2)	73

第73図	SB-17出土遺物実測図(3)	……74	第109図	須恵器窯調査風景	……109
第74図	SB-17出土遺物実測図(4)	……75	第110図	奈良・平安時代の遺構配置図	……110
第75図	SB-18~21全体図	……76	第111図	SB-23実測図	……111
第76図	SB-18実測図	……77	第112図	SB-23出土遺物実測図	……111
第77図	SB-19・20実測図	……78	第113図	加工段10実測図	……112
第78図	SB-21実測図	……78	第114図	加工段10出土遺物実測図(1)	……113
第79図	SB-18~21出土遺物実測図	……79	第115図	加工段10出土遺物実測図(2)	……114
第80図	SB-22実測図	……80	第116図	加工段11及び出土遺物実測図	……115
第81図	SB-22遺物出土状況	……81	第117図	加工段12実測図	……115
第82図	SB-22出土遺物実測図(1)	……82	第118図	加工段12出土遺物実測図	……115
第83図	SB-22出土遺物実測図(2)	……83	第119図	加工段13実測図	……116
第84図	SB-22出土遺物実測図(3)	……84	第120図	加工段13出土遺物実測図	……116
第85図	SB-08出土遺物実測図	……85	第121図	加工段14・15実測図	……117
第86図	加工段9実測図	……86	第122図	加工段14出土遺物実測図	……117
第87図	加工段9出土遺物実測図(1)	……88	第123図	SK-27及び出土遺物実測図	……118
第88図	加工段9出土遺物実測図(2)	……89	第124図	SB-24実測図	……119
第89図	加工段9出土遺物実測図(3)	……90	第125図	SB-25・26実測図	……120
第90図	加工段9出土遺物実測図(4)	……91	第126図	SB-24~26出土遺物実測図	……121
第91図	土器溜1及び出土遺物実測図	……92	第127図	SB-27・28実測図	……122
第92図	土器溜2出土遺物実測図(1)	……93	第128図	SB-27出土遺物実測図	……122
第93図	土器溜2出土遺物実測図(2)	……94	第129図	SK-28実測図	……123
第94図	古道1実測図	……95	第130図	SK-28出土遺物実測図(1)	……124
第95図	古道2実測図	……96	第131図	SK-28出土遺物実測図(2)	……125
第96図	土器溜3出土遺物実測図(1)	……97	第132図	SK-28出土遺物実測図(3)	……126
第97図	土器溜3出土遺物実測図(2)	……98	第133図	SK-28出土遺物実測図(4)	……127
第98図	土器溜4出土遺物実測図	……99	第134図	SK-29実測図	……128
第99図	土器溜5出土遺物実測図(1)	……100	第135図	SK-29出土遺物実測図	……128
第100図	土器溜5出土遺物実測図(2)	……101	第136図	SK-30実測図	……129
第101図	土器溜5出土遺物実測図(3)	……102	第137図	SK-30出土遺物実測図	……129
第102図	土器溜5出土遺物実測図(4)	……103	第138図	SK-31出土遺物実測図(1)	……130
第103図	土器溜5出土遺物実測図(5)	……104	第139図	SK-31出土遺物実測図(2)	……131
第104図	土器溜5出土遺物実測図(6)	……105	第140図	SK-31実測図	……132
第105図	土器溜5出土遺物実測図(7)	……106	第141図	SK-32及び出土遺物実測図	……132
第106図	古道3実測図	……107	第142図	須恵器窯1実測図	……133
第107図	SD-02実測図	……107	第143図	須恵器窯1出土遺物実測図(1)	……134
第108図	SD-02出土遺物実測図	……108	第144図	須恵器窯1出土遺物実測図(2)	……135

第145図	須恵器窯1出土遺物実測図(3) ……136	第182図	加工段1付近出土上器実測図 ……166
第146図	須恵器窯周辺出土遺物実測図 ……137	第183図	加工段1付近出土石製品実測図 ……166
第147図	SK-33実測図 ……137	第184図	加工段2実測図 ……167
第148図	SK 33出土遺物実測図 ……137	第185図	加工段2出土師器実測図 ……168
第149図	平安時代土器底部拓本(1) ……138	第186図	加工段2出土石製品実測図 ……168
第150図	平安時代土器底部拓本(2) ……139	第187図	SB-03遺物出土状況 ……169
第151図	SB-29実測図 ……141	第188図	SB-03・SD-01実測図 ……170
第152図	SB-30及び出土遺物実測図 ……142	第189図	SB-03出土遺物実測図 ……171
第153図	SB-31実測図 ……143	第190図	SB-03出土石製品実測図 ……171
第154図	SB-32~34及び出土遺物実測図 ……144	第191図	SD-01出土須恵器実測図 ……172
第155図	SB-35~37実測図 ……145	第192図	加工段3実測図 ……173
第156図	SB-35~37及び出土遺物実測図 ……145	第193図	加工段3出土師器実測図 ……174
第157図	SB-38実測図 ……146	第194図	加工段3出土須恵器実測図 ……175
第158図	SB-39実測図 ……146	第195図	加工段3出土石製品実測図 ……175
第159図	SB-40・41実測図 ……146	第196図	加工段4~7実測図 ……176
第160図	SB-42・43実測図 ……147	第197図	加工段5出土須恵器実測図 ……177
第161図	SB-43実測図 ……147	第198図	加工段6・7出土上器実測図 ……177
第162図	SB-44実測図 ……148	第199図	加工段7・8実測図 ……178
第163図	SB-45実測図 ……148	第200図	加工段8下層出土上師器実測図 ……179
第164図	SB-46実測図 ……149	第201図	加工段8下層出土石製品実測図 ……180
第165図	原ノ前遺跡 第1・4トレンチ土層断面図 ……151	第202図	加工段8上層出土土器実測図 ……181
第166図	原ノ前遺跡トレンチ調査区配置図 ……152	第203図	加工段8下層出土金属器実測図 ……181
第167図	原ノ前遺跡地形測量図 ……154	第204図	SK-04検出状況 ……182
第168図	SB-01出土弥生土器実測図 ……155	第205図	SK-1~4実測図 ……182
第169図	SB-01実測図 ……155	第206図	SK-5・7実測図 ……183
第170図	SB-01出土十師器実測図 ……156	第207図	遺構に伴わない遺物実測図 ……184
第171図	SB-01出土石製品実測図 ……156	第208図	遺構に伴わない石製品実測図 ……185
第172図	SB-02実測図 ……157	第209図	原ノ前遺跡出土古銭実測図 ……186
第173図	SB-02・SD-02実測図 ……158	第210図	原ノ前遺跡遺構変遷図 ……188
第174図	SB-02出土弥生土器実測図 ……159	第211図	原ノ前遺跡遺構変遷図 ……189
第175図	SB-02出土石製品実測図 ……159	第212図	弥生時代後期の集落 ……192
第176図	SB-02埋土中出土土器実測図 ……160	第213図	古墳時代中期の集落 ……193
第177図	SX-01実測図 ……162	第214図	古墳時代終末A期の集落 ……195
第178図	SX-01出土土器実測図 ……163	第215図	古墳時代終末B~D期の集落 ……197
第179図	SX-01川上不明土製品実測図 ……164	第216図	奈良時代の集落 ……199
第180図	SX-01出土石製品実測図 ……164	第217図	平安時代の集落 ……200
第181図	加工段1実測図 ……165		

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	7	第2表 落とし穴一覧表	16
--------------------	---	-------------------	----

図版目次

巻頭図版1 渋山池遺跡 須恵器窯1、 SB-15 鍛冶が検出状況	図版30 古道1
巻頭図版2 渋山池遺跡出土遺物	図版31 古道3
渋山池遺跡	図版32 SD-02、土器溜1
図版1 SK-33 出土遺物	図版33 加工段9
図版2 渋山池遺跡・原ノ前遺跡遠景	図版34 加工段11・12
図版3 渋山池遺跡調査前全景	図版35 SB-24~26
図版4 渋山池遺跡遠景	図版36 SK-27、SK-28、SK-30
図版5 渋山池遺跡全景	図版37 須恵器窯1 検出状況
図版6 渋山池遺跡全景	図版38 須恵器窯1 縦断七層
図版7 SK-03、SK-05、SK 06	図版39 須恵器窯1 横断上層
図版8 SK-09、SK-14	図版40 須恵器窯1 横断土層、遺物出土状況
図版9 SB-01	図版41 須恵器窯1 遺物出土状況
図版10 SB-02・03	図版42 SK-33
図版11 SB-02 溝断面	図版43 SB-30
図版12 加工段2	図版44 SB-29、SB-31、古道4
図版13 SB-04	図版45 SB-01 出土遺物、SB-02 出土遺物
図版14 SB-05 床面遺物出土状況	図版46 加工段1 出土遺物、加工段2 出土遺物
図版15 SB-05、SB-05・06	図版47 SB-04 出土遺物、SB-05 出土遺物
図版16 SB 07・08、SB-09・加工段3	図版48 SB-05 出土遺物
図版17 加工段4、加工段6 遺物出土状況	図版49 SB-09 出土遺物
図版18 加工段6	図版50 加工段6 出土遺物、加工段7 出土遺物(1)
図版19 加工段7 遺物出土状況・土層、 溝状遺構1、遺物出土状況・土層	図版51 加工段7 出土遺物(2)、 建物SB-07・10 出土遺物
図版20 SB-10 遺物出土状況、 SB-11~14	図版52 SB-15 出土遺物、SB-11 出土遺物(1)
図版21 SB-11 遺物出土状況	図版53 SB-11 出土遺物(2)
図版22 SB-11~13 遺物出土状況	図版54 SB-11 出土遺物(3)
図版23 SB-12 遺物出土状況・土層	図版55 SB-12 出土遺物
図版24 SB-15・加工段8	図版56 SB-17 出土遺物(1)
図版25 SB 16、SB-17 遺物出土状況	図版57 SB-17 出土遺物(2)
図版26 SB-17	図版58 SB-08 出土遺物、 SB 18~21 出土遺物、 SB-22 出土遺物(1)
図版27 SB-18 付近	図版59 SB-22 出土遺物(2)
図版28 SB-22	図版60 SB-22 出土遺物(3)
図版29 古道1・土器溜3~5	図版61 加工段9 出土遺物(1)
	図版62 加工段9 出土遺物(2)

- 図版63 土器溜1出土遺物、土器溜2出土遺物
 図版64 土器溜3出土遺物、土器溜4出土遺物
 図版65 土器溜5出土遺物(1)
 図版66 土器溜5出土遺物(2)
 図版67 S D 0 2出土遺物、加工段1 3出土遺物
 図版68 S B - 2 4 ~ 2 6 出土遺物、
 S K - 2 8 出土遺物
 図版69 S K - 2 9 出土遺物、S K - 3 0 出土遺物
 図版70 S K - 3 1 出土遺物
 図版71 須恵器窯1出土遺物(1)
 図版72 洪山池遺跡出土ミニチュア土器・
 上鉢・鉄製品
 図版73 洪山池遺跡出土砥石
- 原ノ前遺跡
- 図版74 原ノ前遺跡全景
 図版75 調査前近景、調査後全景
 図版76 S B - 0 1 検出状況、S B - 0 1 完掘状況
 図版77 S B - 0 2 検出状況、
 S B - 0 2 上層堆積状況
 図版78 S B - 0 2 付近作業風景、
 S B - 0 2 完掘状況
 図版79 S X - 0 1 土層堆積状況、
 ビット群・S X - 0 1 作業風景
 図版80 S X - 0 1 完掘状況、
 S X - 0 1 付近完掘状況
 図版81 加工段1完掘状況、加工段2完掘状況
 図版82 加工段3検出状況、加工段3完掘状況
 図版83 S B - 0 3 上面検出状況、
 S B - 0 3 下面完掘状況
 図版84 加工段7完掘状況、加工段5完掘状況、
 加工段4 ~ 7完掘状況
 図版85 加工段4土層堆積状況、加工段5遺物出土
 状況、加工段7土層堆積状況
 図版86 加工段8検出状況、加工段8遺物出土状況
 図版87 加工段8ビット内遺物検出状況、加工段8
 完掘状況
 図版88 先行調査区焼土坑土層堆積状況、S K 0
 1完掘状況、S K - 0 4 礫検出状況
- 図版89 原ノ前遺跡出土遺物(1)
 図版90 原ノ前遺跡出土遺物(2)
 図版91 原ノ前遺跡出土遺物(3)
 図版92 原ノ前遺跡出土遺物(4)
 図版93 原ノ前遺跡出土遺物(5)
 図版94 原ノ前遺跡出土遺物(6)
 図版95 原ノ前遺跡出土遺物(7)
 図版96 原ノ前遺跡出土遺物(8)
 図版97 原ノ前遺跡出土遺物(9)
 図版98 原ノ前遺跡出土遺物(10)
 図版99 原ノ前遺跡出土遺物(11)
 図版100 原ノ前遺跡出土遺物(12)
 図版101 原ノ前遺跡出土遺物(13)
 図版102 原ノ前遺跡出土遺物(14)
 図版103 原ノ前遺跡出土遺物(15)
 図版104 原ノ前遺跡出土遺物(16)

本文目次

序	
序	
例言	
目次	
第1章 調査に至る経緯	……………(橋) ……1
第2章 調査の経過	……………(橋・林) ……2
第1節 浪山池遺跡	……………2
第2節 原ノ前遺跡	……………2
第3章 遺跡の位置と環境	……………(橋) ……4
第4章 浪山池遺跡	……………(橋) ……8
第1節 遺跡の概要と時期区分について	……………8
第2節 縄文時代の遺構	……………11
第3節 弥生時代の遺構	……………19
第4節 古墳時代中期の遺構	……………24
第5節 古墳時代終末期Ⅰ	……………27
第6節 古墳時代終末期Ⅱ	……………51
第7節 奈良・平安時代の遺構・遺物	……………109
第8節 時期不明の遺構	……………140
第5章 原ノ前遺跡	……………(林) ……151
第1節 原ノ前遺跡の概要	……………151
第2節 トレンチ調査と遺構の概要	……………151
第3節 遺構の概要	……………155
第4節 小 結	……………186
第6章 結 語	……………191
1. 浪山池・原ノ前遺跡の変遷について	……………(橋・林) ……191
2. 加丁段について	……………(橋) ……201
3. 古道について	……………(橋) ……201
4. 平安時代の土器について	……………(橋) ……203

第1章 調査に至る経緯

鳥根県教育委員会は建設省から委託を受け、平成4年度から「安来道路西地区」において埋蔵文化財の発掘調査を開始した。平成7年度は東出雲町出雲郷から安来市荒島町に至る2-2工区(延長8km)のうち、西端部の東出雲町内に所在する遺跡(岸尾遺跡、島田池遺跡、島田遺跡、洗山池古墳群、洗山池遺跡、原ノ前遺跡、勝負遺跡、堂床古墳)、東端部の荒島町内に所在する遺跡(竹ヶ崎遺跡、柳遺跡、柳Ⅱ遺跡、小久白墳墓群、神庭谷遺跡)においてこれまでにない大規模な発掘調査を実施した。特に東出雲町内では6班体制でこれに対応し、町内に残る対象遺跡の調査を全て完了した。

本来、安来道路予定地内の遺跡発掘調査は、昭和50年の「国道9号バイパス」の建設に先立って行なわれた、松江市竹矢町のオノ峠古墳群等の調査からスタートしたものとと言える。以下に平成7年度調査までの経緯・経過の概要を述べておきたい。

- ・昭和47年5月26日付けで、建設省松江国道工事事務所から鳥根県教育委員会に「国道9号バイパス」建設の基本設計資料として、安来市吉佐町～松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無についての照会が行なわれる。
- ・県教育委員会が昭和47・48年に地元教育委員会の協力を得て、対象地の遺跡分布調査を実施。
- ・昭和48年7月、建設省から提示されたルート案をもとに、松江東地区の遺跡取り扱いについて協議。
- ・昭和50年1月22日付で建設省から県教育委員会あてに発掘調査(調査地は松江東地区と安来地区のうち清水～月坂間の一部)の依頼。
- ・昭和50年7月、建設省と契約、同年から翌年度にかけて、松江市竹矢町のオノ峠古墳群等の発掘調査を実施。
- ・昭和55・56年度、57年度開催の「くにびき国体」の主要幹線道となる「松江東バイパス」東出雲町出雲郷～松江市古志原町に至る5.4km間の7遺跡(暫定2車線分)の調査を緊急に実施。
- ・昭和60年、建設省は「松江道路」(「松江バイパス」が高規格道路に設計変更)建設にともない、7遺跡の残り4車線分についての調査を県教育委員会に依頼。
- ・昭和61年度、県教育委員会は依頼部分の発掘調査を開始、平成3年度に調査完了。
- ・昭和61年度、安来市烏田町～同赤江町に至る6.9kmが「安来バイパス」として事業化。同63年度には東出雲町出雲郷～安来市吉佐町間18.7kmの高規格道路「安来道路」に設計変更される。
- ・昭和62・63年度、ルート変更部分の遺跡分布調査を実施。
- ・平成元年度、安来市赤江町～烏田町間6.9km内7遺跡の発掘調査を開始、同4年度に完了。
- ・平成4年度、安来市荒島町～東出雲町出雲郷間8kmを「安来道路西地区」として発掘調査を開始。
- ・平成5年度、安来市吉佐町～同島田町間3.9kmを「安来道路東地区」として引き続き調査。
- ・平成8年度現在、発掘調査はほぼ終了し、安来市荒島町の塩津山遺跡の一部、同久白町の小久白墳墓群の一部を残している。

現地での発掘調査に至る経緯は以上の通りであるが、調査報告書は現在も継続して作成中のものが多く、順次発刊する予定である。

第2章 調査の経過

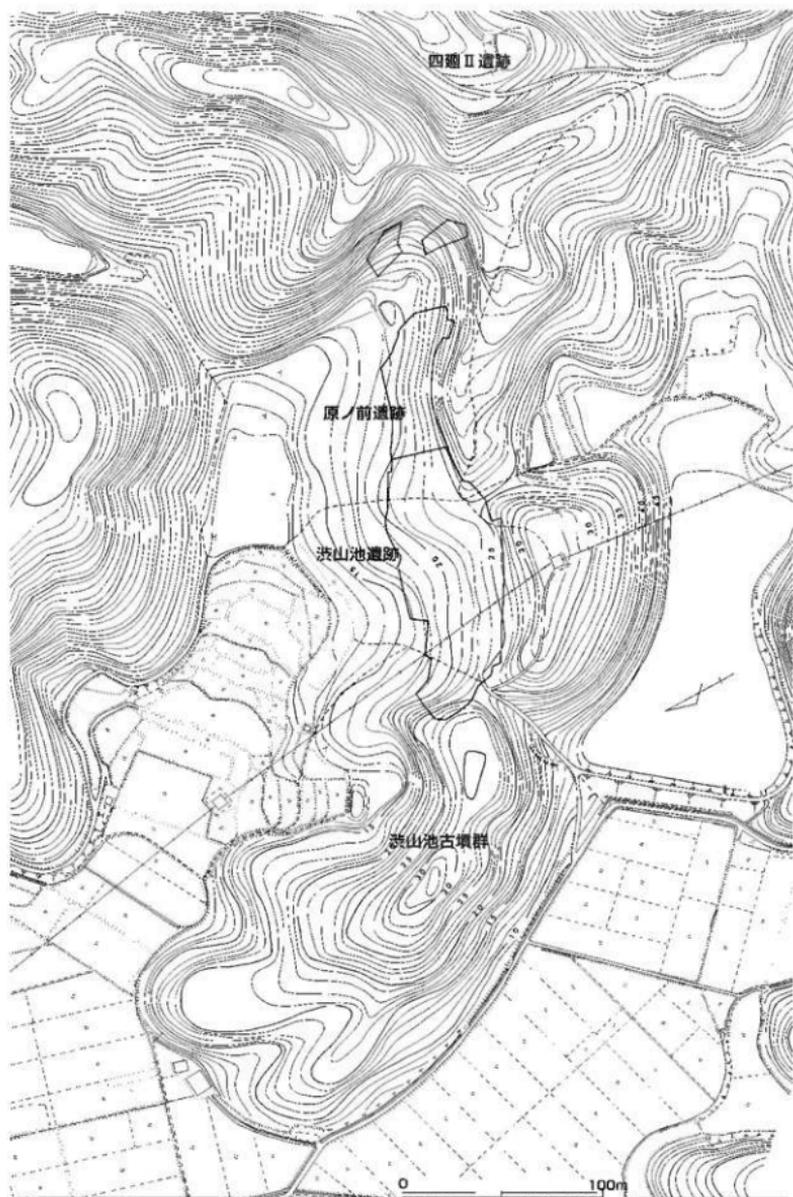
平成4年10月末～11月にかけて遺跡の概要等を把握するためトレンチ調査を行なった結果、両遺跡からは多数の柱穴や弥生時代後期～奈良時代の遺物が出上り、この時期の集落跡と認識されることとなった。この時点では調査地点や遺跡の境界について平成6度の調査区とやや異なる部分があり、以下に調査過程を記述する中で、この部分についても説明を加えておきたい。

第1節 渋山池遺跡

現地調査は平成6年4月17日より開始し、調査区は地形等に合わせてⅠ～Ⅲ区を設定した。Ⅰ区は果樹園造成により著しい削平を受けており、検出される遺構の遺存状態が悪かったが、柱穴が多数を占めることから予想以上に大規模な集落遺跡と認識するに至った。また、Ⅰ区西端部で検出された遺構は調査区のさらに西側に広がる事が判明し、調査区を拡張してⅣ区とした。この部分は非常に急斜面となっていたため、トレンチ調査がなされていなかったが、結果的に遺跡内では最も遺構の遺存状況が良好、かつ密度の高い地点となった。Ⅲ区は遺跡東側の平坦部に位置しているが、遺構の検出状況から、隣接する原ノ前遺跡との境界(山道)を東に変更して、この増加面積部分をⅤ区とした。また渋山池遺跡の調査対象地が西側に拡張したため、原ノ前遺跡の調査は別荘により対応することとなった。この間、Ⅱ区の北側部分やⅢ区からの廃土処理が困難となり、やむなくⅠ区の大半を調査終了後に廃土置場として調査を継続した。11月30日には遺跡のほぼ全容が明らかになったことから、現地指導会を開催し、最終的な調査方法や、遺構・遺物の検討を行なった。その後12月9日に周辺の各遺跡を含めて現地説明会を開催し、12月27日に一部の測量等を残して調査を終了した。年明けには須恵窯窯の考古地磁気調査を行なったほか、部分的な補足調査を行なったが、積雪のため完了したのは3月中旬となった。最終的な調査面積は5,564㎡である。

第2節 原ノ前遺跡

渋山池遺跡の東に隣接するこの遺跡は、前述したように遺跡西端部が東側に変更され、当初はよりやや調査対象面積が縮小している。また5月24日に、急遽この遺跡東端部の尾根を開削することとなり、渋山池遺跡の調査を中断して、この部分の調査に入った。検出した遺構は土坑1基のみで、遺物もほとんど出土しなかったこと、さらに周辺地形には大規模な土砂崩れの痕跡が見られることなどから、東端部の調査区も当初よりやや縮小することとなった。こうした経緯を経て、9月4日に新たため遺跡本体部分の調査を再開し、トレンチ調査時の予想通り古墳時代中期の集落等を検出した。さらに同時期の玉作関連遺物なども認められ、渋山池遺跡とは異なる時期の集落が中心となり、むしろ東側丘陵部にある四廻Ⅱ遺跡との関連が注目されることとなった。この間調査指導会・現地説明会などを開催し、12月22日に調査の大半を終了した。翌年には積雪等の悪条件の中補足調査等を実施し、余調査が完了したのは2月23日であった。総調査面積は3,728㎡である。



第1図 洗山池・原ノ前遺跡調査区配置図(1:2,500)

第3章 遺跡の位置と環境

洪山池・原ノ前遺跡は島根県東部、八束郡東出雲町楯屋に所在し、中海南西部沿岸に位置する。この一帯は標高50m前後の南北に長い低丘陵が東西に連続する地形となっており、丘陵北側は現在中海まで約2.5kmの平野となっているが、古代においては中海が丘陵先端部、もしくはやや内陸部まで入り込んでいた可能性もある。こうした地形に位置するため、丘陵と丘陵との間に位置する谷部が可耕地として利用され、当時の集落がこの谷部を一つの単位として成立していたものと考えられる。谷自体の面積は全体として狭いものであるが、中には須田地区や意東地区のようにやや広い平野を形成している地域もある。この点は占墳時代後期を例にとれば、木遺跡周辺のような狭い谷部には横穴墓群が、前述した広い谷部では横穴墓のほかに横穴式石室墳がそれぞれ1基ずつ見られることにも関連すると考えてもよいだろう。こうした地形は穴道湖・中海沿岸では普遍的に見られ、その連続性を絶つ形で松江市の意宇平野・持川平野、安来市の能義平野などの広大な沖積平野が存在している。人規模な遺跡はもちろん後者に多く存在しているが、前者のような小地域に存在する遺跡とそのつながりが果たしてきた歴史的役割も見過ごしてはならない点であろう。

木遺跡は東出雲町の歴史資料を追加した以上に、こうした意味においても重要な資料を数多く提供していると言える。以下では東出雲町内の遺跡を中心に紹介し、この小地域の歴史を概観しておきたい。

旧石器時代

この時期の遺跡は町内ではこれまで見つかっていないが、周辺では松江市大庭町の下黒田遺跡、同東津江町の石台遺跡で旧石器が出土しており、他の穴道湖沿岸部で近年この時期の資料が相次いで発見されていることを考慮すれば、今後見つかる可能性は高いと言える。地形から見た場合、意東地区の台地状の丘陵部などが候補地となろう。

縄文時代

古くから縄文時代の遺跡として知られる竹ノ花上遺跡では、前期の上器片などが出土しているが、実体の多くは不明である。また意宇平野東南端に位置する春川遺跡では後期の土器片が出土しているが2次的な堆積上中の出土である。こうした中で、平成5年度に同じ安来道路予定地内で調査された鷗宮遺跡では後・晩期の上器片と共に、当時の中海の海岸線を推定させる海性の堆積層が確認されている。これらの遺跡は沖積平野に営まれたこの時期の遺跡が存在することを推測させるが、明確な遺構が見つからないため、集落自体がどこに位置するかは今後の大きな課題と言える。今回洪山池で調査された20以上の落し穴は縄文時代と推定しているが、縄文時代の遺物と考えられるものは石鎌数点のみで、



第2図 遺跡の位置

十器は皆無である。このことは本遺跡周辺は陸上大型獣の狩猟地で、集落はやはり中海沿岸に占地していることを推測させる。松江市北東部の西川津遺跡では縄文時代から弥生時代後期初頭の貝塚を伴う大規模遺跡であるが、これに近い性格の遺跡がこの東出雲中海沿岸にも存在していると考えても不自然ではないだろう。また、縄文土器は出土していないが、安来道路地内の島田遺跡では丘陵頂部の古墳調査の際に、周辺から局部磨製石斧数点が出土しているほか、大木権現山2号墳で縄文晩期のビットが、寺床遺跡では後期の土器片が検出されており、狩猟以外にも内陸丘陵部が利用されたことを示している。

弥生時代

早くから知られる町内出土の粉痕付き弥生土器がある。意東平野の磯近遺跡からの出土品で、他に甕形土器、打製・磨製石斧、十錘などがある。土器は前期末のもので、この時期の中海岸線を推定させる資料である。町教委によって周辺がトレンチ調査されたが、遺構は検出されていない。これとはほぼ同時期と考えられる竪穴住居が前述の寺床遺跡で1棟検出されている。弥生の住居としては県内でも今のところ最古のもので、柱状えぐり入り石斧が出土しており注目される。

中期の遺跡はこれも先の寺床遺跡において、溝状遺構などが丘陵上から検出されているほか、先の鶴貫遺跡など沖積平野でも存在していることが確認されている。

後期の遺跡は安来道路予定地内で本遺跡のほかにも竪穴住居などが検出されているが、いずれも丘陵部に立地するものである。この他、後期末の四隅突出形墳(丘墓)の可能性が指摘される大木権現山1号墳や、後期初頭の洪水砂で埋没した大敷遺跡の水田跡などが注目される。

古墳時代

昭和55年に調査された寺床1号墳は町内のみならず、県内でも最古級の前期古墳である。1辺21m～33mの方墳で、第1主体は竪穴式石室の下半部を意識した礎床に割竹形木棺を置くもので、斜縁二神二甕鏡1面、鉄剣1、勾玉1などを副葬していた。また内行花文鏡を出土した古城山古墳など前期古墳も見られ、当時の政治的位置づけも試みられている。

中期古墳もその前半期と考えられるものが、寺床古墳群や大木権現山古墳群中に見られるが、いずれも小規模な方墳である。これに対して安来道路内では中期でも後半期に築造されたと考えられるものが島田池遺跡、島田遺跡、渋山池古墳群などで多数見られ、大半は円墳となっている点が注目される。中には島田1号墳のように人物埴輪を伴うもの、碧玉製勾玉未製品を出土した堤谷1号墳などがあり、いずれも径10m前後の小墳である点も注意される。

後期古墳としては切り石で造られた出雲東部独特の石棺式石室を持つ栗坪1号墳、近年調査された中意東古墳などが知られるが、他のいわゆる群集墳は全て横穴墓であり、周辺部とほぼ同様な状況と言える。安来道路予定地内では島田池遺跡、島田遺跡、渋山池古墳群など前代で墓域となっていた丘陵部に大規模な横穴墓群が展開しており、特に島田池遺跡では30基以上が調査され、当地域のこれまでの横穴墓研究の常識を超える事実が明らかとなりつつある。

方集落遺跡は以前はごくわずかなものが知られるに過ぎなかったが、安来道路予定地の調査では本遺跡をはじめ、四廻Ⅱ遺跡、勝負遺跡などで中期の玉作工房や、後期の掘立柱建物群などが多数発



第3図 周辺の遺跡

見され、その情報量は飛躍的に増えたと言える。しかし前期にまで遡る例は四廻遺跡の一部にあるだけで、他は平野部の大敷遺跡の上器溜まりが注意されるくらいである。

奈良・平安時代

この時期の遺跡は安来道路予定地の調査で明らかになったものがほとんどであり、この数年で判明した事実が極めて多い。集落としては本遺跡のほかに、岸尾遺跡、島田池遺跡、林廻り遺跡などがあり、いずれも丘陵斜面に築かれた掘立建物を中心となっている。このほかで注目されるのは、奈良時代後期の鍛冶1房と考えられる建物跡が島田池遺跡から見つかったほか、平安時代前半期の須恵器窯が本遺跡と隣接する洪山池古墳群で、さらに勝負遺跡では木棺墓から、島田池遺跡では祭祀的な建物跡からそれぞれ八稜鏡が出土している。

以上各時期の代表的な遺跡を概観してきたが、その大半は今回の安来道路予定地において調査されたものであり、調査報告が全て行なわれた後にはこの地域のみならず、山雲東部地域の歴史に多くの事実を付け加えることとなるはずである。特に隣接地域である意宇平野に国府が置かれる前後の時期の資料が飛躍的に増えたことは、あらゆる意味において非常に重要なことであり、多くの問題を提起することになる。

参考文献

『東出雲町の遺跡』東出雲町内遺跡分布調査報告書 東出雲町教育委員会 1988年

『寺床遺跡・調査概報』東出雲町教育委員会 1983年

『一般国道9号安来道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区J』鳥取県教育委員会 1993年

番号	遺跡名	種別	調査	発見	遺跡名	種別	調査
1	洪山池遺跡	集落	安来道路予定地内調査	46	東出雲中学校校庭遺跡	散布地	
2	塚ノ原遺跡	古墳・集落	安来道路予定地内調査	47	岸尾下等墳	古墳	
3	石取古墳	古墳	松江町教育委員会	48	意田遺跡	散布地	安来道路予定地内調査
4	数日行・聖門古墳	古墳		49	毛塚古墳	散布地	安来道路予定地内調査
5	出雲園分尊	寺跡	鳥取県教育委員会	50	香木遺跡	散布地	
6	島田池遺跡	集落	松江バリエイション予定地内調査	51	上ノ池遺跡	散布地	
7	香川城跡	城跡		52	柳崎古墳群	古墳群	安来道路予定地内調査
8	大敷遺跡	水田ほか	松江バリエイション予定地内調査	53	見ノ平遺跡	古墳	
9	高志古墳群	古墳		54	祝山遺跡	集落	
10	以下谷地区集落跡	散布地		55	蓮子谷古墳群	古墳	
11	以下古墳	古墳		56	野谷遺跡	散布地	
12	鳥居古墳	古墳		57	裏谷古墳	古墳	
13	春日遺跡	散布地	松江バリエイション予定地内調査	58	平賀遺跡	祭祀	
14	赤子平野赤坂遺跡	集落		59	平賀 古墳	古墳	
15	赤木町寺跡	寺跡		60	まつか古墳	古墳	
16	両丈夜待神社内遺跡	集落		61	南免古墳群	古墳	
17	赤松山城跡	城跡		62	虎田古墳群	古墳	
18	竹の北上遺跡	散布地		63	意田遺跡	集落	
19	新野古墳群	古墳		64	孫神社古墳	古墳	
20	阿比嶋跡	城跡		65	取田遺跡	散布地	
21	栗野遺跡	集落		66	柳子下遺跡	散布地	
22	横田神社境内遺跡	集落		67	森田上の古墳	古墳	
23	横松古墳群	古墳		68	水島聖跡	聖跡	
24	赤岡遺跡	散布地		69	嶋崎山城遺跡	聖跡	
25	吉備山古墳群	古墳群	町教委調査	70	水島長瀬し原跡	聖跡	
26	山江古墳群	古墳群	安来道路予定地内調査	71	横谷遺跡	散布地	
27	長谷古墳群	古墳		72	横谷遺跡	散布地	町教委調査
28	岸尾遺跡	集落	安来道路予定地内調査	73	横谷遺跡	散布地	町教委調査
29	大木塚山古墳群	古墳	町教委調査	74	トノ形 遺跡	芋ノ・集落	安来道路予定地内調査
30	林廻り遺跡	集落		75	林廻り遺跡	集落	安来道路予定地内調査
31	安知古墳群	古墳		76	意田遺跡	集落	安来道路予定地内調査
32	赤松遺跡	散布地		77	内田遺跡	集落	安来道路予定地内調査
33	長瀬遺跡	散布地	安来道路予定地内調査	78	芦田沼敷穴墓群	横穴墓	
34	長瀬古墳群	散布地	安来道路予定地内調査	79	吉備山横穴墓群	横穴墓	
35	大栗遺跡	古墳・集落	町教委調査	80	島田遺跡	横穴墓・集落	安来道路予定地内調査
36	猪谷古墳群	古墳	町教委調査	81	島田遺跡	横穴墓・古墳	安来道路予定地内調査
37	山田山古墳群	古墳		82	赤田山古墳群	横穴墓・古墳	安来道路予定地内調査
38	田ノ池 遺跡	古墳	安来道路予定地内調査	83	穴ノ輪穴墓群	横穴墓	安来道路予定地内調査
39	大敷遺跡	散布地		84	芦田沼敷穴墓群	横穴墓	
40	猪谷遺跡	集落	安来道路予定地内調査	85	高井輪穴墓群	横穴墓	調査
41	安来古墳群	古墳	安来道路予定地内調査	86	中津橋穴墓群	横穴墓	
42	安来遺跡	散布地		87	藤子谷輪穴墓群	横穴墓	
43	東西西遺跡	散布地	安来道路予定地内調査	88	中津橋穴墓群	横穴墓	
44	五反田遺跡	散布地		89	聖門1号墳	横穴式古墳	1996年、町教委調査
45	取田中学校校庭遺跡	散布地		90	湯原遺跡	古墳式古墳	町教委調査

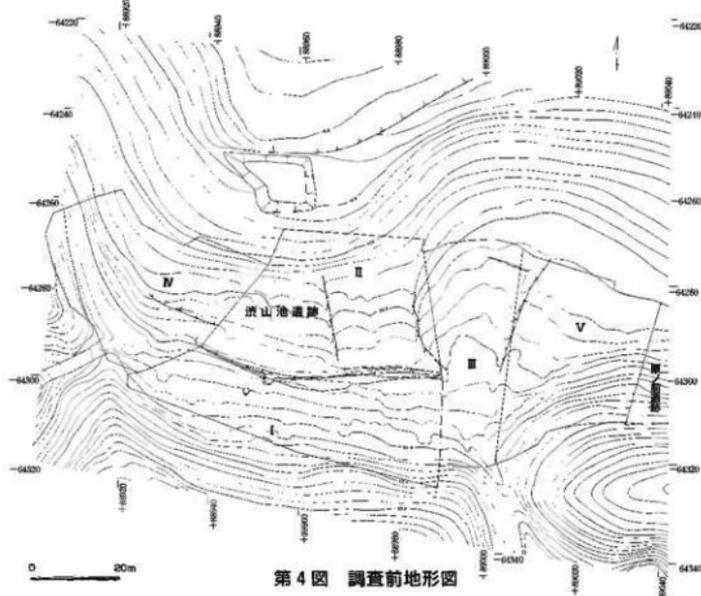
第1表 周辺の遺跡一覧表

第4章 洪山池遺跡

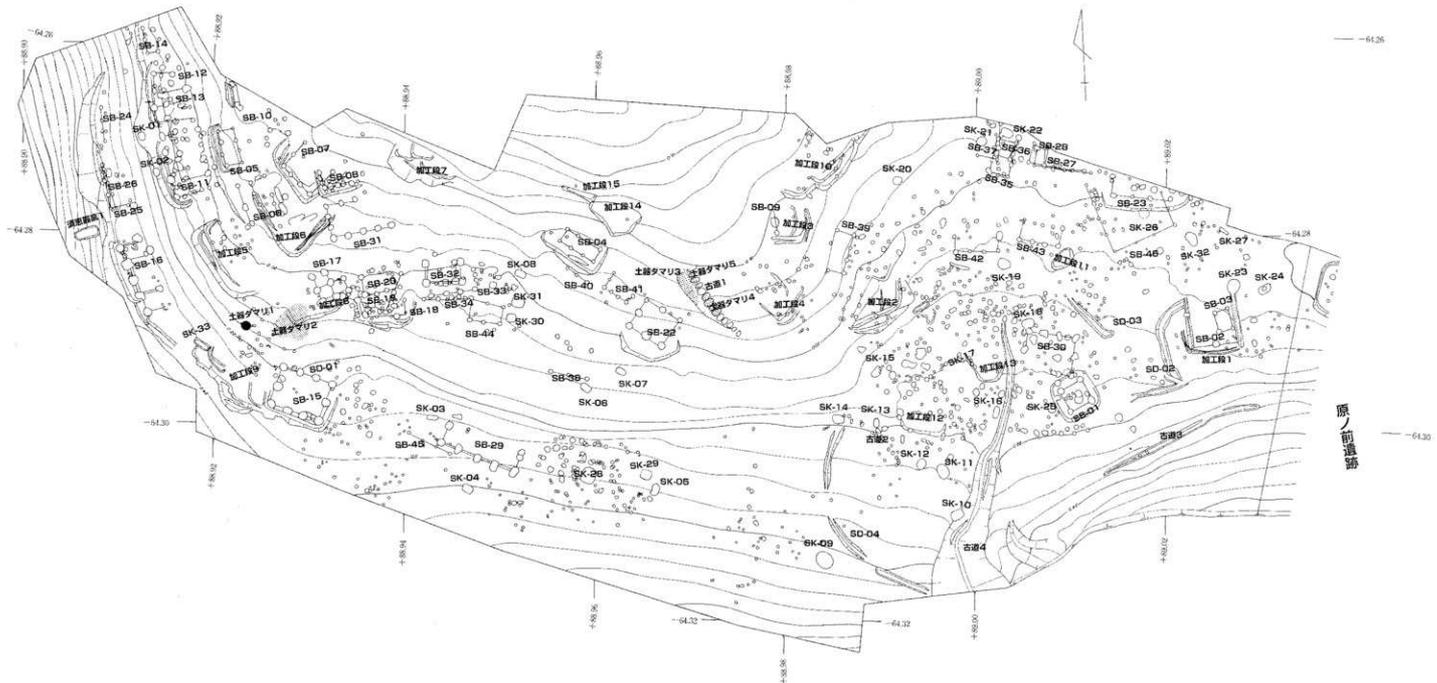
第1節 遺跡の概要と時期区分について

洪山池遺跡は東出雲町揖屋宇洪山に所在し、東側に後述する原ノ前遺跡が、西側に洪山池古墳群が隣接する。とくに原ノ前遺跡とは本来一体的な遺跡であり、地形的には谷奥の丘陵斜面、および丘陵裾部の緩斜面に広がるものである。また、遺跡内の大半は最近まで果樹園として利用されており、旧地形を残さないほど造成された部分も多い。

検出された遺構は縄文時代と推定される落とし穴から平安時代の須恵器窯跡まで多岐にわたるが、そのうち主要な部分を占めるのは古墳時代終末期の集落跡で、遺物量もこの時期のものが圧倒的に多い状況であった。集落を構成する遺構は、各時期ともいわゆる掘立柱建物がほとんどであるが、性格不明の加工段・土坑なども多く、さらにそれらの組み合わせは時期により異なる様相が認められた。この他にも集落の変遷を考えると、非常に興味深い現象も多く、一遺跡の中で集落変遷がこれほど理解しやすい形で明らかになったことは県内でも数少ないものと言える。しかし、各時代を示す遺物、特に須恵器や土師器の編年は当地域ではまだ確立されておらず、ここでは遺跡の現状に即して、便宜的かつ編年作業を進めるうえでの一時的仮説によって時期区分を設定した。後節ではこの仮説により遺跡内の遺構を6期に分けて紹介したが、これはあくまでも各時期の遺構の特徴が理解しやすいように行なった区分であり、当遺跡内においてのみ使用するものである。なお古墳時代の須恵器の時期については大谷晃二氏の編年多用したほか、他の時期についても各編年案を参考としており、そのことに関しては結語において記しておいた。



第4図 調査前地形図



第5図 遺跡全体図

第2節 縄文時代の遺構

遺跡の立地は丘陵緩斜面を中心としていることから、当初は縄文時代の遺構も想定していたが、縄文土器は1片も認めらず、この時期に属すと考えられる石鏃が数点出土したのみである。しかし、通例この時期に狩猟用として盛んに作られたと推定される落とし穴が20基以上検出され、一遺跡としては県下でも最多数を占めるほどである。この他、古墳時代を中心とする後の建物跡の下に残存する旧表土下で、径が10cm前後を測る小ピットが多数検出されている。そのひとつひとつを上層遺構のものと区別することは困難であったが、基本的には落とし穴の堆積土に近似した埋土を持っており、何らかの杭列的なものを想起させるものであった。この小ピット群は調査中に十分検討を加えることができなかったため、実測はできる限り行なったが、明確な抽出作業はできていない。こうした理由もあり、ここではこの小ピットが谷部に多く認められる傾向がある点、落とし穴と関連する可能性もある点を指摘するにとどめておきたい。



第6図 縄文時代の落とし穴 (SK-09)

落とし穴 (第8~11図・第2表)

SK-01 (第8図)

古墳時代の建物SB-13を調査中に検出したもので、加工段造成により斜めに2分の1が削平されている。平面は隅丸方形に近く、底面ピットが中央に検出された。かなりの急斜面に立地する。

SK-02 (第8図)

SK-01の南側に隣接する土坑で、古墳時代の建物SB-11により大半が削平され、下部の3分の1程度が残存していたのみである。底面ピットは削平されているものと推定され、検出できなかったが土土や形態から、落とし穴の一部がころうじて残存しているものと判断した。

SK-03 (第8図)

平面は細長い小判形を呈し、断面はやや影れの形態を持つ。底面ピットは中央に掘り込まれている。他の落とし穴と同様、平面長軸方向は等高線に平行している。

SK-04 (第8図)

肥料穴によりやや削平されていたが、全体に残りが良い。平面は隅丸長方形、断面は一部下影れ状となる。土層は漸移的な自然堆積と観察された。

SK-05 (第8図)

最初に検出された落とし穴で、平面隅丸方形、断面下影れ状の形態をもつ。北側にステップ状の段が付き、土層からこの落とし穴に付設するものと判断している。

SK-06 (第8図)

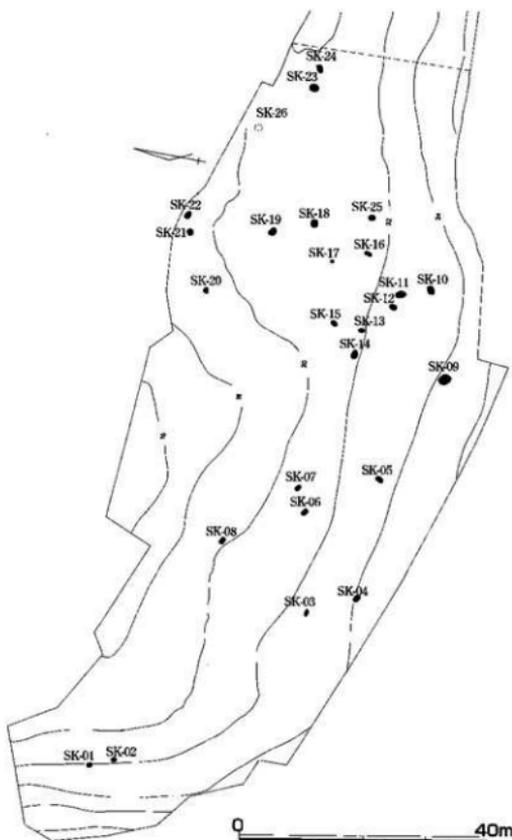
後世の耕作により上半を削平されている。平面は隅丸長方形で、断面はやや下影れ状を呈する。他と異なり底面ピットは長軸上に2穴認められ、細い杭を打ち込んだような痕跡として検出された。

SK-07 (第8図)

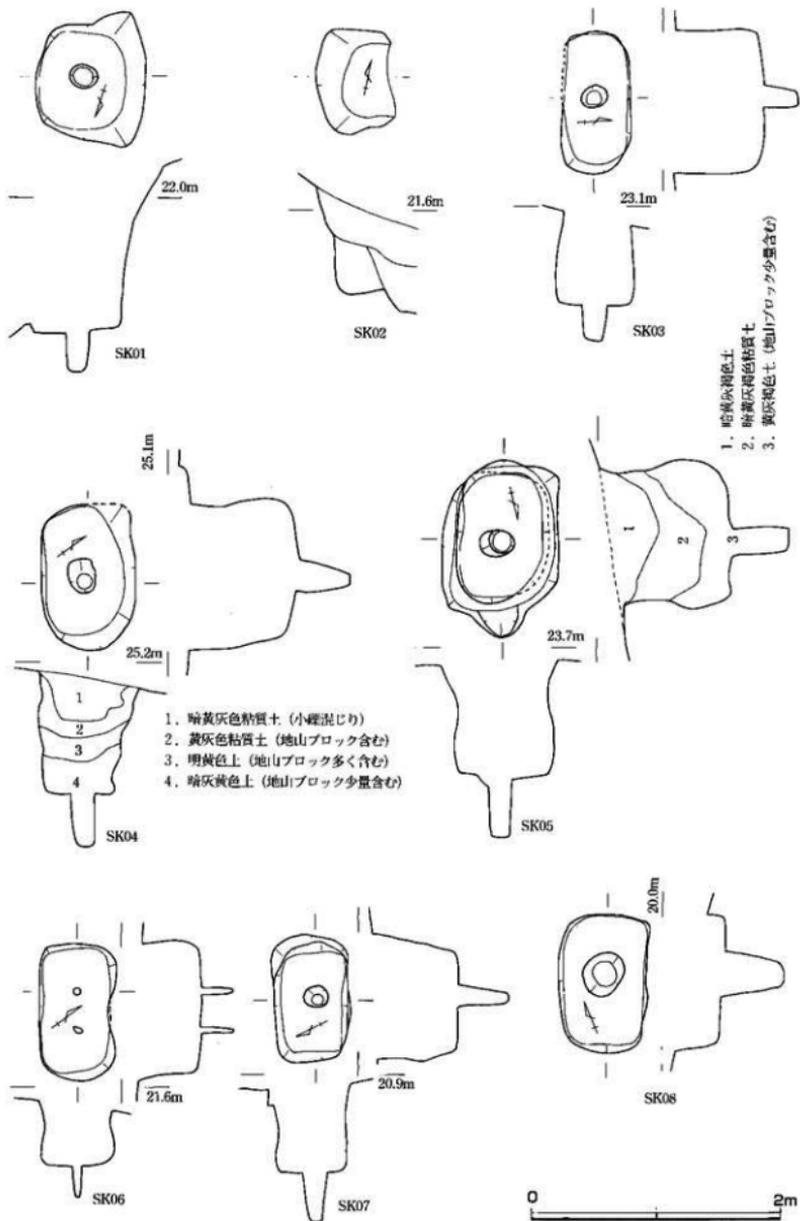
平面は隅丸長方形、断面はわずかに下影れ上を呈す部分が認められる。

SK-08 (第8図)

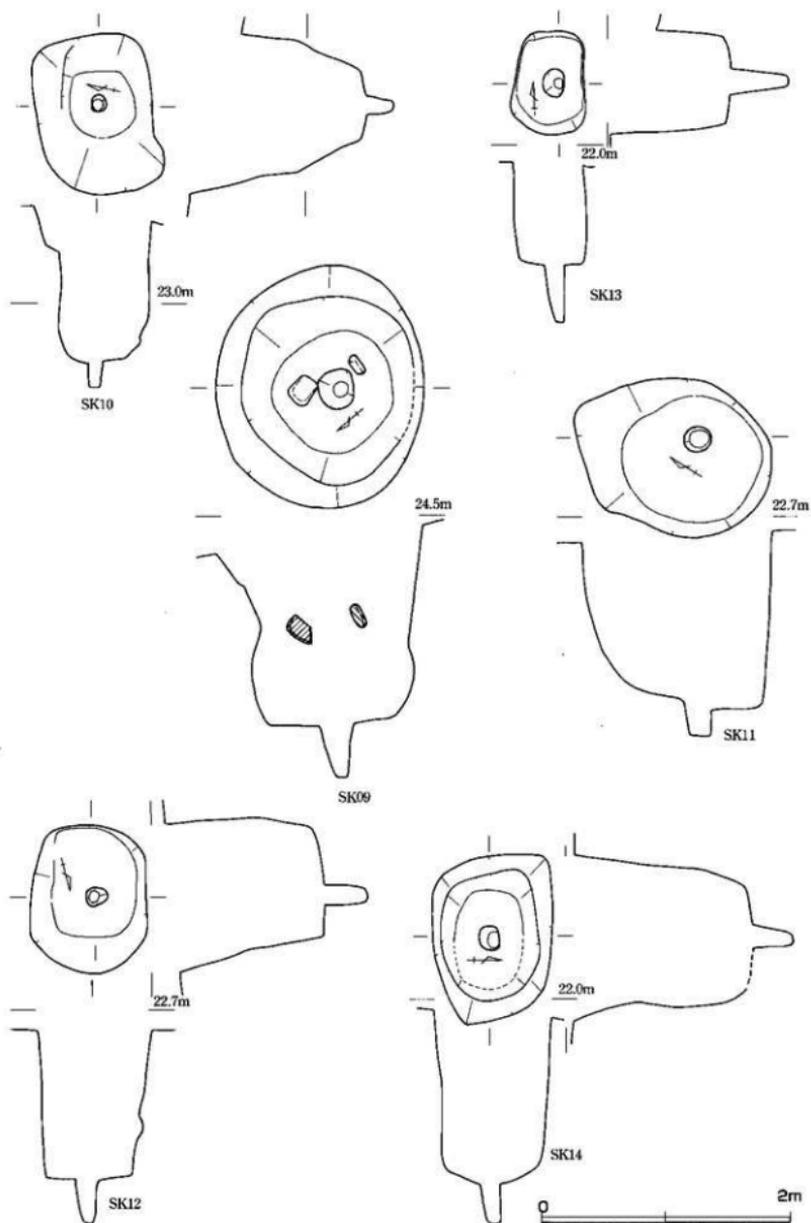
耕作による削平が著しい。平面



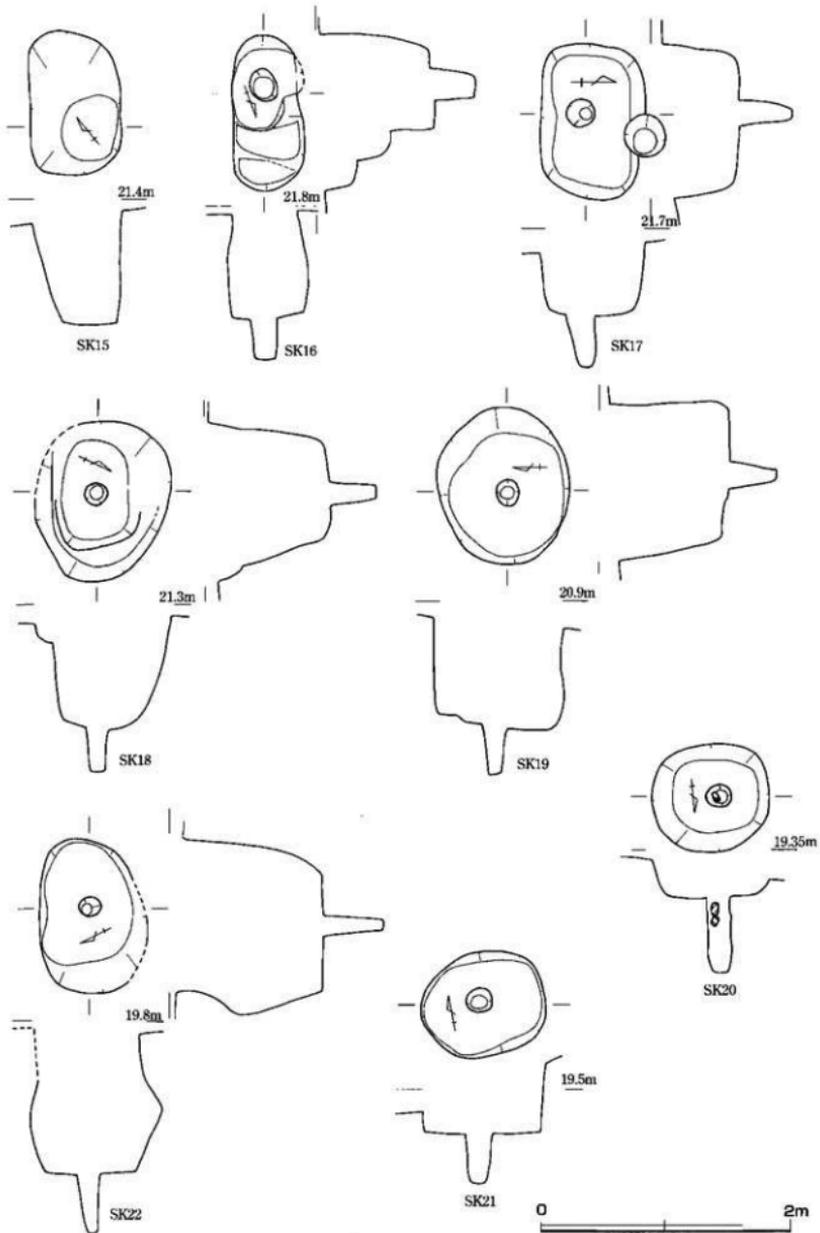
第7図 縄文時代の遺構配置図 (1:800)



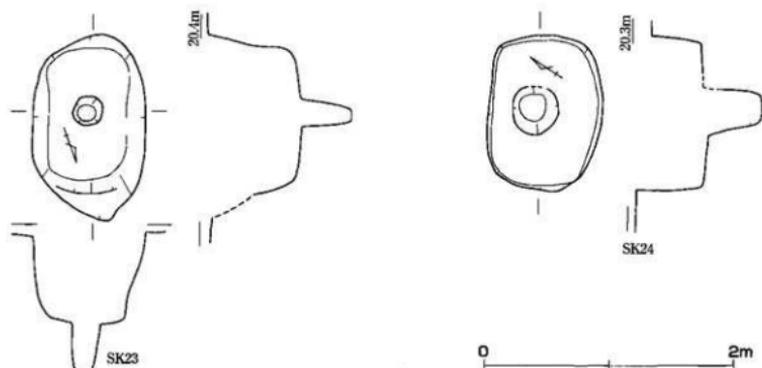
第8図 落とし穴実測図 (1) (1:40)



第9図 落とし穴実測図(2) (1:40)



第10圖 落とし穴実測図(3) (1:40)



第11図 落とし穴実測図(4) (1:40)

遺 蹟 名	平面形	断面形	検出面長幅及	検出面短幅長	長	径	短	底面ビット径	ビット深	底面標高	残存深度
SK-01	B	c	8.6	(7.6)	8.0	7.0	2.1	3.4	2.0	9.0	1.3
SK-02	—	c	(8.0)	—	6.0	—	—	—	—	20.92	(8.9)
SK-03	D	a	11.7	5.5	10.8	5.1	1.0	3.0	2.2	23.0	7.4
SK-04	C	a	12.0	7.6	10.6	6.4	2.2	4.3	2.4	22	10.0
SK-05	C	b	11.2	9.3	10.0	7.4	2.0	4.6	2.2	26.4	10.5
SK-06	D	b	11.2	6.0	10.0	5.4	7×2P	2.6	2.0	9.5	5.2
SK-07	C	b	10.5	6.2	8.0	5.4	1.9	4.0	2.0	10	7.2
SK-08	C	a	11.4	7.0	10.4	6.4	3.5	5.0	1.9	5.2	3.6
SK-09	A	b	19.8	16.6	10.0	9.6	2.8	4	2.2	28.0	16.2
SK-10	B	c	13.0	9.4	5.4	5.2	1.3	2.2	2.2	5.2	2.8
SK-11	A	a	15.6	12.8	11.2	10.4	2.0	3.0	2.1	14	4.4
SK-12	C	c	12.0	9.2	9.0	7.0	1.6	3.6	2.1	3.5	12.0
SK-13	C	a	8.4	5.8	7.0	5.2	1.6	4.8	2.1	10.0	8.6
SK-14	C	c	13.6	9.5	8.0	5.6	1.8	3.2	2.0	5.0	1.4
SK-15	C	c	11.0	7.2	5.2	4.4	—	—	—	20.4	9.0
SK-16	D	b	(12.8)	5.2	6.6	5.8	2.2	3.6	2.0	8.5	9.0
SK-17	C	a	12.8	8.6	10.6	6.0	2.2	4.4	2.1	10.0	6.0
SK-18	C	c	13.2	10.8	8.0	5.4	1.8	3.6	2.0	3.0	9.0
SK-19	A	a	13.0	10.5	10.2	9.2	2.0	4.0	1.8	8.5	9.0
SK-20	B	a	9.5	9.0	6.8	6.0	1.8	6.0	1.8	9.5	3.0
SK-21	B	a	10.0	8.8	9.5	7.5	2.0	4.0	1.9	5.5	5.6
SK-22	C	b	12.5	8.5	10.0	7.0	1.6	5.0	1.8	5.5	12.0
SK-23	C	c	13.0	9.2	10.8	6.5	2.2	4.0	1.9	6.0	7.4
SK-24	C	a	12.8	9.2	11.8	8.4	3.6	4.6	?	?	5.6
SK-25	A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK-26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

A: 円形, B: 隅丸方形, C: 隅丸長方形, D: 長楕円形, a: 壁面が垂直, b: 下膨れ, c: V形

(単位は全てcm)

第2表 淡山油遺跡検出落とし穴一覧表

隅丸長方形を呈し、底面ビットは他と比較して径がやや大きいものである。

SK-09 (第9図)

今回検出されたものの中では最大規模をもつ。平面は不整形円形、断面は下膨れ状を呈している。堆積中に転落したと考えられる自然石が2点出土した。検出面は遺跡全体の中で見ると、最も後世の削平の及んでいない地点であり、作られた当初の深さは検出時のものに20cm程度の表十分を加えた180cm前後になるものと推定される。

SK-10 (第9図)

後世の古道により一部削平を受けていたが、SK-09同様残りは良い。平面は隅丸方形に近く、断面は中程で変換点を持ちながらやや下膨れ状の部分もあるが、全体としてはロート状を呈している。

SK-11 (第9図)

SK-09に隣接するもので、平面は不整形、断面は底面が安定しない不整形を呈している。底面ビットは中央からややずれた位置に掘り込まれている。

SK-12 (第9図)

平面は隅丸方形に近く、壁面はほぼ垂直に近い立ち上がりを持つ。底面ビットは中心からややずれた位置に穿たれている。

SK-13 (第9図)

平面は隅丸長方形、断面はほぼ垂直に立ち上がる壁面を持つ。遺跡内では最小クラス。

SK-14 (第9図)

平面は隅丸長方形に近く、断面はやや下膨れ状を呈しながらも垂直に近い立ち上がりの壁面を持つ。

SK-15 (第10図)

検出面では隅丸長方形に近い平面形であったが、掘り進むにつれ不整形となり、底面も縮小したような状態で、底面ビットは検出されなかった。落とし穴とするにはやや踏襲する部分もあるが、堆積上は他の落とし穴と全く同一で、同様の時期に作られたものであることは間違いないであろう。

SK-16 (第10図)

検出面では細長い小判形を呈していたが、掘り進むにつれて階段状に縮小し、底面は不整形なものとなった。断面はやや下膨れ状を呈する。

SK-17 (第10図)

奈良時代の加工段13に削平された状態で検出された。平面は隅丸方形で、底面ビットは中央からややずれた位置に掘り込まれている。

SK-18 (第10図)

検出面では不整形の平面であったが、下半は隅丸方形に近く、断面形は下膨れとにならないタイプである。

SK-19 (第10図)

検出面、底面ともほぼ円形を呈し、断面は一部がわずかに下膨れ状を呈しているが、全体として壁が垂直に立ち上がる。

SK-20 (第10図)

耕作による著しい削平を受け、底部付近のみ残存していた。平面はやや隅丸方形に近く、底面ビットは他に比較して深く、上部に固定用と推定される自然石が詰め込まれていた。

SK-21 (第10図)

削平により底部付近のみ残存していた。やや隅丸方形気味で、底面ほぼ中央にビットが掘り込まれている。

SK-22 (第10図)

古墳時代以降の柱穴によって切られていた。平面は不整形な長楕円形で、断面は下膨れ状を呈してい

る。底面ピットは深く掘り込まれている。

SK-23 (第11図)

検出面は不整長楕円形であるが、底面付近は隅丸長方形を呈している。断面は下膨れ状となっていない。

SK-24 (第11図)

上部を削平されている。平面は隅丸長方形に近く、断面は残存部に限りほぼ垂直に立ち上がる。底面ピットは径が大きいものである。

SK-25

平面は不整円形であり、堆積土中に自然石が入り込んでいた。谷部の黒色系の堆積土を掘り込んでいたため、底面の検出が十分にできなかった。

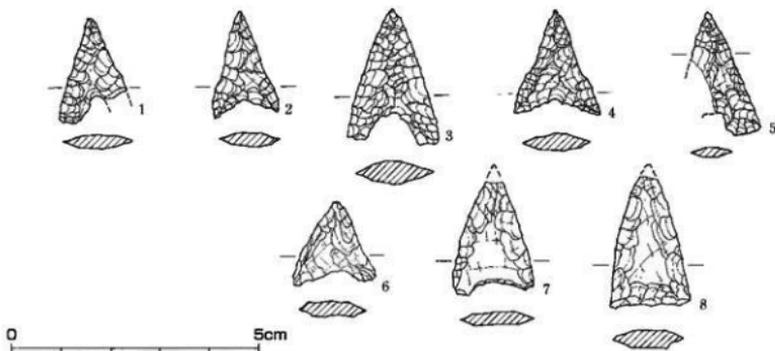
SK-26

奈良時代の建物SB 23により削平されていたもので、堆積土は他の落とし穴と同様であったが、調査終了間際の積雪のため規模形態とも確認することができなかった。

遺構に伴わない遺物 (第12図)

遺跡全体から縄文時代のもので推定される石鏃がわずかに出土している。1～5は黒曜石製、6～8は安山岩製である。

このように石器はほとんどが石鏃で、検出された遺構が多数の落とし穴であることと合わせて、本遺跡が狩猟用の地に適していたとは間違いないであろう。県内でこのような高密度の落とし穴群は今のところ見つかっておらず、この遺跡の立地、地形が狩猟地として最適なものかどうか興味のある点である。



第12図 石器実測図 (1:1)

第3節 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、遺跡東端部にわずかながら集中して検出された。いずれも後期のもので、建物3棟、加工段1カ所が判明しているが、遺物を含まない柱穴のうちこの時期の建物となる可能性のあるものがあるかも知れない。また、東に隣接する原ノ前遺跡西端部においても、ほぼ同時期と考えられる建物が存在し、弥生集落としてはもちろん一体的なものとして取り扱わなければならないだろう。

また土器を中心とする遺物が両遺跡ともごくわずかであることや、集落の中心が調査区の北側に広がっている可能性が強いことなど、留意しておくべき点が多い。いずれにせよ本遺跡が集落としての展開を見せるのはこの時期からであり、以後いくつかの断絶を挟みながらも平安時代前半期まで続く集落変遷の開始期である。



第13図 弥生時代後期の建物調査風景 (SB-02)

建 物

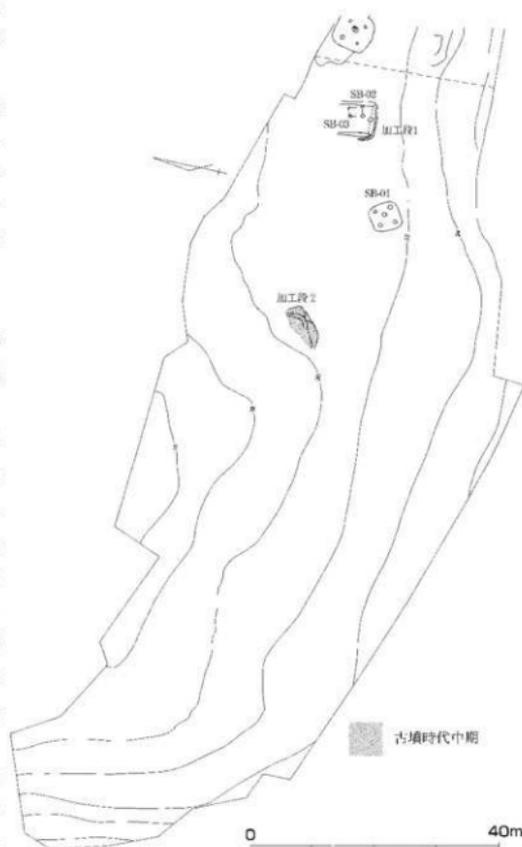
SB-01 (第15図)

調査区南側の丘陵裾部に位置する竪穴建物で、周辺の地形から当時の集落の最南端に位置する可能性がある。また地形的には原ノ前遺跡から南西に伸びる浅くて細長い谷奥部に位置し、原ノ前遺跡検出の竪穴建物もこの谷筋延長線上に位置している。この谷部は縄文時代以前の黒色系の堆積土により遺構の検出が困難な地点であり、この遺構も部分的にその堆積土を切り込んでいた。

検出された竪穴は東西4.4m、南北4.6mの隅丸方形の平面を呈し、4本柱で、中央穴を持つタイプである。

壁体溝は北東隅部で検出できなかったが、元々は全周するものと考えられ、幅15cm前後、床面からの深さは土層観察部分で、6cmを測る。またこの土層観察部分で注意してみると、床面の土間土が壁体溝の上部にまでやや伸びている様子が伺えた。柱穴は東側がやや開くもの、ほぼ正方形に配置する。柱穴掘り方は西側の2穴が床面で径60cm前後、深さ70cmを測るのに対して、東側の2穴は径70cm前後、深さ65cm前後を測り、異なった掘り方をしている。柱痕跡(抜き取り痕と考えられる)が見つかったのはP-1とP-3で、径は18cm前後を測る。中央穴は床面で1辺70cm前後の方形に近い平面形を呈しているが、下部では径10cmの柱穴状を呈している。内部には灰泥じりの土が堆積しており、土層観察からこの中央穴の周囲にドーナツ状の盛土が巡っていることが推定された。この盛土には中央穴から南に向けて、炭化物があたりかまゆき出されたかのように広がっていた。中央穴自体は熱を受けた形跡は確認できなかったが、灰が充填していれば十分炉としての機能を果たしていたと考えられる。

遺物(第16図)は床面に大型の砥石1点が出土したほか、土器小片がわずかに認められた。Iは中央穴付近の床面から出土した高坏の口縁部



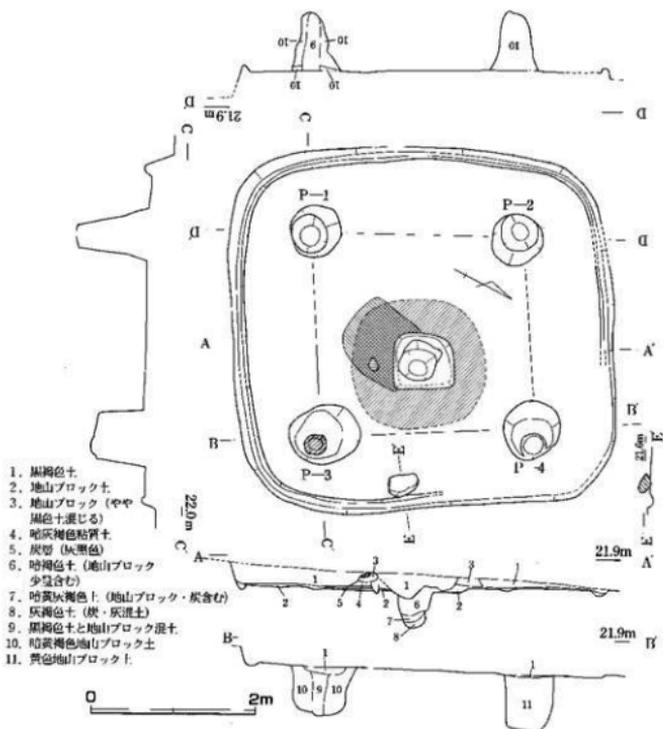
第14図 弥生時代・古墳時代中期の遺構配置図(1:40)

小片で、口径は不明確である。2はP-3出土の鼓形器台の小片で、受け部と推定されるが、口径は不明確である。1・2とも風化が著しく調整等は不明である。3は大型の砥石で、最もよく使用された面を上に向けた状態で出土した。大きさは径37.5~26.8cm、厚さ13.5cmを測る。

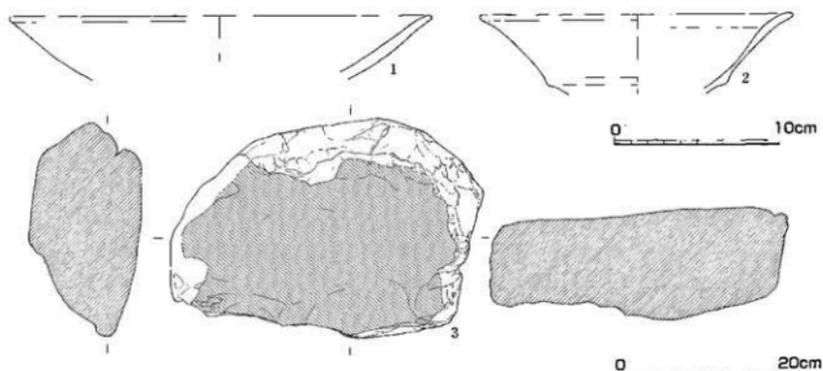
SB-02 (第17図)

SB-01の北東約10mの地点で検出された建物跡で、横持柱と考えられる柱穴以外はいわゆる布堀状の溝に柱を据えた特異なものである。当初はこれを削平して作られた古墳時代中期の加工段1の建て替え痕跡と考えて調査を開始したが、埋土がやや硬質で異なり、全体を見直してようやく把握できた遺構である。遺構は北側で耕作により著しく削平を受けており、全体の規模等は不明であるが、梁行が2間5.2m、桁行数間5.4m以上の規模を持つかなり大型の建物であったと推定できる。

横持柱と考えられる柱穴は1辺約50cmの平面隅丸方形を呈しており、当初は加工段1の壁際上坑として調査したものである。深さは溝よりやや浅く、内部から土器片がわずかに出土した。



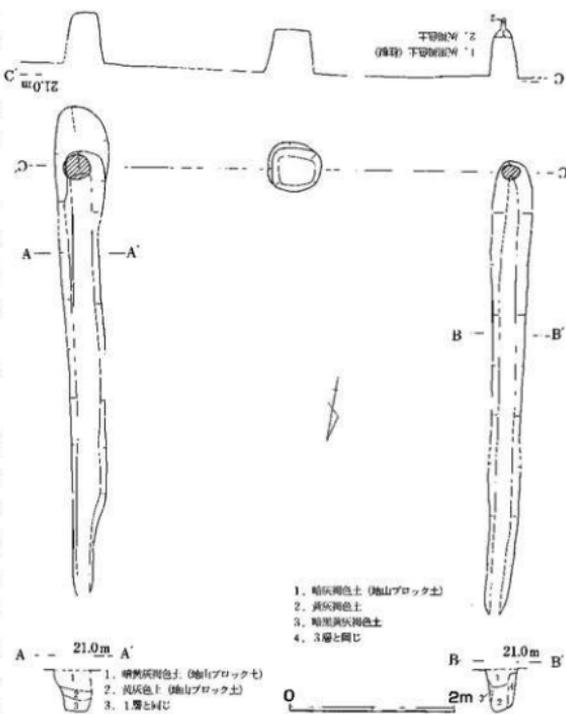
第15図 SB-01実測図(1:60)



第16図 SB-01出土遺物実測図(1・2は1:3、3は1:6)

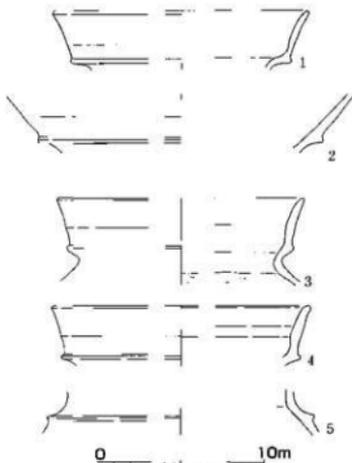
溝は2本とも逆台形に整然と掘り込まれており、いずれも南端部底面に柱痕跡を確認している。東溝の柱痕跡は径25cm前後を測るが、西溝の柱痕跡は底面付近の検出のため径が小さい。また西溝の土層観察用壁(B-B'ライン)で偶然柱痕跡を確認しており、少なくとも桁行方向の柱間距離が1.9m以内であることがわかった。

遺物(第18図)は土器小片が少量出土したのみである。1・2は棟持柱から出土したものである。1は甕の口縁部で、口径は不明である。2は笠形器台の受け部下半と推定されるものであるが、脚部となる可能性もある。3~4は加工段1の調査中に東溝南端付近で出土したものである。3は甕の口縁部小片で、端部はやや先細りで丸くおさめるものである。4も口縁部小片



第17図 SB-02実測図(1:60)

であるが、やや外側に折り曲げる端部処理を施している。5は鼓形器台の小片で、内面の屈曲ぐあいから脚部と判断したものである。1～5はいずれも薄手の作りで、白っぽい胎土を持つ。こうした胎土の特徴は古墳時代前期のもの共通するものであるが、甕の口縁端部処理が定形化していないことなどから、弥生時代後期後半のものとして推定している。

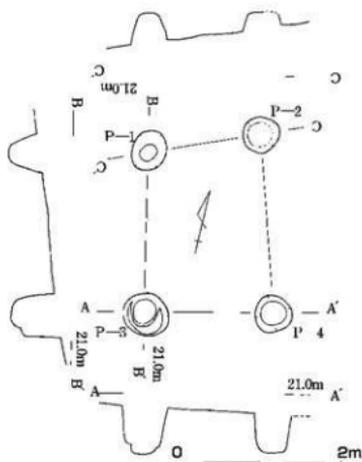


第18図 SB-02出土遺物実測図(1:3)

SB-03 (第19図)

SB-02と重複して検出された1×1間の建物跡で、東側がやや固く柱穴配置を持つ。柱穴は径が45cm前後を測るもので、底面の標高もほぼ同一である。南西隅の柱穴は二段階で、柱の径が30cm以下であることを示している。

遺物は柱穴内から上器細片が出土している。これらは図示していないが、灰白色を呈し均一な砂粒を含むもので、内面はヘラケズリされていること、また柱穴内の埋土はSB-02と全く同一の硬質なもので、古墳時代以降のものとは明確に区別できたことから、前述した建物とほぼ同時期の弥生時代のものとして間違いないと判断した。



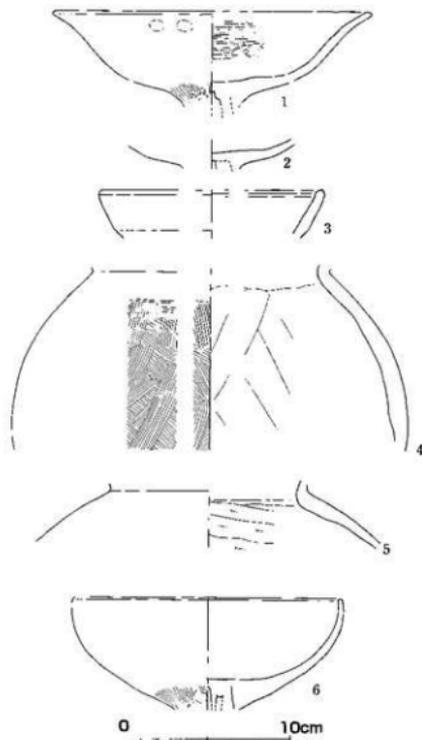
第19図 SB-03実測図(1:60)

第4節 古墳時代中期の遺構

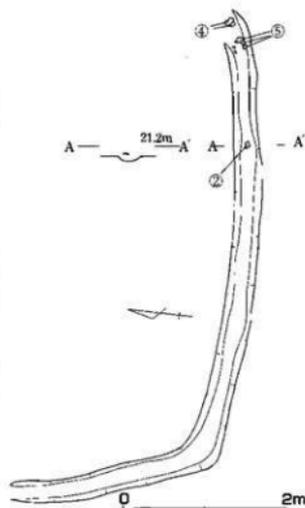
淡池遺跡・原ノ前遺跡とも古墳時代前期の遺構は検出されていない。古墳時代中期になると再び集落が出現しているが、大半は原ノ前遺跡側に集中している。

加工段1（第20図）

加工段として検出したが、L字形の壁体溝状の溝を確認したのみである。この溝は通常の竪穴建物に見られる壁体溝とは異なり、各辺がやや弧状に張り出すタイプである。この特徴は古墳時代後期の加工段にも共通するもので、弥生時代にも見られる点から、かなり普遍的な機能を持って



第21図 加工段1出土遺物実測図（1：3）



第20図 加工段1実測図（1：60）

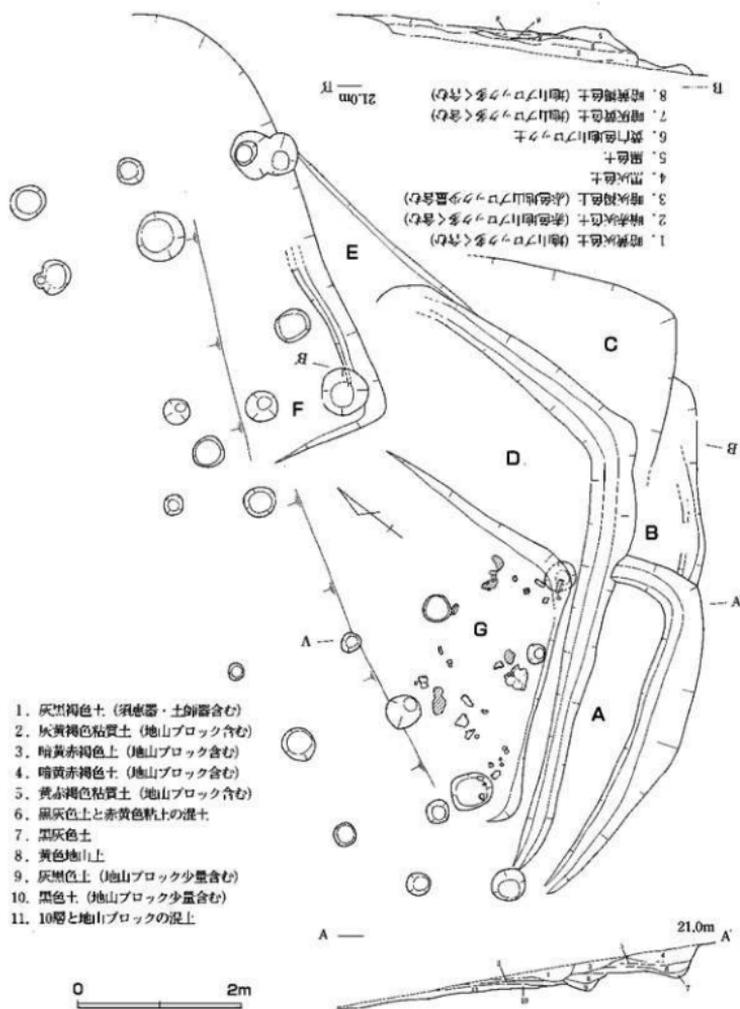
いた可能性が強い。なお、当初この加工段に伴うとして調査したピットが1基あるが、建物とならなかった。また、両者の出土土器の時期が異なることから、加工段に柱穴は伴わないと判断している。

遺物（第21図）は1～5が溝内部出土で、6は前記したピット内出土である。1は口縁部がS字状に開くタイプの高坏で、脚部内面に径5mmの刺突痕を持つ。2も1と同様の器形と推定される。3は口縁部小片で、端部は内面が肥厚する。4・5は堯の体部片で、4は内面が強いナデ、もしくはケズリによって調整されている。6は碗形の坏部を持つ高坏で、脚部内面には刺突痕が2つある。1～5は古い特徴を持つ一群で、須恵器出現以前、6は口縁部の立ち上がりが高くやや内湾することから須恵器出現以降に伴うタイプと考えられる。

加工段 2 (第22図)

この加工段はA～Gの7つの加工段が複雑に切り合っているもので、出土遺物も各時期のものがあ
る。ここでは加工段の切り合い関係と、古墳時代中期に属すと考えられる加工段についてのみ記述し、
古墳時代後期のものについては次節で扱うこととした。

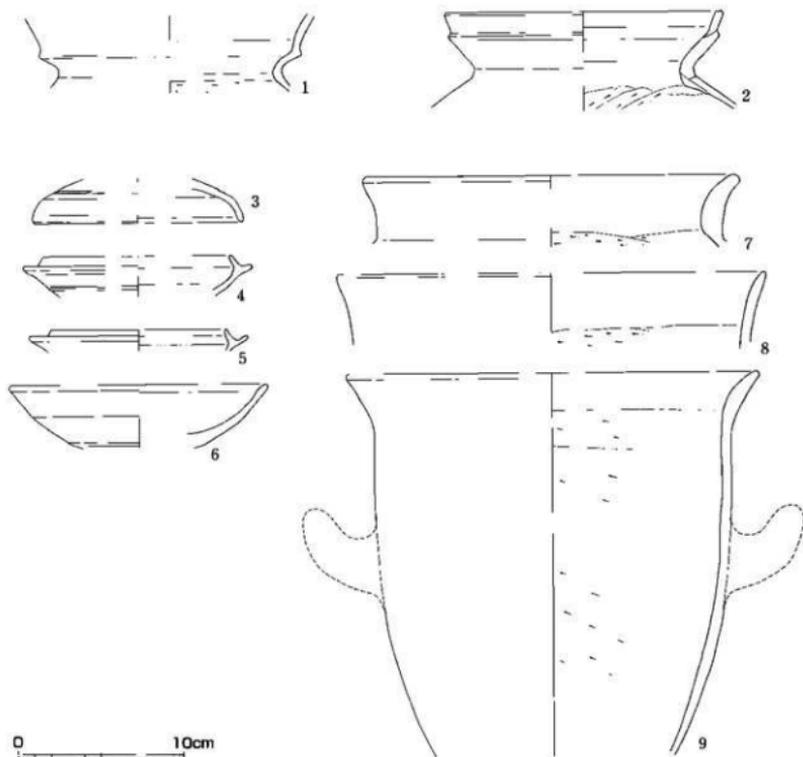
調査時に最初に確認できたのはGに伴う土器溜まりである。これらは古墳時代終末期のもので、周



辺から出上した土器もこの時期に伴うものが多数を占めた。しかし、他の加工段から出土した土器片は少量ながらそれ以前のものばかりであり、このことは土層観察によっても明確であった。切り合い関係からの前後関係は、F・D→B、D→A・Gが判明しており、CとEについては不明確であった。土器はDの加工段に伴う壘体溝から古墳時代中期の土器（第23図-2）が出土しており、これらのことからG以外は古墳時代中期の加工段群と推定される。ただし、Fの埋土中からは弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器片（同-1）も出土しており、この時期に属す可能性もある。

加工段は基本的に壘体溝を持っているが、壘穴建物の壘体溝とは異なる形態である。これらに伴う明確な柱穴は確認できておらず、柱穴は後世のものである可能性が高い。以上の点から、これらの加工段は加工段1と同様のものとして性格を考える必要があるだろう。

遺物（第23図）は図示できるものは少量である。2は壘の口頸部で、口縁は二段となる。7は後期の可能性もあるが、口縁部が垂直に立ち上がり、端部をやや外反する点は中期のものに近い特徴である。なお、1についてはSB-02出土土器に近いが、口縁端部が欠損していることや風化していることから明確な時期決定は困難である。



第23図 加工段2出土遺物実測図（1：3）

第5節 古墳時代終末期

本遺跡の中で検出された遺構・遺物は大半がこの時期以降のものである。第1節で記したようにこの時期の集落の変遷を理解しやすくするために、便宜的ではあるが古墳時代終末期の遺構のうち、ここでは古い時期のものを抽出して記述した。

この時期の建物、加工段は標高21m以下の低位部にのみ見られ、このことは県下でも類例の少ない当該期の集落立地のひとつの形態を示しているかもしれない。遺構分布の様子から集落はさらに北側に広がる可能性が強いが、標高16m以下は後世の大規模な削平を受けており明確でない。遺構は明確な建物跡3棟、不明確な建物2棟以上、加工段4カ所以上、溝1条などがあり、1～2回の造り替え、を行なっているものもあり、ほぼこの時期の集落内の遺構構成を反映しているものと考えられる。

遺物は床面から土器がまとまって出土した例が多く、この点で後続する時期の建物跡・加工段と様相を異にしている。土器は須恵器の蓋坯を中心とする食器類、そして土師器の甕が大半で、甌、移動式カマド、土製支脚などもわずかに見られ、器種構成上は後続する時期のものとも基本的に共通する。特に移動式カマド、土製支脚は県内最古の部類のもので、少なくともこの時期にはこの器種構成が出



第24図 斜面部の調査風景

現していることが明確となった。このことは竪穴建物の消滅期と密接に関わりがあるものと推定され、当地域の集落研究の上で欠くことのできない成果となった。

このようにこの時期の集落は今後の調査・研究において重要問題を提示すると考えられることから、あえて抽出した意味もある。また西側に隣接する淡山池古墳群では、横穴墓がこの時期から造られている可能性があり、こうした意味においても注目される。

建 物

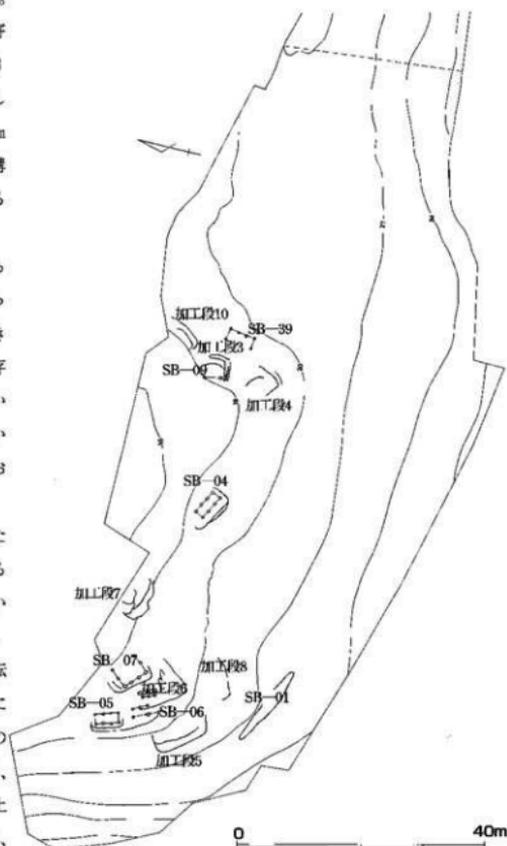
SB-04 (第26図)

この時期の遺構群のほぼ中心に位置する建物跡で、後世の耕作により一部削平されているが、ほぼ全体の様子がわかる。

建物は斜面を平坦に造成後、やや東寄りに建てられたもので、柱穴配置から3×1間(4.1×1.45m)で、斜面に対して横に長いものである。柱穴は径が30cm前後を測るやや小さいもので、短辺を構成する柱穴が一段深く掘り込まれている点の特徴である。

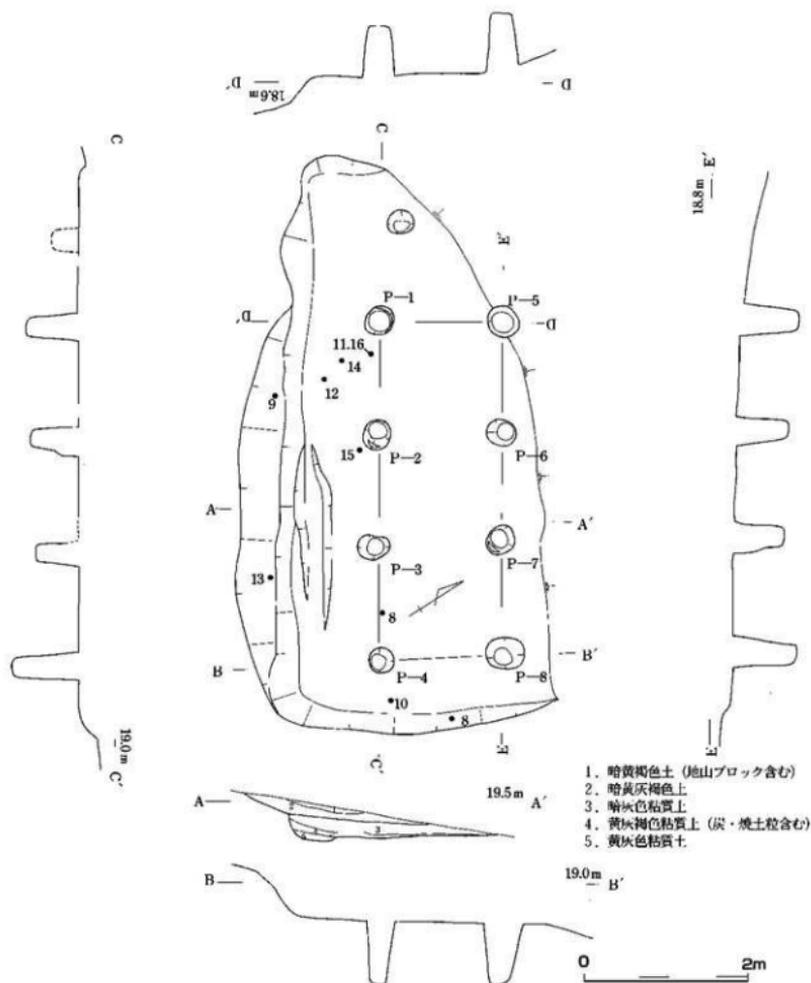
床面には薄い炭化物の広がりが認められたが、明確な被熱部分は認められなかった。また平面的には一部でしか検出できなかったが、建物に平行する壁体溝が存在し、貼り床面のレベルでは全周していたと推定した。なお、建物西側には浅いピットが存在するが、埋土は異なっており、後世のものと考えられる。

遺物(第27図)は床面からやや浮いた状態で出土したものがほとんどであるが、ほぼこの建物の廃絶時期を示していると考えられる。1~7は上層出土で、1は古墳時代終末期の壺、3は底部回転糸切りの平安時代の皿であり、明らかに後世の混入品である。6・7は土師器の壺・瓶で、風化が著しい。8は床面から、9~16は床面からやや浮いた状態で出土したものである。8は口径11.6cmを測り、底部外面の3分の2近くに回転ヘラケズ

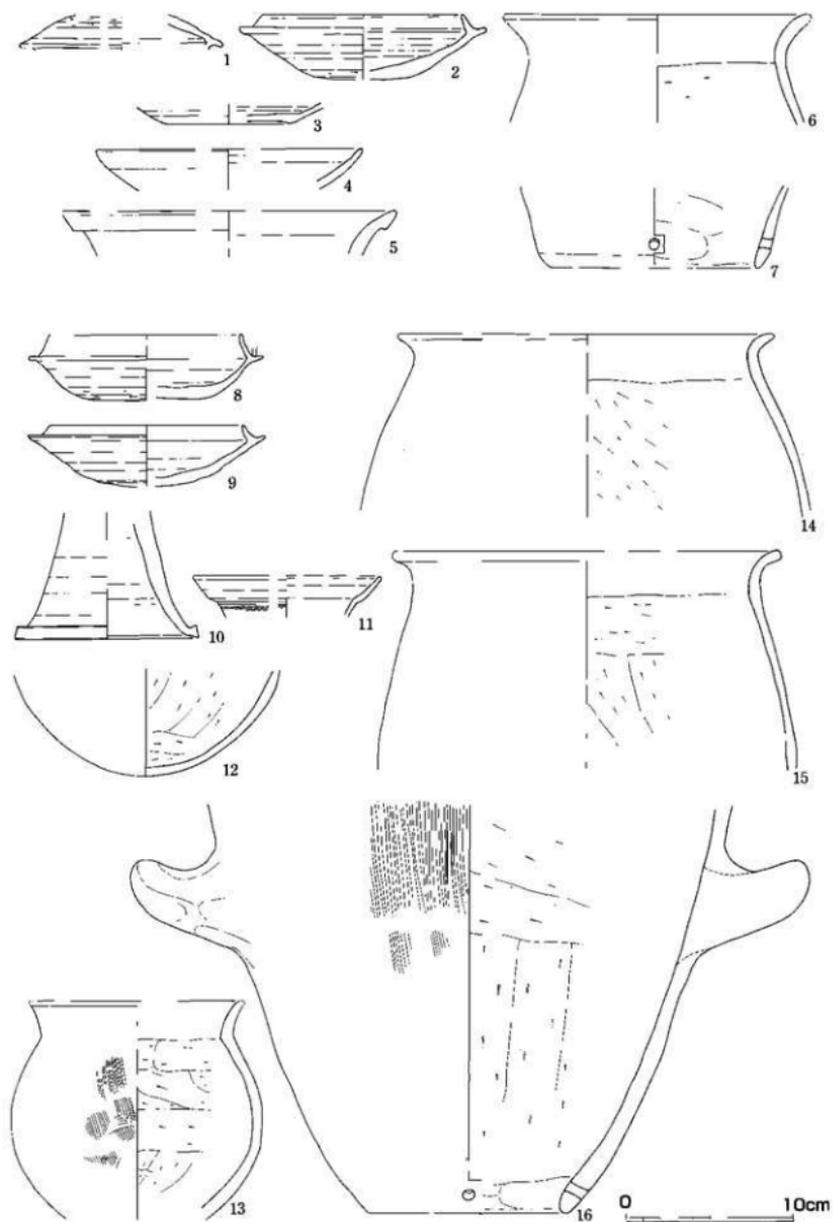


第25図 古墳時代終末1期の遺構(1:800)

リが見られる。受け部には焼成時に付着した蓋口縁が認められる。9は底部外縁にはほぼ1一周するヘラケズリ状の痕跡が認められるが、通常の回転とは逆方向である。10は高坏脚部、11は施口縁部片である。12~16は土師器で、風化しているため調整がわかるものはわずかである。12・13は小型の甕、14・15は中型の甕である。16はやや大型の甕で、底部の小孔は2穴残存し、4方向2対のタイプであると推定される。把手は差し込み式の痕跡が明瞭である。



第26図 SB-04実測図 (1:60)

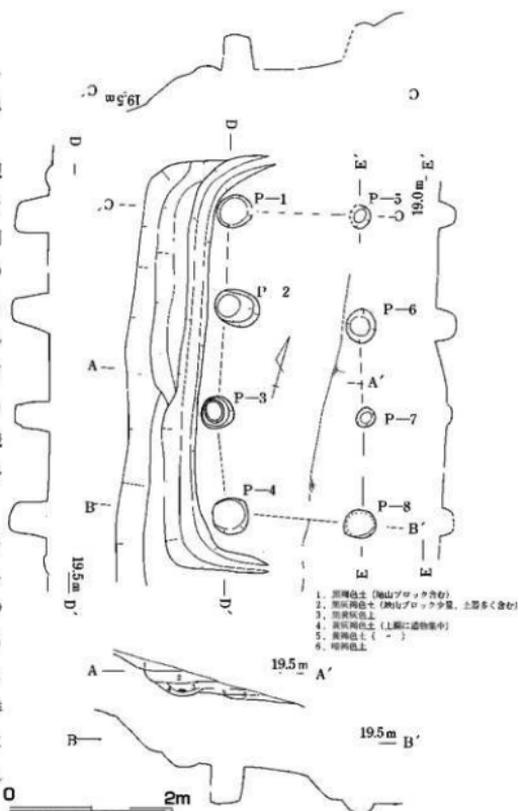


第27圖 SB-04出土遺物実測圖(1:3)

SB-05 (第28図)

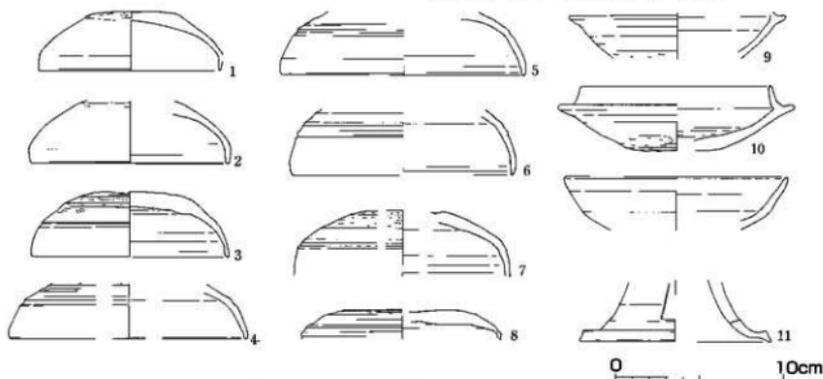
SB-11造成上下層において検出した建物跡である。付随する加工段は黒色土によって覆われ、上層断面からは1、2回の再造成が行なわれているように観察された。建物は3×1間の柱穴配置を持ち、長軸3.75m、短軸1.55m前後を測る。柱痕は検出できなかったが、一部の掘り方の様子から、径20cm前後を測るものと推定される。建物の周囲にはほとんど間隙を置くことなく全体溝を巡らしており、この点はSB-04とはやや異なっている。床面には比較的多くの土器が残存しており、完形に復元できたものも多い。

遺物は1・2層中に包含されていたもの(第29図1~11)と、3層上面、そして床面から(4層上面)出土したもの(第30図12~第31図30)がある。これらには接合関係が認められるものがあることから、もともと床面に存在した土器群が、上層断面で観察された後の再造成によって上部を攪乱されたものと推定される。

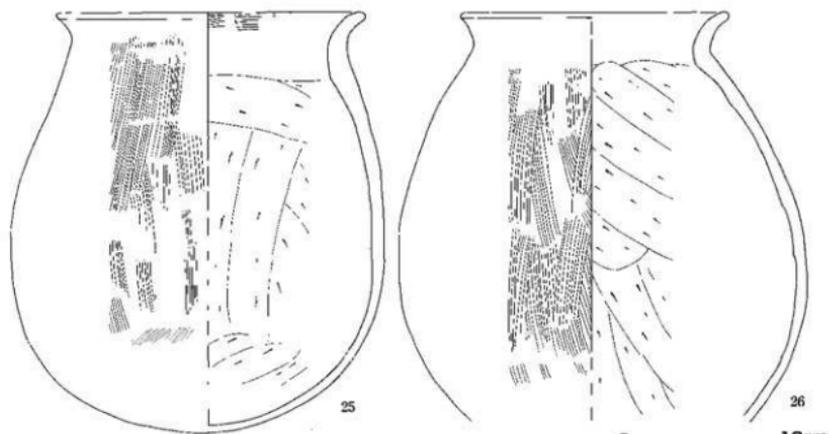
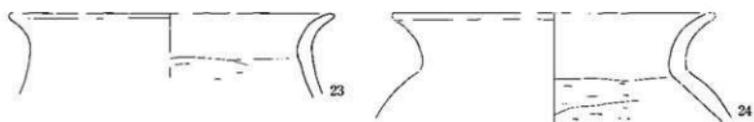
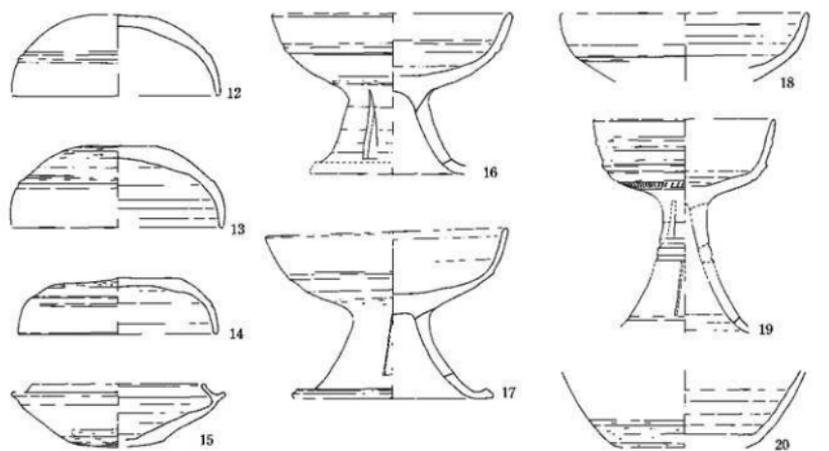


第28図 SB-05実測図 (1:60)

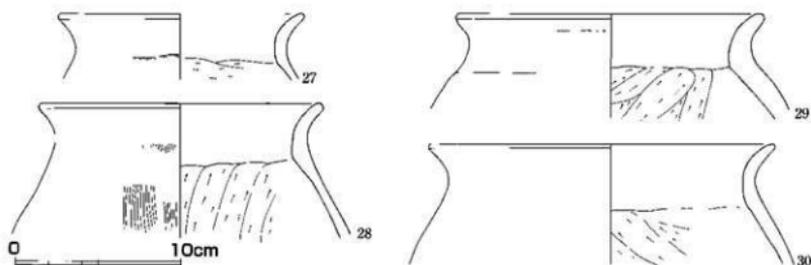
1・2層中からの出土土器 (第29図)



第29図 SB-05出土土器実測図 (1) (1:3)



第30図 SB-05出土遺物実測図(2)(1:3)

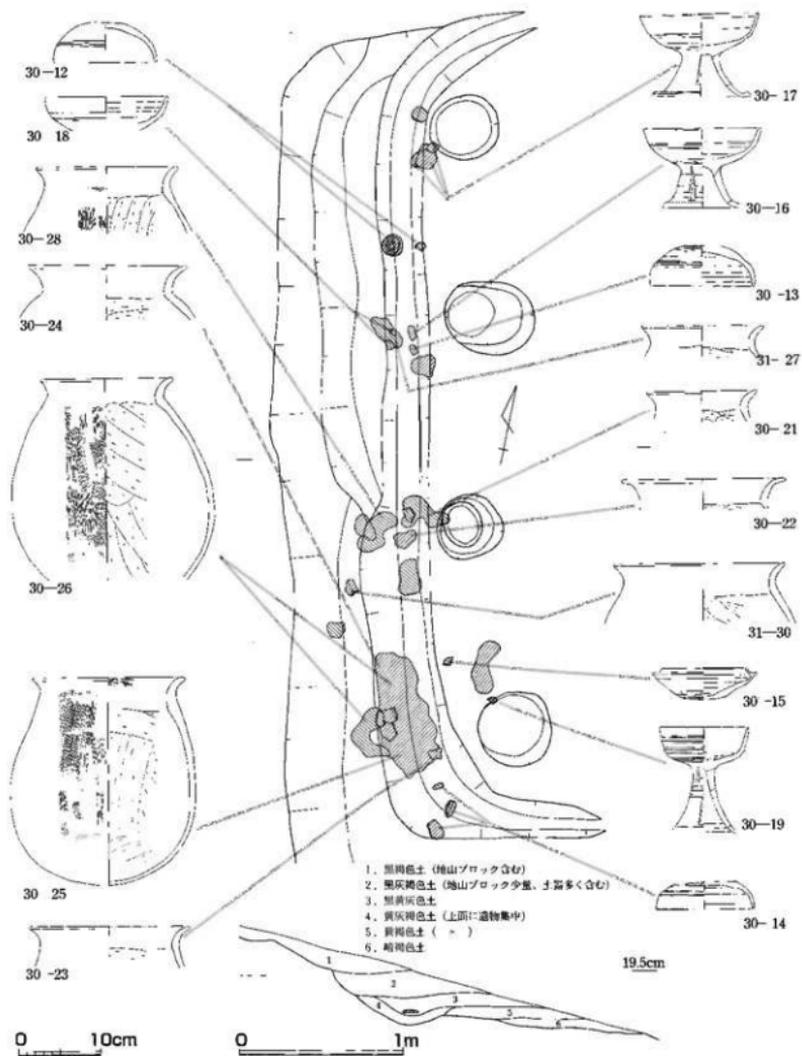


第31図 SB-05出土遺物実測図(3)(1:3)

は大半が須恵器で、土師器の欠片はほとんどが床面のものと接合関係にあった。1・2は小型の蓋で、口径はそれぞれ、11.1cm、11.8cmを測り、床面出土土器より新しい時期のものであり、SB-11はこれ以降に建てられていることになる。3～8の蓋は床面出土のものに比べてやや古相を呈するものを含むが、ほぼ同時期のものである。天井部は8のみ偏平で、他は丸くて高いタイプである。9・10は坏で、低部外面に回転ヘラケズリを施す。11は同一個体の高坏口縁部と脚部の破片で、床面出土のものに比べてやや古相を呈している。脚部の透かしは2方向である。

3層上面と床面出土品(第30・31図)はほとんどが接合したため、ここでは一括して扱う。12・13は口径が13cmを測る蓋で、天井部は高く丸いタイプである。12は焼成不良で調整が不明であるが、13と同様回転ヘラケズリと推定される。14は口径12.1cmを測る蓋で、天井は偏平なタイプである。15は口径10.5cmを測る坏で、底部は回転ヘラケズリである。16～18は短脚の高坏で、いずれも焼成が不良である。16は口径が14.5cmを測り、坏部外面には2本の沈線、脚部には透かしを3方向に施している。17は口径14.6cmを測り、坏部外面の沈線は退化し、脚部の透かしも2方向である。18は口縁部のみであるが、前2者と同様のタイプと考えられる。19は長脚の高坏で、図は各部の小片から復元したものである。坏部底面はクシ状工具による連続刺突文、脚部には形態は不明であるが上段に3方向、下段に4方向の透かしを持つタイプである。20は下半を回転ヘラケズリした平瓶体部片と推定されるものであるが、出土地点は塹体溝から南に1m近く離れており、異なる時期のものである可能性が高い。21～30は土師器の甕で、全て口径が20cm以下のものである。21は復元口径21cmを測る小型の甕で、体部内面は横方向のヘラケズリ調整を施す。22・24は口縁部がやや長めで外反するタイプである。25は口径18.6cm、高さ25.5cmを測り、体部最大径が下半にある下膨れタイプの特徴をよく留めている。26は口径が16.2cm、推定器高28cmとやや細めながら、25と同様の下膨れの形態を持つ。29は塹体溝から南へ1m近く離れた位置から出土しており、床面のものと所属する時期が異なる可能性が高いものである。

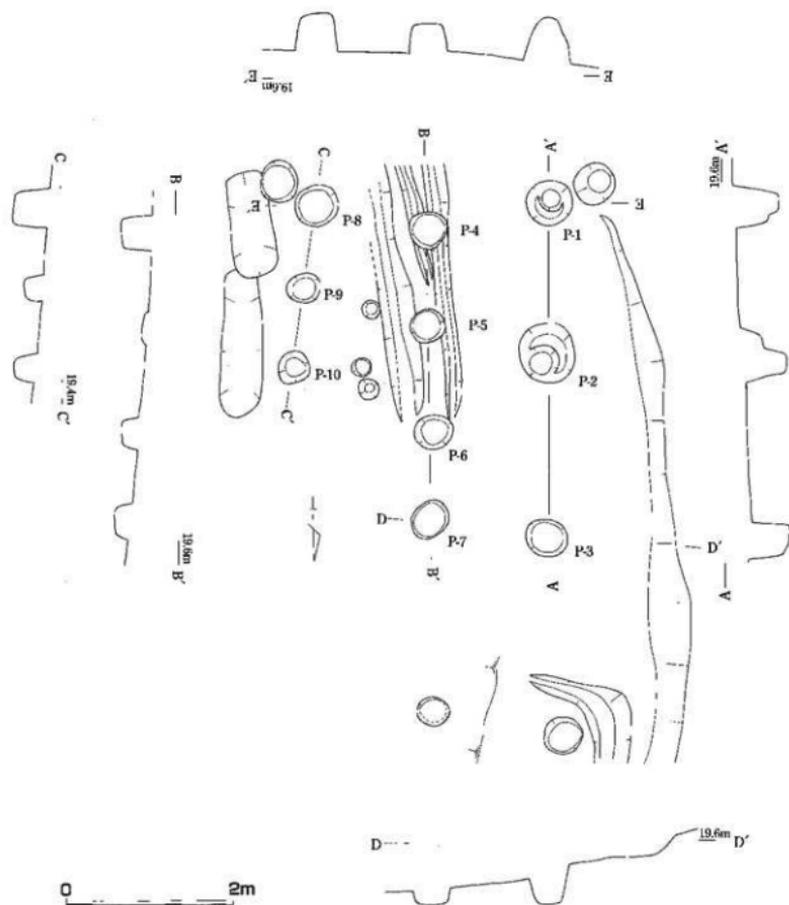
建物の時期は床面出土土器がその廃絶時期を示していると考えられ、須恵器、特に高坏の特徴から大谷産年4期と考えている。



第32図 SB-05遺物出土状況 (1 : 30)

SB-06 (第33図)

加工段6と重複して検出したもので、柱穴の配置は判然としないが、南北方向に主軸をとる建物の存在が検討できる。一見すると3列の柱穴列にも見えるがA-A'ライン以外は底面のレベルが不揃いであり、全体として明確な建物を抽出できなかった。B-B'ラインを構成する柱穴は加工段6の整体溝を切っており、これに後続することは間違いない。C-C'ラインを構成するP-8からは遺物がまもって出土しており、加工段6とほぼ同時期のものである。また、これらの建物(群)の南側にはこれに付随する可能性のある加工段が存在する。この加工段は切り合い関係は不明であるが、西側のSB-05と重複しており、建物は東に偏った位置に建つことになる。



第33図 SB-06実測図 (1:60)

遺物（第34図）は1～3で、いずれもP-8内の出土である。1は焼成不良の須恵器坏片で調整は不明である。2は受け部径14cm前後を測る坏で、底部は回転ヘラケズリ、断面はセピア色に近い焼成である。3は土師器の甕口縁部であるが、小片のため図示したものより口径が小さくなる可能性がある。風化しているが、内面には一部にハケメが、頸部以下はヘラケズリの痕跡を留めている。

以上不明確な点の多い遺構としてSB-06を設定したが、主軸を南北方向に持つ2～3間程度の建物が複数存在していたものとして捉えておきたい。時期はわずかな遺物と切り合い関係からSB-05・加工段6に近い時期のものと推定した。

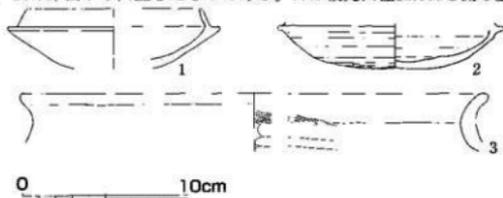
SB-07（第35図）

次節で扱うSB-08の下層から検出された建物跡で、比較的よく遺存していた。建物は3×2間で、規模は柱穴間距離で4.1×3.3mを測る。梁が北東方向にさらに伸びる可能性はまったくないとは言えないが、柱穴はコーナー部の柱穴が一段深く掘り込まれており、北西側の桁間を構成する柱穴は検出面では残存しなかったものと推定した。柱痕は断面でのみ検出し、推定される柱の径は15～18cmで、先端は先細りとなっている。壁体溝はSB-05と同様で、柱穴と重なるほどに建物と接近した位置に作られている。また、この建物の下層にはほぼ同方向に壁体溝と推定される溝や加工段の一部、そして、床面よりやや高い位置にも別の加工段が認められ、いずれも土層断面からこの建物に先行するものであることが確認されている。これら先行する遺構には明確な柱穴は存在せず、後述する加工段群と同様のものと推定される。床面は固く締まっており、被熱面は検出されなかった。

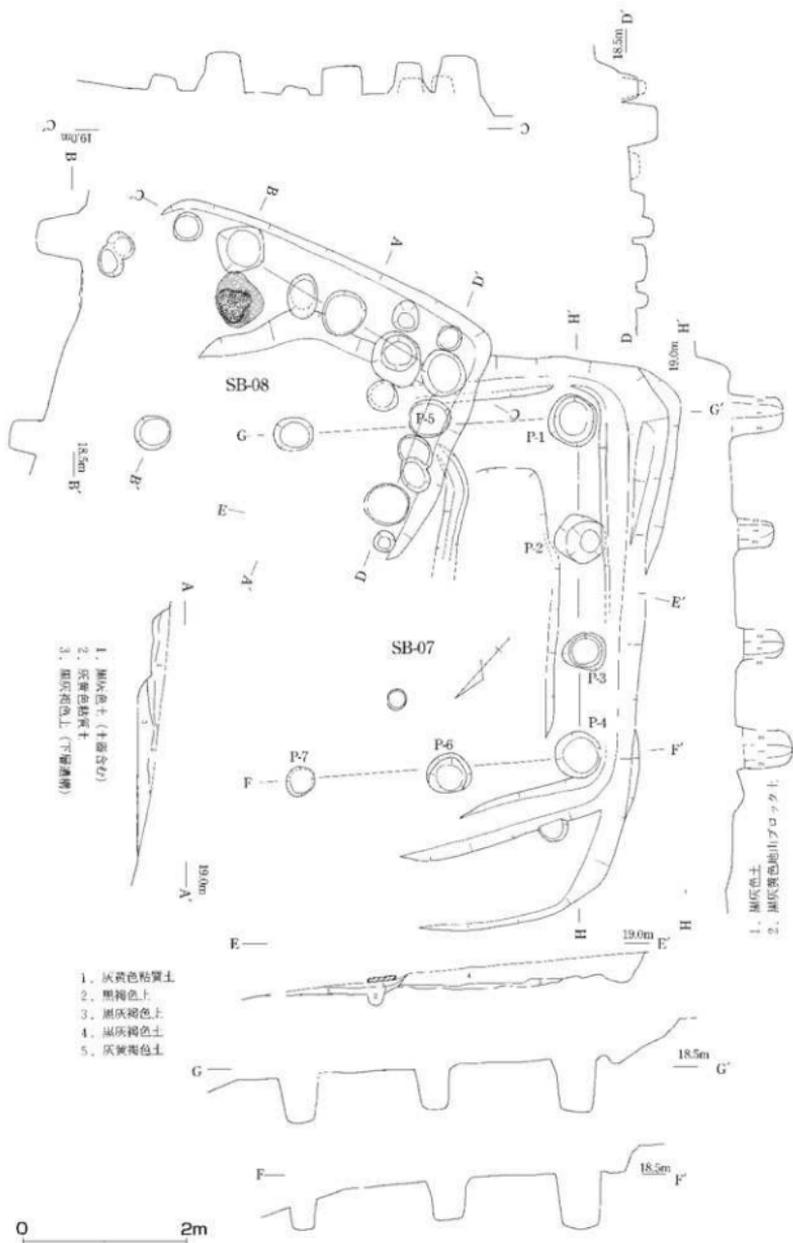
遺物（第36図）は大半が覆土中出土の須恵器・土師器であり、床面に密着したものはわずかであった。

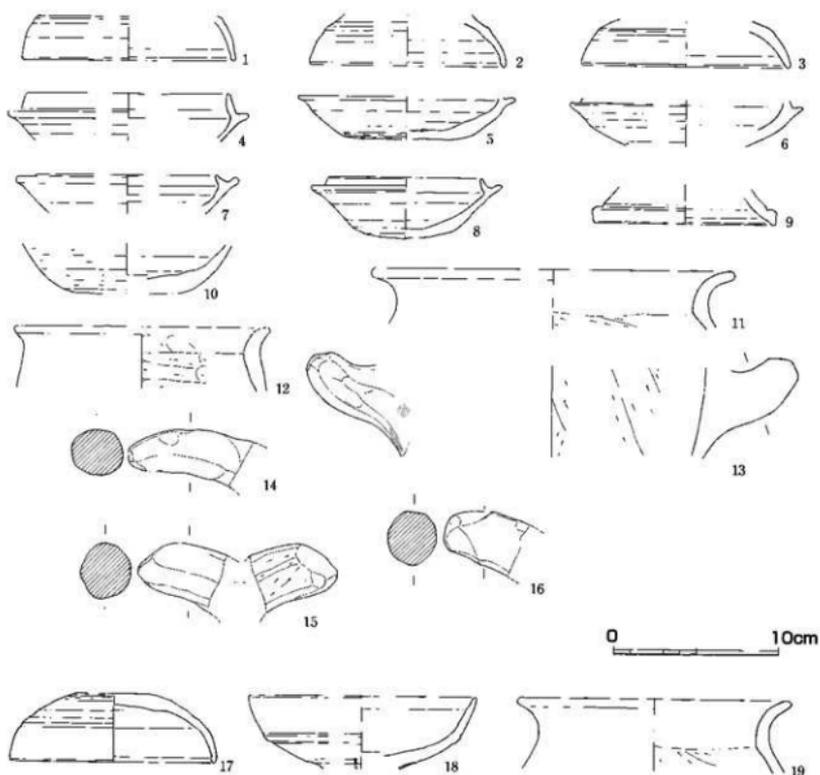
1～16は覆土上層から出土した土器で、建物周辺高所に存在する遺構に関連する遺物と考えられる。1は須恵器の蓋で、口縁内面に段を持つ古相のものである。2・3の甕はこれより新相を呈するもので、この建物に後続する建物SB-08の築造時期を考えるうえで参考となる資料である。5・6は底部に回転ヘラケズリを施す坏で、やや大型の、7・8は口縁の立ち上がりが高いやや小型の坏である。8はほぼ完形で、口径9.3cm、受け部径11.6cmを測る。9は高坏脚端部片、10は長頸壺、あるいは平瓶の底部である。12～16は土師器で、いずれも小片である。11は口縁部が外反するタイプの甕で、頸部内面の屈曲が明確である。12は小型の甕で、頸部内面は緩やかな屈曲部となっている。13は甕の把手部分で、胴部径は不明である。14～16は土製支脚の突起部片で、全体に強いナデ、あるいはヘラケズリ調整が施されたものである。

17は床面付近、18・19は床面から出土したものである。17は復元口径12.6cmを測る蓋で、天井部は



第34図 SB-06出土遺物実測図（1：3）





第36図 SB-07出土遺物実測図(1:3)

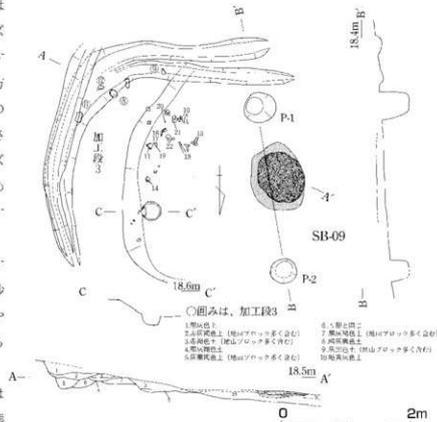
回転ヘラケズリを施し、口縁端部内面はやや肥厚する。18は高坏の坏部で、外面に2本の沈線を巡らし、脚部に施された透かしの上端が残存している。口縁部は内面に段を持ち、透かしの方向は不明である。19は土師器壺の口縁部小片で、外反する口縁部と明確に屈曲する頸部内面を持つタイプである。

建物の時期は床面出土土器から、SB-05とほぼ同時期と推定される。また、この建物を切り込んで建てられた建物であるSB-08は上層遺物の2・3・7・8の示す時期より新しいものであることも明確である。

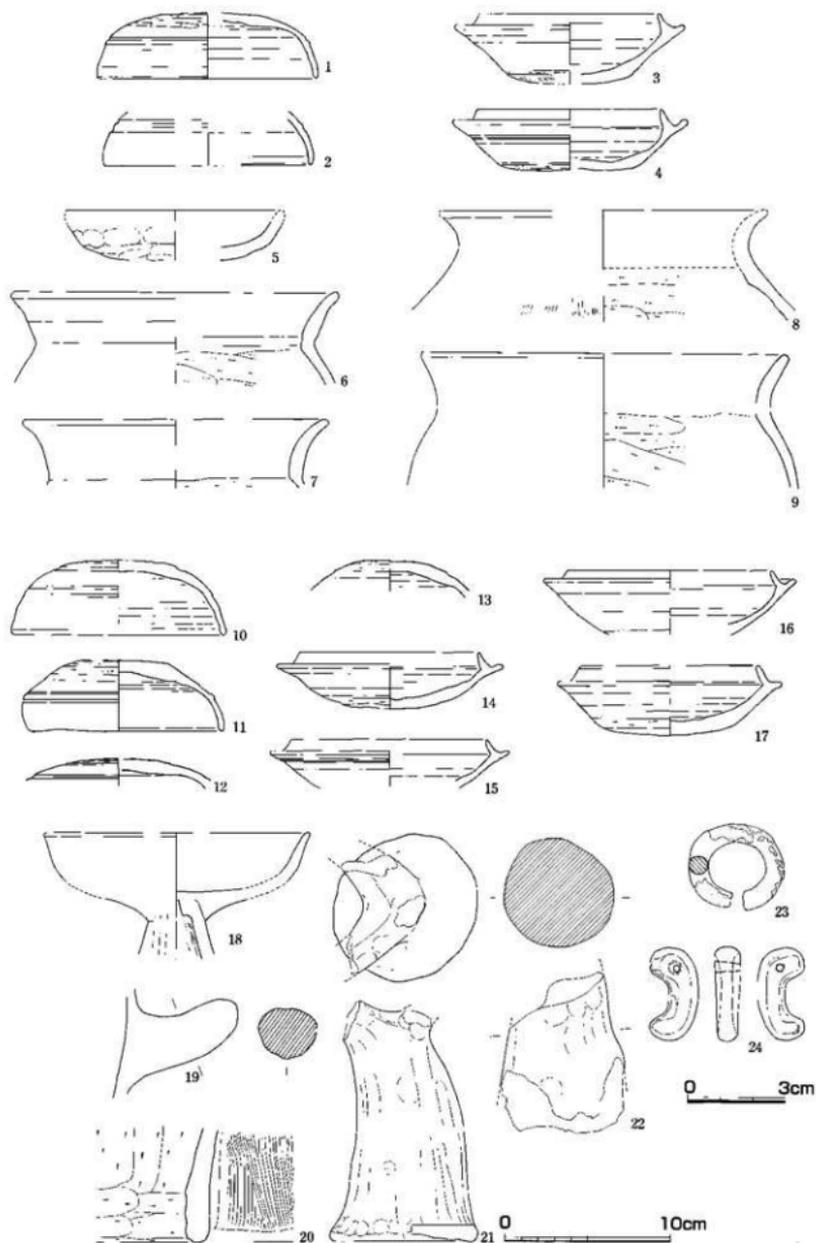
SB-09 (第37回)

後述する加工段と重複して検出した建物で、柱穴2つと被熱面を持つ加工段とで構成される。これらのうち加工段と被熱面の同時性は確認できたが、柱穴の同時性については明確でなく、平面的な配置と柱穴底面のレベルから、これらが一つの建物を構成していたものと判断した。柱穴間の距離は2.6m、柱穴の径は検出面で40~50cm、床面からの深さは復元すると55cm前後を測る。壁体溝は平面的にも土層断面においても検出できず、当初より存在しないものと判断した。被熱面は床面中央と推定される位置に存在し、70×80cmの規模を測る粘土貼りとその周囲が熱を受けたものである。断面観察により床面を血状に浅く掘り込んだ後、粘土を厚さ5cm以上貼り付けたものであることがわかった。この粘土は白黄色を呈し土師器に近い焼成で焼けており、周辺及び下層の土は熱を受けて赤色化していた。この粘土貼りは造り付け籠の燃焼部床面に見られるものと同様であり、本例の場合は移動式竈や土製支脚を用いる炊事の際に、燃焼部として作られたものと推定される。

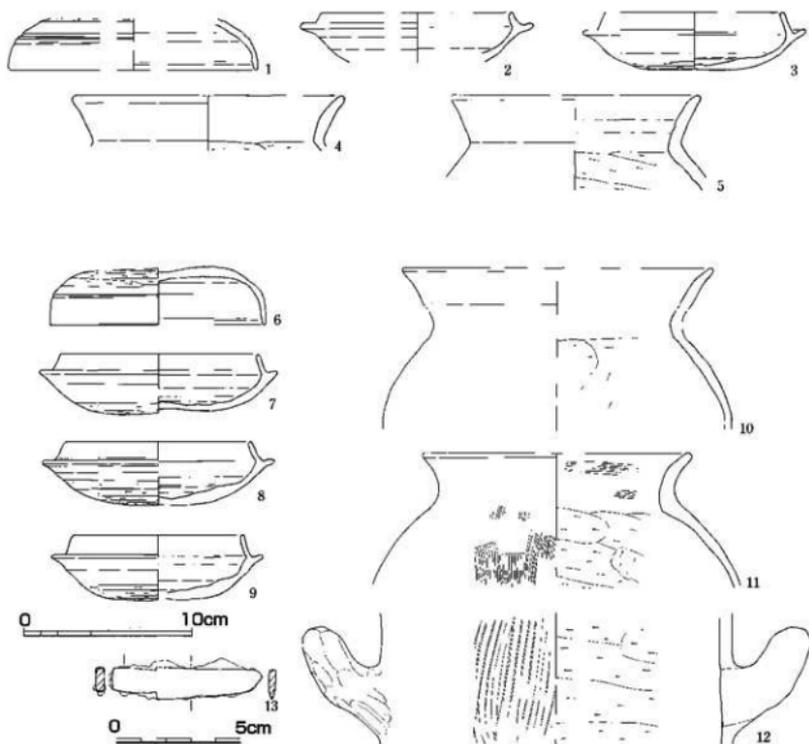
遺物(第38回)は下層の加工段とともに周辺から多くのものが出土している。1~9は建物西側下方向から出土したもので、大半は床面より下層出土と判断される。このうち須恵器環3については建物にともなっていた可能性が強く、床面出土の環と形態、調整とも近似している。10~22は建物に付随する加工段の床面付近から出土したもので、下層遺構の遺物の混入も否定できないが、ほぼこの建物の廃絶時期を示していると考えられる。10~13は蓋で、復元口径は10が13cm、11が12.8cmを測る。犬井部外面にやや雑な回転ケズリを残すものと残さないもの(10)とがあり、外面には2本の沈線を巡らしているが、10のそれは非常に浅く退化したものである。口径端部内面は10が非常に浅い沈線を持ち、11はやや肥厚する程度である。14~17は口径10.8~12.5cmを測る環で、いずれも回転ヘラケズリが消失している。このうち14・17は底部外縁に一見すると回転ヘラケズリの痕跡が見られるが、よく観察するといずれも回転方向が通常の逆方向となっており、回転弁に正位置のままの段階に施された痕跡と推定される。この「外縁部逆回転ヘラケズリ」はこの時期以降の蓋环にも認められるもので、回転弁から切り離す際にできた技法の痕跡と推定され、以下では「回転ヘラ切り」と表現することにする。またこの技法では砂粒の動きが顕著でなく、回転速度や土器表面の乾燥状態が通常と異なる可能性があることも傍証となる。18は土師器の高環で、環部内面には放射状のハケメが認められる。形態はこの時期の須恵器短脚高環に似る



第37回 SB-09・加工段3実測図(1:60)



第38圖 SB-09・加工段3出土遺物(1)(1:3)、23.24(1:2)



第39図 SB-09・加工段3出土遺物(2) (1 : 3)・13は(1 : 2)

が、脚部内面に刺突痕を持つ古式の様相も留めており、類例の少ない当該期の土師器高環の中で位置付けられるかどうか検討を要するものである。19は甌の把手、20は移動式甕の底部片である。21・22は土製支脚片で、いずれも燃烧部方向にやや内傾し、背面が弧状を呈している。23は長径2.9cm、短径2.6cmを測る耳環である。銅製であるが、風化が著しく表面は消失している。24は碧玉製の勾玉で、この建物のプランを検出する際に出土したが、明確な位置は不明で下層遺構に伴う可能性もある。コの字形の形態を持ち、長さ2.9cm、厚さ0.8cmを測る。

この建物は床面出土土器や、下層の加工段出土土器などから、その築造時期が限定できるものである。床面出土の須臾器蓋坏は回転ヘラケズリが消失する過渡期のものといえ、して言えば大谷編年4期末～5期初頭と考えられる。

加工段3 (第37図)

前記した建物の下層遺構で、平面では3本の、土層断面では4本の壁体溝を検出した。これらはいずれも加工段に付随するものと推定され、明確な柱穴は検出できなかった。壁体溝は南東側にコーナ

一部を残すが、東側の辺は直線的でなく緩やかな弧状を呈している。

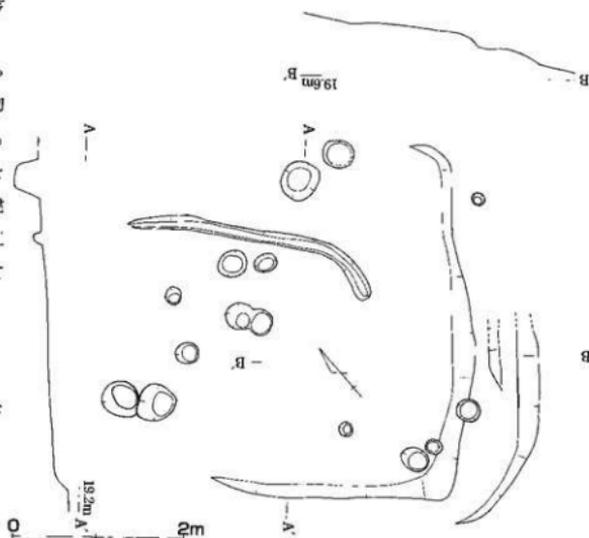
出土遺物（第39図）は上層溝に伴う加工段の床面付近から出土したもので、若干の混入品を含むものと考えられる。1は蓋口縁部小片で、天井部は回転ヘラケズリ、口縁部内面に沈線を持つタイプである。2は坏小片、3は推定口径10.6cm、受け部径13.4cmを測るやや偏平な坏で、底部は回転ヘラケズリを施す。4・5は土師器の甕で、頸部内面は明確な屈曲部を持っている。6～12は下層の壁体溝内から出土したもので、須恵器蓋坏はほとんどが完形品である。6は口径13cmを測る偏平な蓋で、天井部は丁寧な回転ヘラケズリを段近くまで施している。7は口径12cm、受け部径14.3cmを測る偏平な坏で回転ケズリも丁寧に施されている。8も口径11.3cm、受け部径14cmを測り、回転ヘラケズリも丁寧に広く施されている。9は2分の1の破片で、復元口径10.4cm、受け部径12.8cmを測る。これらの蓋坏類は遺跡内でも当該期では最も古い様相を持つものである。10は土師器の甕で、全体に風化している。口縁部は先端がやや外反し、体部最大径は中程に近い位置にあるものと推定される。11も同様の甕で、外面はハケメ調整が認められる。12は瓶の小片で、内面は横方向のヘラケズリ、外面は縦方向の粗いハケメ調整が施されている。把手は差し込み式の痕跡が認められ、強いナデによって整形されている。

これらの加工段は数回の造り替え痕跡が見られるが、下層出土の遺物から大谷編年4期初頃に築造され、4期の内に廃絶したものと考えておきたい。

加工段4（第40図）

加工段3の南側に隣接するもので、谷部の遺物包含層除去後に検出した遺構である。数回の造り替えが推定され、壁体溝と考えられる溝2本と加工段1基を検出している。これらは谷部最下層を除去して初めてその存在に気づいたものである。周辺にピットを検出しているが、明確な建物配置は認められず、加工段に伴わないものと考えている。

これらに伴う遺物は全く出土していない。しかし、下層包含の土器や堆積土などから、前述した加工段3とはほぼ同時期と判断した。



第40図 加工段4実測図（1：60）

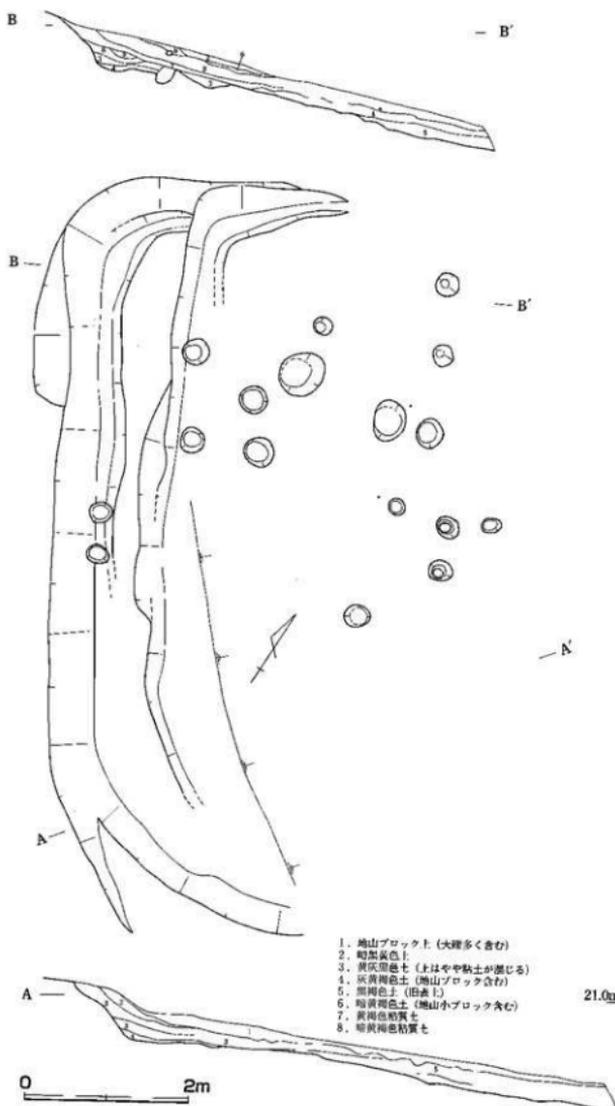
加工段5 (第41図)

調査区西側の谷筋に連なる加工段群のうち、一番高所に位置するものである。床面南半にはピット

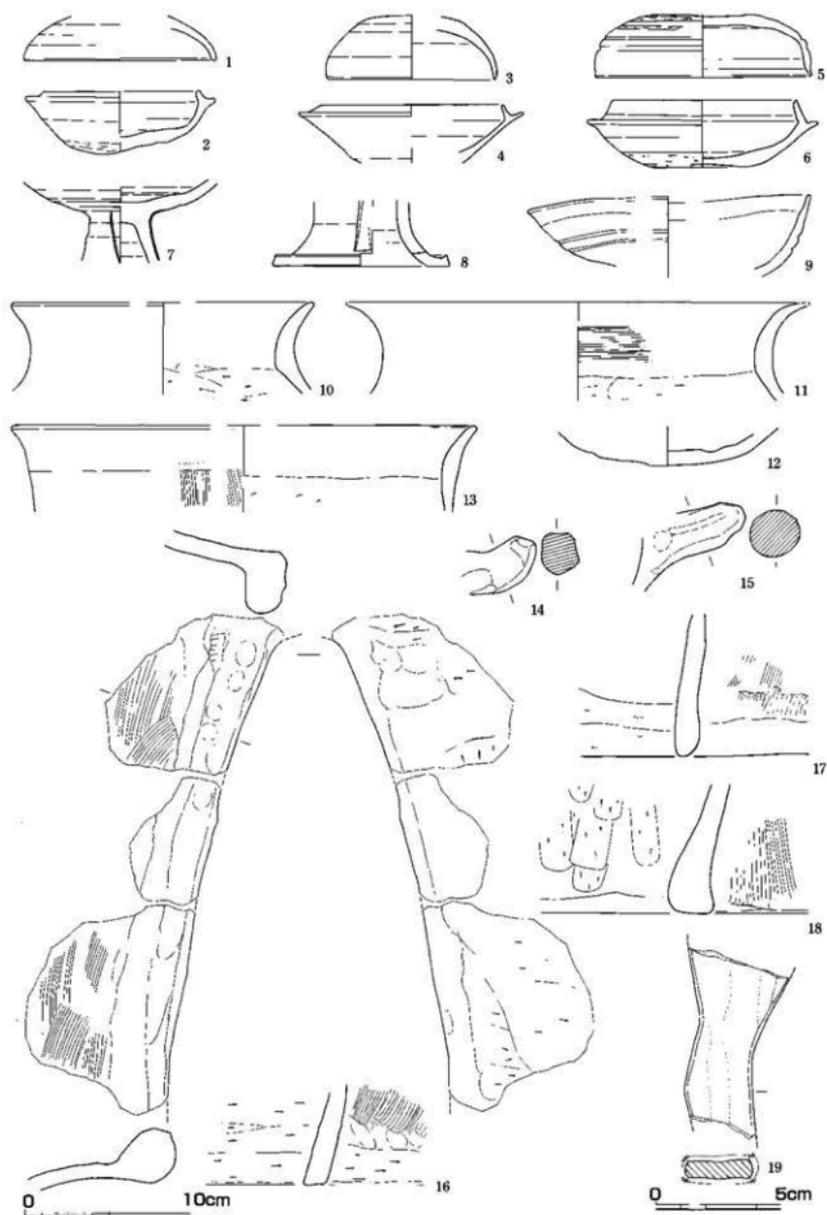
が検出されたが、建物を構成するものではなく、大半は古い堆積土を持っており縄文時代のものである可能性が高い。加工段は少なくとも1回の造り替えを行っており、いずれも部分的に壁体溝を確認している。堆積土層のうち1層は地山ブロック土による造成土であり、上方にある加工段構築時のものと考えられる。

遺物(第42図)は堆積土中のものがほとんどで、床面から出土したものはわずかである。1~3・16は堆積土上層から出土したものである。この須臾器は回転ヘラケズリが見られない新しい時期のもので、周辺遺構からの混入品と考えられる。4~6、8、11、13、14、18は概ね3層上部で出土したもので、4以外は古相を呈している。9、10、15、17は上層加工段床面出土であるが、一部は下層の加工段に伴う可能性がある。また、7・12は加工段やヤド方の出土であり、上層に伴う可能性が高いものである。18は1層出土の石英組面岩製の砥石で、玉作に関連する内磨き砥石と推定される。平安期に遡る可能性が高い。

出土遺物から推定される加工段の時期は床面出土の高坪



第41図 加工段5実測図 (1:60)

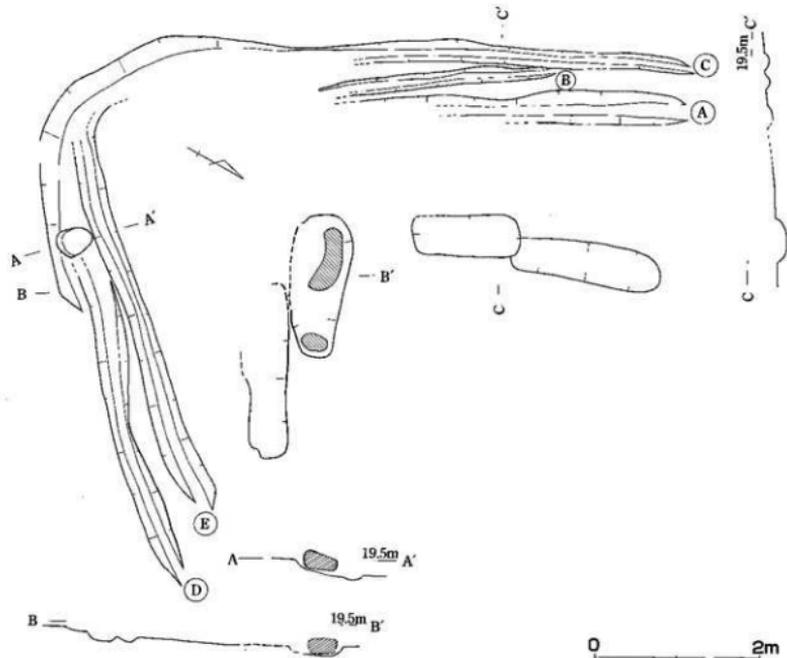


第42图 加工段5出土遗物实测图(1:3)

と床面出土の須恵器の大半が示す大谷編年4期と考えられる。

加工段6 (第43図)

前述した加工段の下方に隣接するもので、後世の耕作により床面付近が崩壊して残存していたものである。最終的には壁体溝を3本確認しており、前後関係は不明であるが2回の造り替えが判明している。その形態は加工段3によく似ており、この種の加工段の機能を考える上で参考となろう。壁体溝はA・BとDが、CとEが同一のもと考えられ、通常の造り替えならばA→B→C (D→E)の順が推定される。壁体溝の直上から径40cmの偏平な自然石が出土している。使用痕跡は認められなかったが、作業台的なもの可能性がある。床面では明確な柱穴は認められなかったが、長さ1.5m前後、幅0.5m前後を測る蕨状の土坑を4基検出した。これらは貼り床を除去した後に検出されたもので加工段に先行する時期の可能性もあるが、全体として加工段の形態にバランスよく配置していることや、加工段同様、造り替えらしき切り合いも認められることなどから、加工段の付随施設と考えている。うち1基には拳大の自然石が詰め込まれていた。この土坑が加工段の下部構造であるとすれば、床面に置かれた何らかの施設、あるいは柱穴を伴わない建物の存在を想定すべきかも知れない。またこの加工段は後述する建物S B-3 1の柱穴によって切られており、または同時期と推定される建物が北西部に重複している。特に後者のうち柱穴列C-C'はこの加工段の床面内に存在し、ほ

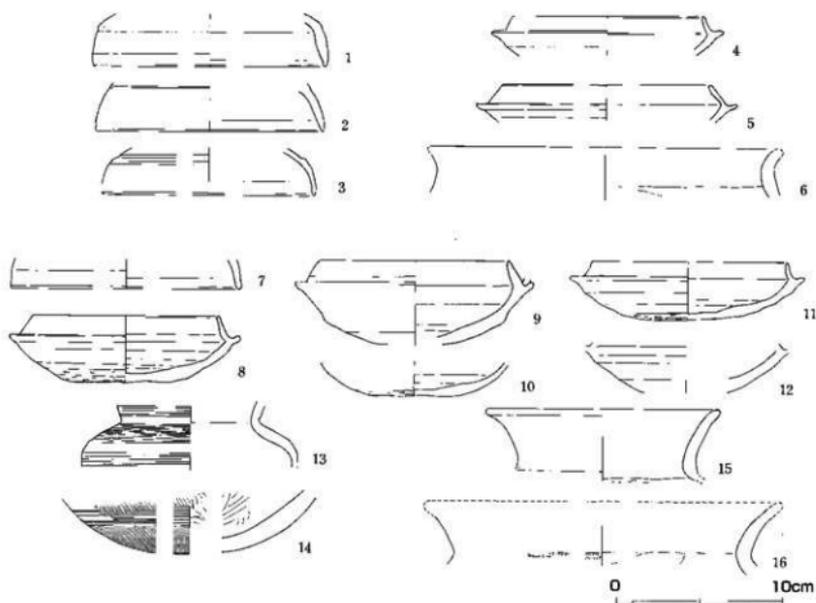


第43図 加工段6実測図 (1:60)

は同時期の遺物を出土していることから同一の遺構である可能性も否定できない。

遺物（第44図）は1～6が堆積土、7～16が床面・壁体溝内の出土である。1～3は須恵器の蓋で、外面には段あるいは2本の沈線を通らす。4・5は坏で、口縁部はやや高く立ち上がるタイプである。6は土師器の甕口縁部片で、風化している。7は須恵器蓋口縁部小片、8～12は坏でいずれも底部は回転ヘラケズリを施している。9・12は自然釉の付着が著しい。13は短頸壺の頭部で外面はカキメを施す。14は小型の甕底部片と推定され、外面はカキメが施される。15・16は土師器の甕口縁部片で、16は小片のため、口径が図示したものより小さくなる可能性がある。いずれも口縁部が長く外反し、頭部内面が明確に屈曲するタイプである。

加工段の築造時期は出土土器から大谷福年4期初頭頃と推定され、4期の内に廃絶したものと推定される。さらに細かく見ていくと、壁体溝D出土土器（8～10）と壁体溝E出土土器（7・11・12・15）とでは、坏の口縁部立ち上がりが前者のほうがやや長めであり、ある程度の時期差を反映しているかもしれない。また、SB-05・加工段3と同様に、床面出土の遺物が比較的良好なものも注意すべき点であろう。

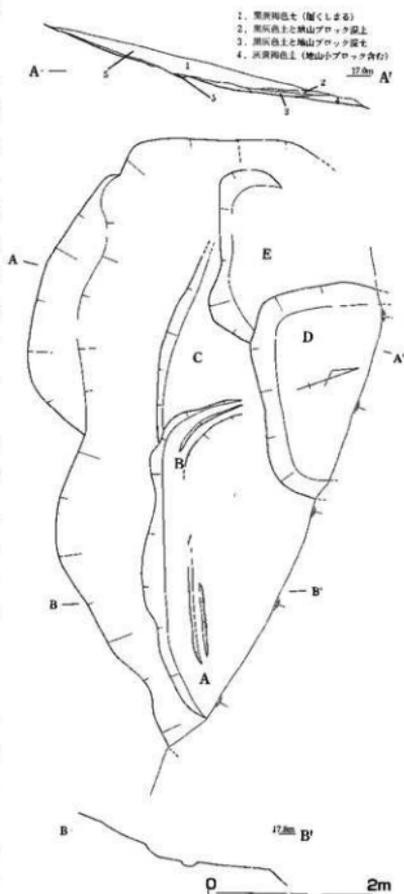


第44図 加工段6出土遺物実測図（1：3）

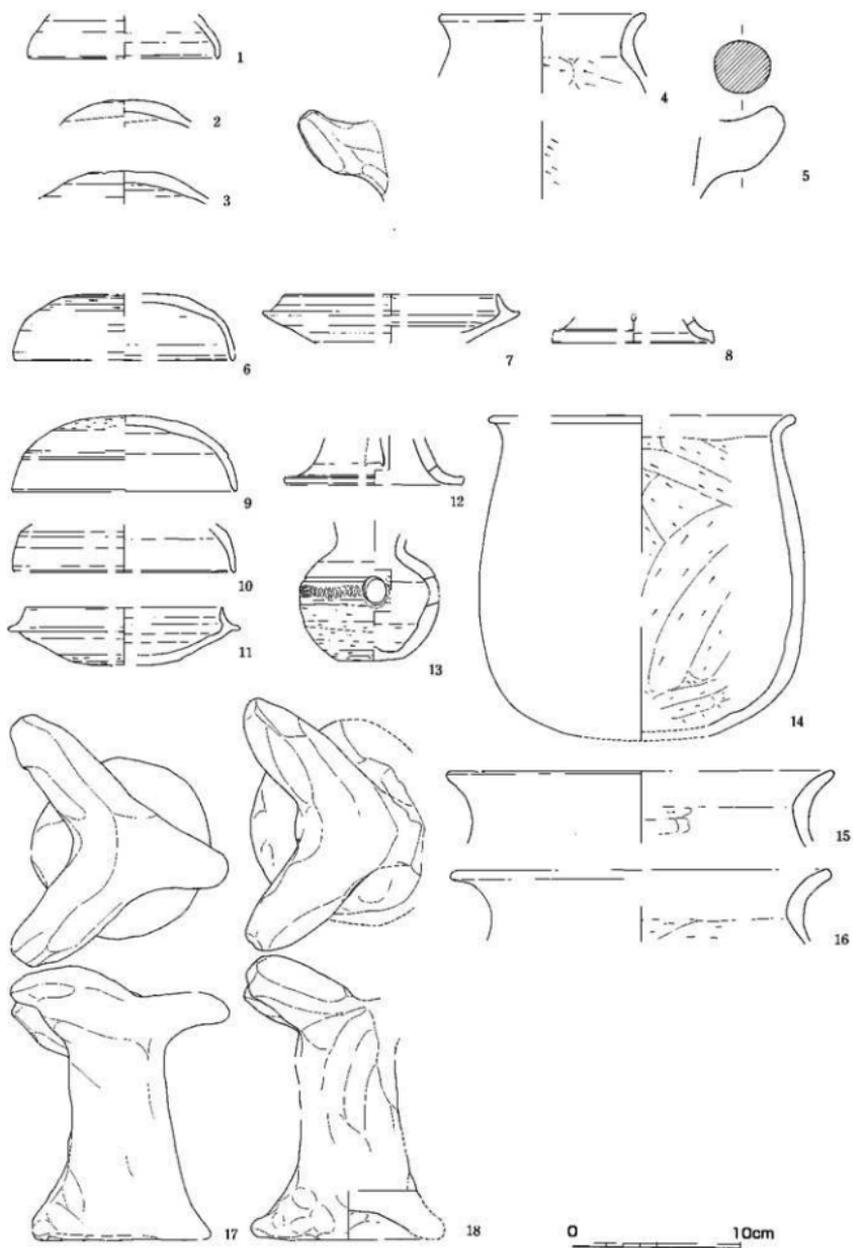
加工段7 (第45図)

加工段6の北東に位置するもので、北半は後世の大規模な削平により失われている。残存する床面には全く柱穴は認められず、壁体溝が一部に認められたに過ぎない。切り合い関係等は十分押さえることができなかったが、数回の造り替えを行っており、最終面と考えられる加工段Bの床面上には小規模な土器溜まりを形成していた。また、西半部の南北土層を観察すると、緩やかな削平を受けていることがわかり、この削平後の堆積土中からは建物S B-0 8 出土品と接合関係のあるものが存在していた。壁体溝が平面や土層断面で検出できたのは、A・B・Cの加工段で、D・Eの土坑状を早するものには認められなかった。

遺物(第46図)は東半部上層出土遺物(1~5)、西半部上層(1層)出土遺物、そして床面の土器溜まり(9~18)がある。1~3は須恵器蓋で、いずれも天井部は回転ヘラケズリを施さない新しい時期のものである。4は土師器の壘片、5は甑の把手小片である。6は口径不明の蓋で、外面は天井部に回転ヘラケズリを施し、段は退化したものとなっている。7は口径不明の坏小片で、口縁部立ち上がりは比較的長い。8は短脚の高坏と推定される脚部小片で、円形の透かしの痕跡を残している。9は焼成不良の須恵器蓋で、ほぼ完形に近いものである。口径は13.6cm、高さ4.6cmを測るドーム形のタイプで、外面は天井部に回転ヘラケズリ、2本の沈線を巡らすものである。10も同様の蓋と推定される口縁部小片であるが、段は退化したものとなっている。11は口径不明な坏小片で、底部外面は回転ヘラケズリを施している。12は短脚高坏の脚部小片で、脚径は不明である。透かしは2カ所に痕跡が認められ、三角形透かしが3方向に施されていたと考えられる。13は体部最大径8.4cmを測る處で、口縁部の大半を欠損している。肩部の下位に2本の沈線と連続刺突文を施すタイプである。14はほぼ完形に復元できた土師器蓋で、口径18.5cm、器高19.8cm、体部最大径19.5cmを測る下膨れのタイプである。体部内面はヘラケズリ、外面は風化のため調整不明である。15・16は土師器の壘口縁部片で、いずれも口縁部が長く外反し、頸部内面が明確に屈曲するタイプである。16は口縁部のみは完存し、口径は23cm



第45図 加工段7実測図(1:60)



第46图 加工段7出土遺物実測図(1:3)

を測る。17・18は十裂支脚で、器高17cm前後を測るほぼ同形態、同サイズのものである。外面は風化しているが強いナデ調整を施していると推定される。十節器の變は15・16が古いタイプの特徴を残しているが、14は口径が体部最大径近くまで拡大したもので、後続するタイプに近いものとなっている。

この加工段は床面出土遺物から大谷福年4期の内に廃絶したと推定される。

加工段8（第70図）

次節で紹介するSB-17に重複して検出したもので、この時期のものと判断したものである、詳細は次節に記した。

加工段10-D・E（第113図）

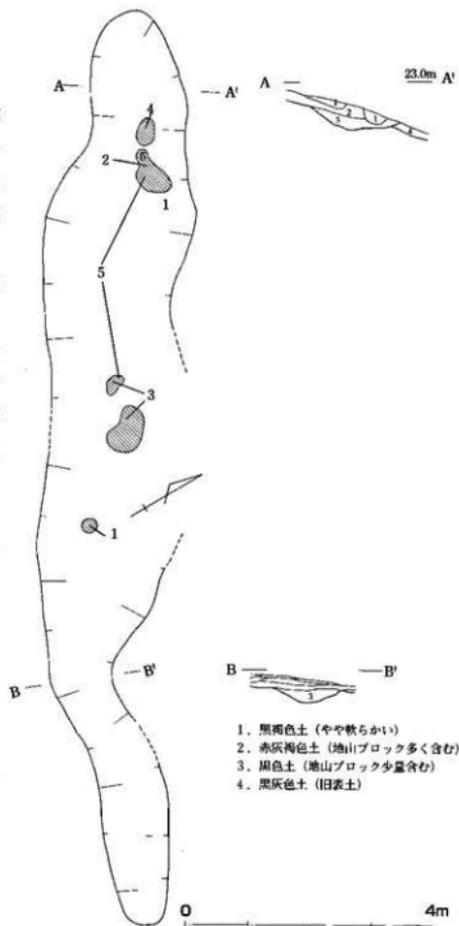
後述する奈良時代の加工段10に重複して検出されたもので、規模や形態は不明確な点が多いが、当該期の土器を出土しているものである。位置は加工段3の北東谷部緩斜面で、この地区にはほぼ標高を同じにして同時期の加工段3カ所が並んでいたことになる。奈良時代の加工段との切り合い関係や検出時の様子は別節に譲るとして、ここでは出土遺物を中心に記しておく。

遺物（第114図7～10）は7の須恵器蓋小片のほか、十節器では變8、十裂支脚9、竈底部片10などがあるが、この他にも奈良時代の加工段に混入したものがあり、いずれも当該期の中では新相を持つものである。

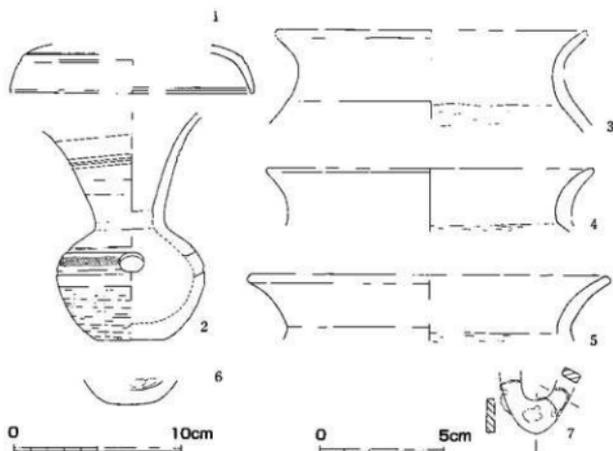
加工段の廃絶時期は出土須恵器から、概ね大谷福年4～5期頃と推定される。

SD-01（第47図）

後述する建物SB-15の下層から検出したもので、南北方向に伸びる長さ15m、幅0.8～2.3mを測る溝状遺構である。北辺の中央部は当初北側に伸びていくように観察されたが検出が難しく、また、その部分には十器溜まり2や建物SB-17が存在していたため、この部分は明確にできなかった。以上のことから、ここでは北側に伸びる平面Tの字形の溝であったことを記しておく。溝断面は緩やかな弧状を呈して



第47図 SD-01実測図（1：80）



第48図 SD-01出土遺物実測図(1:3, 7は1:2)

おり、底面は東から下降して中央部でやや水平になった後、西側へ向かって徐々に上昇し、西端では急激に立ち上がり消失している。問題は中央部のT字路部分で、検出不十分ではあるがおそらく北側下方に向かって下降していたものと推定される。こうした形状の溝は自然流路的なものとは言えず、やや不整形ではあるが、人工的な溝と推定される。しかし、後述する古道のような路面連続ピットは検出できておらず、ここでは道の可能性も十分ある溝状遺構としておきたい。仮にこの溝が道であるとすれば、この時期の遺構としては最も高い位置に存在し、西に伸びることを単純に考慮すると、その先にある渋山池古墳群中にある同時期の横穴墓との関連が注目される。

遺物は(第48図)溝底面に小さな土器溜まりとして出土している。また、後述する土器溜まり2はこの溝状遺構に伴う可能性が極めて高いものと考えている。1は口径不明の須恵器蓋で、外面に2本の沈線を、口縁部内面に1本の沈線を持つ。2は口縁部を欠損した甕で、体部最大径8.9cm、残存高13.9cmを測る。頸部には2本の沈線、肩部には2本の沈線とクシ状工具による退化した波状文を施している。3～5は土師器の甕口縁部片で、口径は3が18.8cm、4が20cmを測る。いずれも風化しているが、内面は横方向のヘラケズリ痕跡が認められる。6はやや平底気味の底部片で、内面は指頭圧痕が認められ、この時期の土師器とすれば、ミニチュアと考えられる。7は残存部がU字形に残る偏平な鉄製品で、堆積土から出土したものである。幅は最大部1.4cm、最小部0.8cm、厚さは3～4mmを測る。欠損部の形状が左右・上下とも対称的なものであるとすれば、概ね長径5cm前後、短径3cm前後、内法は長径2.5cm前後、短径1.4cmを測るものと推定される。鏝とも考えられるがやや小型であり、検討を要する。

この遺構は出土した須恵器から大谷編年4期のうちに廃絶し、土器溜まりを形成したものと推定できるが、その後も溝としての機能は残っていた可能性もある。いずれにせよこの溝埋没後には大谷編年6-A期の鍛冶工房が建てられており、この期には完全に機能を停止していることは確実である。

第6節 古墳時代終末期Ⅱ

この時期の遺構として抽出したものは本遺跡では最も遺構数・遺物数とも多く、ある意味では集落の変遷を考えるうえで、一つの大きな柱となる部分である。このことは前節で紹介した先行する時期の集落、そして次節で述べる奈良時代の集落を理解しやすいようにすることも目的であるが、それ以上にこの時期の集落が、建物構造や、土器組成、そして各種遺構の構成など様々な面において大きな画期を認めるからに他ならない。

この時期の建物は大半が調査区の西半の斜面部にあり、一部可能性の強いものが東側の平坦部にも見られる。そしてこの二つの地域の間にある谷底付近では道が造られており、ひじょうに興味深い集落構成となっている。また、西側の建物は先行する時期のものに比べてやや高い位置にも分布しており、集落全体がいっせいに再構築された様相を呈している。

遺構の遺存状態は、果樹園による造成や調査条件などの理由により制約を受けたものもあるが、比較的良好である。これは当該期の遺構が比較的急斜面に、大規模に造成されていることに起因する。ひとつの建物を建てるために造らなければならない平坦地は、斜面が急であればあるほど、それにかかる労力は大きくなるはずであり、その意味においてはこの時期の集落では他の時期には見られない大土木工事を行なっていると見える。

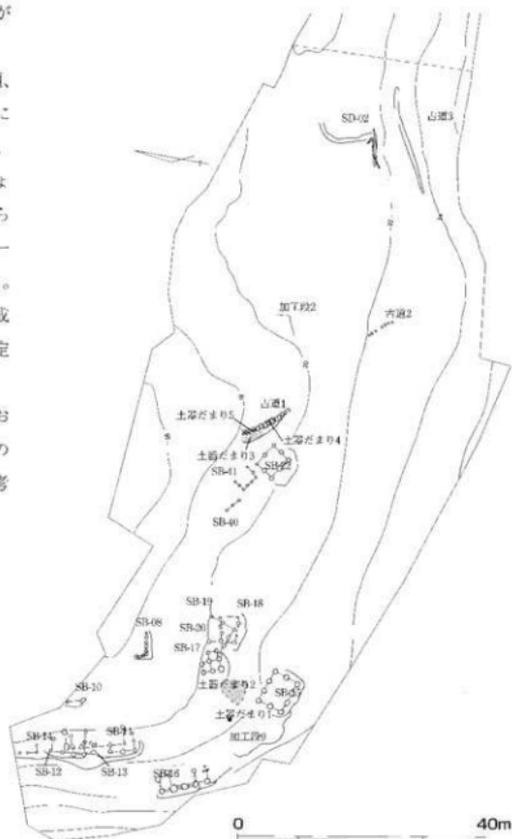


第49図 土器溜まり実測風景

建物を構成する柱穴は柱径に対してより大きな掘り方を持つものが出現し、その平面形も方形を指向している様子が伺える。建物総数は抽出できたものだけでも15軒以上を数える。1×1軒の柱穴配置を持つものが半数近くあり、2×2間の総柱を持つ倉庫も出現し、注日される。加工段は1カ所しか認められず、これも新相を呈すことから一旦消滅しているようである。これらはほとんどが1～2回の建て替えを行なっているが、倉庫についてはその痕跡は認められなかった。建物では床面に鍛冶炉を持つものが1軒認められるほか、床面に竈用の粘土貼りが残るものが数軒存在している。建物以外の遺構としては遺跡の存在が目目される。これは丘陵部を溝状に掘り込んだ後、その底部におよそ60cmのピッチで連続したピットを掘り込んだものである。こうした例は県内のみならず全国的に見られるもので、最近になって遺跡として認知されつつあるものである。本遺跡例ではその機能していた時期が押さえられた点で重要であろう。そして注日すべき現象として、谷部や崖絶した建物跡に多数の上器溜まりを形成していることがあげられる。

出土遺物は大半が須恵器の食器類、土師器の煮炊き道具類であり、他に耳環2点、鋤先などの鉄器がある。このうち土師器の占める比率はひじょうに高く、前代では少量しか認められなかった移動式竈や土製支脚は一定の比率を占めるようになっている。また、土器溜まりにはその器種構成においていくつかのパターンが想定できるかもしれない。

このように遺構・遺物の両面においても当該期は律令初期の一集落の様相を想像以上に反映していると考えられる。



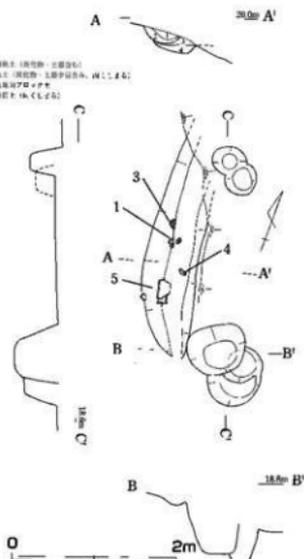
第50図 古墳時代終末II期の遺構配置図(1:800)

SB-10 (第51図)

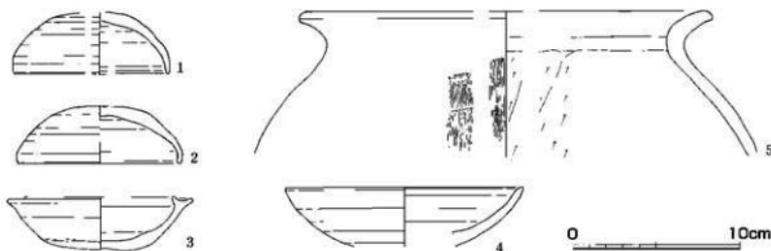
調査区北西端に位置する建物跡で、北側の大半を後世の大規模な造成によって失われている。検出できたのは建物の南東コーナー部分と考えられ、壁体溝の一部と柱穴2カ所がかるうじて遺存していた。柱穴はそれぞれ1回の建て替え痕跡が認められ、SB-07などと同様、南隅のものが一段深く掘り込まれている。掘り方の径は検出面で40~70cmを測り、床面ではそれ以上の大きさがあったことになる。床面からの深さを復元すると、南隅のもので約70cmを測る。また掘り方の形状はやや隅丸方形に近いものもあり、注意される。建物に付随する壁体溝は南端でややカーブを描いており、柱穴に接近した位置に廻らされている。平面では検出できなかったが、土層断面では柱穴同様、1回の造り替えが確認できた。遺物は少量ながら最終面の壁体溝内に集中して出土している。

出土した遺物(第52図)はいずれも壁体溝内からのものである。1・2は須恵器の壺で、ほぼ同形態のもので、2は復元口径9.9cmを測る。3は蓋に伴うと推定されるもので完形である。口径9.0cm、受け部径11.4cmを測る。4は須恵器の高坏片で、復元口径14.5cmを測るものである。5は土師器の壺で口径は不明であるが、やや大型に復元できるものと推定される。体部は外面に縦方向のハケメ、内面に縦方向のヘラケズリが認められる。

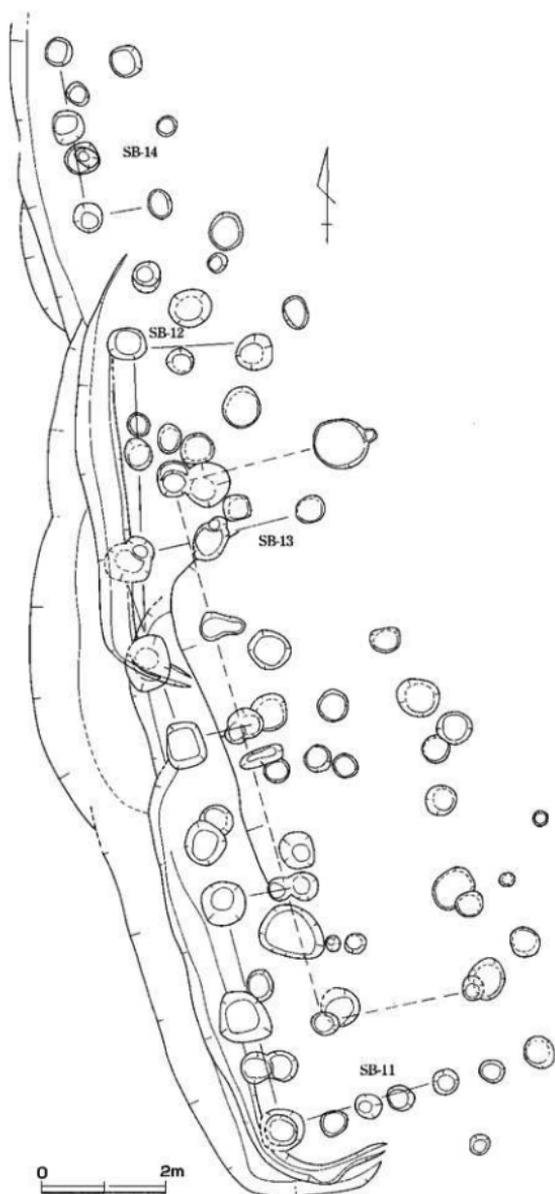
これらの出土須恵器から本建物の廃絶時期を推定すると、1・2が口径10cm前後を測る小型のもので、少ない遺物量であるがツマミの付く壺が見られないことから、大谷編年6-A期と考えられる。



第51図 SB-10実測図(1:60)



第52図 SB-10出土遺物実測図(1:3)



第53圖 SB-11~14全体圖 (1 : 80)

SB-11 (第53・54図)

調査区西端の急斜面部に位置する建物跡で、後述する建物SB-12~14と同時に調査をしたものである。これらの建物跡は複雑な切り合い関係を持っており、調査後の資料整理中に気付いたものも存在する。建物の抽出に手間取った最大の理由はその柱穴の多さと、床面上に存在する土器溜まりの存在であった。また、本建物の南より中央部には大きな松の切り株が存在していることも一因である。いずれにせよ建物の抽出は完全にはほど遠いものであることを明記しておく。

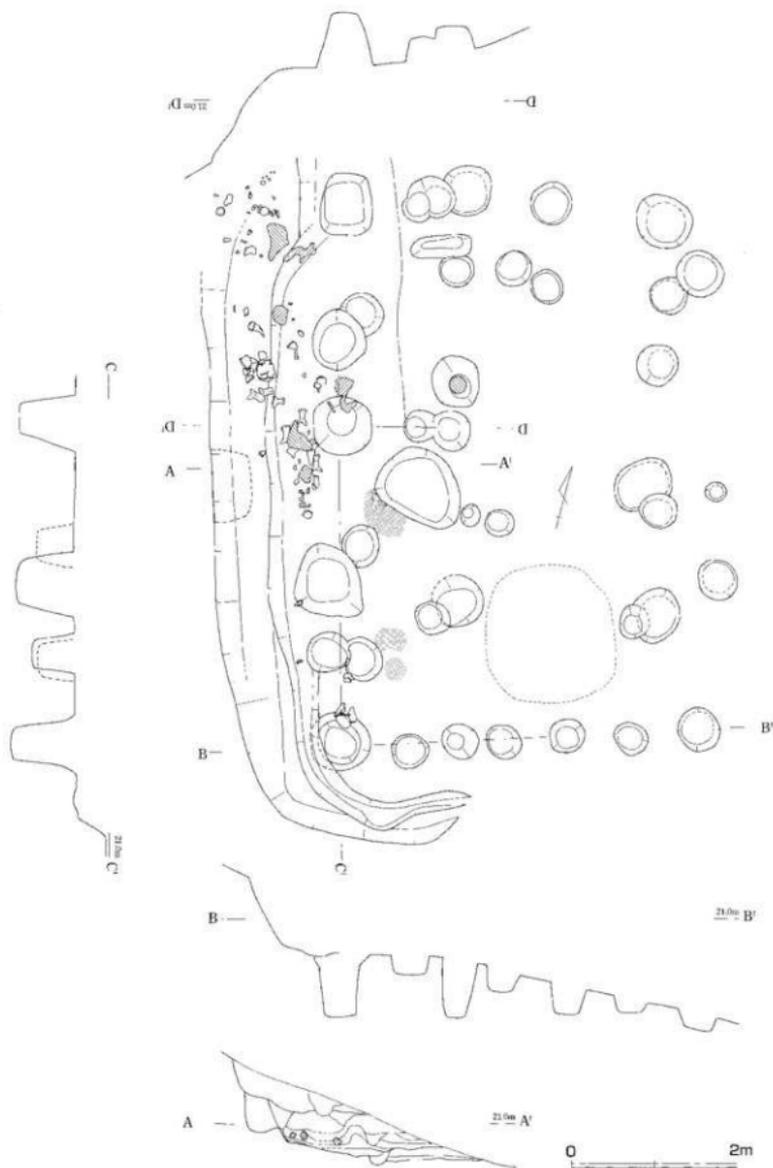
建物の説明をする前に、まず、連続して建てられたこれら建物群の調査時の検出状況を記しておく。当初検出されていたのはSB-11に伴う加工段であった。この時点では調査区外に加工段が続く状態であったため、調査区を北西側に拡大して調査を再開した。その結果加工段は北側に延々と伸び、よく観察すると切り合い関係は不明であったが、検出ラインが2カ所で変換点を持っていることがわかった。このため、3つの加工段を想定してそれぞれ土層観察用の畔を残して掘り下げていった。そして、SB-11付近では多量の土器群が出現し、掘り下げを中断した。北側では、床面近くのレベルでSB-12の壁体溝がSB-14を切っていることが判明した。またSB-12の遺物はSB-11の土器溜まり出土品よりも新相を呈していることから、SB-12が一新相しいものと判断した。その後SB-11を床面まで下げたが柱穴はほとんど見つからず、さらに下層面があることから最終的には地山面に置いて柱穴の検出を行なった。その結果が第54図で示したもので、加工段についてはSB-11とSB-12の中間下層で新たなもの(SB-13)を抽出でき、ある程度理解できたが、柱穴の配置についてはほとんど理解することができなかつた。最終的には現地調査で得たわずかな情報と、報告書作成時の検討により4軒の建物を抽出できたに過ぎない。特にSB-11の下層には数回の貼り床の張り替えらしき痕跡があり、また、平安期の土器小片がわずかながら出土していることなどから、ここで記した建物以外にもその前後の時期の建物が存在していた可能性が強い。ちなみに破線で示した4×2間以上の柱穴配置は一見すると建物としてのまとまりに見えるが、柱穴とは考えにくいピットや、堀土の状況から積極的に肯定できないものと判断している。

上記したようにSB-11は様々な問題点を抱えているが、ここでは抽出した建物と床面上に存在した土器溜まりについて説明する。建物の柱穴配置はほぼ南北に主軸をとる2×2間であるが、南辺の柱間距離がやや短いことから、この線上にある他の柱穴が別の配置を構成するかもしれない。西辺の柱穴には比較的掘り方が大きいものもあり、平面が方形に近いものも存在する。床面には被熱した粘土貼りが認められたが、建物と同時期かどうか判断できなかった。

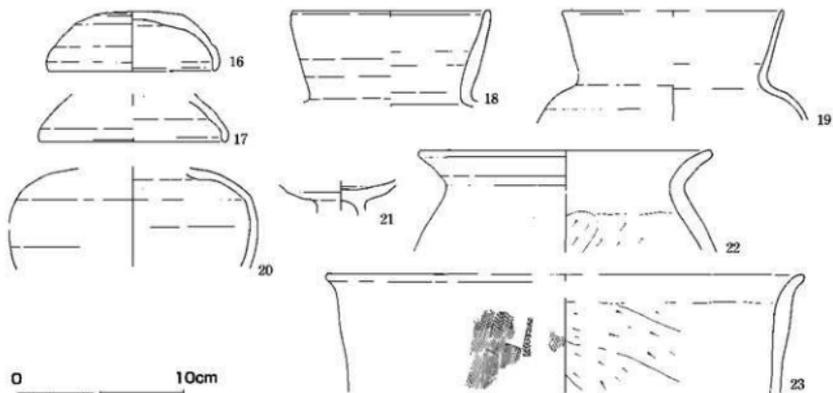
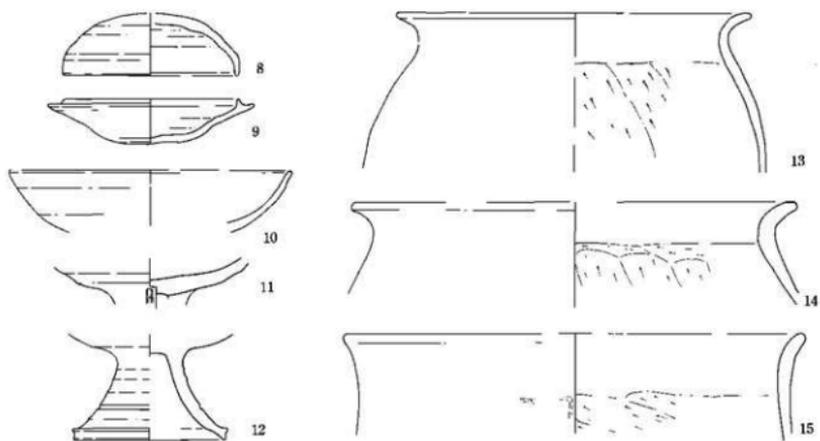
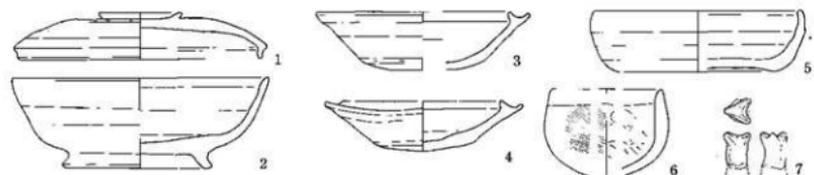
出土遺物(第55~59図)は多量の須恵器・土師器で、混入品も含む可能性があるが、ほぼ同時期の様相を呈している。

1~7は堆積土層から出土したもので、この建物の南西上方にあるSB-16に伴う可能性もある。1は輪状ツマミを持つ蓋で、口径は14.6cmを測る。2は高台付きの坏で、口径は15cm前後を測る。3・4は坏で、口径はそれぞれ10.5、9.6cmを測る。3は底部外縁を回転ヘラ切りした痕跡が残る。5は底部回転切りで、奈良時代のものである。復元口径12.6cmを測る。6は復元口径6.5cmを測る小型の土師器の椀で、外面ハケメ、内面は指頭圧痕とヘラケズリが施されている。7はミニチュアの土製支脚で、脚端部を欠損し残存高2.2cmを測る。

8~15は出土位置が不明確なものであるが、土器溜まりに気付くまでに取り上げたもので、ほとんど



第54图 SB-11实测图 (1 : 60)



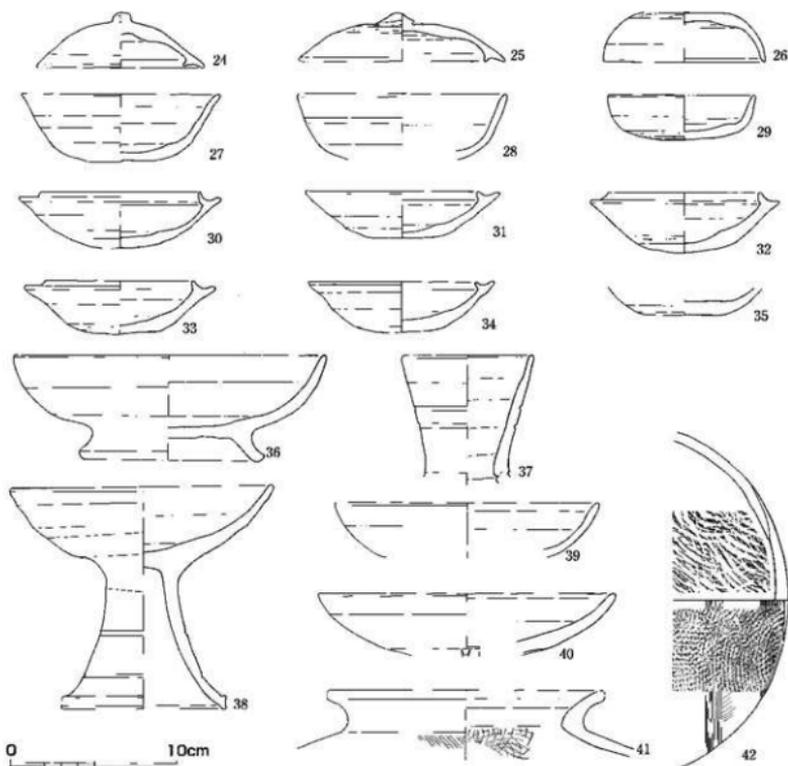
0 10cm

第55图 SB-11出土遺物実測図 (1) (1 : 3)

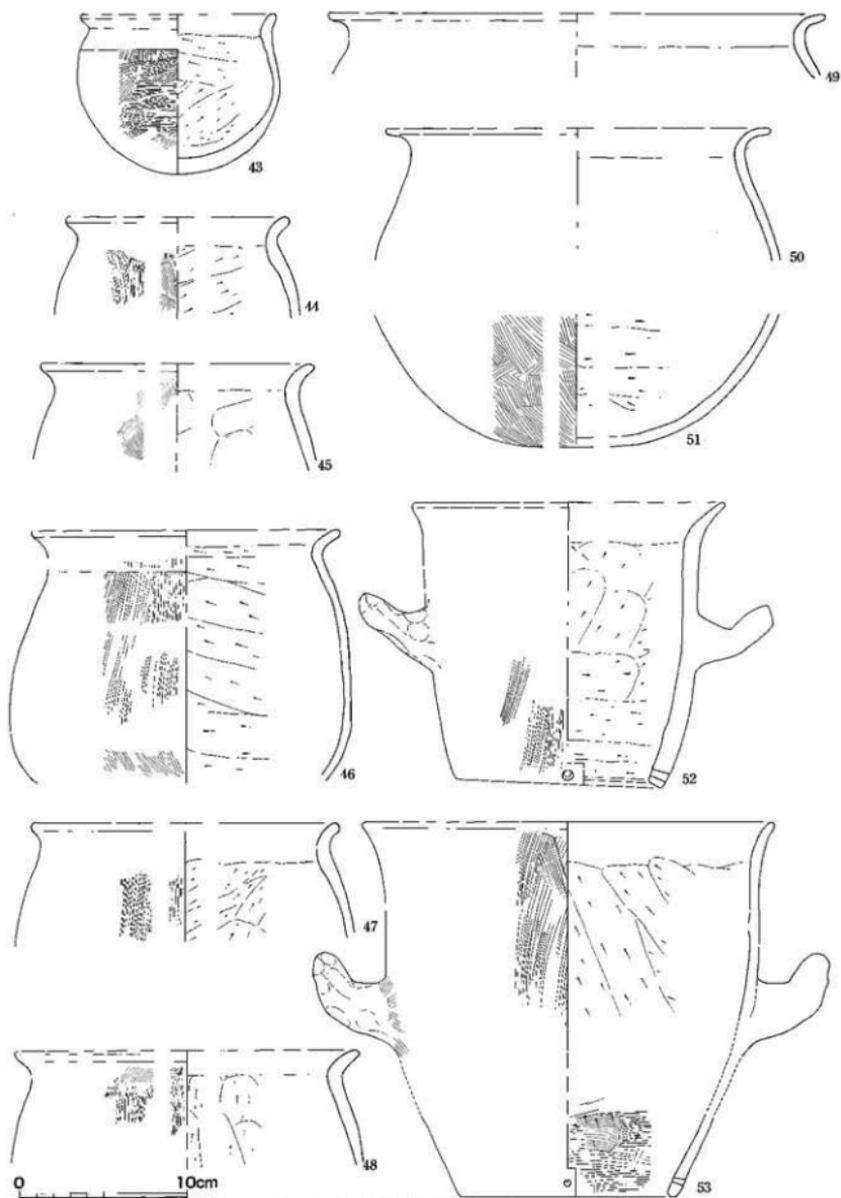
どが土器溜まりに関連するものと推定される。8～12は須恵器の蓋坏・高坏類で、11の高坏脚部の透かしは2方向に施されている。13・14は土師器の甕片、15は甕口縁部片である。いずれもほぼ同時期のものと考えられ、土器溜まりの一部と考えても矛盾しない。

16～23は土器溜まりの堆積した面より下層から出土したもので、やや古相を早すものを合んでいる。16は口径10.3cmを、17は推定口径11.4cmを測る須恵器の蓋である。18～20は須恵器の広口壺と推定される。21は小型の低脚坏片と考えられる。22は土師器の甕で、口縁部と体部のバランスはやや古相を持つものである。23は土師器の甕口縁部小片で、大型のものと推定される。

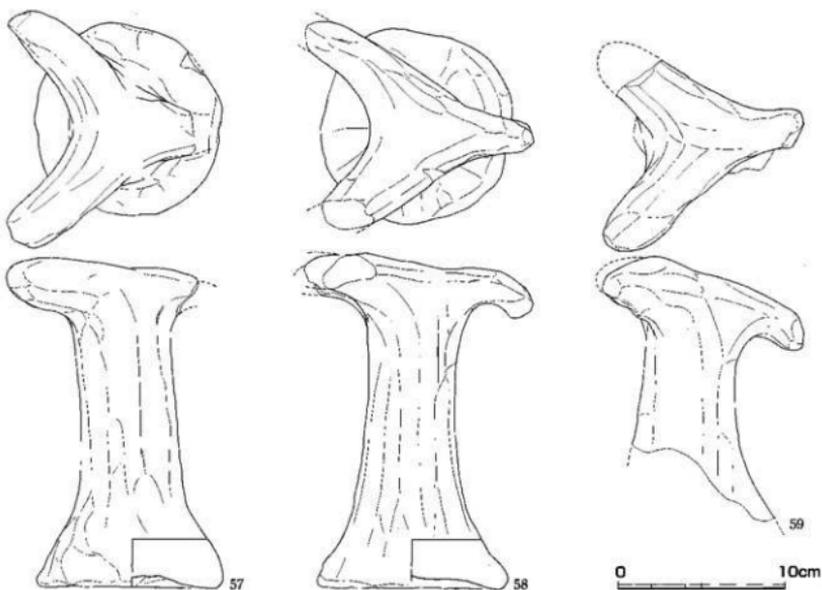
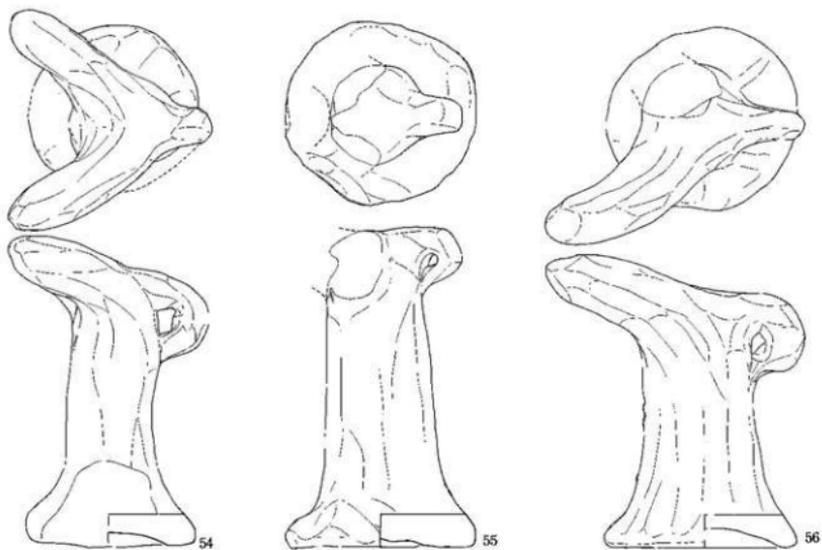
24～63は床面上の土器溜まりを形成していた一群で、24～42は須恵器、他は土師器である。24は口径7.8cm、最大径10.2cmを測る蓋で、ツマミは乳頭状を呈している。25は蓋で、口径10.2cm、最大径12.4cmを測り、ツマミは扁平な宝珠状を呈している。26は蓋として図示しているが坏となる可能性もある。口径は9.8cm。27は口縁部が開くタイプの坏片で、口径は12cmを測る。28は高坏の口縁部片と推定される。29は底部の外面に回転ヘラケズリを、内面にヘラ記号を施しており、ここでは坏として図示した。口径は9cmを測る。30～35は受け部を持つ小型の坏で、最大径はそれぞれ、12.2、11.8、



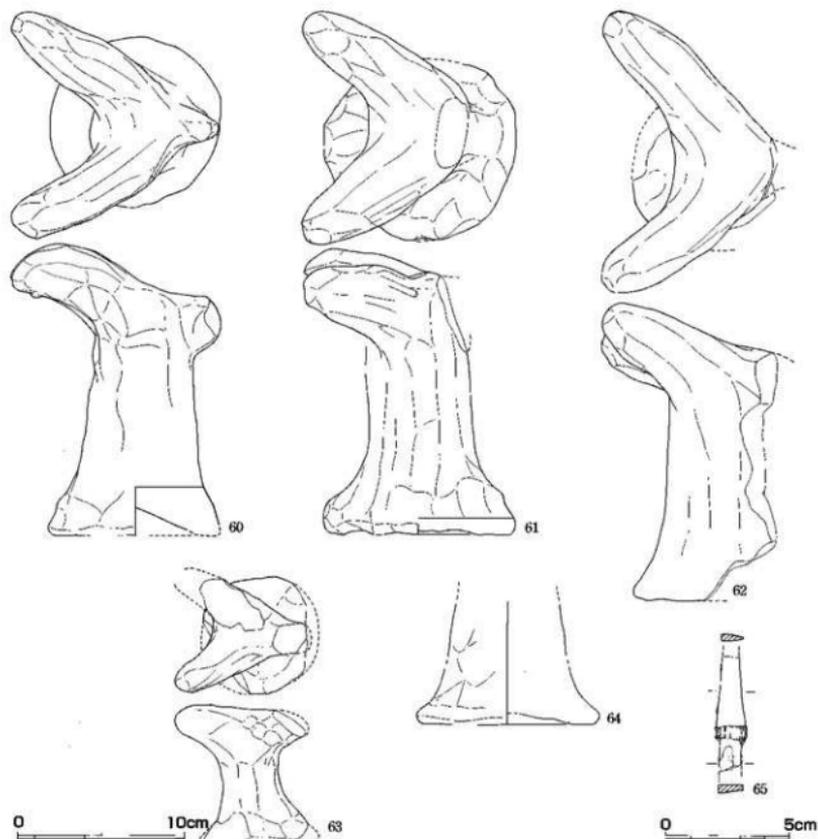
第56図 SB-11出土遺物実測図 (2) (1:3)



第57圖 SB-11出土遺物実測圖 (3) (1:3)

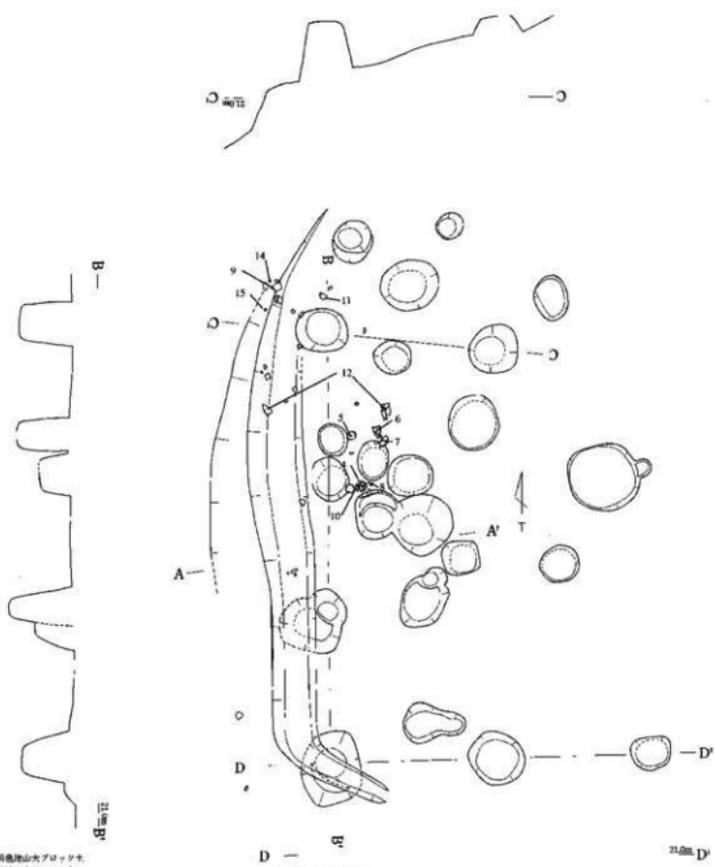


第58圖 SB-11出土遺物実測圖 (4) (1:3)

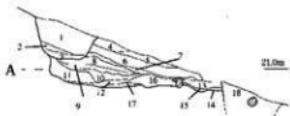


第59図 SB-11出土遺物実測図 (5) (1:3, 65は1:2)

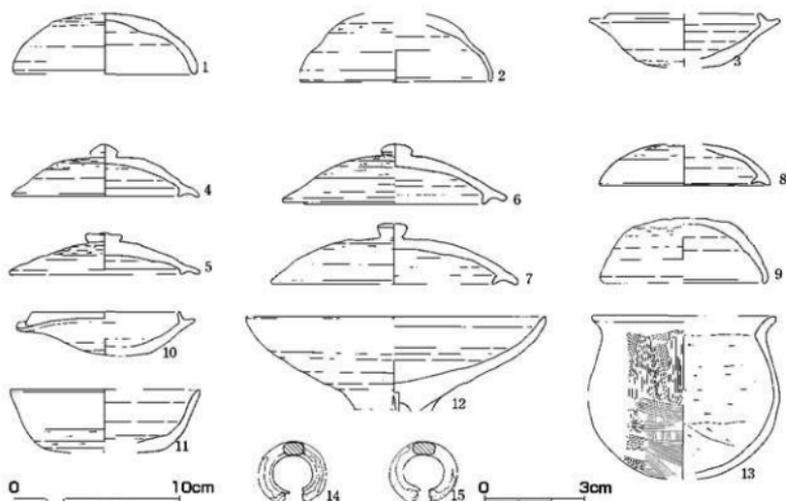
11.4、11.6、11.2cmを測る。このうち33・32には底部外面の外縁部に回転ヘラ切りが認められる。36はハの字に踏ん張る高台が付く坏で口径は18.9cmを測る。37は長頸壺の口頸部で、2本の沈線を巡らす。38~40は高坏で、38は脚部に2本の沈線を巡らし、透かしは持たない。40は透かしの痕跡が認められる。41は小型の甕で、復元口径16.8cmを測る。42は横瓶の体部片と推定され、粘土土壁の接合痕が認められる。43は口径11.8cmの小型の土師器甕で、内外面の調整が良く残っている。44・45は口径が不明である。46~48は中型の甕で、46は口径18.5cmを測る。46は体部下半まで横方向のヘラケズリを施しているが、他は縦方向である。49~51は径が不明確であるが、大型の甕と推定される。52はほぼ定形に復元できた甕で、口径18.9cm、底径12.5cm、器高17.5cmを測り、底部側面には小孔が4方向2対認められる。外面は風化のため調整は部分的にしか観察できない。53も甕で、3分の2が残存する。復元口径24.8cm、底径13cm、器高は推定で22~23cmを測り、底部の小孔は2対と推定される。54~63は上製支脚で、図示できなかった小片もある。54~56は背面の小突起が環状を呈しているもので、



1. 明黄色地山灰ブロック土
2. 明黄色地山灰ブロック土
3. 黄褐色地山灰ブロック土
4. 黄褐色土 (地山ブロック多く含む)
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土 (地山小ブロック含む)
7. 明黄色地山灰土
8. 明黄色地山灰土
9. 明黄色地山灰土 (赤土小ブロック含む)
10. 赤土地山灰土 (少量含む)
11. 黄褐色土 (地山ブロック多く含む)
12. 黄褐色土 (地山ブロック多く含む)
13. 明黄色土
14. 灰化地層
15. 明黄色土
16. 明黄色土
17. 明黄色土 (多く含む)
18. 明黄色土 (地山ブロック多く含む)



第60図 SB-12実測図 (1 : 60)



第61図 SB-12出土遺物実測図(1:3) 14・15は(2:3)

突起部を含まない器高・脚部径はそれぞれ16.9・10.2cm、19.1・11.5cm、15.5・11.5cmを測る。いずれもやや風化しているが、外面は強いナダ、あるいはヘラケズリ後のナダ調整が施されている。57・59は背面の小突起が下向きにカーブするもので、突起部を含まない器高・脚部径は欠損する59を除きそれぞれ19.5・11.3cm、19.5・11.5cm、を測る。外面の調整は54～56と同様である。60は背面小突起が縦に偏平な鐫状を呈するもので、突起部を含まない器高・脚部径は15・10.3cmを測る。61・62は60と同様のタイプと推定され、器高・径はそれぞれ16・16.6cm、15.3・11cm前後を測る。63は器高8cmを測る小型品で、脚部の復元径は7cmを測る。64は脚部下半のみで、復元径は11cmを測る。

この他原位置は不明であるが堆積土中から65刀子1点が出土している。残存長4.7cm、刃部は最大幅1.2cmで、閃部は両関式である。

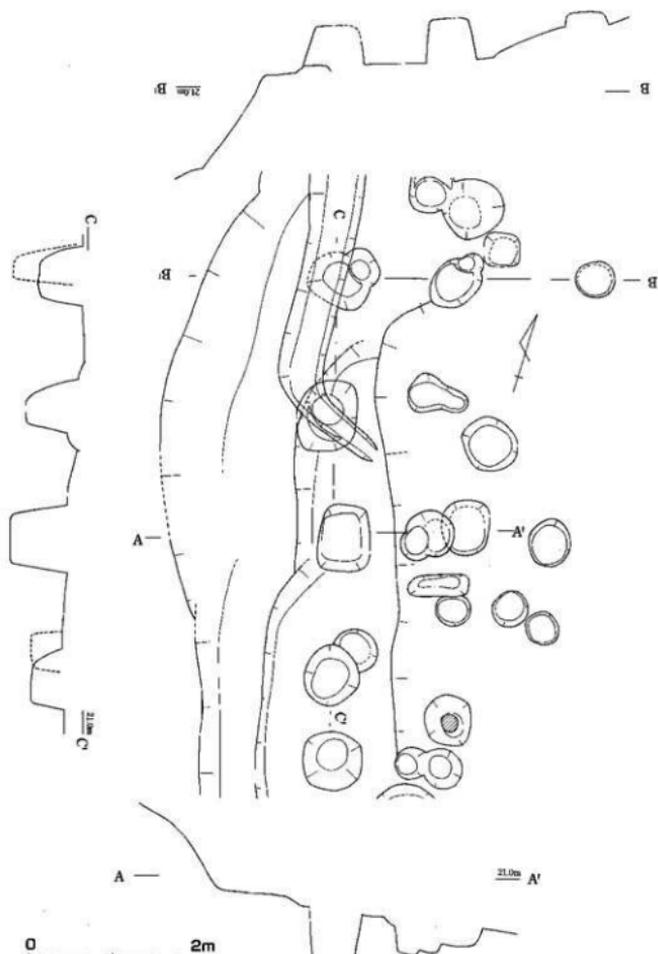
SB-11は柱穴配置や建て替えなどについて十分検討できなかったが、土器溜まりの須恵器の様相から、概ね大谷編年6-B期には廃絶していたものと考えられる。

SB-12 (第60図)

前記したように建物群中では最も新しい時期のものとして推定され、3×2間の柱穴配置を想定している。壁体溝は明瞭に検出され、南側は直角に近いカーブを見せるが、北側はやや緩やかな弧状を早している。柱穴はやや平面方形に近いものもあるが、他の柱穴と重複しているものもあり判然としにくい。コーナー部の柱穴が一段深く掘り込まれていることは他の建物と同様である。床面には完形に近い土器が残されており、北端の隙隙では床面よりやや浮いた状態で耳環2点が出土している。この耳環2

点については初期の堆積上中に含まれていたと考えているが、南に約3m離れた位置の土層断面において、幅70cm以上を測る土坑状の落ち込みを検出しており、こうした落ち込みがこの部分にもあったとすれば上城塞的な遺構の存在を考慮しておく必要がある。

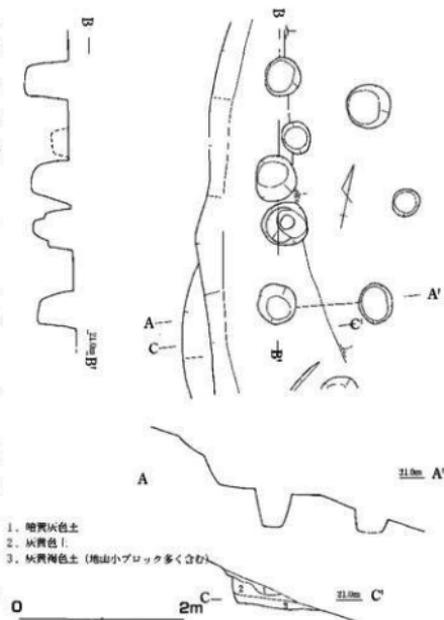
出土遺物（第61図）は大半が須恵器の蓋環類で、1～3が堆積土上層からの、4～15が床面及び床面付近で出土したものである。1・2は須恵器の蓋で、口径はそれぞれ11.1、11.6を測り、2は天井部外面の外縁部に回転ヘラ切りの痕跡を残す。3は最大径11.6cmを測る環である。4・5はそれぞれ最大径11.3、11.5cmを測る小型の蓋で、いずれも天井部の回転ヘラケズリが明瞭に残る。ツマミは5



第62図 SB-13実測図 (1:60)

はやや偏平であるがいずれも宝珠状を呈している。6・7は最大径がそれぞれ13.5、14.9cmを測るやや大きめの蓋で、天井部は回転ヘラケズリが施される。8は最大径10.4cmを測る小型の蓋で、天井部外面は回転ヘラケズリを残すが、ツمامミの有無は明確でない。9は耳環とともに出土した蓋で、口径10cmを測る。10は小型の坏で、最大径10.8cm。11は底部回転ヘラケズリの坏で、口径は11.5cm。12は高坏坏部片で、下端部に透かしの痕跡が残る。13は土師器の甕で、口径11.2cmを測る小型品である。14・15は耳環で、銅地金貼りと推定される。外径・断面径はそれぞれ2.1・0.6cm、2.0・0.6cm、を測る小型品である。

本建物は床面出土須臾器から大谷編年6 B期に属したものと考えられる。ただし、ツمامミ付きの須臾器蓋の量が過半数を占め、口径もやや大きいものが存在する点から、6-B期の中でもより新しい時期のものであることは間違いないだろう。



第63図 SB-14実測図(1:60)

SB-13 (第62図)

前記したSB-12の下層で検出した建物跡で、2×2間の柱穴配置を持つ。柱穴掘り方は方形を呈するものが多い。建物内側には付随すると考えられる加工段の痕跡が認められるが、壁体溝は検出できなかった。またこの床面下層には別の加工段の一部が認められたが、これに伴う建物跡は抽出できていない。推定される床面の高さは南に隣接するSB-11よりも高い位置にあるが、切り合い関係は確認することができなかった。床面付近から時期のわかる遺物は出土しておらず、明確な時期決定はできないが、SB-11の土器溜まりの状態からは本建物が先行している可能性が強いと考えている。

以上のことから建物の時期は明確でないが、概ね大谷編年6-A期としておきたい。

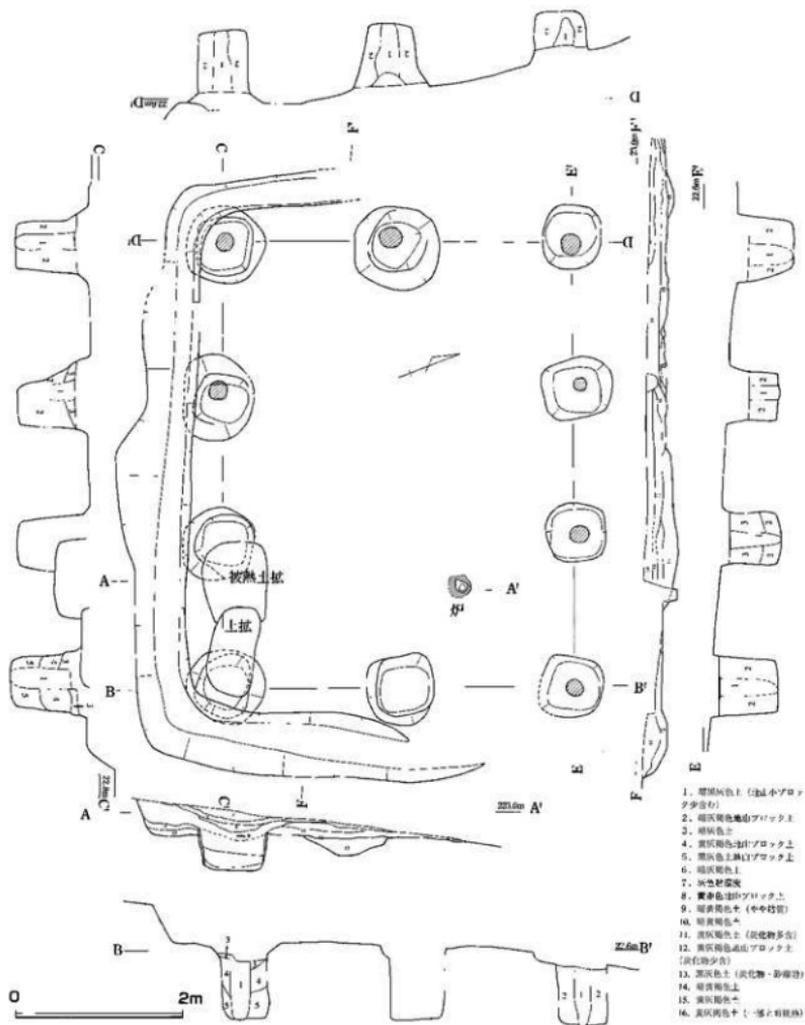
SB-14 (第63図)

SB-12の北側に隣接し、これに先行する建物であることが切り合い関係より判明している。建物に付随する加工段は調査区外に伸びており、柱穴配置は確定できないが、2間以上×2間と推定される。建物としてまとまらない柱穴は他と同様複数認められ、建て替えの可能性が高い。遺物は時期の確定できない土器細片が少量出土したのみである。

建物の時期は、SB-12に先行することが明らかであることから、大谷編年6-A期以前と考えられる。

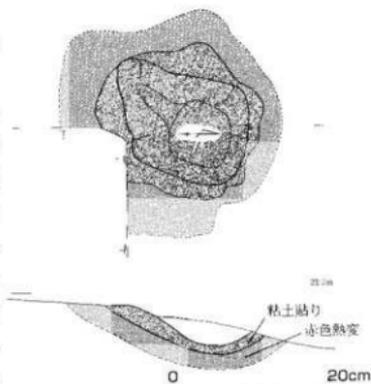
SB-15 (第64図)

調査区の南西端に位置する建物跡で、今回の調査では最も遺存状態の良いものである。調査初期の段階で検出し、当初は竪穴建物と推定していた。またこの建物南東部は平成4年度にトレンチ調査を行なった部分で、その時点では柱穴のみを確認している。



第64図 SB-15実測図 (1:60)

建物は主軸を東西にとる3×2間(5.4×4.15m)の柱穴配置を持ち、極めて整然としたものである。柱穴の掘り方は全て方形に近い平面形を呈しているが、床面レベルで検出したものは全て上端が円形に広がっている点に注意される。柱穴の深さは床面から90cm前後と深く、桁行き間の柱穴2本は南辺、北辺とも一段浅いものである。柱痕跡は7本確認され、径18~22cmを測る。壁体溝は南半にのみ残存し、底面幅20~40cmを測る幅広のものである。また溝堆積土は柱穴を切っており、柱を建てた後に造られていることが明らかである。壁体溝底面中心から柱痕中心部までの距離は45cmを測る。溝内に壁痕跡を注意して探したが、全く認められなかった。床面には明らかな貼り床が施されていたが、壁体溝内にも続いているように見受けられた。

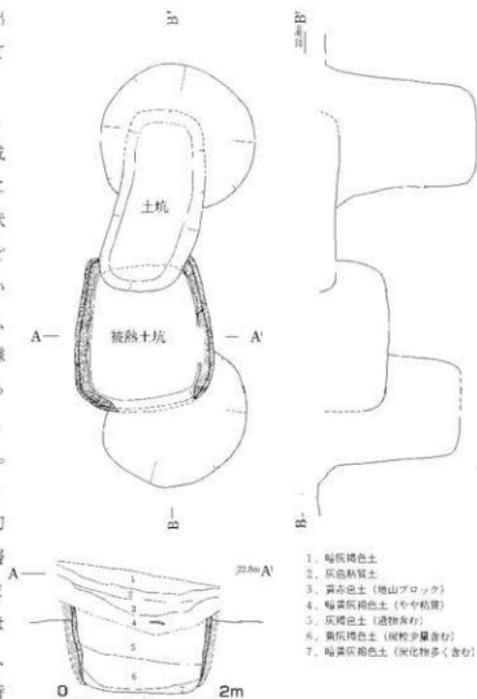


第65図 鍛冶炉実測図(1:6)

建物内の北東部貼り床上面において、炉跡1基、被熱土坑1基、土坑1基を検出したが、いずれもトレンチ調査によって消失した部分がある。

炉跡(第65図)は外法で径20cm前後、内法で径13cm前後を測る被熱粘土で構成される。内面の形態は平面が隅丸方形に近いが、南西部は上方に立ち上がる溝状を呈していた。深さは床面から5cmほどで、粘土の厚さは1~2cmが残存していた。粘土部分は暗青灰色に熱変しており、周囲は赤色化していた。形態・熱変の様子から鍛冶炉と判断した。また床面からはこれに伴うと考えられる鉄滓1点が、下方の包含層中からは数点出土している。鍛造剥片等は検出作業ができていない。

被熱土坑(第66図)は柱穴P-2を切り、土坑によって切られたもので、土層断面の観察により建物廃絶後に掘り込まれていることがわかっている。平面形は隅丸長方形で、規模は検出面で90×60cm、深さ約50cmを測る。この種の被熱土坑特有の粘土貼りが良く残っており、粘土下



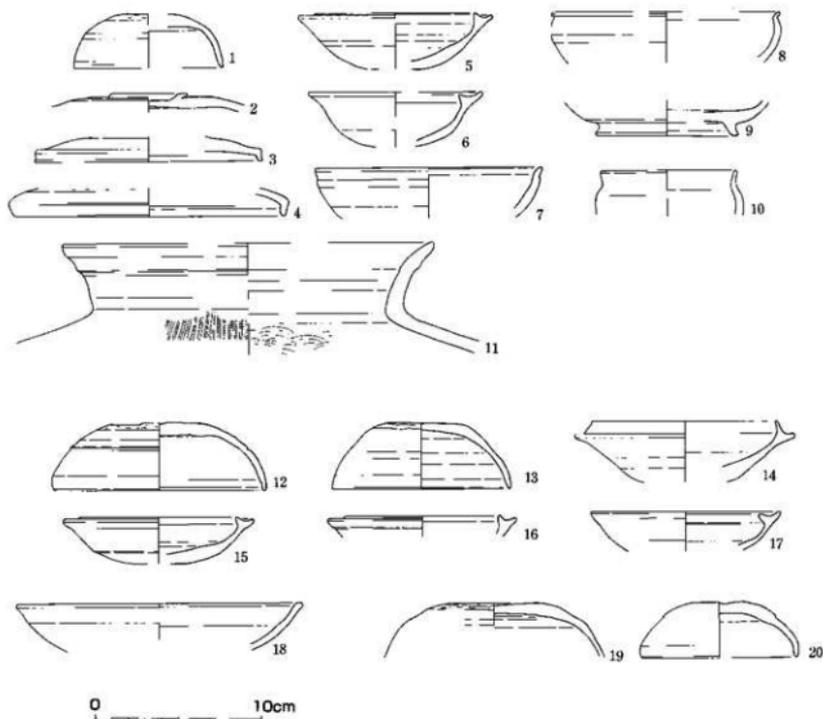
第66図 被熱土坑・土坑実測図(1:30)

1. 暗灰褐色土
2. 灰白粘質土
3. 黄赤土(地山ブロック)
4. 暗黄灰褐色土(中粒層)
5. 灰褐色土(遺物夾層)
6. 黄灰褐色土(泥粒少量含む)
7. 暗黄灰褐色土(泥化物多量含む)

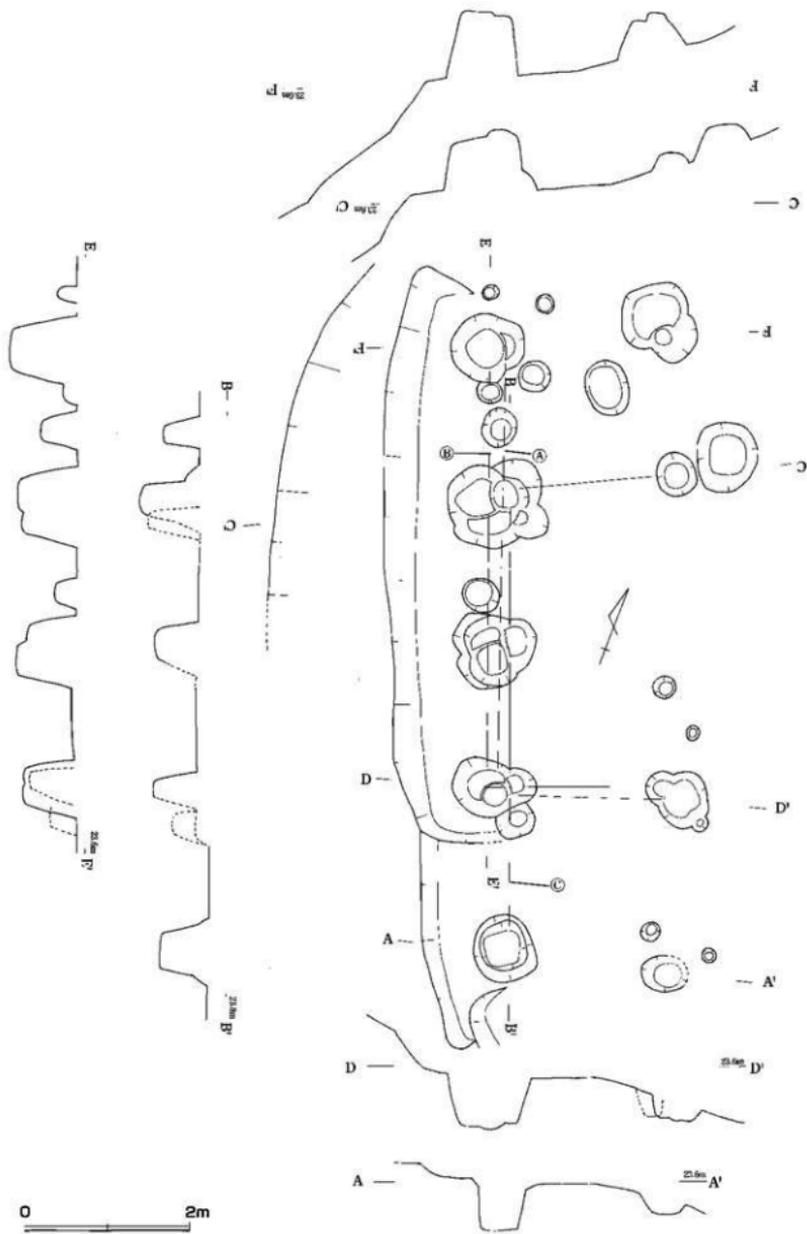
端は底面から5cm前後を測る点や、底面がほとんど熟変していない点も共通する。内部からは須恵器片数点が出土したほか、最下層には粉状になった炭化物が検出された。小型の製炭窯と推定される。

十坑は平面不整長方形を呈し、底部付近を検出したのみである。被熱十坑を切り込んでおり、これに後続することが明らかであるが、熟変しておらず、炭化物の堆積も認められなかったことから性格は不明である。規模は幅50cm、長さ110cm以上を測る。

遺物(第67図)は1~12が堆積土上層から、13~18が堆積土下層から、19は柱穴P-6、20・21は被熱十坑内からの出土品である。1は蓋として図示しているが、天井部に回転ヘラケズリを施しており、坏となるかも知れない。2~4は輪状ツマミが付くタイプの蓋と推定されるもので、この建物の南側高所にこの時期の遺構が存在することを想像させる。5・6は坏片で、復元最大径はそれぞれ11.6、10.5cmを測る小型品である。7・8は内湾する口縁が端部付近で外反するタイプの坏片で、この種のものとしては古相を呈している。9は蓋片で、2~4に伴うものであろう。10は短頸壺と推定されるが、小片のため径・傾きとも不明瞭である。11は復元口径22.5cmを測る須恵器の甕で、体部にはタタキ痕が残る。13は口径12.9cmを測る蓋で、肩部に沈線、天井部外面の外縁に回転ヘラ切りの痕跡を残す。回転ヘラケズリが消失した直後のタイプであろう。14は口径10.9cmを測る蓋で、天井部は13



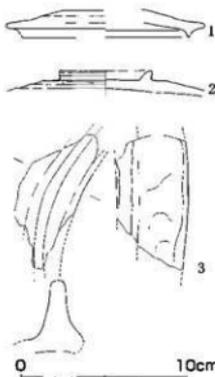
第67図 SB-15出土遺物実測図(1:3)



第68图 SB-16实测图 (1:60)

と同様である。15～18は坏小片である。19は高坏口縁部細片と推定される。20は蓋片で、口径は13に近いものと推定され、天井部外面の調整も同様である。21は口径10.7cmを測る小型の蓋である。その他、土師器小片も出土しているが図示できるものはない。

建物の時期は堆積土下層出土の須恵器を下限とし、建物下層で検出された溝状遺構1出土の須恵器を上限とする時期であることは間違いないだろう。ここでは大谷編年5期以降に築造され、6～A期の内に廃絶したものと考えておきたい。また、上層遺物は奈良時代に下る可能性が高いが、次節で紹介するタイプよりやや古相を持っていることが注意される。以上のことから本建物は7世紀前半の鍛冶工房としての位置付けをしておく。



第69図 SB-16出土遺物実測図
(1:3)

SB-16 (第68図)

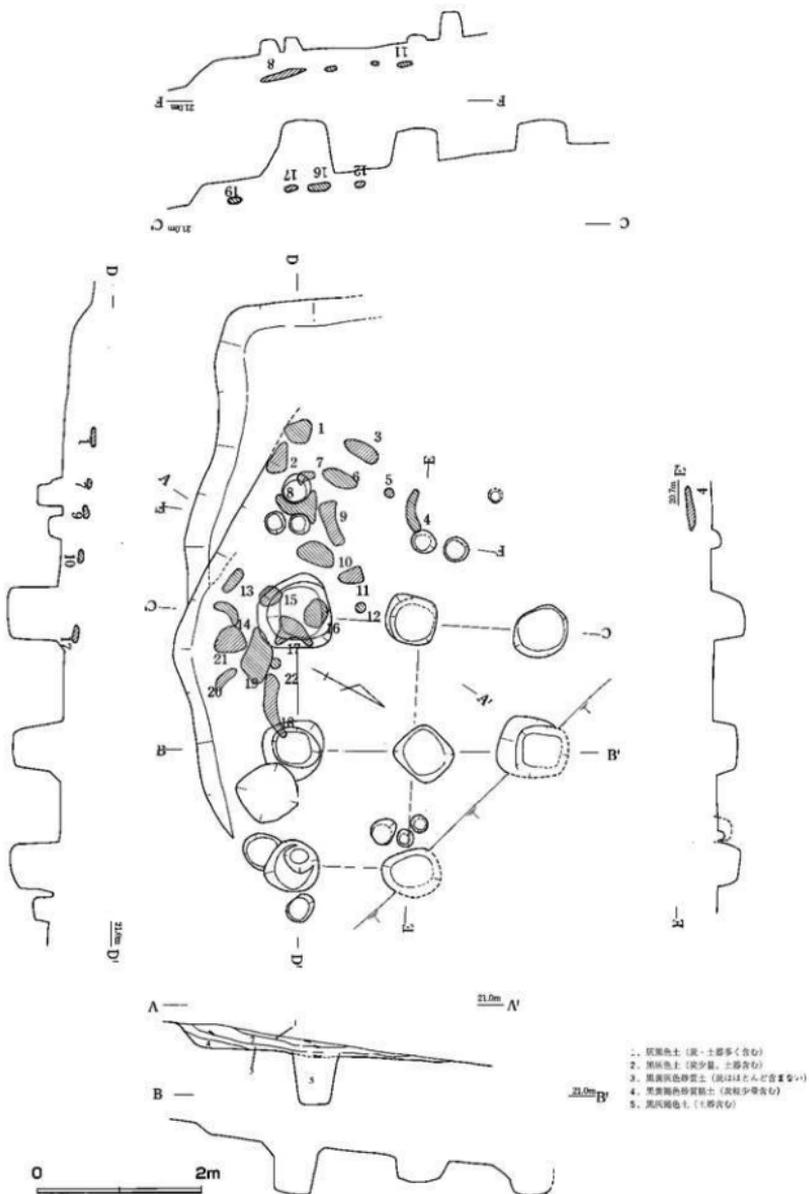
調査区西端高所に位置する建物跡で、3棟分の柱穴配置が抽出できている。それぞれの切り合い関係は不明であるが、建て替えをする度により高所へ、床面はより高くなるという基本パターンを緩用すれば、本建物においては建物A→B→Cが推定されることになり、ひとつの日安となろう。建物はいずれも3×2間の柱穴配置を持ち、規模はいずれも5.4×4m前後になるものと推定される。柱穴掘り方はいずれの建物も方形を指向するものが混在しており、径も大型の部類に属している。これらに付随する加工段はB・Cに伴うものが残っており、壁体溝は十分な調査が行なわれていないが存在していたものと考えている。床面は一部に炭化物の広がりが認められたが、被熱面は確認できなかった。

遺物はごくわずかなものであり、床面に近い位置で出土したものである。1は復元最大径12cmを測る蓋で、ツマミが付くタイプと推定される。2は輪状ツマミが復元径5.8cmを測る蓋片で、天井部外縁には回転ヘラケズリが施されている。3は移動式竈の小片で、焚き口の鏝状部分と考えられる。その他、平安時代と考えられる土師器小片も出土している。

建物(第69図)は出土遺物が少なく、明確な時期決定は困難であるが、床面付近の須恵器2や、北側下方のSB-11上層出土遺物(第55図-1・2)などから、大谷編年7～8期に廃絶したものと推定される。3回の建て替えを考慮すれば、初期の建物は少なくとも1の須恵器が示す6-B期にまで遡る可能性がある。また、床面に残された小型の柱穴は建物として抽出できていないが、北側の建物群と同様、平安期のものと推定される。

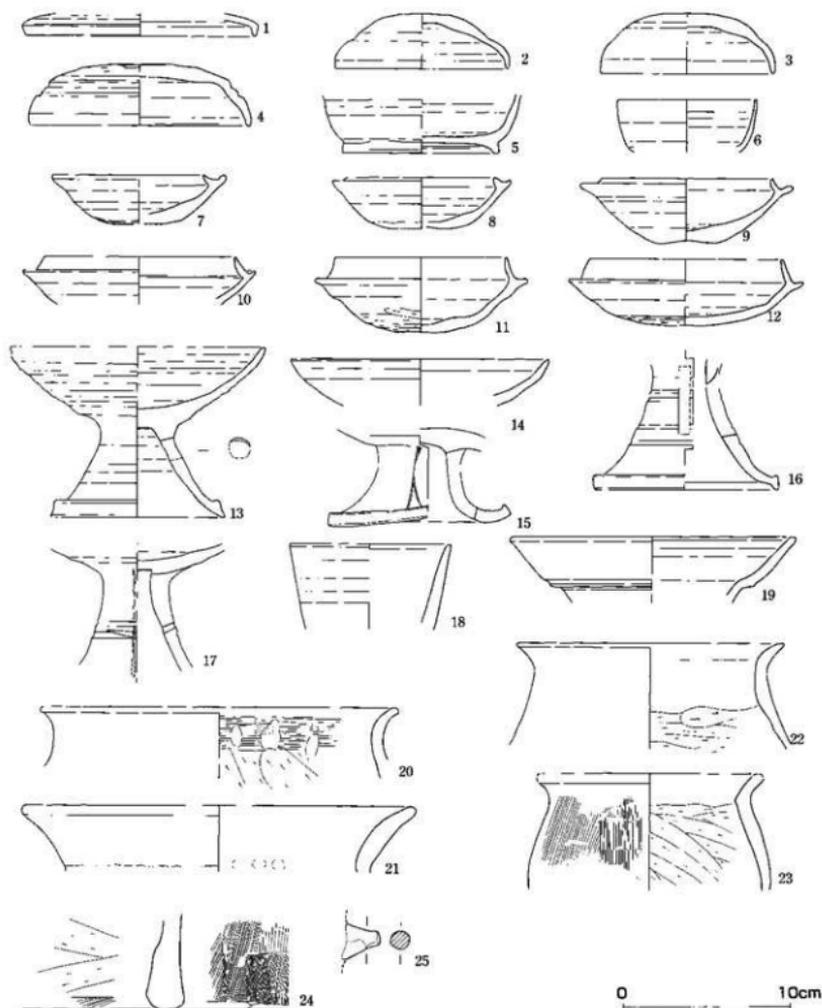
SB-17 (第70図)

SB-15の北側下方に位置する建物跡で、検出当初は上器溜まりとして認識していたものである。その後加工段が検出されたが、南辺ラインに不自然な変換点が見受けられたため、上器溜まりと加工段の関係を注意して検出作業を行なった。その結果やや不明確な部分もあるが、2つの加工段が切り合っていることがわかり、土器溜まりは新しいほうの加工段に伴うものであることがわかった。そして、上器溜まりを取り除いた後、床面から2×2間の総柱の柱穴配置を持つ建物跡を検出した。

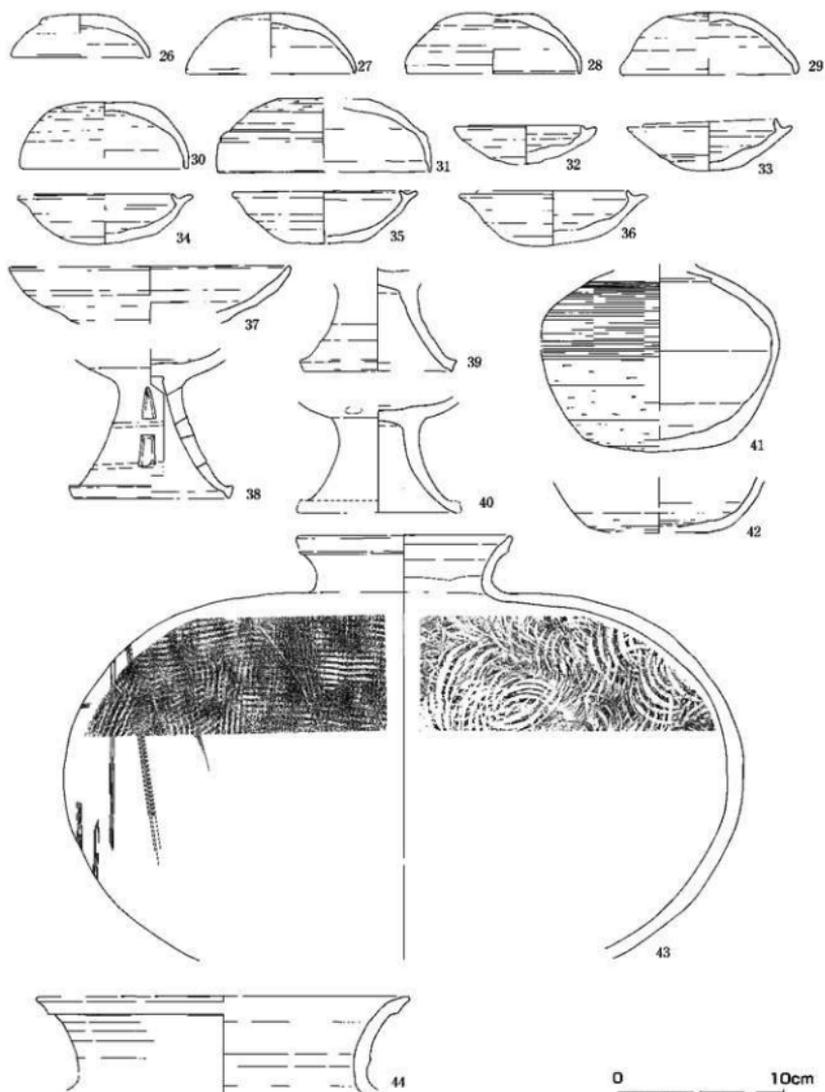


第70図 SB-17・加工段8実測図 (1 : 60)

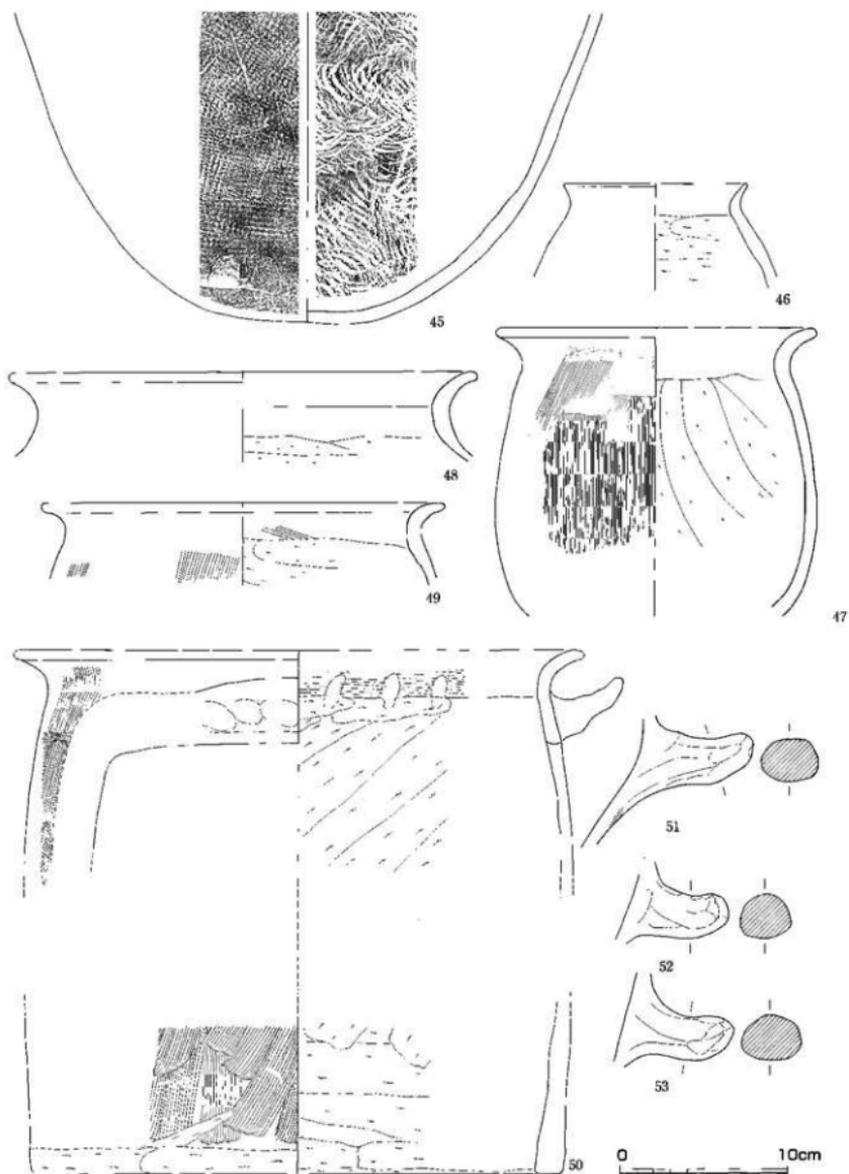
建物規模は2.9×2.9mを測り、北側は削平を受け、柱穴1本分が消失している。柱穴掘り方は、方形を指向するものが多く、上面でやや開く点はSB-15と共通している。柱穴の深さは他と同様で、中間のものがやや浅く、中心部の床柱はさらに一段浅いものであった。加工段は直線的なラインを持たず、やや弧状を呈しており、整体溝は平面でも土層断面でも検出できていない。加工段の形状は後



第71図 SB-17出土遺物実測図 (1) (1:3)



第72圖 SB-17出土遺物実測圖 (2) (1:3)



第73图 SB-17出土遺物実測図 (3) (1:3)

述する建物SB-22に近い点は注意しておきたい。

遺物は加工段が未分離の段階で検出した一群(第71図)、加工段分離後に土器溜まりとして認識したもの(第72・73図)、そして土器溜まりの下層出土品(第74図)である。このうち未分離の段階で出土したものはかなり時期幅が認められるが、これは前節で記した溝状遺構1と後述する土器溜まり2などがこのあたりで複雑に交錯しているためと推定される。

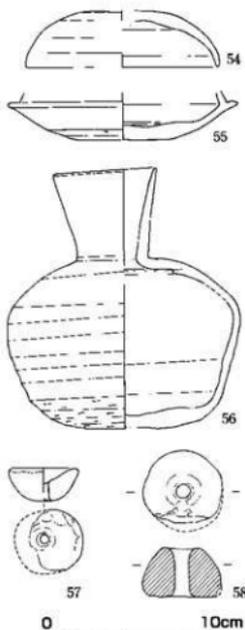
1は輪状ツマミが普及する新しい段階のもので、SB-15の上層にも見られる。5は底部に回転糸切りを施す坏で、奈良時代でも古相を呈するものと考えられる。4・11・12・19は回転ヘラケズリを施す古い段階の蓋坏や甕で、溝状遺構1に関連するものと推定される。これ以外の須臾器は土器溜まりと同様の時期を示すものと考えられる。土師器については小片が多く不明確な点があるが、概ね同様の時期と推定される。この他特徴をあげると、13は脚部に方向不明の円形透かしの痕跡が、15は3方向に三角形の透かし、16は3方向に形態不明の透かし、17は2方向に線状透かしが施されている。21は土師器は移動式甕の口縁部となる可能性がある。24は移動式甕の底部片である。25は小型の瓶の把手と推定される。

土器溜まり出土品は古相を呈する31を除き、ほぼ同様の時期を示し

ていると考えられる。蓋坏類は、セットで出土した26・32などの小型品も見られるが、蓋は27-29など、口径が10-11cmに収まるものが多い。坏33-36も最大径が11.5cm以内に収まるものである。37-40は須臾器の高坏で、長脚の38は2段2方向に透かしを持ち、短脚の39・40は透かしを持っていない。41・42は長頸空あるいは平瓶で、41は上半部にカキメを施す。43は横瓶片で、2分の1弱が遺存していた。44は須臾器甕口縁部片で、復元口径22.6cmを測る。46-47は土師器甕で、ほぼ器形が判る47は口縁部径と胴部最大径がほぼ同じ下膨れの形態を呈している。内面ヘラケズリは47が縦方向に、他は少なくとも上部を横方向に施している。50は移動式甕で、各部小片からのおおよその復元図である。口径は推定34cmを測る。51-53はいずれも甕の把手部である。54は復元径約4.5cmを測る土製品で、紡錘車、あるいは底部穿孔のミニチュアと考えられる。55は石製の紡錘車で、石材は白色で粗く風化が著しいものである。最大径4.8cm、高さ3cm、孔径0.9cmを測る。

土器溜まり除去後に下層床面付近から出土したものはわずかである。56は復元口径11.8cmを測る須臾器の蓋で、天井部にはヘラ記号の一部が残る。57は底部外面に回転ヘラケズリを施す坏で、復元最大径は14cmを測る。58は平瓶で、ほぼ完形に近いものである。

本建物の廃絶時期は、土器溜まり出土の須臾器が大谷編年6-A期と考えられることから、それ以前と推定される。下層遺物の大半もこの時期に属しており、築造時期もこの期の内にあると考えられる。また、より古い4期の須臾器である57は破片のほとんどが南西側に重複する加工段の下層で出土していることから、この加工段の時期を示していると考えられる。以上の点から、本建物は6-A期の高床倉庫で、下層には同4期の加工段が存在していたと考えられる。

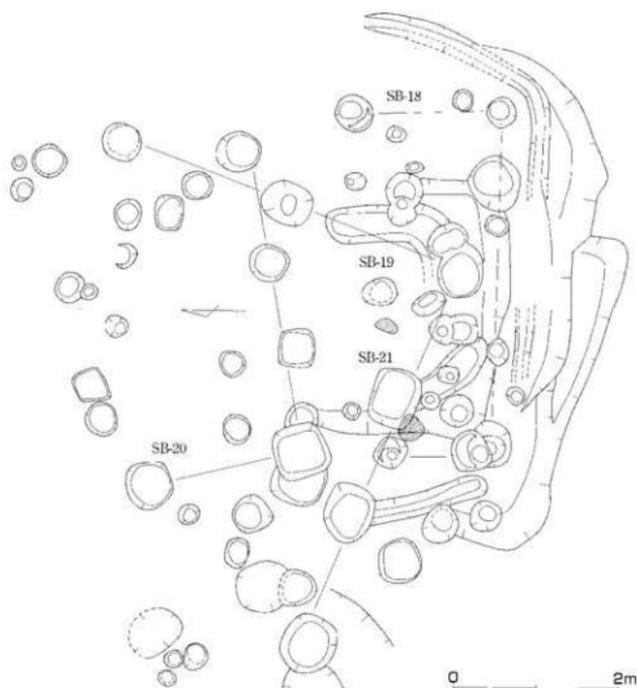


第74図 SB-17出土遺物実測図(4)
(1:3)

SB-18~21 (第75図)

これらは前記した建物SB-17の東側で検出した建物群で、当初は一つの加工段として認識していたものである。調査が進むにつれて、加工段は少なくとも3回の造り替えを行なっていることが土層観察によって明かとなった。また検出当初に土器溜まり状を呈していたものは大半が1・2層中に含まれているやや新しい時期のものであることもわかり、遺構検出は困難を極めた。床面を水平に下げながら下層遺構を探したが、被熱面や加工段・柱穴の一部を検出できたのみであった。結局、柱穴のほとんどは地山面において検出したもので、それすら困難な状態であった。柱穴についてはその並びを検討しながら、再三に渡って検出作業を行なったが、完全なる配置は抽出することができなかった。ここで紹介する建物群は可能性を示したに過ぎず、今後も検討が必要なることを断っておく。

出土遺物(第79図)についてはほとんどが建物群廃絶後に堆積したものであり、2次資料と言わざるを得ない。しかし、周辺部の建物の様子や、わずかな下層出土品からおよその時期決定はできると考えられる。この遺物についての説明は最後に建物を含めて総括したい。



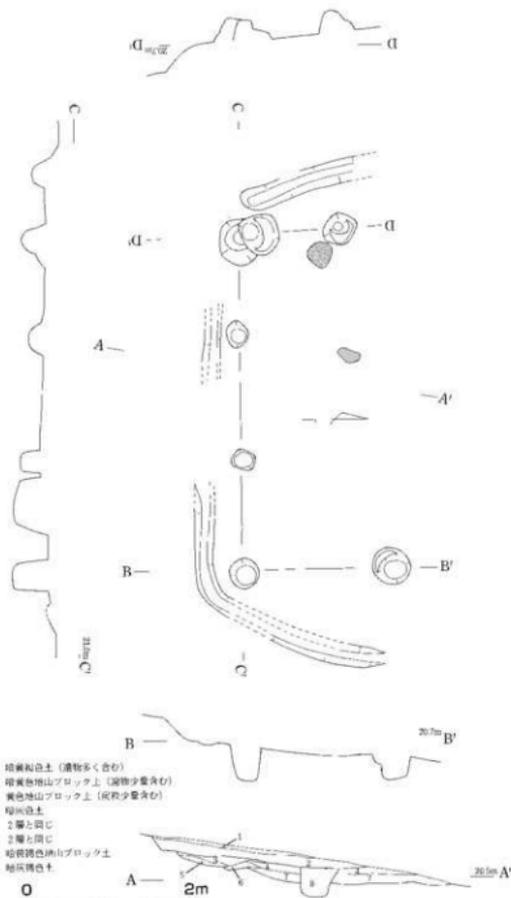
第75図 SB-18~21全体図(1:60)

SB-18 (第76図)

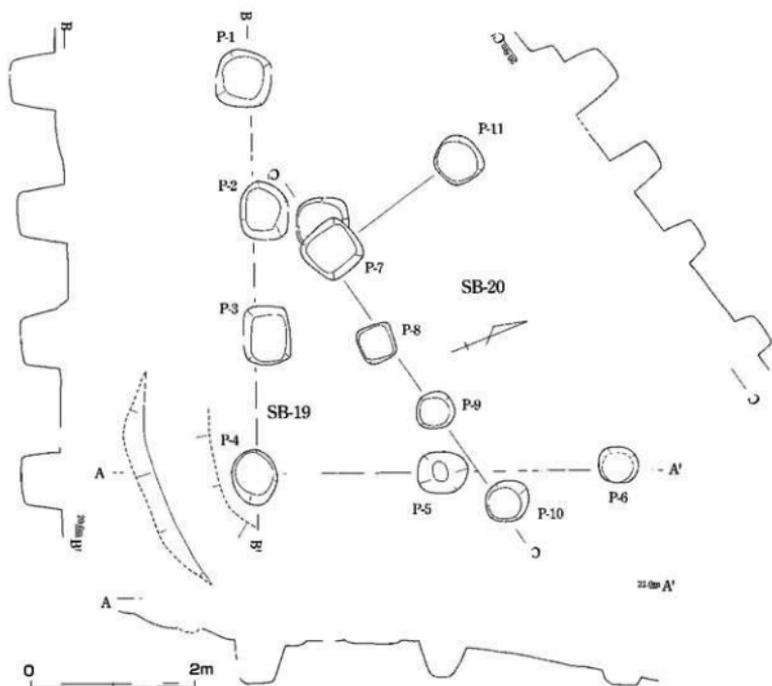
この建物跡は3×2間以上の柱穴配置と、コの字に巡る壁体溝によって構成される可能性があるものである。壁体溝は部分的に検出できたものであるが、全体のバランスや底面のレベルがほぼ均一であるため、一連の溝と判断した。柱穴は全体に径が小さく浅いもので、南辺は比較的明瞭な並びを見せている。しかし、東・西辺は間隔が異なっており検討の余地がある。また、柱穴の深さが浅い点はより上層から掘り込まれた可能性があることを意味しており、もしそうだとすれば、壁体溝を持つこの加工段と建物は別時期のものであることになり、注意を要する点となる。壁体溝は6層に対応するもので、上部は3・5層の幅広の(壁帯)溝によって削平されている。この上層の溝は平面的には一部しか検出されておらず、後述する建物SB-19に付随する可能性のあるもので、だとすればSB-18→SB-19という関係が成り立つ。被熱面2カ所はそのレベルからこの床面にはほぼ対応すると推定したもので、他の建物に見られる粘土貼りの痕跡は見つかっていない。以上の点からこの遺構群を一つの建物とするには更に検討が必要である。よって、本遺構群を建物の可能性のあるものとしておきたい。

SB-19 (第77図)

この建物跡は周囲の柱穴群の中から方形に近い掘り方を持ち、底面のレベルが均一となるものを選んだ後、平面的に抽出したもので、それ以外には積極的な根拠はない。一見すると整然とした柱穴配置にも見えるが、南辺と東辺では柱穴間距離がかけ離れている点、南辺の中間部の柱穴2本が軸線からややずれる点など、一つの建物とするには消極的な要素もある。また、柱穴P-1は隣接する建物SB-17の柱穴を切り込んで掘られていることが確認されている。以上の点からこの柱穴配置を建物跡の可能性のあるものとしておきたい。



第76図 SB-18実測図 (1:60)



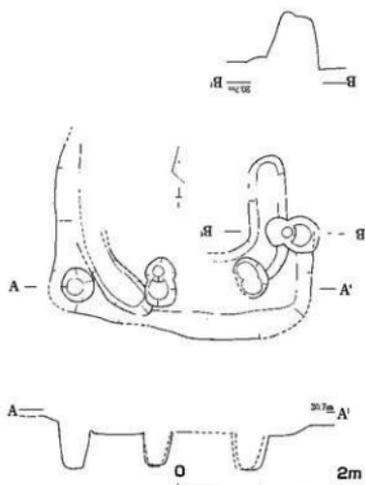
第77図 SB-19・20実測図 (1 : 60)

SB-20 (第77図)

この建物も柱穴底面レベルが均一なものの中から平面的に抽出したものである。柱穴掘り方が方形を呈するものを含む点は注意される。遺物等は出土していないが周辺の柱穴と同様の堆積土を持っており、相前後する時期に立てられたと判断している。

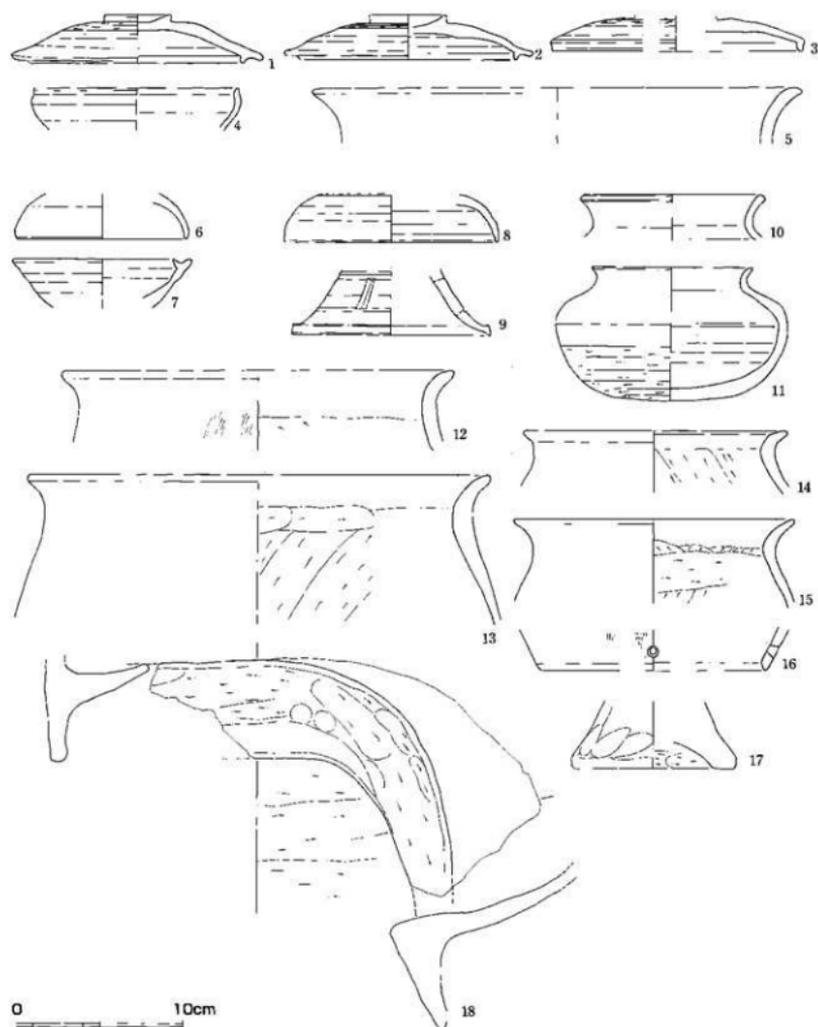
SB-21 (第78図)

最下層地山面で検出した小型の加工段と、その周縁部で検出した柱穴群を便宜的に建物跡としたものである。柱穴配置には積極的な並びは見いだせないが、柱穴底面のレベルはほぼ同一で、大きさ等も非常に近似していたためこれらが一連



第78図 SB-21実測図 (1 : 60)

のものである可能性が高いものと考えており、あえてここで抽出したものである。加工段には不自然な壁体溝状の溝が付き、建物との関係は不明であるが、ここでは関連する可能性のあるものとして取り上げた。

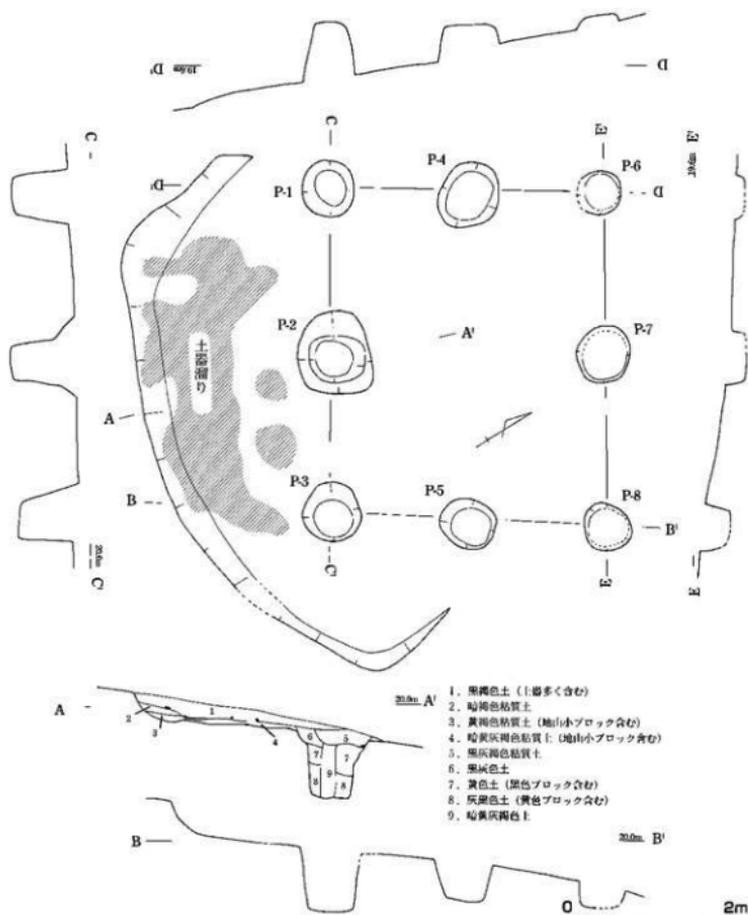


第79図 SB-18~21出土遺物実測図(1:3)

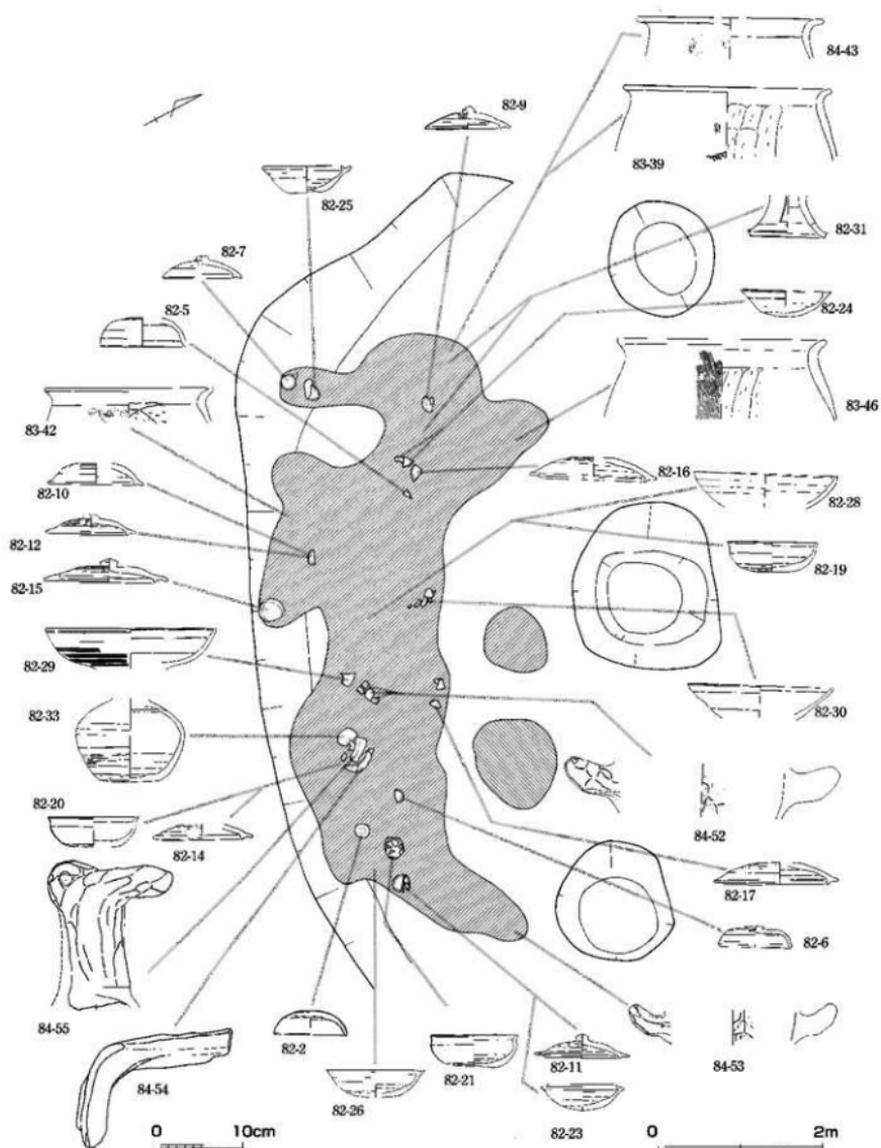
SB-18~21出土遺物 (第79図)

1~5は1層出土で、後述する加工段9と同時期の蓋(1・2)とそれよりやや新しい時期のもの(3・4)である。6・7はSB-19の柱穴内からの出土で、6は口径10cm、7は最大径10.8cmを測る小型品である。8~18は2層から出土したと考えられるもので、やや占相を呈するものも含まれている。9は3方透かして大谷編年5期にはほぼ限られるようである。

これらの出土遺物と、柱穴等の切り合い関係から、SB-19は大谷編年6-A期以降に、SB-18・21はそれに先行する時期(6-A期以前)としておきたい。



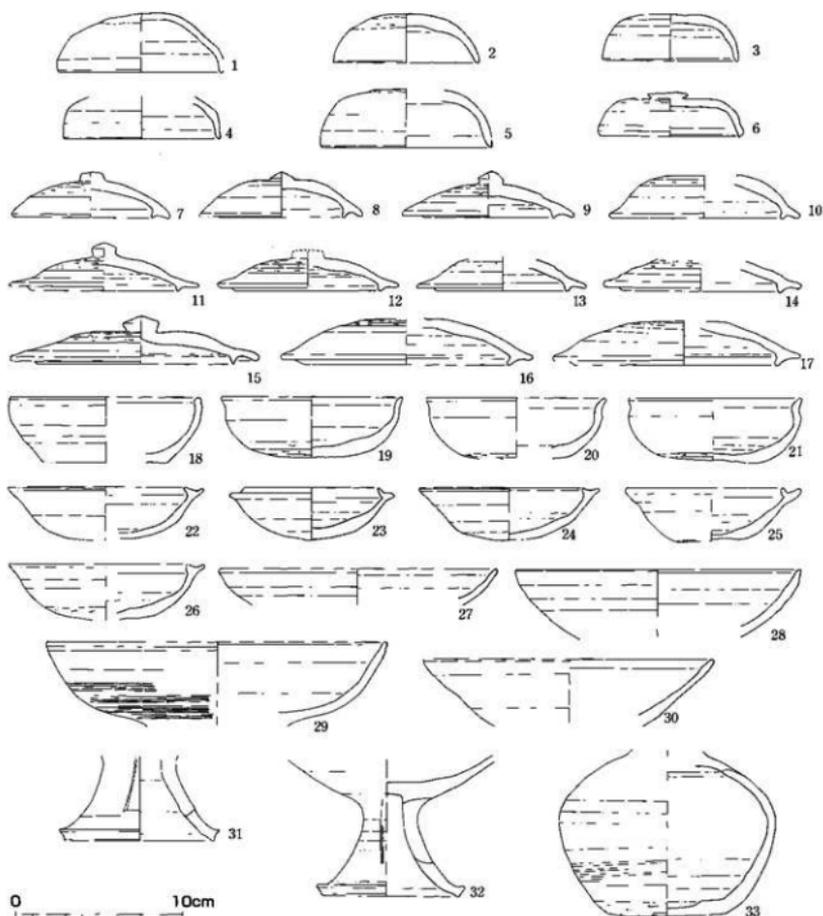
第80図 SB-22実測図 (1:60)



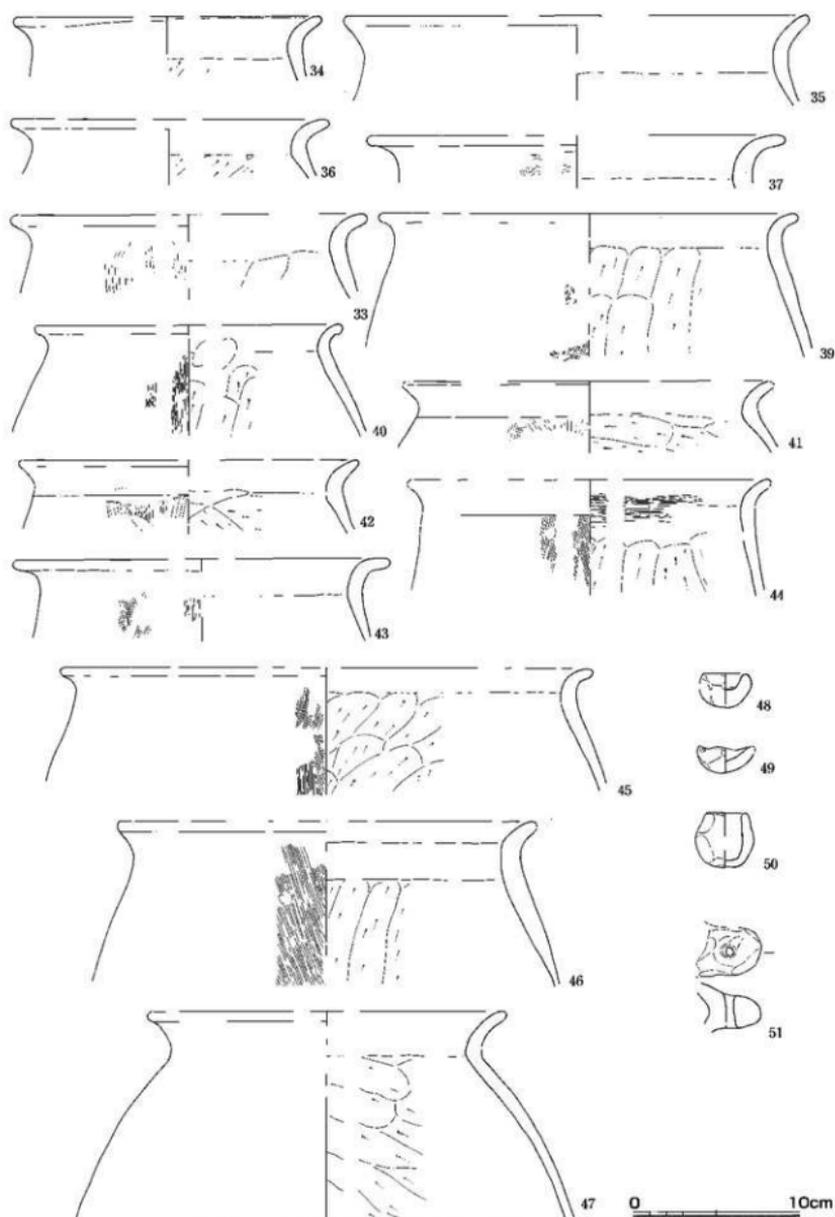
第81圖 SB-22遺物出土狀況

SB-22 (第80図)

遺跡中央部の谷斜面に位置する建物跡で、2×2間の柱穴配置を持っている。この地点は検出当初は土器溜まりとして認識していたが、その後明確な加工段が検出され、最終的には建物跡が発見されたものである。建物主軸は斜面に平行するもので、規模は3.95×3.3mを測る。柱穴はやや方形を指向しているものも存在し、規模も大型のタイプである。このうちP-2は掘り方上面がやや広がる形状を持っており特徴的である。付随する加工段は建物に対して直線的でなく、壁体溝も土層断面でかろうじて存在する可能性が指摘できる程度で、平面的には検出できていない。また、柱穴から壁面までは2mも離れており、特徴的である。これらは通常の建物と明確に異なる点であることに注目して



第82図 SB-22出土遺物実測図 (1) (1:3)

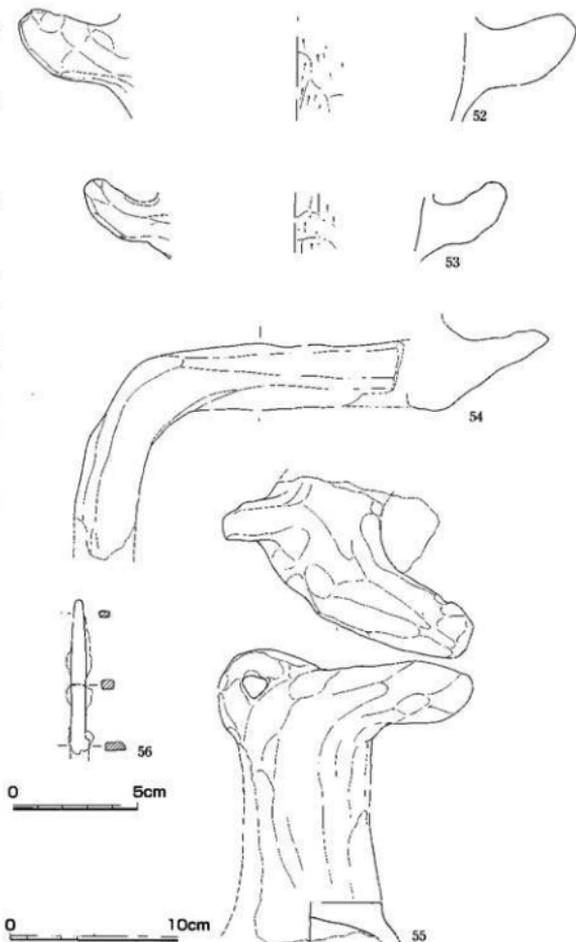


第83图 SB-22出土遺物実測図 (2) (1:3)

おきたい。

遺物（第82～84図）はほぼ床面上に形成された大規模な土器溜まりが主で、出土状況（第81図）は一見混沌とした状況に見えるが、須恵器の蓋坏類の完形品に近いものがほぼ全体に分布する点や、須恵器の高坏・壺類、土師器の甕・土製支脚が少ない点は注目される。このことは後述する建物東下方に位置する、古道1上に堆積した土器溜まりと密接な関係があると考えている。結論を言えばこの建物の土器溜まりと古道1上の土器溜まりは相互補完的な関係にあると見え、同時期の土器大量廃棄と考えられるものである。これはSB-12床面上に残された同時期の須恵器と線で結ばれ、さらに隣接する洗山池古墳群中の横穴墓群の使用時期とも関係し、面的な広がりを感じさせる現象と考えている。ちなみにこの次の時期と考えられる遺物を出土した遺構は、調査区内では加工段9などで、他に調査区南側高所に遺構の存在が想定されるのみである。

個々の遺物は主要なものについてのみ記しておく。18は底部回転糸切りで、加工段検出以前の出土



第84図 SB-22出土遺物実測図 (3) (1:3, 56は1:2)

品に含まれているため混入品と考えられる。19～21の口縁端部が外反する坏はいずれも焼成不良で、同じく焼成不良の蓋11・14などとセット関係になると考えられる。29は銅製品を模したと考えられる、椀形の坏部を持つ類例の少ない高坏である。48・49はミニチュアの椀で、口径は3.5cmに満たないのである。50もミニチュアで、壺を意識した形状を持つ。51は小孔を持つ把手状の土製品で、内面がやや袋状となっており、土鈴の可能性がある。52・53は瓶把手部分の小片。54は甕の底部分で、これと同一個体と推定されるものが北側下方の包含層から出土している。55の土製支脚は背面突起が環状を呈している。

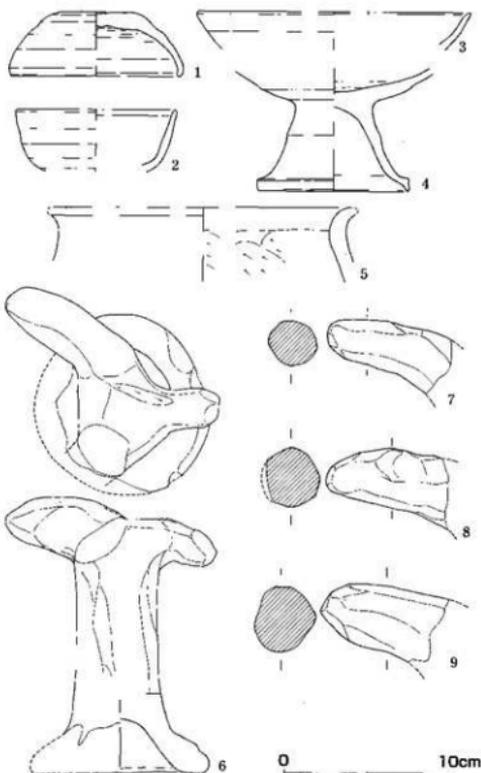
SB-08 (第35図)

前節で記した建物SB-07を切り込んで作られた建物跡である。谷溝の後世の削平により、柱穴の一部と床面の半分が失われている。柱穴配置は南辺が2間分、西辺が1間分残存するが、床面の残り具合や、周辺の地形などから判断して、2×2間あるいは南北に主軸をとる3×2間が推定される。また床面にはこの他に浅い柱穴が認められ、建物埋没後も何らかの建物が作られたと考えられる。

床面南西端には、移動式竈に伴うものと考えられる被熱した粘土貼りが良好に依存していた。規模は径50~40cm、厚さは3cm前後を測る。床面周縁には明確な壁体溝は認められず、柱穴から壁面までの距離は20~0cmと非常に接近したものとなっている。

図示した遺物(第85図)は床面から出土したもので、小片が多い。1は口径10.4cmを測る須恵器の蓋、2は口径は不明瞭な小型の坏片と考えられる。3・4は高坏で、4の脚部は径が9.2cm、透かしは存在しないものと推定される。5は土師器甕の小片で径は不明

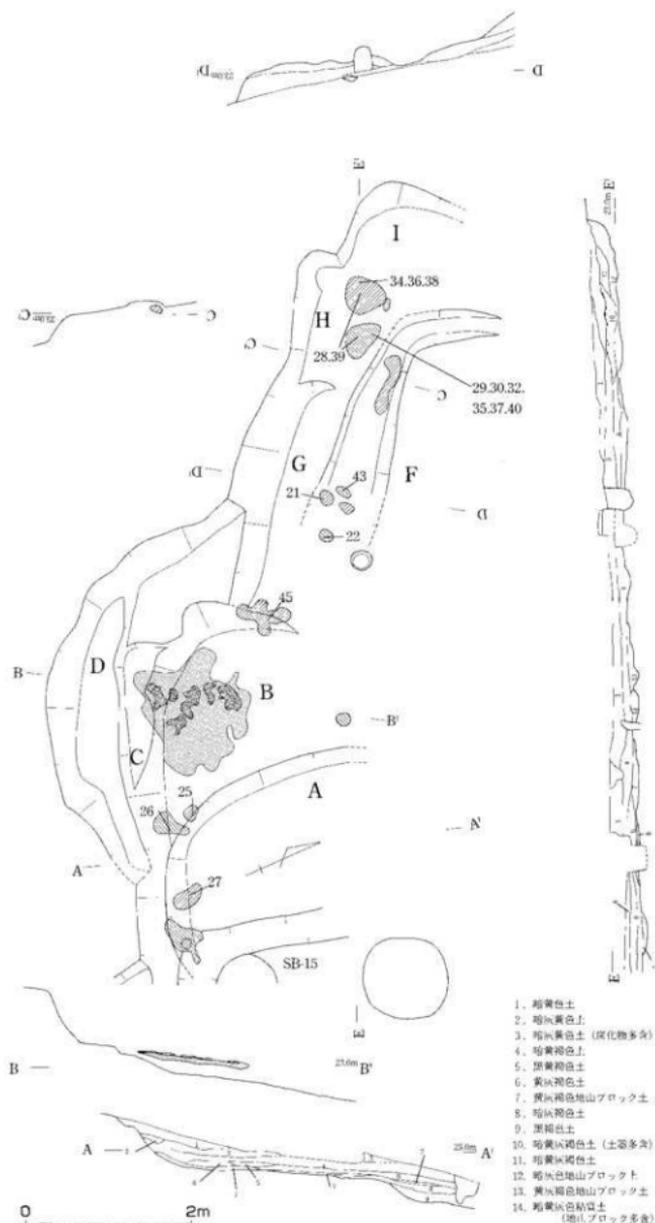
であるが、頸部内面に屈曲部の見られない下膨れタイプのもので推定される。6は土製支脚で、突起部を除く高さは15.5cm、復元脚部径約11cmを測るものである。調整は強いナアと考えられるが、一部にヘラケブリの痕跡が認められる。7~9はいずれも土製支脚の突起部片と推定されるが、9についてはヒネリが不明瞭で甕の把手となる可能性がある。床面から出土した須恵器から、本建物の廃絶時期は大谷編年6-A期と考えられる。築造時期は先行する建物SB-07の堆積土中の須恵器に大谷編年5期に近いものを含むことから、それ以降となろう。



第85図 SB-08出土遺物実測図 (1:3)

加工段9 (第86図)

鍛冶工房SB-15の西側で検出した加工段群で、当初は調査区から外れた位置に存在していたため、本来の下層遺構であるSB-15を調査していく過程で検出、その後調査区を広げて対応したものである。また、この付近の地山は山砂利と通称される砂礫層によって構成されていたため、検出は



第86図 加工9段実測図 (1:60)

非常に困難であった。

検出された加工段は最終的に最大でA~Iの9面を数え、この他に西側に隣接して加工段の可能性があるものも存在している。これらは同一時期のものも存在する可能性があることや、短期間に拡張、あるいは造り替えを行なったものと推定される。土層観察によって数回の造り替え痕跡を確認しているが、面的には十分でなく、それぞれの加工段がどの面に対応するかは検討不十分であることを断っておく。これら加工段のうち、確実に壁体溝を伴うものはFで、それ以外は伴わない可能性が強いと判断している。床面に竈床と推定される被熱粘土貼りを残していたのはEに対応する面で、この他土層断面でAに対応する面でも被熱部分を確認している。床面では一部に柱穴らしきピットを検出しているが、いずれも浅いもので、この種の加工段に伴っていた建物を復元するうえで十分な検出作業

が行えなかった。

遺物(第87～90図)は調査区拡張以前に出土したものと、拡張後の堆積土上層遺物を示したのが第87図-1～15、第90図-42・44である。これらの中には回転糸切り痕を持つもの3・4、静止糸切り痕を持つもの5など加工段床面出土品より新しい時期のものが含まれている。このことは調査区南高所にこの時期の遺構の存在を示すものである。またこれらは口縁端部の特徴や焼成が次節で扱う奈良時代のものとは異なっており、奈良時代のものとしても、より先行する時期のものと考えられる。土師器のうち11は底部にヘラケズリを行なっている。15は甕の口縁部となる可能性がある。

16～20は1層から出土したもので、大谷編年7期以降のものと推定される。

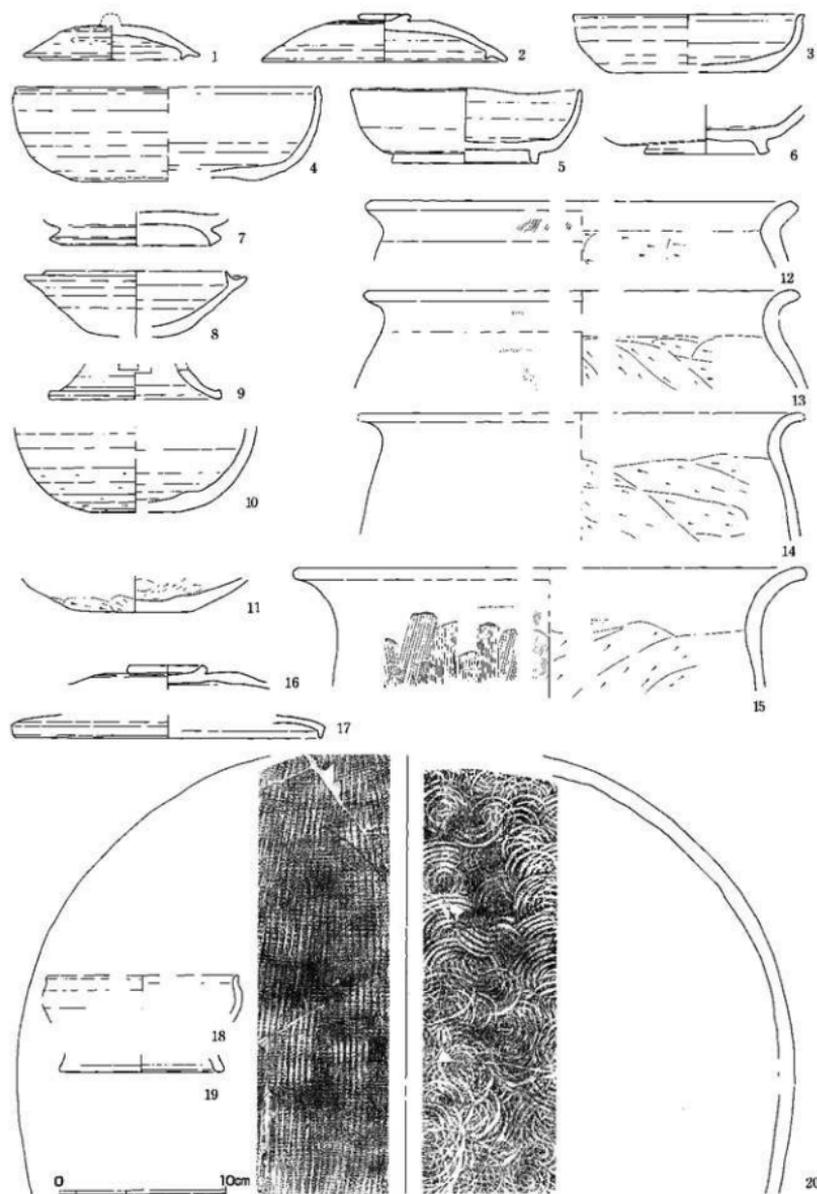
21～24・43は加工段Fの壁体溝内から出土したもので、21・22はほぼ完形である。最大径・ツマミ径はそれぞれ14.7・4.7cm、16・4.8cmを測る。大谷編年に対応させれば、7期初頭頃になるだろう。

25～27・45は甕床とほぼ同一面からの出土で、加工段Dに伴う可能性があるものである。25の高台付き椀は口径19cmを測る大型品で底部に竹管状の工具による刺突痕が残る。26・27は移動式甕で、各部の小片から推定復元したもので、いずれも薄く作られており、中型品以下の大きさと推定される。甕の特徴をあげると、頸部内面径は推定20～23cmを測り、甕に載せる土師器壘の大きさの1つの目安となろう。焚き口外縁部には罌状の粘土帯を貼り付け、上部では庇状に偏平拡大し、45度前後の角度で立ち上がっている。この部位の調整はナデ調整が主であり、貼付けの際の圧痕が顕著である。体部は内面ヘラケズリを全面的に行なっている。外面は風化が激しいが、縦方向のハケメを一部に残しているほか、26では底部付近に横方向のヘラケズリと斜め方向の強いナデの痕跡が認められる。図示していないがこの他にも厚手に作られた甕片も存在する。45は鋤先の側面部分と考えられる鉄器片で、内側の差し込み部分は損傷が激しいため不明確な点が多い。先端部付近は外側が薄めに作られていることがわかる。側面中程で、使用時の切れ込みが認められ、上端はほぼ原形を残していると推定される。

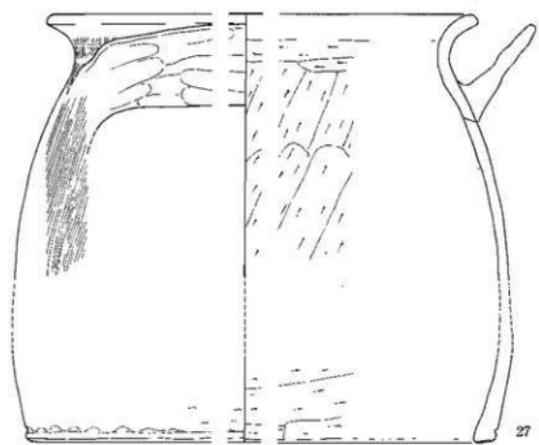
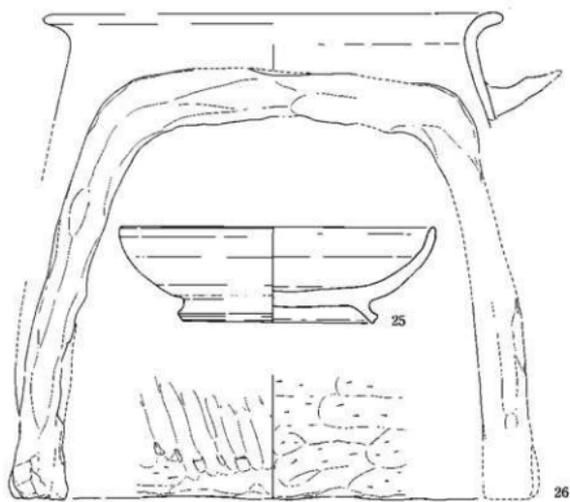
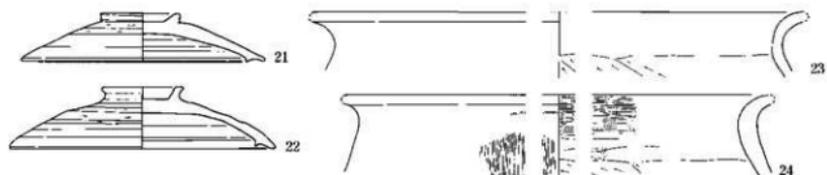
28～41は加工段H・Gに対応すると考えられる床面出土のもので、西側から廃棄されたような出土状況であった。28～30は輪状ツマミを持つ蓋で、最大径・ツマミ径はそれぞれ15.1・3.9cm、17.2・5.9cm、18.8・7.9cmを測り、下層のものよりやや大型化している。31は短脚の高杯で、口径17.4cmを測る。32～37は土師器の甕で、口径13cmの小型品から、口径39.6cmの大型品まで各サイズのものが存在する。38は小型の甕で、器高17.5cm、推定口径19～20cmを測る。把手は先端が大きく膨らむ形状を持ち、底部の小孔は6方向3対と推定される。39も甕であるが把手部分は残っておらず傾きもやや不確かなものである。底部の小孔は2穴残っており、4方向2対と推定される。土製支脚40・41はほぼ同サイズ、同形態のもので、把手部を含まない高さ・脚部の径はいずれも11・78.9cmを測る。これらの資料はほぼ一時期のものとして資料価値の高いものであり、SB-2・古道1の上器溜まりなどと比較するうえで重要な役割を持つものと考えている。

以上のように要所要所から上器がまとめて出土しているため、これら加工段の時期については個別には判断できないにしろ、一つの流れとしてはほぼ抑えることができる。まずその廃絶時期であるが、これは28～31の須恵器が示す時期で、大谷編年に対応させれば7期の早い段階にあると推定される。築造開始時期については下層遺構であるSB-15の廃絶時期より新しいことが明確であり、大谷編年6-A期以降であることは間違いない。

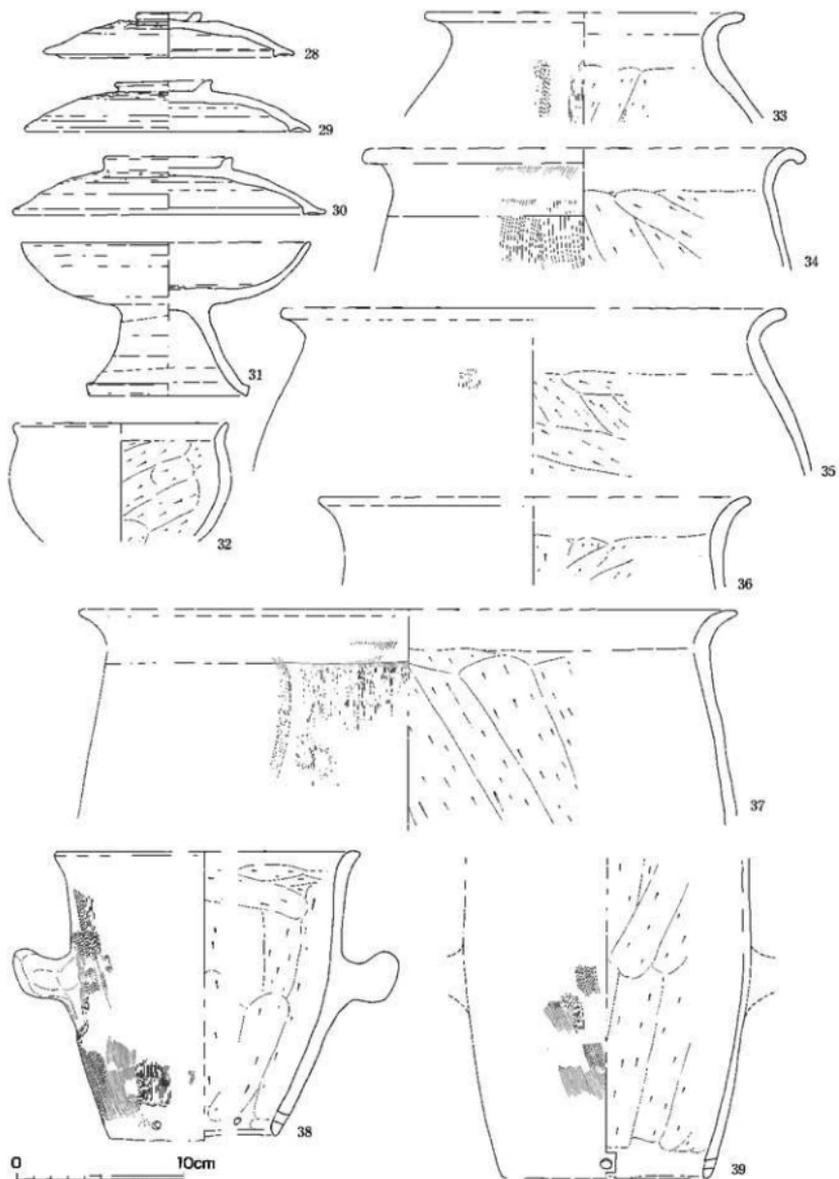
以上の点からこの加工段は当該期では新しい時期に含まれる数少ない遺構で、言い方を替えれば、



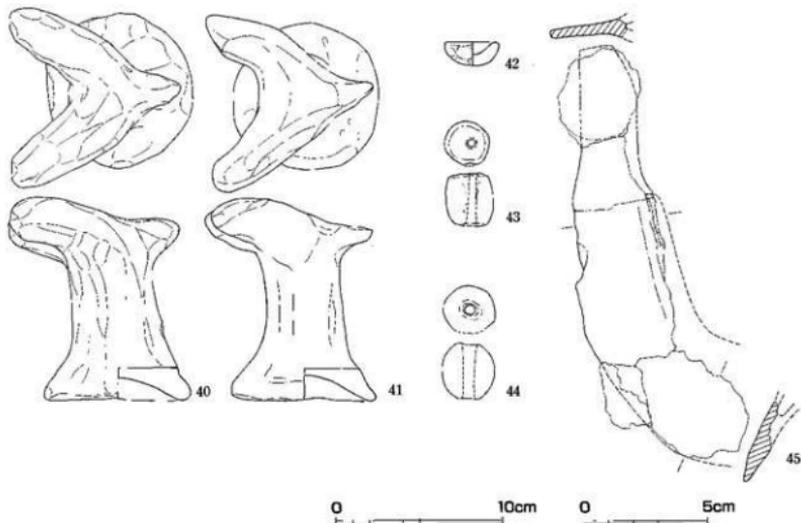
第87図 加工段9出土遺物実測図(1)(1:3)



第88图 加工段9出土遺物実測図(2)(1:3)



第89図 加工段9出土遺物実測図(3)(1:3)



第90図 加工段9出土遺物実測図(4) (1:3, 45は1:2)

当該期において本加工段が造られる以前は検出されたほとんど全ての遺構が掘立柱建物であり非常に象徴的な位置にあると言える。また上層出土品に大谷編年8期以降の須志器が含まれる点は、調査区南側にその時期の集落が存在することを示していると考えられ、集落全体が7期に再編された可能性が極めて高いと言える。

加工段2-G (第22図)

前々節で紹介した、調査区東側に位置する古墳時代中期の加工段2に重複していたもので、当初は小規模な土器溜まりと認識していたものである。加工段の輪郭を検出した時点で、土器溜まりがその中に収まることから、この加工段群中では最も新しい時期のものであることが判明した。床面ではピットを検出したが、建物を抽出できていないため加工段としたものである。壁体溝は土層断面でのみ検出している。

遺物(第23図)は確実に伴うものが9の瓶片で、他の3~6, 8は加工段を認識する以前に出土したものである。3~6はいずれも小片であるが、ほぼ同一時期のもと考えられることから、ほぼこの加工段に伴うと考えている。その場合に9の瓶についても矛盾はないものと言えるだろう。

以上の点からこの加工段は、古墳時代中期の加工段廃絶後の窪地に造られたもので、大谷編年5期に廃絶したものとして大過ないであろう。またこの加工段の東側上方の平坦部に存在する建物の時期を考える上でも参考となるだろう。

土器溜 1 (第91図)

前記した加工段9の北側下方で、谷部の遺物包含層を除去中に検出したもので、須恵器の蓋坏2セットが意識的に置かれた状態で出土したものである。検出面は谷部に形成された旧表土面直上と考えられ、東側では1の上に2が、西側では3の上に4が置かれた状態で、3の下には小型の自然石が存在し、状況から人為的に置かれたものと考えられる。これらの蓋坏は土圧により壊れていたが、復元すると完形になるものであり、内外面とも摩滅した形跡が無く、ほとんど未使用状態のものと考えているが、遺跡全体の須恵器と比較していないので断定は避けておきたい。

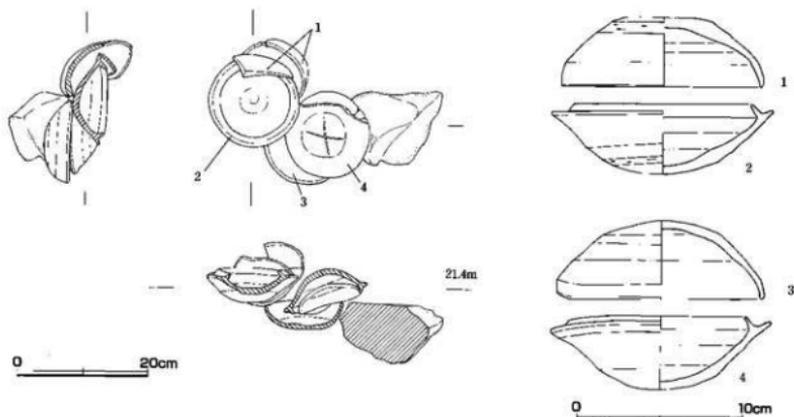
出土した須恵器(第91図)は1と2、3と4がセット関係であるが、いずれも同型式、同サイズのものである。蓋の口径は1が12cm、3が12.4cmで、坏の最大径は2・4とも13.4cmである。1は天井部外面の外縁に「回転ヘラ切り」の痕跡が認められる。2も1と同様の回転ヘラ切りの痕跡が認められる。

これらは回転ヘラケズリが施されなくなった直後の時期と推定され、大谷繩年の5期のものである。

土器溜 2 (第5図)

ここで土器溜まり2として取り上げるものは、前述した土器溜1のさらに下方において谷物包含層を掘り下げている際に、多量の自然石が集中して溜まっている状況が観取されたため、この自然石群とその周辺に集中する土器群を一つの「かたまり」として抽出したものである。これらは層位的な取り上げを行なっておらず、資料的には2次的なものと言わざるを得ないが、通常の調査では包含層として扱われるものであり、その点においては意味あるものと言える。

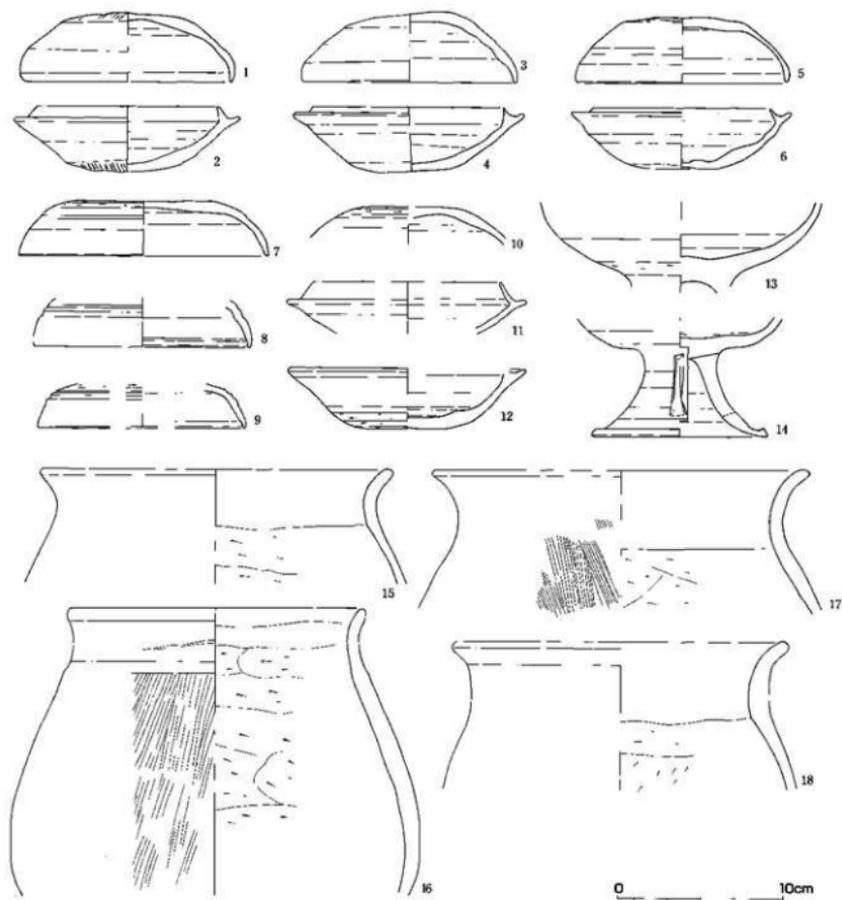
遺物(第92図)は蓋坏類だけをとっても、古い特徴を持つもの(7~12)と、土器溜1と同時期と考えられるもの(1~6)が存在している。



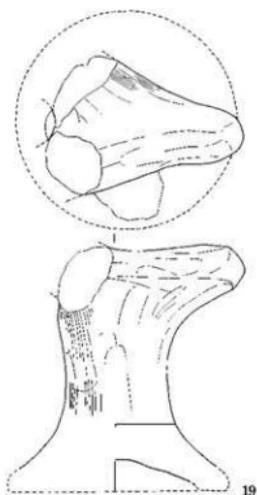
第91図 土器溜1及び出土遺物実測図 (2:15、遺物は1:3)

古道1 (第94図)

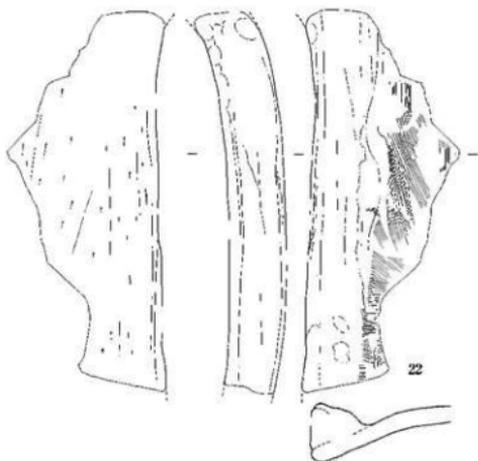
調査区のほぼ中央に位置する、谷部西より斜面に位置し、建物SB-22の下方を走るものである。谷部に堆積した厚い包含層を除去している際、この部分で土器が多量に出土し始めたため、土器溜まりとして精査を開始した。その後土器溜まりは3カ所に分離することが判明し、そのうちの2カ所は上下に重なることもわかった。そして土器溜まりが及んでない検出面では幅1.5m前後を測る溝状を屋しており、その底面には短径50cm前後を測る楕円形のピットが列状に並ぶ様子が伺えた。この時点でこの遺構を道跡と判断し、土器溜まりを除去した後に遺構の全容を把握した。道跡は北から緩やかな弧を描きながら南南東方向へ上昇するもので、残存長8.8mを測る。後述するが、この延長線上に



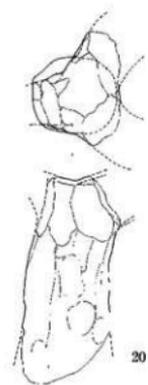
第92図 土器溜まり2出土遺物実測図(1)(1:3)



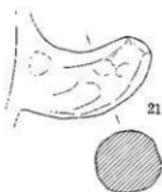
19



22



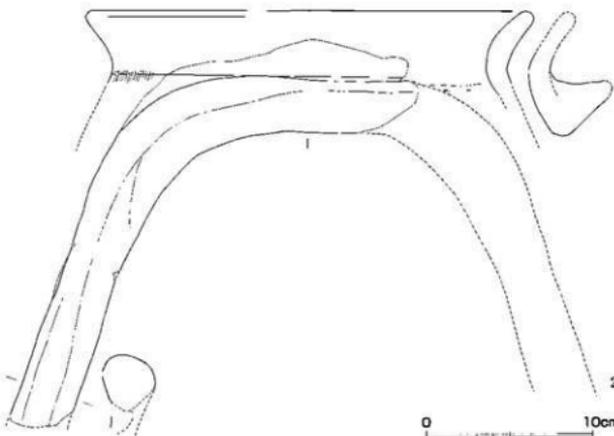
20



21



23

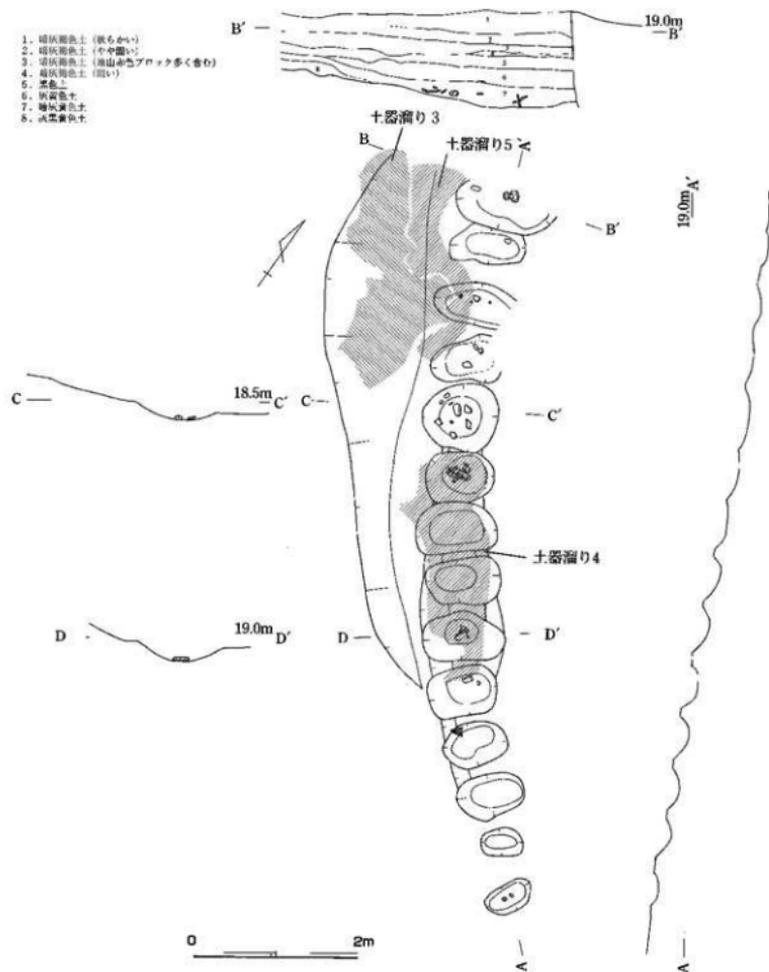


24

0 10cm

第93圖 土器溜2出土遺物実測圖(2)(1:3)

は古道2が存在しており、これに続いてきたことはほぼ間違いないと考えられる。道構造は谷斜面を溝状に加丁した後、底面に60cmピッチで連続する長楕円の皿状ピットを掘り込んだもので、南側では溝部が削平され、古道2と同様路面の皿状ピットのみ残っている。また、溝が二段となっている部分のある点も注意された。ピット内には土器溜まりの一部と考えられる土器片や鉄器片が堆積したものが多く、ピット底面には小石や甕の小片などが密着、あるいは叩き締められた状態で検出された。しかし、これらは敷き詰められていたと言うほどではなく、むしろ散在していた状態であり、しかも土



第94図 古道1実測図 (1:60)

器片等の堆積状況から、使用時にもこのピット内はほとんど埋められていないことが確認できた。

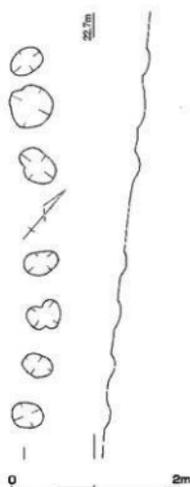
床面の連続ピットは道の傾斜角度にもよるであろうが、心々距離でほぼ60cmのピッチを持っている点は古道2と共通しており、人が歩く際の平均的歩幅と同じである。ただしこれが単なる階段のステップと考えるには、他遺跡において平坦部で検出される道にも存在する点で問題が残る。この機能については結語でふれておきたい。

古道上の土器溜まり3は上層に堆積していたもので、結論から言えば、奈良時代以降にSB-22から古道1にかけて廃棄された土器溜まりを削平した際の2次的な混入品である。土器溜まりの下層から検出されたのが土器溜まり2・3で、面的には同じ古道路面直上に形成されたものである。

古道2（第95図）

前記したように古道1と同遺構と判断しているものである。検出面では溝部は消失しており、路面連続ピットのみ検出できた。道跡はわずか1.6m、ピット数7を数えるが、中間で1穴分割半されているようで、もとはこの長さにおいて8穴存在していたものと推定される。また、このうち3穴は切り合い関係は不明であるが、造り替えの痕跡が認められている。

底面には古道1と同様、小石や須恵器壘小片がめりこんだ状態で検出されている。道の形態は緩やかな弧状、あるいはS字状を呈しており、北北西から南南東へ向かって上昇していくように見える。北側は古道1に、南側は現在も使用されている、調査区南側の尾根鞍部の山道方向に向かっている。



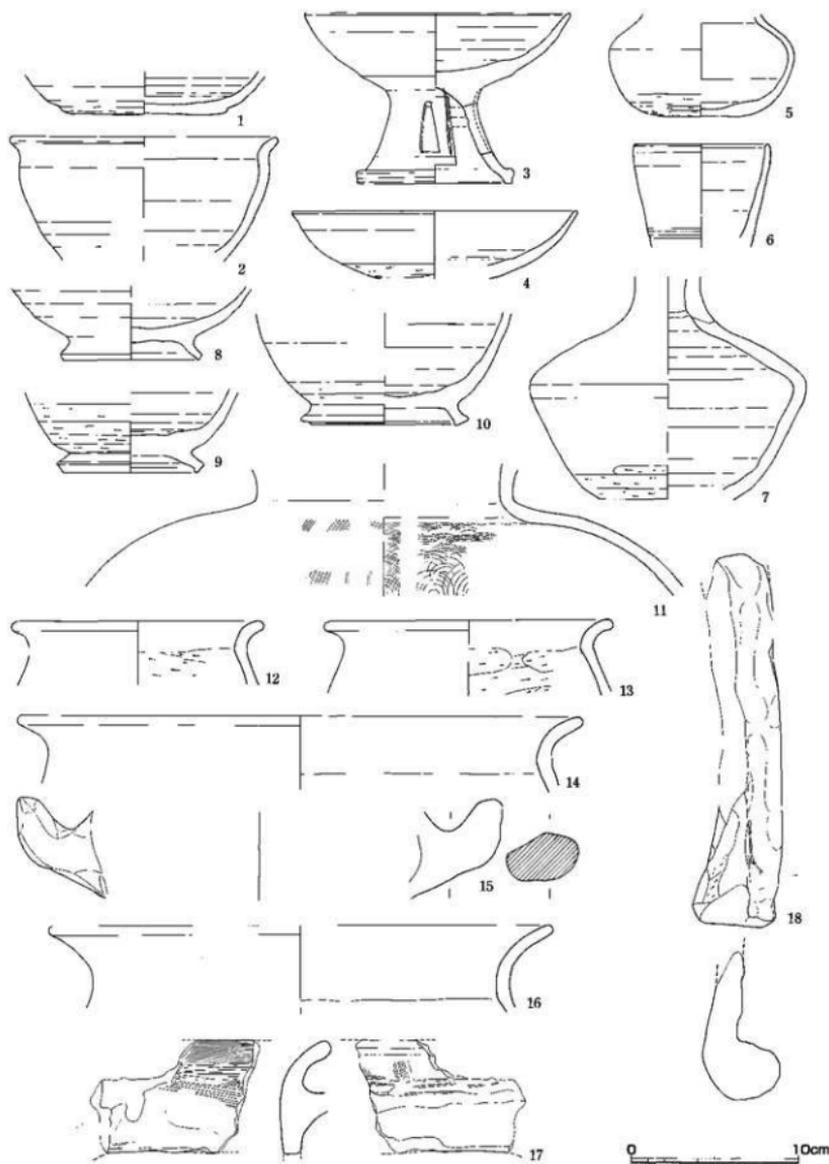
第95図 古道2実測図
(1:60)

土器溜3（第5・96・97図）

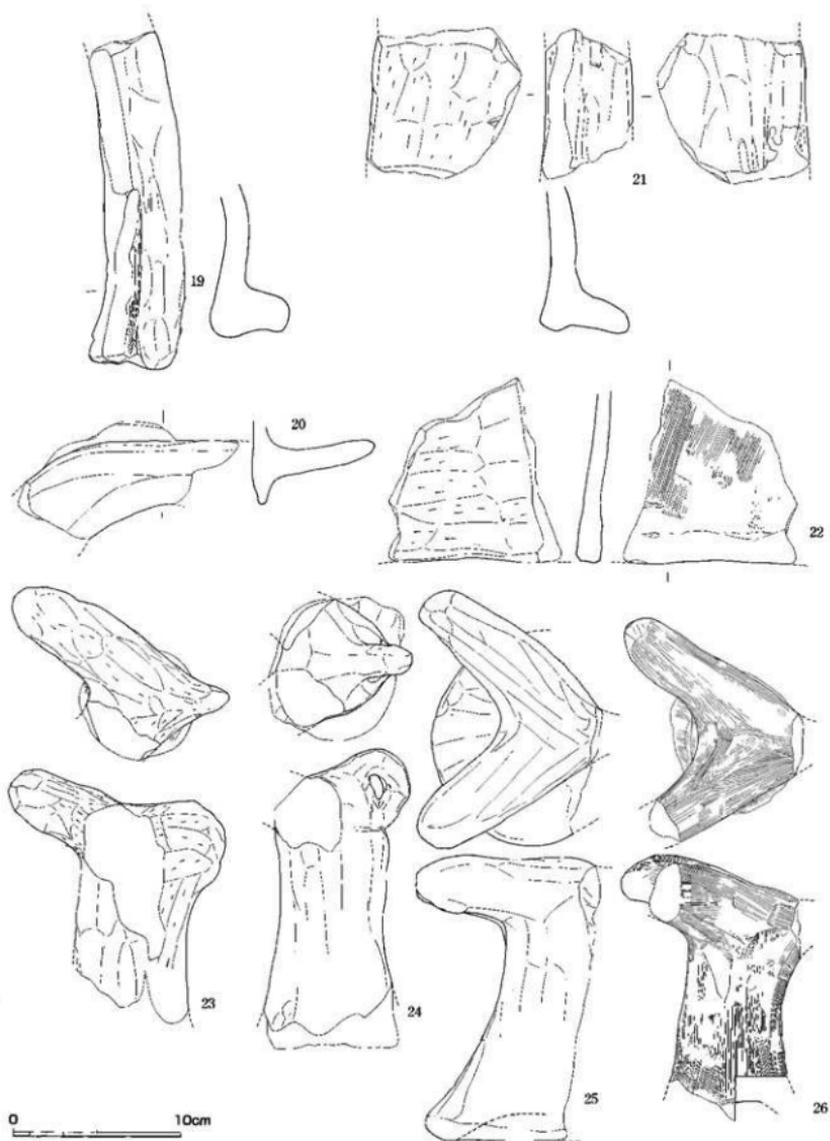
古道1の上層（第94図6層）に堆積したもので、コンテナ5箱分が出土している。1は底部回転系切りの楕形環と推定されるものである。2は深鉢で、暗緑灰色を呈する。2点とも奈良時代の須恵器である。3の高坏は脚部に2方向のみ貫通線刻透かしと、1方向に三角形の透かしを持つものである。5は短頸壘、6～10は長頸壘と推定されるが、9は内面がナデ調整であり、高台の付く環の可能性がある。このうち7は奈良時代と推定されるものである。11の須恵器壘は下層の土器溜まり3や、路面ピット内からも出土している。12～14は土師器の壘、15は瓶の把手、16～22は甕の各部小片である。23～26は土製支脚で、各部を欠損しているが、ほぼ同サイズのものと考えられる。23は背面突起が鈎状を呈し、部分的にヘラケズリ調整を、24は背面突起が環状を呈すタイプ、26はほぼ全面をハケメ調整するタイプで、それぞれが異なる特徴をもつ点が注意される。

土器溜4（第5・98図）

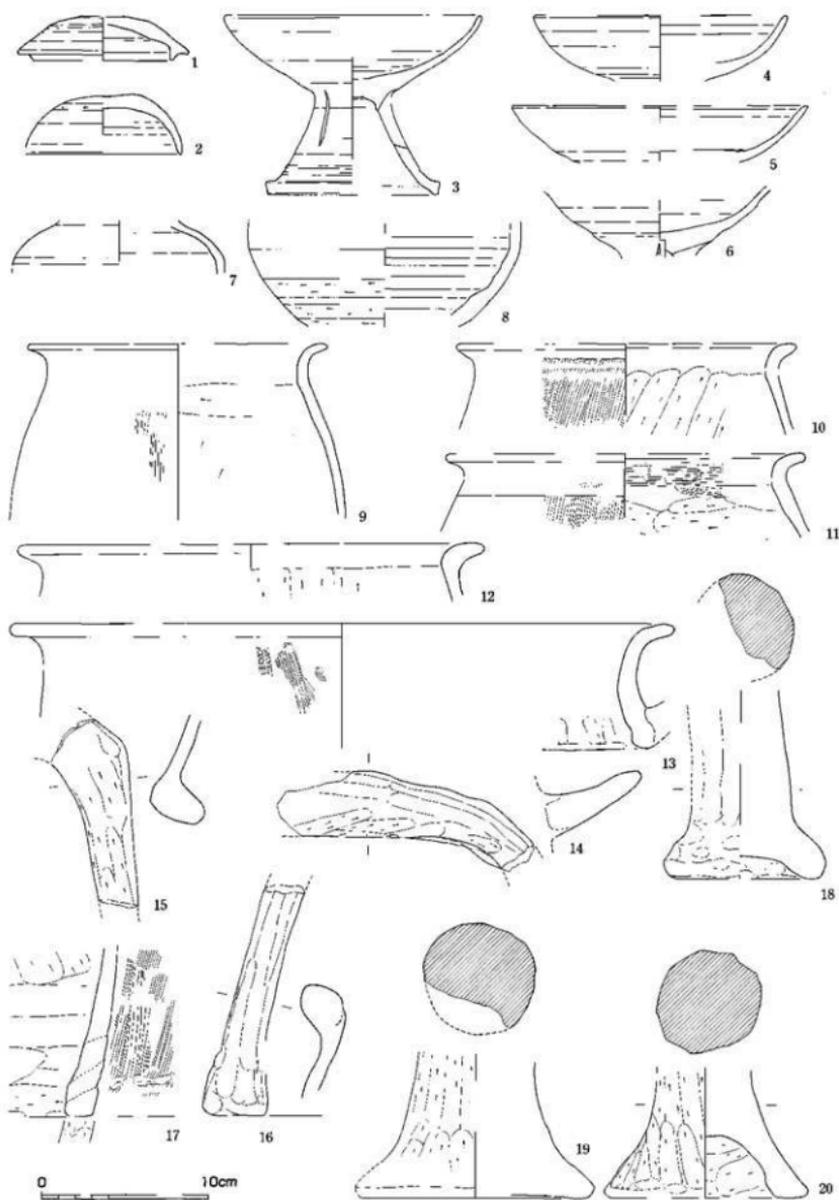
古道1の直上に形成された小規模なもので、コンテナ2箱分の土器が出土している。土器溜5と分離して検出されたが、基本的には同時期のものと考えられる。1は偏平な壘として図示しているが、天井部に回転ヘラケズリが見られないことから環となるかも知れない。2は口径9.5cmを測る小型の



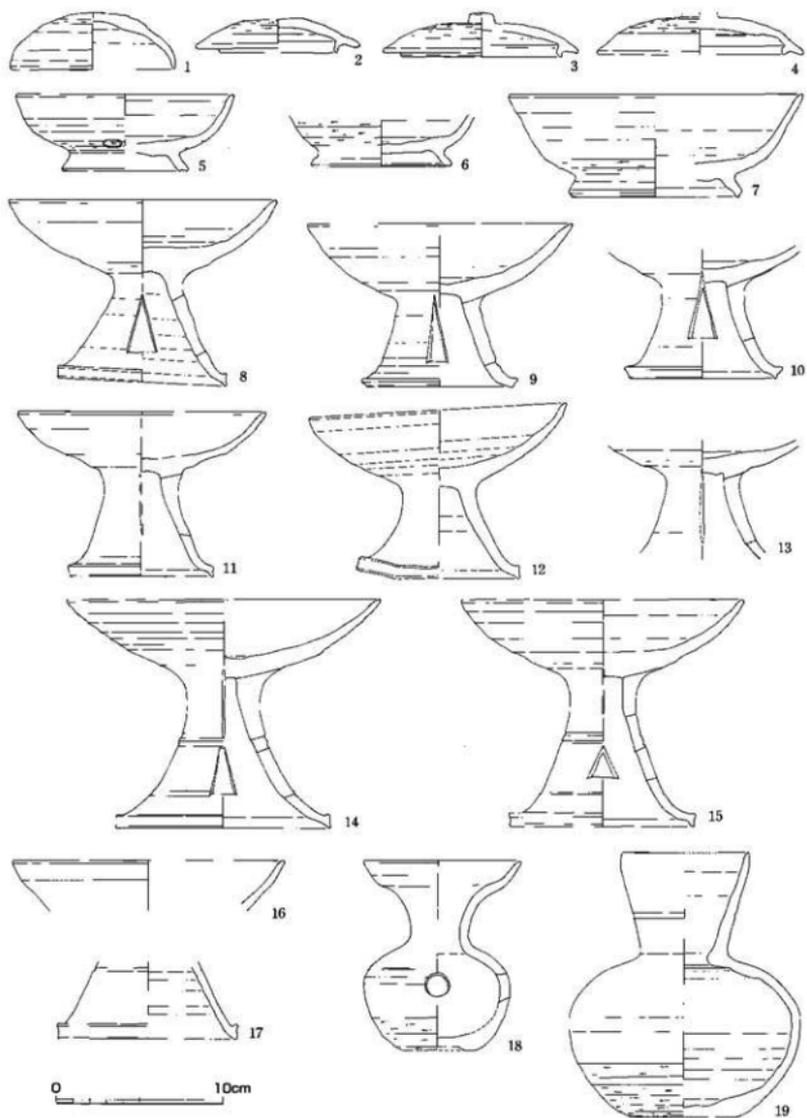
第96図 土器溜3出土遺物実測図(1)(1:3)



第97图 土器溜3出土遺物実測図(2)(1:3)

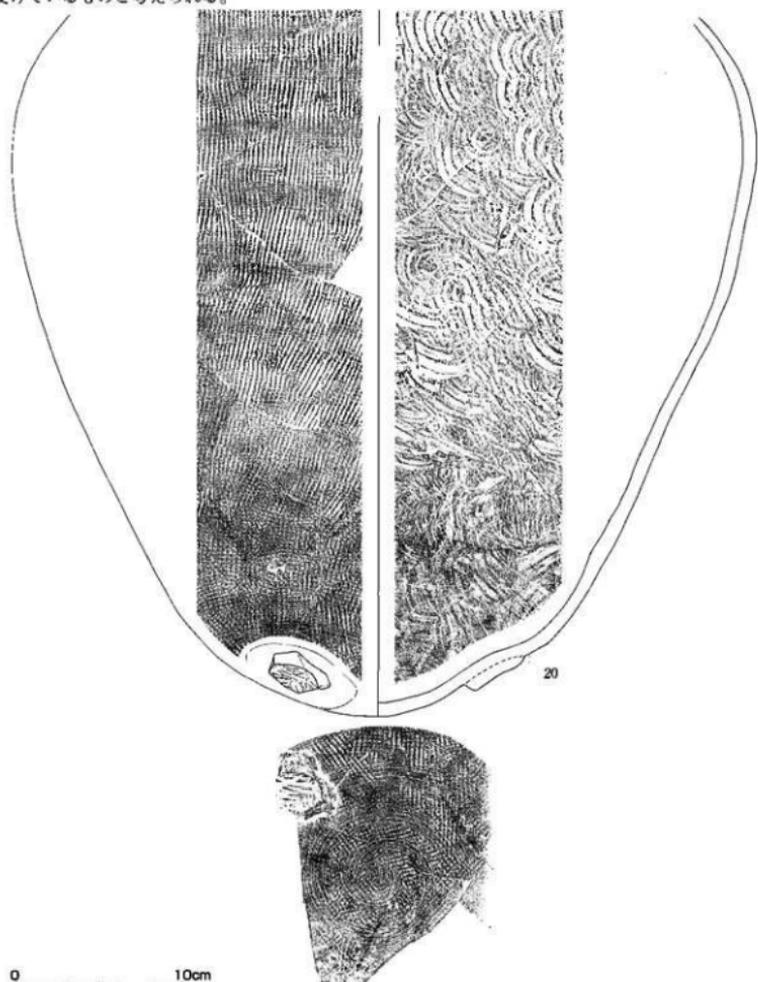


第98圖 土器溝4出土遺物実測図(1:3)

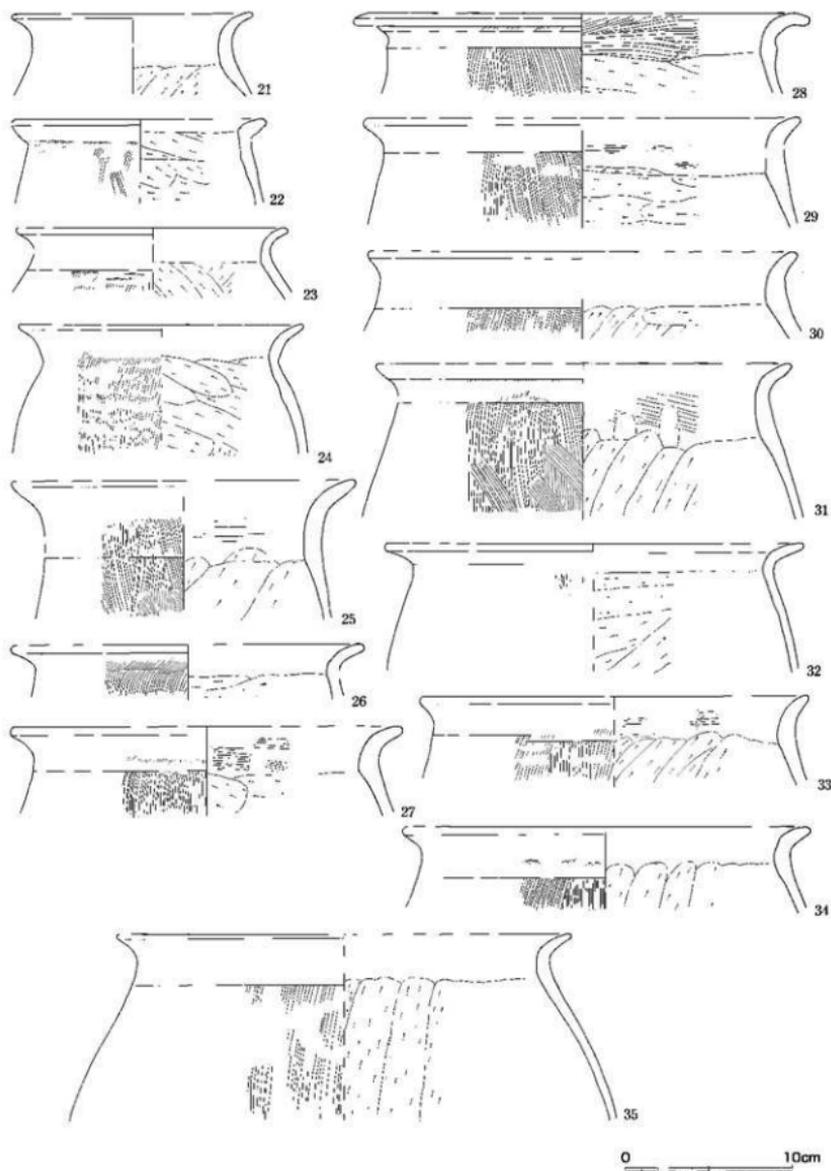


第99圖 土器溜5出土遺物実測圖(1)(1:3)

坏で、天井部外縁に回転ヘラ切りが認められる。3～6は高坏で、3・6は脚部に線刻透かしがそれぞれ3方向・2方向に施される。7は短頸の、8は長頸の甕片である。9～12は土師器の甕で、ハケメやケズリ方に各種ある。13～17は甕の各部小片である。13は口縁部6分の1の破片からの復元であり、正確な径は示していないが、かなりの大型品であると推定できる。15は焚き口の右上部、14は焚き口の底部、16は焚き口左下端部、17は底部の小片である。18～20は土製支脚の脚下半部片で、19・20は縦方向のヘラケズリが顕著である。これらはいずれも小片が多く、本土器溜まりはかなり削平を受けているものと考えられる。



第100図 土器溜5出土遺物実測図(2)(1:3)

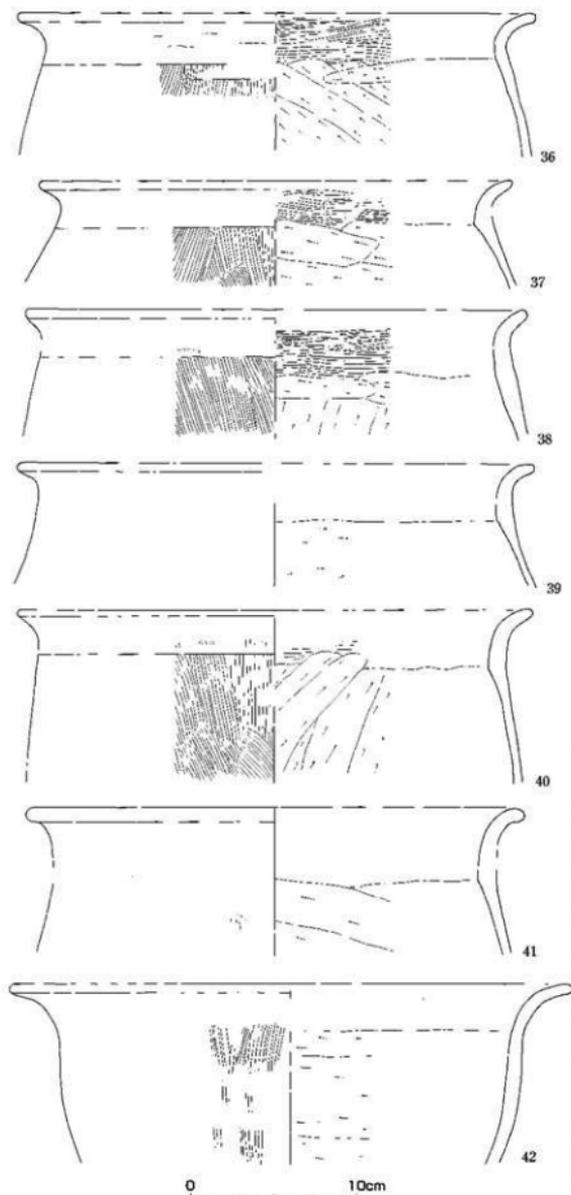


第101図 土器溜5出土遺物実測図(3)(1:3)

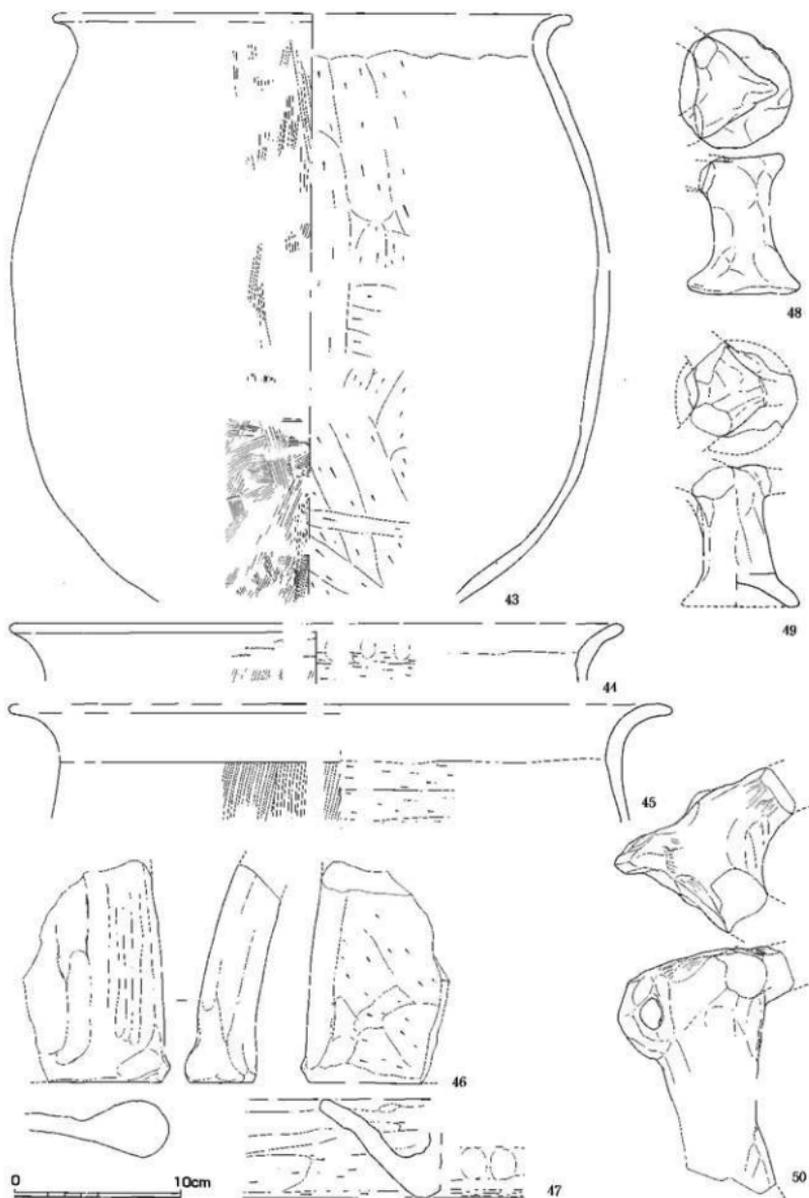
土器溜5 (第99~105図)

土器溜4と同様、古道面直上に形成されたもので、コンテナ10箱分が出土している。七師器は風化のため復元は困難であったが、全体として遺存状態が良く、廃棄時の状態を良く保っているものと推定される。また、須恵器はそのほとんどが高坏で占められている点や、土師器の量が多い点は上方の建物SB-22の土器溜まりとは対照的である。

1は口径10cmを測る釜で、天井部外面に回転ヘラ切りの痕跡が残る。2~4はいずれも口縁内面にかえりを持つ蓋で、2だけがツマミを持たないタイプである。5~7はいずれも八の字状に踏ん張る高めの高台が付く坏で、外面下半部を回転ヘラケズリ調整したものである。口縁部径は5が13.2cm、7が17.8cmを測る。8~17は高坏で、ほとんどが完形に近い状態で出土したものである。このうち8~10は短脚部に三角透かしを2方向に持つタイプ、11~13は短脚部に2方向の線刻透かしを持つタイプである。長脚のものは、14~15とも上段に線刻透かし、下段に三角透かしを2方向ずつ持つタイプで、17は長脚と推定されるが、透かしは不明である。18の甕、19の平瓶はいずれもほぼ完形で、一群の土器溜まりの中では器種としては少ないものである。20の須恵器甕は口縁部を欠いているが、体部は3分の1程度遺存しており、本

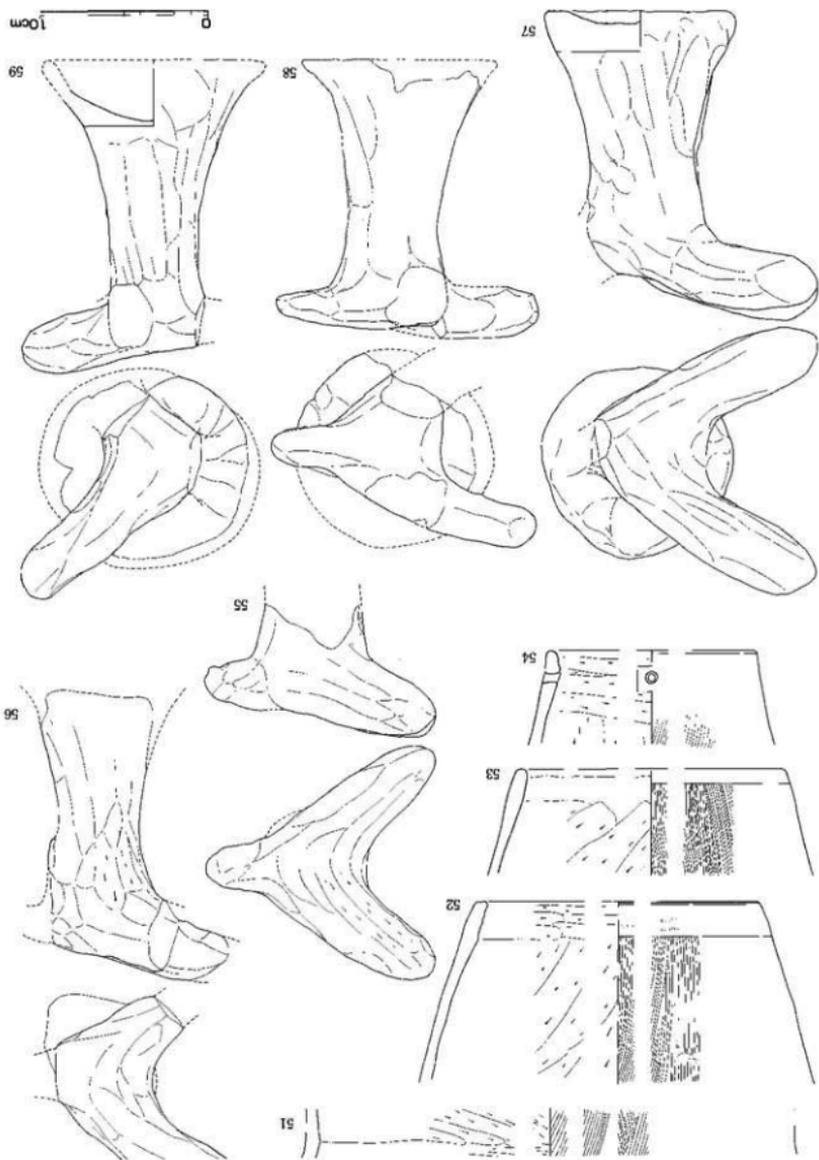


第102図 土器溜5出土遺物実測図(4)(1:3)



第103図 土器溜5出土遺物実測図(5)(1:3)

第104图 土器器5出土遺物実測図(6) (1:3)



来は完形に近い状態で廃棄されたものと推定している。また破片の一部は土器溜まり4や、古道1の路面ピット内からも出土しており、土器溜まり4と5が同一のものとなることを示している。

21～45は土師器の甕で、41・45は移動式甕、42は鍋となる可能性がある。これらには口縁部形態やケズリの仕方にバリエーションが見られるが、その容量についてはある程度の分類ができるかも知れない。ここでは完形に近いものが少ないため、検討することが困難であるが、口縁部径については傾向として次のことがあげられる。まず、口径22cm以下の小型品には口径にばらつきがある点。数のうえで、口径22cm前後と口径31cm前後にややピークがありそうな点などである。今後は移動式甕・甕・土製支脚などの規模別分類と合わせて検討する価値がある。

46・47はそれぞれ、移動式甕の底部・焚き口底部の小片である。51～54は甕で、小片のため底部の小孔の数は不明である。48～50、55～59は上製支脚で、48・49などの脚高8.5cm前後を測る小型品、同16cm前後を測るものがある。調整はほとんどが強いナデによっており、部分的にヘラケズリされているものも認められる。

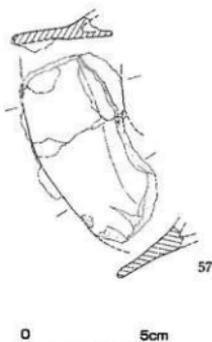
この他、路面ピット内からも土器細片が出土しているが、ほぼ底面で出土した60は鋤先片と考えられる鉄製品で、加工段9出土品とほぼ同形態のものと推定される。

以上土器溜まり5の遺物群の概要を述べてきたが、前記したように土器溜まり3～5と、SB-22の上器溜まりはほぼ同時期の遺物群と考えられることから、本来は一体である可能性が高い。このことは出土状況や、位置関係からも肯定され、それ以上にそれぞれの土器溜まりの器種構成が相互補完的な面も持っていることから理解できる。さらに遺跡内では最も大規模な土器の廃棄跡であり、廃棄された方向も建物が集まる調査区南西側からのものであることを重視すれば、集落全体がいっせいに上器を廃棄したと考えられよう。興味深いのはこの土器に後出する土器を出土した遺構が遺跡南西部の高所付近に偏在する点である。つまり土器と集落が同時に廃棄、更新されていると考えられるのである。この大きな画期は、出土した須忠器から大谷編年6-B期の終わり頃、あえて大年を推定すれば7世紀の第3四半期のうちにあると考えている。

古道3 (第106区)

調査区南東部の丘陵斜面に位置する遺跡で、東から西へ向かってやや弧状を呈しながら伸びるものである。路面の傾斜はわずかに西側が高くなっており、東から緩やかに上昇していたものと推定される。また、道中央部分は北側下方に石列状の施設が存在し、図示していないが、その周辺部では北側に分岐する何面かの道跡らしき灰色土の凹凸を認めた。土層断面の観察から、当初は北方向に分岐したT字状、あるいはL字状の屈曲する道が3回の造り替えを行なった痕跡が確認できた。また石列状遺構は最終の造り替えの際、北方向へ分岐する道を埋めるために組まれたものと判断された。路面連続ピットは西端部付近で検出されたが、検出時の掘りすぎもあり、部分的に確認できたに過ぎない。土層断面の観察から、路面には厚さ5～10cm程度の灰色系の固く締まった粘土が認められた。

石列下層の路面からは土製支脚片や須忠器細片などが出土しており、ほぼ当該期のものであると考



第105図 土器溜まり5出土
遺物実測図(7)(1:2)

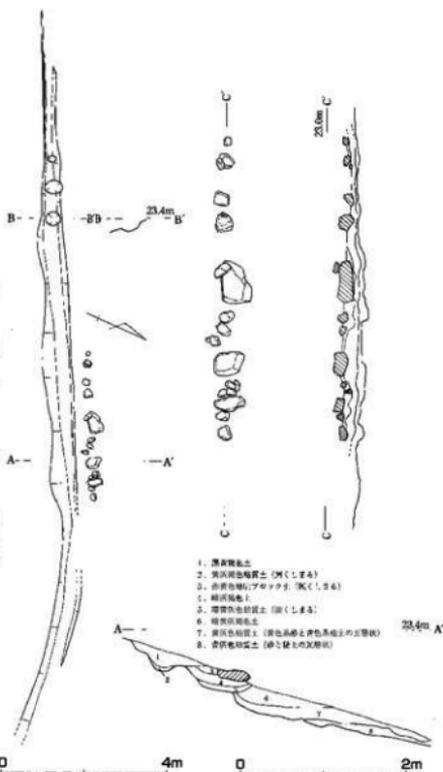
えられる。

SD-02 (第107図)

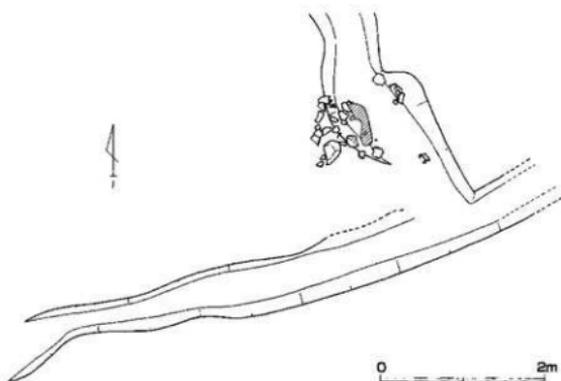
前記した古道3の北側下方に位置するもので、道跡の可能性も否定できないが、路面連続ピットや、固く締まった粘質土なども認めることができなかつたため、ここでは溝状の遺構としておきたい。溝は数本に分離する可能性もあるが、同質の堆積土を持っていることから一連の遺構と判断した。

屈曲部では須恵器の甕(第108図)1個体分が潰れた状態で出土している。検出ラインが不明瞭ではあるが、この溝に置かれたか、あるいは溝を切り込んだ浅い土坑内に置かれた可能性がある。

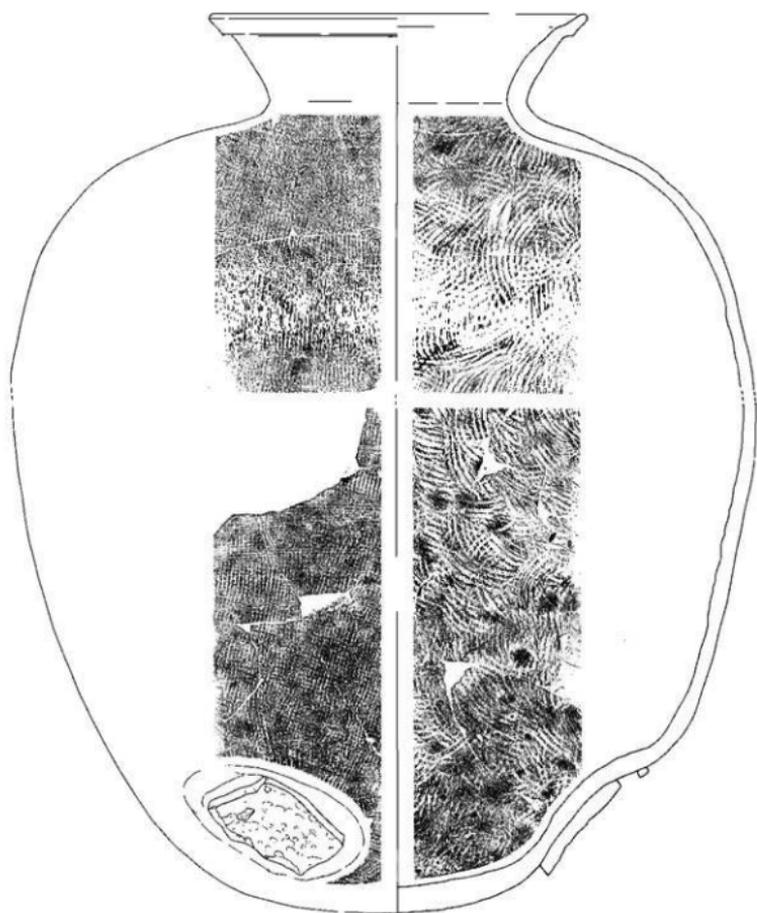
甕は口径22.5cm、体部最大径44.5cm、推定器高43.5cmを測り、底部外面には甕体内で付着した焼かた片が2カ所認められた。



第106図 古道3実測図(左図は1:120、右図は1:60)



第107図 SD-02実測図(1:60)



0 10cm

第108图 SD-02出土遺物実測図(1:3)

第7節 奈良・平安時代の遺構・遺物

この時期の須臾器編年は実年代を比定できるほどには確立されていないため、ここでは便宜的に奈良・平安時代の遺構を抽出している。このことは特に古墳時代と奈良時代の境や、平安時代と奈良時代の境をどこに持っていかとという点において、研究者によってかなりの温度差があり、この差が後の時期の捉え方にもややずれを生じている原因ともなっているようである。ここでは遺跡の現状に即して、奈良・平安時代を抽出しており、あくまでも便宜的な時期区分であることを断っておく。

前節で長々と記してきたように、本遺跡で最も集落が発達するのは古墳時代の終末期である。この時期の建物は急斜面に造られるものが多く、必然的に、斜面を大規模な造成によって平坦面を形成している。このため1軒1軒の建物は、これに付随する加工段を検出後、その限定された範囲の中で検出することが可能であった。しかし、奈良・平安時代のものはほとんどが平坦地、あるいは緩やかな斜面に造られている。このため、建物に付随する加工段は極めて浅いもの、あるいは存在しないものと想定される。このことは遺構検出面においては、加工段が残りにくいことを意味し、必然的に柱穴のみ検出される、広い範囲から建物を抽出しなければならない。この時期と推定されるピットも比較的多く検出されているにもかかわらず、こうした理由もあって建物の抽出作業は現地においても非常に困難であった。

奈良時代の遺構は建物跡1軒、加工段6カ所などを検出している。これらは遺跡東半部に集中するが、西半部の古墳時代終末期の遺構上層にも少量の土器が出土していることから、西半部、さらに調査区南側にも広がる可能性がある。建物については抽出したもの以外にも、この時期の遺物を出土したピットが存在するため、第6章の第216図でおおよその範囲を示した。加工段は他時期と同様の壁体溝を伴うものも存在するが、平面がやや不整形であったり、床面と壁面の境が不明瞭な一群が存在する点は、この時期の特徴となるものである。遺物は須臾器・土師器がほとんどであるが、この時期の遺構内から勾玉未製品や鍛冶炉炉壁なども出土している。

平安時代の遺構は比較的多数、かつ多彩で、建物跡5軒以上、土坑5基、木棺墓1基、須臾器窯1基などがある。



第109図 須臾器窯調査風景

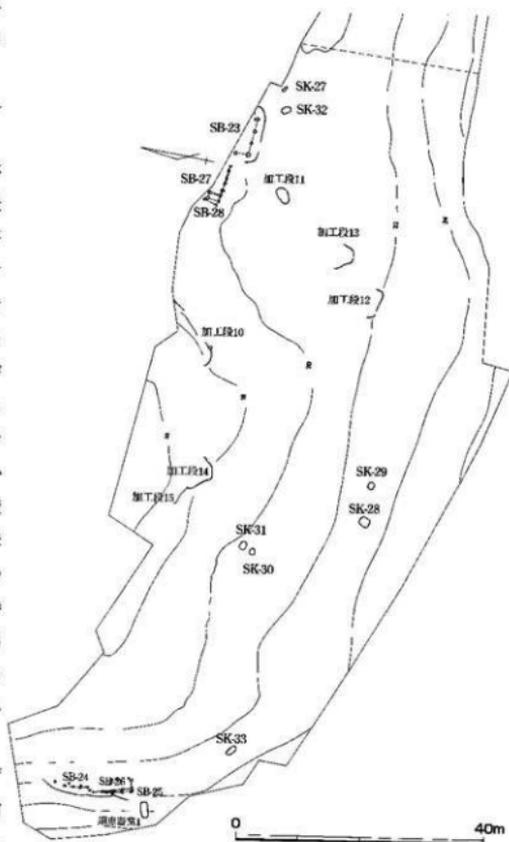
これらは遺跡内の標高20m以上のほぼ全体に分布し、奈良時代の遺構分布とはやや異なっている。建物については、抽出できたものは全て柱穴掘り方の径が小さく、この時期の特徴となっている。また、建物として抽出できなかったピットも比較的多くあり、建物総数は抽出できたものの数倍になると推定される。土坑は方形を基調としたものが多く、内部からは多数の遺物が出土しており、大半が最終的に廃棄物の捨て場となったものと考えられる。須恵器窯は灰原こそ残っていないが、窯体内に比較的多くの土器を残しており、当該期の土器編年を考える上でひとつの指標となりうる。遺物は多数の須恵器・土師器のほかに、緑釉陶器、灰釉陶器、勾玉未製品、鉄鏃、砥石、基石などがある。

奈良時代の遺構

SB-23 (第111図)

遺跡北東端で検出されたもので、北側は調査区の外にあり、全体の規模は不明である。建物は3×2間以上で、主軸を東西方向にとるものと考えられる。柱穴は西側で二重となっており、その他の柱穴でも明確に建て替えの跡が認められた。柱穴の規模は床面で径40cm前後、深さ50cm前後を測り、平面は円形を呈している。建物に付随する加工段は西側コーナーがほぼ直角であるのに対し、反対側はやや緩やかな弧状を呈している。このことは建物が加工段西側にやや偏った位置に建てられていることと関係しているものと考えられる。その場合建物東側に何らかの空間を有していることにならう。壁帯溝は図上では表現していないが、床面検出当初は西側コーナー部に幅広のものが認められていた。床面は積雪時に調査を行ったため、貼り床等の検出に至っていないが、柱穴の検出に戸惑ったことから存在していた可能性が強いものと考えている。

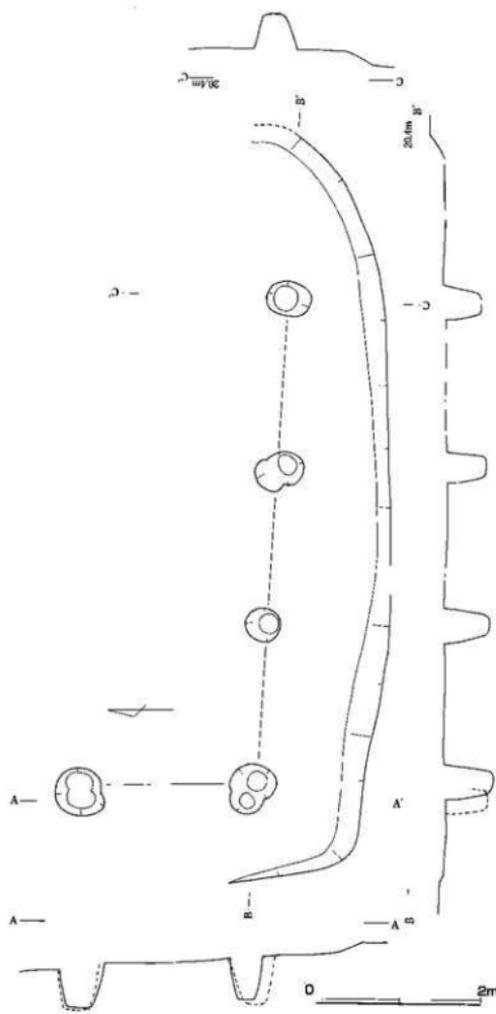
遺物(第112図)は床面付近でわずかに出土しているが、加工段検出以前にこの建物や西側に隣接する建物SB-27付近からは多数の砥石片(図版73)



第110図 奈良・平安時代の遺構配置図(1:800)

が出土している点に注意される。この砥石は古墳時代中期の玉作遺構に伴うものと同様の石英粗面岩製のものである。床面付近で出土したものは1～3で、1は宝珠摘みが付くと推定される蓋で奈良時代のものである。2は須臾器の広口壺、3は土錘である。

出土遺物が少量であるが、本建物は奈良時代のもと考えられる。

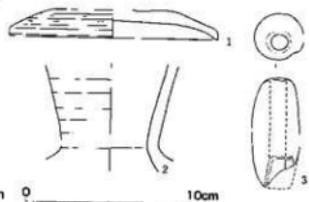


第111図 SB-23実測図 (1:60)

加工段10 (第113図)

前記した建物の内側約30mの谷部緩斜面に位置する加工段で、A～Eに分けることができる。北側は調査区外に伸びており、全容は不明である。検出当初は一つの加工段として認識して掘り下げていったが、床面から20～30cmのレベルで、加工段AがDを切り込んでいることが判明した。その後さらに下層を掘り下げていくと、B・C・Eの加工段が検出されたが、個々の切り合いについては不明である。床面からは後世の肥料穴などの削平もあるが、いくつかの小ピットが検出されている。しかし大半のものが浅く、建物を抽出することもできなかった。また加工段Aの南側コーナー付近には幅50cm以下の浅い溝が取り付いており、切り合い関係は認められなかったことから、これに敷設するものと考えられた。

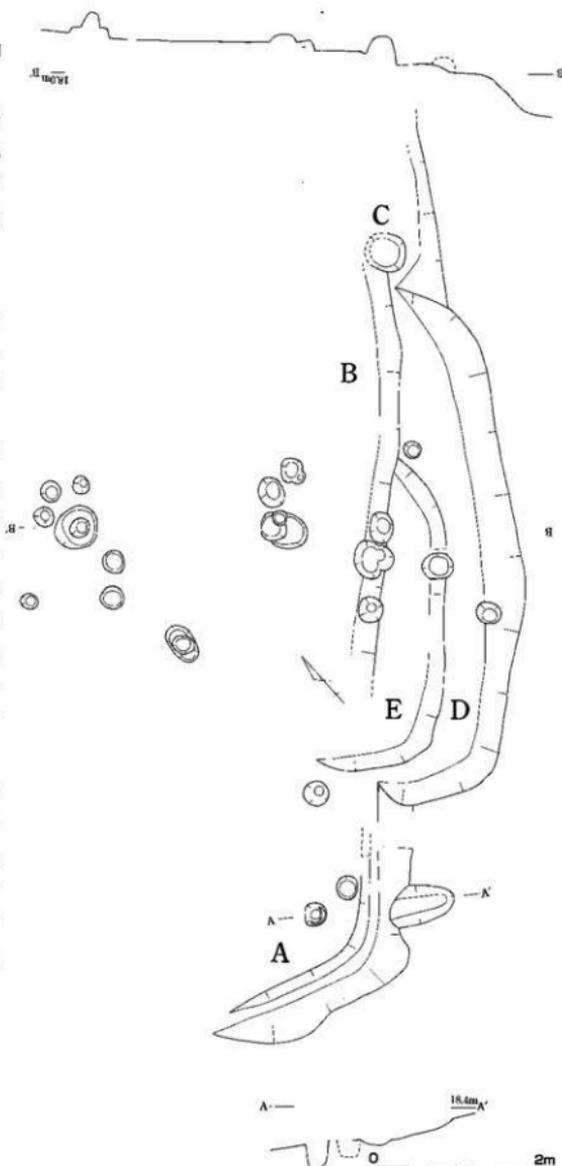
出土遺物(第114・115図)は検出時の理由から加工段が分離する以前のもの1～6、分離後の加工段D下層出土



第112図 SB-23出土
遺物実測図 (1:3)

のもの7～10、同じく分離後の加工段A・Bの上層出土品11～15、そして下層から床面にかけての出土品17～21がある。これらは攪乱部があるために、混入品を含む可能性があるが、加工段の時期をほぼ示すと判断している。

1は回転糸切り底を持つ坏で、口径は11.8cmを測る。2～3はそれぞれ最大径14.4、13.5cmを測る坏で、2は底部ヘラ切り後カキメ調整である。4は壺の口縁部、5は高坏底部片、6は壺の突き口の突帯片である。このうち1は奈良時代のものであるが他は古墳時代のものである。11～16はいずれも細片であり、奈良時代のもは含まれないようである。11～13は須恵器の蓋、14・15は高坏、16は壺の脚部片である。17～21は床面付近から出土したもので、ほとんどの遺物は奈良時代のものである。17・18は高台の付く皿で、口径は17.8・18.6cmを測る。いずれも緑灰色を呈し焼成不良、底部は回転糸切りである。19は古墳時代後期の坏で、混入品と考えられる。20は緑灰色を呈する。回転糸切り底を持ち、1と同様の器形と考えられる。21は上師器甕で、器形から古墳時代のもものと推定される。22は加工段Aに付設する溝状遺構の底面から出土した土師器で、口径0.2cm、体部最大径18.5cmを測る銚と考えられる。口縁部外面は縦方向のハケメが残り、体部内面はヘラケズリ後ナデ調整。23は加工段



第113図 加工段10実測図(1:60)

Aの床面から出土したもので、推定口径26~28cmの土師器甕と考えられる。24は土製支脚の破片で、背面の突起は環状を呈するタイプである。脚部内面には強い指頭圧痕が認められる。この他、25~27の土錘や、28・29の砥石が出土している。

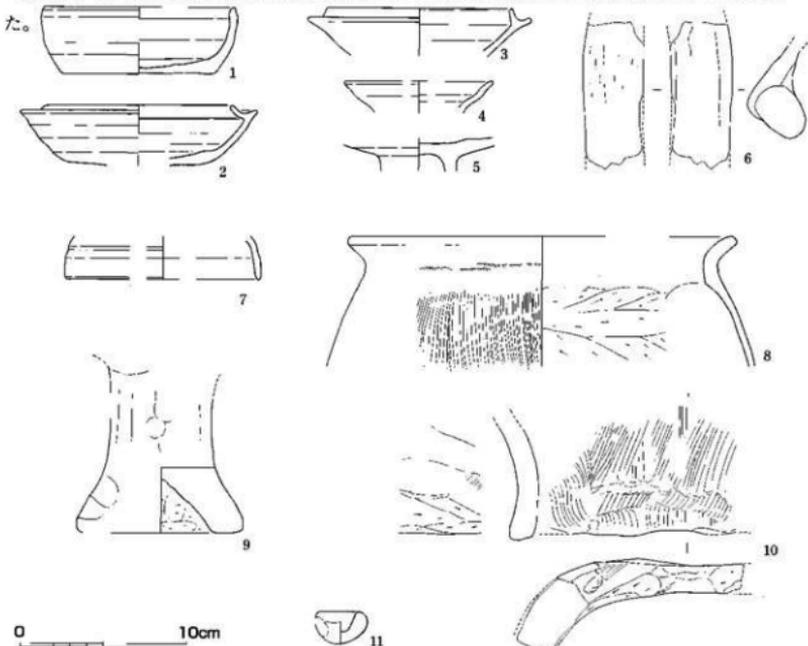
以上のことから、加工段10は古墳時代後期（大谷編年5期頃）に造られた加工段D・Eが廃絶後、奈良時代に加工段A~Cが造られたものと判断される。

加工段11（第116図）

遺跡東部の平坦部で検出されたもので、検出当初は土坑としていたが、完掘後の様子と周囲の地形から、加工段として取り扱うことにした。平面形態は南東部にコーナー部が見てとれ、全体としてL字型に近い。さらに土層断面の観察では、最下層に地山ブロック土が存在し、その様子は壘帯溝の存在を示しているかのようである。そして注目されるのは加工段の北西部に時期不明の建物SB-43が存在している点である。両者の位置関係は建物とそれに付随する加工段（壘帯溝）との関係を示している可能性が強いのである。このことに気付いたのは報告書作成時であるため、ここでは両者を切り離して説明した。

遺物は（第116図）少量出土したのみである。1は底部回転糸切りで、緑灰色を呈した焼成で、奈良時代の特徴を持ったものである。2は古墳時代の坏片で、立ち上がりの低いものである。

遺物が少ないため時期の判定は困難であるが、ここでは1の須臾器が示す奈良時代のものと判断した。

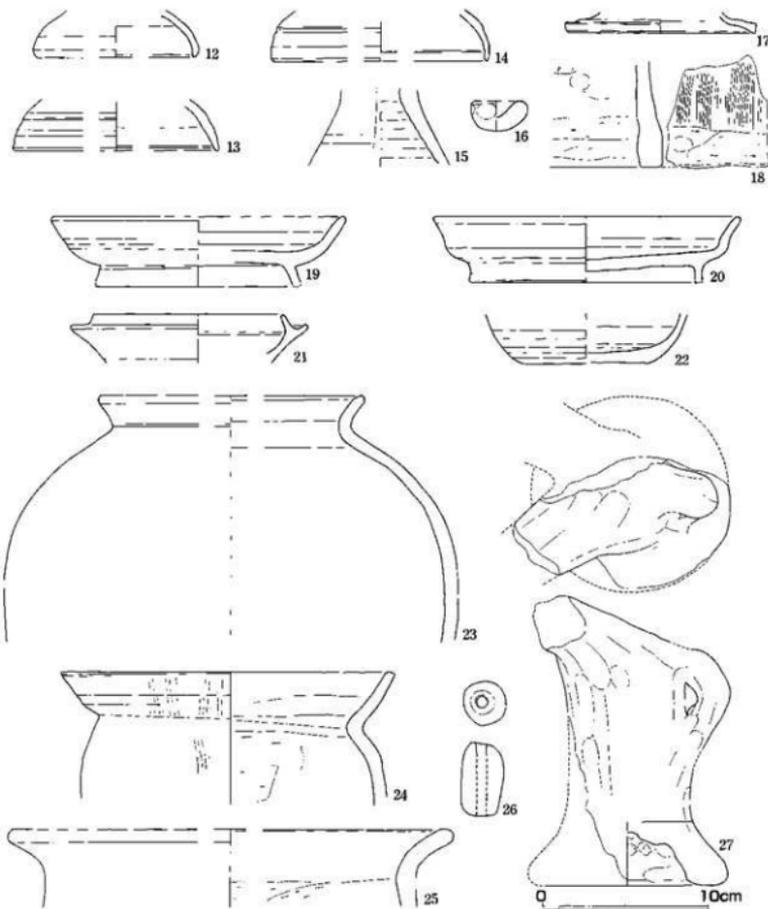


第114図 加工段10出土遺物実測図(1) (1:3)

加工段12 (第117図)

加工段11と同じ平坦部南端に位置し、平面コの字状に加工段が残ったものである。断面は緩やかなカーブを描くもので、壁帯溝は存在していない。床面には地山小ブロックを含んだ貼り床状の土層が観察された。

遺物(第118図)は小片が数点出土している。1は宝珠状ツمامミ片である。2~4はほぼ同様な器形を持つ坏と考えられ、底部は回転糸切り、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部が外反するタ



第115図 加工段10出土遺物実測図(2) (1:3)

イブであろう。5は皿で、口縁部はやや外反する。6は勾玉未製品と考えられるもので、側面は両面とも研磨されている段階のものである。石材は白色半透明で、水晶あるいは石英と考えられる。

加工段の時期は出土した須恵器から奈良時代後半頃と推定される。勾玉未製品の出土はこの時期に玉作を行っていた可能性を示すが、隣接する原ノ前遺跡では古墳時代中期に玉作を行っており、そこからの流入品の可能性も否定できない。しかし、前述した奈良時代の建物SB-23周辺からも玉作用と考えられる砥石が出土していること、後述する平安時代の十坑からも勾玉未製品が出土していることから、この時期の玉作を積極的に検討すべきかも知れない。

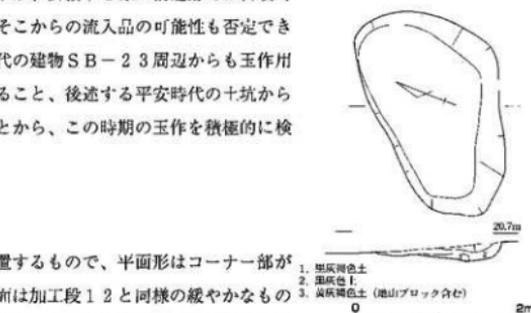
加工段13 (第119図)

加工段12の北東約10mに位置するもので、平面形はコーナー部がやや鋭角なL字状を呈し、壁面は加工段12と同様の緩やかなものである。堆積土の状況も両者は同質のものと観察され、検出時に同時期の遺構であると判断していたぐらいである。床面には貼り床と考えられる層が観察され、壁帯溝は全く検出されなかった。また床面にはピットが検出されたが、大半は浅く、建物の抽出もできなかったことなどから後世のものとの可能性が強いと判断している。

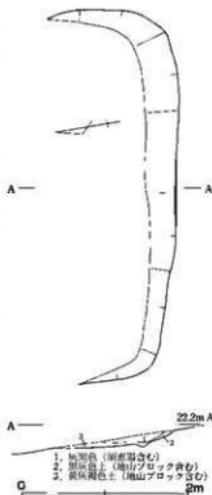
遺物(第120図)は須恵器片と土師器小片が少量出土したのみである。またこれらは加工段が検出面から非常に浅いものであったため、ほぼ床面直上のものである。

1は推定口径12.5cmを測る須恵器の坏で、焼成は茶灰色を呈するものである。体部から口縁部にかけての形状は加工段12出土品と同様である。

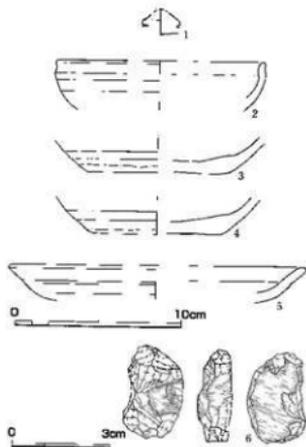
2は4分の1が残存する復元口径14.1cm、器高7.5cmを測る高台の付く坏で、底部外面は回転糸切り痕が残る。口縁部は垂直に近い立ち上がりで直線的に伸びるもので、高台は底面外縁に付き八の字状に踏ん張るものである。焼成は黒青灰色を呈し良好なものである。3も2とほぼ同形態の坏と推定されるが、高台は退



第116図 加工段11及び出土遺物実測図 (1:60, 遺物は1:3)



第117図 加工段12実測図 (1:60)



第118図 加工段12出土遺物実測図 (1:3) 6は(2:3)

化したものとなっている。焼成は緑青灰色を呈している。4・5は皿で、いずれも高台の付かないタイプで、底部は回転糸切りである。復元口径はそれぞれ13.8cm・19cmを測る。6は長頸壺と考えられ、焼成は青灰色で良好、体部の屈曲は直角に近いものである。体部外面は回転ヘラケズリが施され、高台は坏とほぼ同様な形状を呈している。7は須恵器の甕小片で、内面はタタキ痕の同心円をナダ消しており、外面は平行タタキ痕、カキメが残る。

加工段の廃絶時期は出土須恵器から、奈良時代の後半としておきたい。

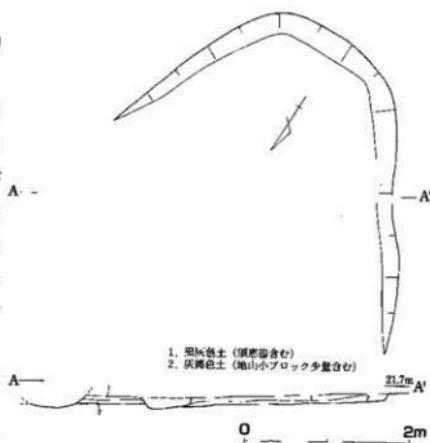
加工段14 (第121図)

調査区中央部の谷斜面に位置するもので、南側上方には古墳時代の建物SB-04が存在する。加工段の平面はし字状を呈しているが、やや不自然な部分があり、造り替えの可能性もある。北側は後世の削平により流出している。断面は壁面が緩やかなカーブを呈しており、前記した加工段と共通の特徴と言える。床面は地山ブロック上による貼り床が認められ、固く締まっていた。ピットが1カ所見られるが、加工段に伴わない可能性が強い。

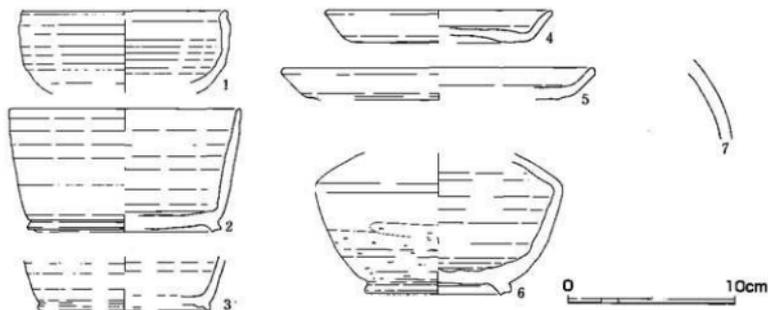
遺物(第122図)は土器が少量出土しているに過ぎない。1は口径12.8cmを測る須恵器の蓋で、外面や、口縁内面に退化した沈線を持つが、天井部は回転ヘラ切り後カキメ調整が見られる。2～4の蓋坏類も1とほぼ同様な時期のものである。

5は内湾した後ほぼ垂直に立ち上がる口縁部を持つ坏片である。6は回転糸切り底を持つ須恵器の坏で、高台は底部外縁に付く。底部外面に×状のヘラ記号が印されている。

加工段の時期はほぼ床面から出土した坏底部6を重視して奈良時代のものと判断している。



第119図 加工段13実測図(1:60)



第120図 加工段13出土遺物実測図(1:3)

加工段15 (第121図)

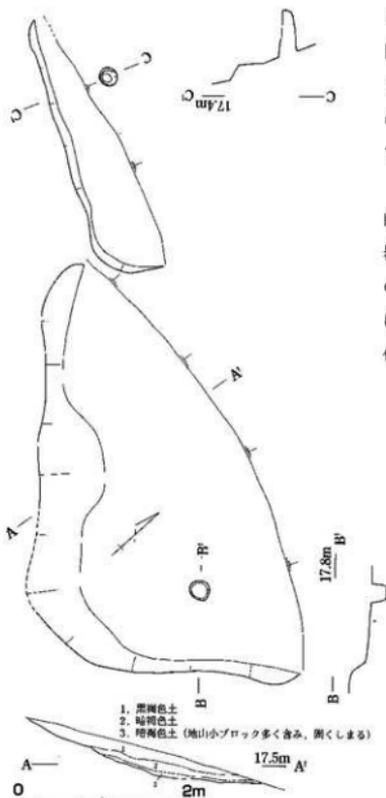
加工段14の北西下方に隣接するもので、加工段の痕跡がわずかに検出されたのみである。加工段の形状は建物に付随するものに近いが、明確な柱穴は1本しか検出しておらず、ここでは加工段として取り扱った。

遺物は土器細片が出土したのみで、明確な時期決定は困難であるが、堆積土は加工段14と同質であったことから、ほぼ同時期と判断した。ただし、柱穴の形態を重視すれば、平安時代に下る可能性もあることも付け加えておく。

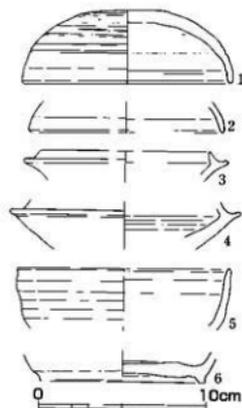
SK-27 (第123図)

遺跡北東端に位置する小型の土坑で、周辺部は後世の耕作によりほぼ水平に削平されていたため、上部はかなり消失しているものと推定される。土坑は長さ75cm、幅35~40cmと長さ50cm以上、幅22cmを測る二つの長楕円土坑が重複しているように見えたため、切り合い関係を検討したが、内部は同様の黒褐色土によって堆積していたため、同一、もしくは同時期の遺構と判断した。底面のレベル差は約15cmを測り、西側の方が一段深いものとなっている。

遺物(第123図)は西側の土坑底面から完形の土師器皿1点が出土したのみである。皿は口径14.6cm、器高1.8cmを測る偏平なもので、内外面とも丹塗りの可能性が高い。底部は外面にヘラケズリ、あるいは板状工具によるナデ調整が認められ、非常に薄く仕上げられている。



第121図 加工段14・15実測図(1:60)



第122図 加工段14出土遺物実測図(1:3)

土坑の時期は川土した土師器皿が後述する平安時代の土器に見られない点や、奈良時代の須恵器の皿に形態が似ていることから、ここでは奈良時代後半～平安時代初頭のものとしておきたい。性格については全く不明と言わざるを得ないが、遺物の出土状況から単なる廃棄土坑とするよりは、なんらかの施設の一部と考えたい。

平安時代の遺構

SB-24 (第124図)

遺跡西端の急斜面部に位置する建物跡で、後述する同時期の建物群や、古墳時代終末期の建物などと併に検出したものである。これらに伴う加工段は当初南西上方に検出された須恵器窯を検出した際に、これの下端部を削平する古道として認識していたものである。須恵器窯の調査が終了した後、掘り下げを再開すると、堆積土から窯体内出土須恵器より新相を呈した土器群が出土し始めたため、須恵器窯廃絶後すぐに造られたものと判断した。床面はこの一帯の地山が引砂利層となっていたため、思うように検出できず、不明確なまま掘りすぎた部分もある。その結果多数の柱穴を検出し、加工段は古道ではなく、建物に付随するものであることが判明した。その後柱穴配置を検討した結果、数軒の建物を抽出し、加工段も低い位置ではその単位が明瞭となり始め、最終的にはここで紹介する平安時代の建物3軒と、前節で記した古墳時代の建物3軒などを抽出できた。

これらの建物群のうち、本建物は最も北に位置するもので、谷側は大半が流出している。柱穴の配置は、桁行き3間、3.5mの規模を持つものと推定され、梁行きは床面流出のため不明である。柱穴の深さには極端に深いものと非常に浅いものがあり、やや不自然と言わざるを得ないが、柱穴列の主軸は加工段の方向と一致することから、ここでは平面形を重視して建物と判断した。なお周辺部には他の建物を構成する可能性のある柱穴も存在するが、床面の大半が流出しているため、ここでは建て替えの可能性を指摘するに留めておきたい。遺物は当初、古道出土品として取り上げていたため、他の建物出土品と一括して後述する。

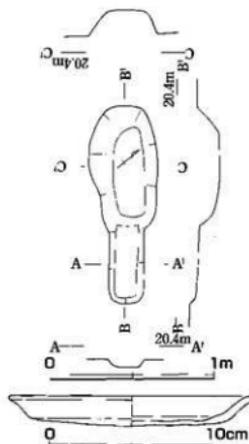
SB-25・26 (第125図)

前記した建物SB-24の南に位置する建物跡で、柱穴配置から2軒が重複しているものと判断した。

SB-25は3あるいは4間×2間以上の建物で、柱穴は径30cm前後を測り、底面はほぼ同一レベルで安定している。規模は4.6(6.4)m×3.6m以上と推定される。

SB-26は柱穴底面のレベルが均一でないことや、平面的にもやや間隔が一定していないため、やや安定感に欠けるが、ここでは一応3～4間以上の建物を想定したものである。柱穴は方形を呈するもの、二段になっているものなどが存在する。

遺物は前記したように、隣接する建物と一括して取り上げているため、次にまとめて紹介する。



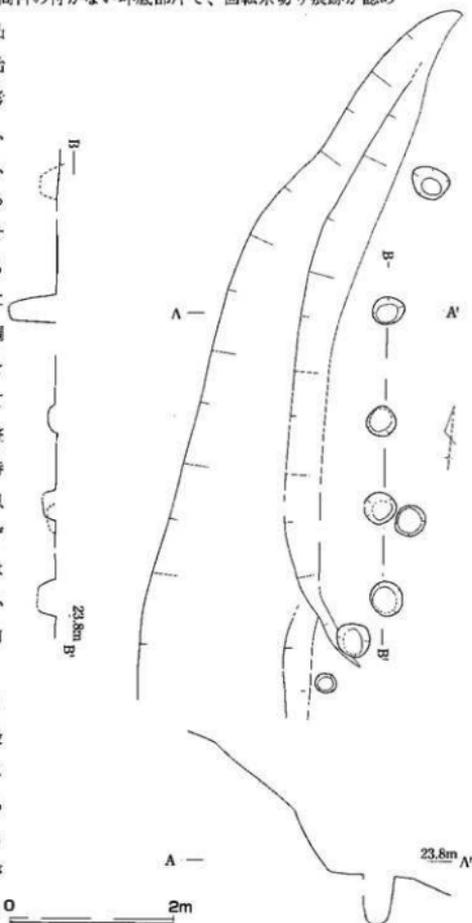
第123図 SK-27及び出土遺物実測図(1:30)

SB-24~26出土遺物(第126図)

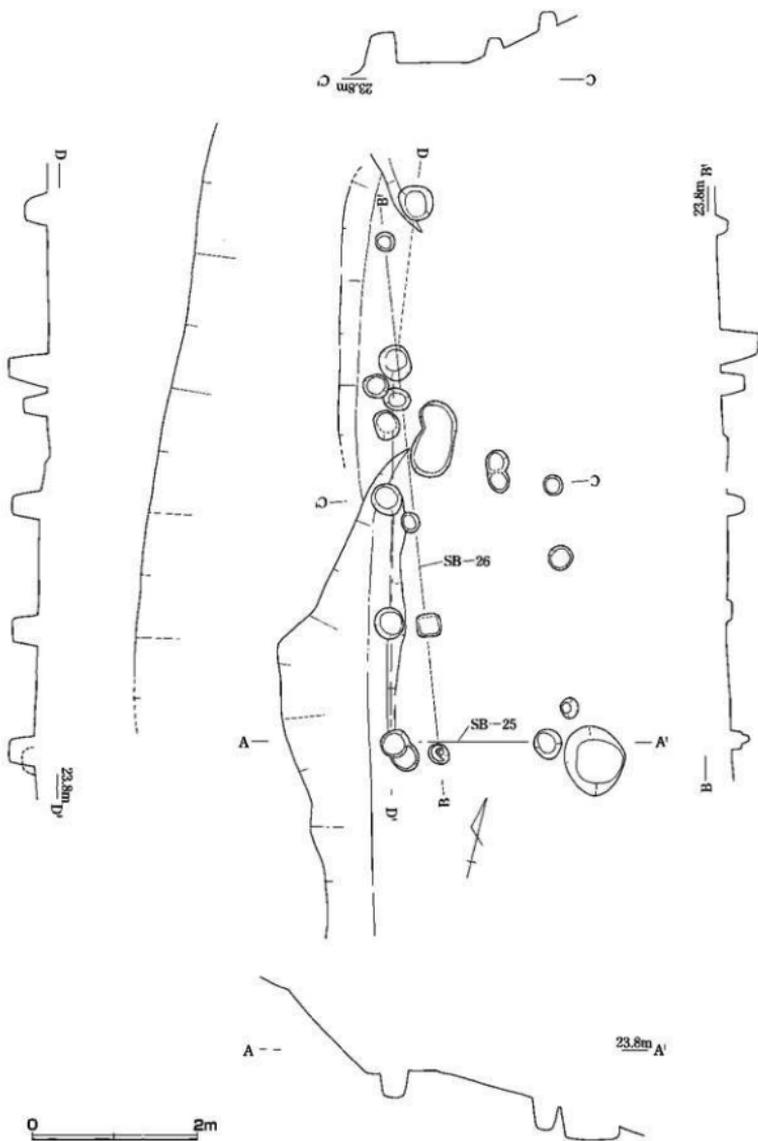
当初、古道出土品として取り上げたもので、いずれも前記した建物SB-24~26に伴うものと考えられる。出土位置はほとんど全てが床面付近であり、建物の廃絶時期を示していると判断した。

1~12はすべて土師器であり、13のみ須恵器である。坏類の胎土や焼成は後述する須恵器窯焼成のものとは明瞭に区別された。1は復元口径15cmを測る高台の付く坏で、白褐色で精選された胎土を持っている。口縁部の開き具合と、八の字形に開く高台が特徴的と言える。風化しているが、底部には回転糸切りの痕跡が、体部には形成時のものと思われる凹凸を残し、回転ナデ仕上げをほとんどしていないものと推定される。2・3は1と同様のものと考えられ、2は底部外面に回転糸切り痕跡が残るが、3は風化のため確認できない。4~8は高台の付かない坏底部片で、回転糸切り痕跡が認められる。いずれも体部外面に形成時の極端な凹凸が残る。これらはすべて白色系で、精選された胎土を持つものでこの時期の特徴を示していると考えられる。底径は高台を持つものが順に6.8、7.2、7.4cmを測り、高台を持たないものは順に6.2、6.5、6.0、6.0、8.6cm測る。9は碗形の坏と考えられる土師器で、口径や傾きにやや難はあるが、およそ推定される口径・器高は約15cm・5cmを測るものである。底部はほぼ丸底で、口縁部は横ナデによってアクセントが付いている。内面はハケメ調整、底部外面は不定方向のヘラケズリの後ナデを施している。胎土は細砂を含み、黄橙色を呈している。平安時代の土師器で、こうした器形・調整をもつ例は今のところ見つからないが、他時期の混入品とは考えにくい。10~12は鍋で、12以外は細片のため口径はおよその推定である。いずれも体部内面は横方向のヘラケズリが、口縁部は横ナデが施されている。13は須恵器の壺口縁部小片で、外面に退化した波状文が施されている。口縁端部はやや平坦に仕上げられている。

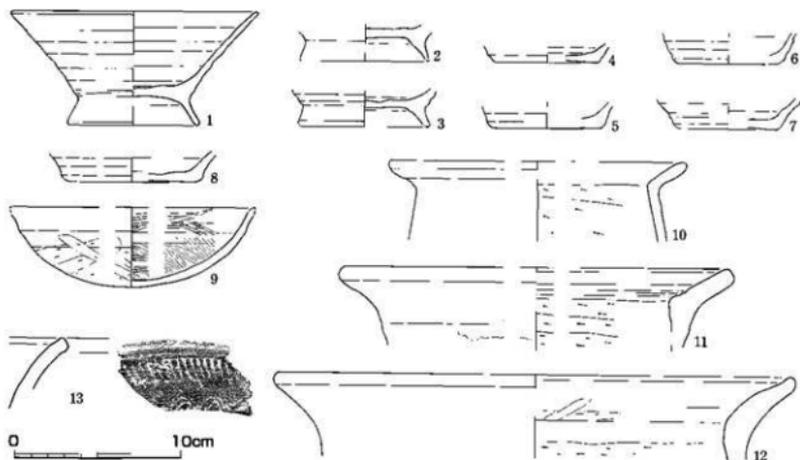
これらの出土遺物から建物群SB-24~26は平安時代前半期の内に廃絶した、遺跡内では最も新しい時期のものと考えられる。さらに、同じ平安時代の須恵器窯1に後出することが明確であり、また今回の調査で平安時代として扱っている土器群の中では、食器類に須恵器窯焼成のものが見られない点などから、相対的に新しい時期のものとしての位置づけが可能である。



第124図 SB-24実測図(1:60)



第125図 SB-25・26発掘図 (1:60)



第126図 SB-24~26出土遺物実測図(1:3)

SB-27・28 (第127図)

遺跡東側の平田部北端に位置する柱穴群の中から抽出したものである。いずれも径30cm前後の小型の柱穴で構成され、建物の存在は現地でおおよそ把握していたが、北半部は調査区外にあるため全容はつかみきれていない。抽出作業は報告書作成時に行なったものである。

SB-27は2×1間以上の建物と推定され、南辺を構成する柱穴がすべて二段になっている点や西辺北側の柱穴が2本存在することから一回の建て替えが想定される。また、南辺は西側に1間分大きくなる可能性もある。

遺物(第128図)は柱穴P-1から出土したものだけであるが、ややまとまった量がある。1は須恵器の皿口縁部片で、復元口径12.6cmを測り回転台成形による凹凸が激しい。焼成は良好で青灰色を呈している。2は復元口径12cm、器高4cmを測る須恵器の坏で、底部は回転糸切り痕を残す。焼成は不良で、白灰色を呈している。3は緑灰色を呈する須恵器の坏底部片で、回転糸切りを残す。4は土師器の甗の把手と推定される。

SB-28は前記した建物と重複するもので、3×1間以上の柱穴配置を持つものと推定される。柱穴はいずれも径が小さいもので、当該期の特徴と言える。

建物の時期はSB-27は出土した須恵器のうち1・2の示す平安時代と推定される。SB-28は遺物が出土していないが、柱穴内埋土は前者と区別できないほど同質のものであり、平安時代のものとしておきたい。

SK-28 (第129図)

調査開始直後に、後述するSK-29と共に検出したもので、検出面での規模は153×138cmを測る南北にやや長い方形を呈している。検出当初は二つの土坑が切り合っているものと推定していたが、土層観察や、掘り下げ時の様子から、土坑内に板材を組んだ施設が存在していたものと判断した。特

に西側の壁面においては内部施設の裏込めに使用されたと推定される粘質土（16層）が認められ、板材が最終的に腐蝕して傾いたと推定している。また、底面の各コーナー部は明確な角を持っており、板材等の組み込みを判断した一つの根拠となっているほか、底面近くでは壁面に近い側で自然石が出土しており（図示）、底板が存在した可能性も考えられる。内部の堆積土は自然堆積状を呈しているが、部分的には掘り直した様子が伺え、また4・5層の上面は部分的に赤褐色に熱変していた。

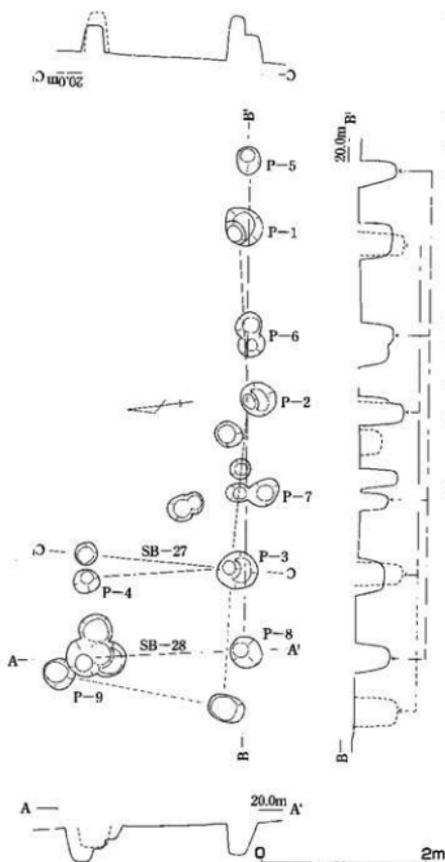
遺物（第130～133図）は非常に多彩なもので、土器を中心にコンテナ3箱分が出土している。しかし土器はいずれも風化が著しく、図化できたのは半分にも満たない。遺物は出来るだけ層位を把握して取り上げようと試みたが、やや不十分なものとなっているため、ここではある程度幅を持たした層毎・器種別に掲載した。

坏・皿類（第130図）は底部調整がわかるものは33を除き全て回転糸切りを施しており、器形も大半が器種毎に近似した様相を持つものである。

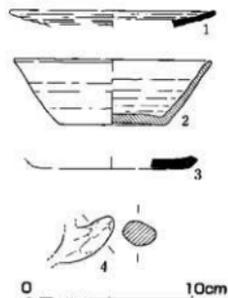
この時期の特徴として、一見すると土師器に見えるが、甕窯で焼成し器形や調整も須恵器と同一なものが存在することから、焼成については後述する須恵器窯出土品を参考に3分類した。

しかし実際には風化したものも多く、見分けのつきにくいものも存在しているため、あくまでも目安として理解していただきたい。分類は焼き上がりの状態が明らかに須恵器（焼成不良等を含む）、褐色系であるが須恵器窯出土品に類似するもの、それ以外のもの（通常の土師器を含む）とし、本土坑以外の遺構出土品もこれに準じることとする。

1～3は検出時に取り上げたもので、1層出土と考えられる。いずれも下層出土品とは異なる



第127図 SB-27・28実測図 (1:60)

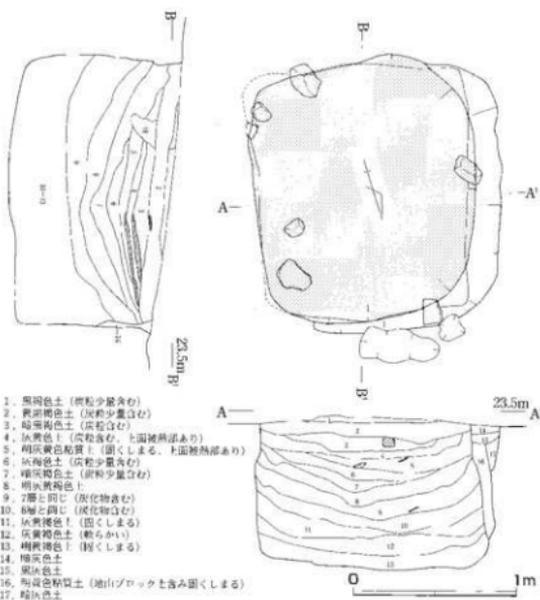


第128図 SB-27 出土遺物実測図 (1:3)

る胎土を持っているように観察された。1・2は内面が黒色の土師器で、風化しているが、内面にかすかにヘラミガキが認められる。砂粒はやや多く含み、黄灰色を呈している。3は灰褐色を呈す土師器の坏底部片で、底部直上から成形時の凹凸が見られる。4～7は2～5層出土品である。4は焼成不良の須恵器で、暗灰色を呈す。5は焼成良好な須恵器で、青灰色を呈す。6・7は風化しており、黄白色を呈す。8～11は5層出土で、10は焼成不良、9は高台が坏部と異なる胎土を持つ。11は復元台径9.6cmを測る灰黒陶器の皿片で、内面に段をもつタイプである。施釉部分は内面全域と外面下半部までで、ほとんど痕跡程度しか残っていない。12～21は5～9層出土で、13・17は焼成良好で、17は白灰色を呈す。19は風化しているが、土師器と推定される。20・21は同一個体となる可能性があり、突帯を持つ厚手の土師器柄と考えられる。22～33は10～12層出土である。22は完形の須恵器坏で、暗灰色を呈し焼成良好なものである。30は15に近似した胎土焼成で、底部は他に比して大型である。32は灰黒色を呈し瓦器焼成に近いものである。33は底部ナデ調整と推定される、やや丸みを帯びた白灰色を呈する土師器である。内面は細かいヘラミガキ調整、見込みに「米」状のヘラ記号が認められる。34は12層出土で、白灰色焼成不良な須恵器坏である。35・36は11層出土である。37～40は最下層出土である。37は茶灰色を呈し焼成良好な須恵器皿である。39は風化しているが灰褐色を呈し、八の字に開く高台をもつ。40は緑灰色を呈する須恵器盤と考えられ、高台に4方向の小孔を持つものである。奈良時代の混入品と推定される。

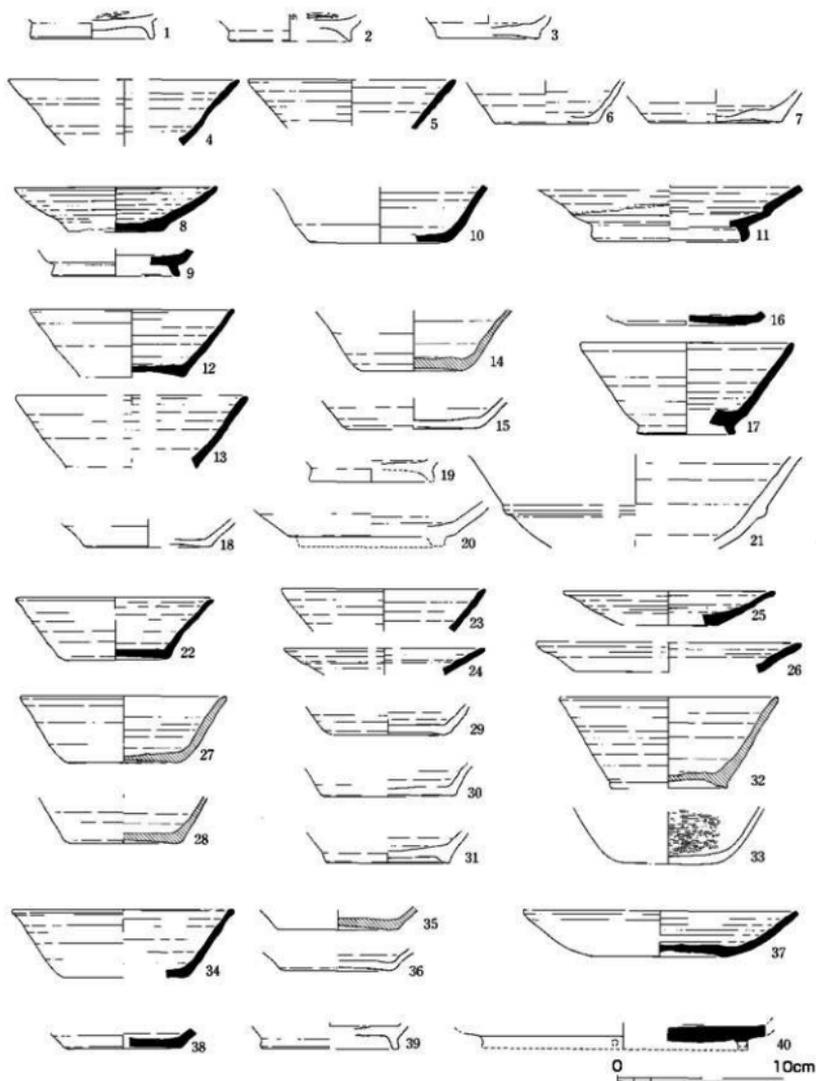
壺類(第132図)はわずかに出土しており、いずれも須恵器窯焼成と考えられる。51は最下層出土で、残存高27.6cm、最大径25.8cm、底径12.2cmを測り、口頸部以外はほぼ完形に復元できた大形品である。焼成は灰～灰黒色の瓦器状を呈し、通常では須恵器の焼成不良とされるものである。調整は内面が回転ナデ、体部外面は縦ハケ後回転ヘラケズリ、底部外面はナデ調整と考えられる。52は8層出土で、51よりやや大型の壺底部と考えられ、体部下端の外面は回転ヘラケズリが施されている。焼成は瓦器状のもので、灰白色を呈している。53は5層出土で、四耳壺の耳部と推定される細片である。焼成は青白灰色を呈し良好なものである。

鍋類(第131図)は大半が小片と化しており、全形を伺うことができるものはないが、残存部の形状から体

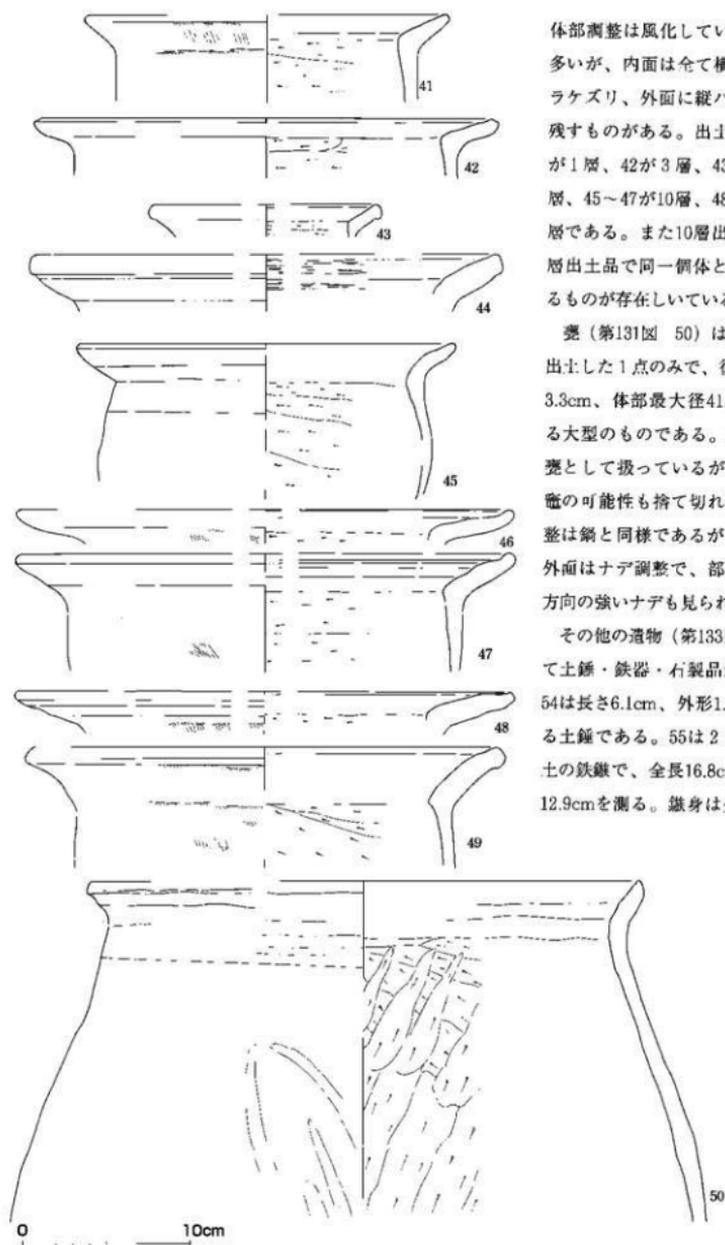


第129図 SK-28実測図(1:30)

部最大径は口径を超えないもので、器高は口径以下を測るものと推定される。口径は復元できるものが少ないが、後述するSK-31出土品のような極端な大型品は含まれていないようである。口縁部形態も様々なものがあり、大型品はほとんどが内面に稜を持ち、端部をやや上向きに仕上げている。



第130図 SK-28出土遺物実測図 (1) (1:3)



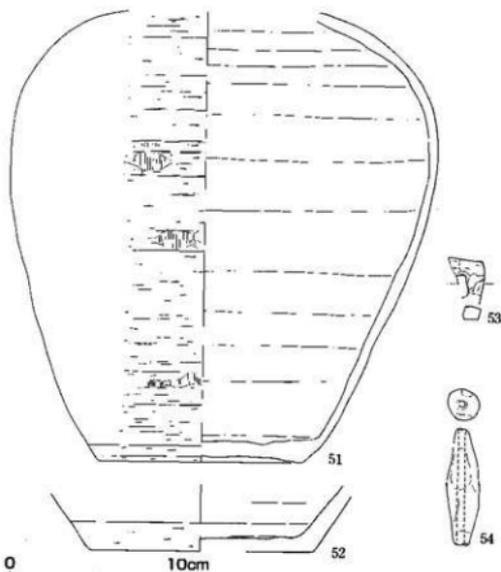
体部調整は風化しているものが多いが、内面は全て横方向のヘラケズリ、外面に縦ハケ痕跡を残すものがある。出土層位は41が1層、42が3層、43・44が5層、45～47が10層、48・49が12層である。また10層出土品と5層出土品で同一個体と考えられるものが存在している。

甕(第131図 50)は11層から出土した1点のみで、復元口径3.3cm、体部最大径41.5cmを測る大型のものである。ここでは甕として扱っているが、移動式甕の可能性も捨て切れない。調整は斜と同様であるが、体部外面はナデ調整で、部分的に縦方向の強いナデも見られる。

その他の遺物(第133図)として土鍾・鉄器・石製品がある。54は長さ6.1cm、外形1.9cmを測る土鍾である。55は2～5層出土の鉄鍔で、全長16.8cm、茎長12.9cmを測る。鍔身は少なくと

第131図 SK-28出土遺物実測図(2)(1:3)

も片面に錆がつくと推定される。56は5～9層出土の鉄製紡錘車で、棒軸は欠損している。円盤部は径4.5cmを測り、中央がわずかに窪んでいるように観察される。軸部は断面方形で径4mmを測り、一部にやや斜交する木質が認められた。57は5～9層で二つに破損して出土した砥石である。石材は白色できめの細かいもので、側面は全て使用され小口部は敲打痕が残る。58も同層出土で元々57と同様な砥石と考えられ、欠損後も使用された痕跡が残る。石材は黄白色を呈し、ややきめの粗いものである。59は10層出土で、片面の一部のみ使用痕が残る砥石破損品である。石材は石英粗面岩と考えられ、通常古墳時代には玉作用の砥石として利用されるものである。60は5～9層出土で、礮石あるいは平玉と考えられ、石材は暗緑色の碧玉、あるいはこれに類似したものである。全面をよく研磨しており、側面には研磨痕の単位が認められる。61も同層出土で、黑色頁岩製と考えられる自然石であるが、大きさや形状から礮石と判断したものである。62も礮石と判断した自然石で、7層出土である。石材は白色半透明で石英と考えられる。



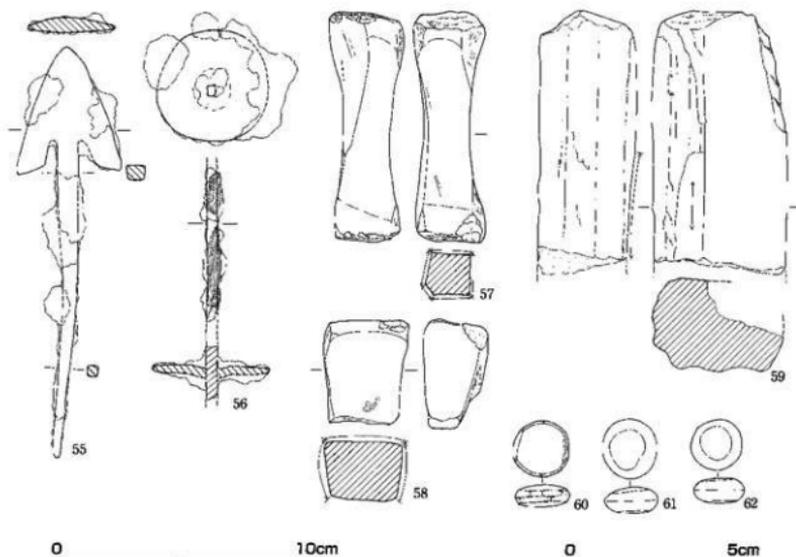
第132図 SK-28出土遺物実測図(3)(1:3)

以上の点から本土坑は、本来は板材を組み込んだ溜骨状施設で、最終的に廃棄土坑として利用されたものと推定される。時期は平安時代前半と考えられる。出土土器は1層の黒色土器等が新相を呈するが、2層以下は大差なく、また異なる層で同一個体が出土していることからほぼ同時期のものと考えられる。また灰釉陶器皿は愛知県弥生投窯産の可能性があり、型式は黒笹90号窯式【愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ】によると考えられることから9世紀末～10世紀前半頃に比定される。

SK-29 (第134図)

SK-28の東に近接した位置で検出された隅丸方形の土坑で、検出面からは非常に浅く、北半は流出している。検出面での規模は東西124cmを測り、深さは最大18cmほどが残存していた。底面はほぼ水平で、内部には黒褐色土のみが堆積しており、土器が少量出土している。

遺物(第135図)は1が須臾器の蓋と推定されるもので、端部は欠損するが、やや下向きに折れ曲がるものと観察された。2は緑釉陶器小片で、口径はおおよそ14～15cmを測るものと推定される。



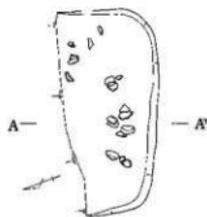
第133図 SK-28出土遺物実測図(4)(1:2, 60~62は2:3)

口縁部は直線的に開き、端部外面にアクセントがある。体部下半は内湾して底部に続くものと推定され、外面には回転ヘラケズリの痕跡が認められる。胎土は黄白色を呈し、砂粒をほとんど含まないものである。施釉部分はうす緑色を呈し、全面に及ぶものと考えられるが、風化のため口縁端部には見ることができない。3は復元口径14.4cmを測る坏で、全体に丁寧な回転ナデ仕上げを行っており、底部は回転糸切り痕が残る。焼成は窑窯焼成と考えられ、外面黒灰色、内面白桃灰色を呈す。4は3と同様な調整を持ち、形態も同様なものと考えられる。桃白~灰色を呈し、窑窯焼成と推定される。5は風化が著しく調整は不明であるが、形態から小型の坏と考えられ、黄白~灰色を呈している。窑窯焼成と考えている。6~8は土師器の鍋と考えられる破片である。6はほぼ全面に横方向のヘラミガキ調整を施したもので、外面下半部は二次焼成を受け、上半部には煤が付着している。復元口径16.8cm、体部最大径16.6cmを測り、胎土は砂粒を少量含み、暗灰褐色~右黄色を呈している。7は薄手のもので、口縁部は横ナデ、体部外面はナデ調整を施している。胎土は砂粒を多く含み、灰褐色を呈している。8は細片であるが、6・7に比べてやや大型のタイプと推定される。口縁部は横ナデ調整で、内面には稜が残る。

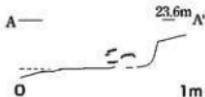
本土坑はかろうじて遺存していたものであり、不明確な部分が多いが、出土した土器は底面付近のものと考えられ、この廃絶時期を示していると考えられる。その時期はほぼSK-28と同時期と考えられるが、出土した須臾器の蓋が混入品とすれば、わずかに後出する可能性もある。緑釉陶器はさらに検討を要するが、概ねこの時期として矛盾ないものと考えている。土坑の性格については不明と云わざるを得ないが、近接する土坑SK-28に比べて底面レベルが非常に高い点などから、これとは別な機能を有していたものと考えられる。また、平面的には後述するSK-31に近似していることから、これと同様な性格の可能性があるのでないだろうか。

SK-30 (第136図)

前記した土坑から北西に約30m近く離れた低い位置に存在するもので、上面は肥料穴により攪乱されていた。平面形は検出面で東西99cm、南北88cmを測る隅丸方形に近いものだが、底面は収束して不整形形となっている。検出面からの深さは50cmを測り、堆積土は分層できない黒褐色土1層で、コンテナ1箱近い土器片を包含していたが、大半は細片化しており廃棄された様相を示していた。



遺物(第137図)は1~14は坏・皿で、肉眼観察では全て竈窯焼成と判断している。坏類は器高3.8~4.3cm、口径11.6~12.8cmを測り、回転ナデ仕上げが行き届いておらず成形時の凹凸が残るものが多い。15は暗緑~紫灰色を呈する須恵器で、奈良時代の混入品と考えられる。16・17は鍋と考えられもので、16は内肉横方向のヘラケズリの後ナデ調整が施されている。18は濃緑色の碧玉製勾玉で、側面の研磨が開始された段階の未製品と考えられる。19は厚さ3mmを測る性格不明の板状鉄製品である。端部は欠損していないようにも観察されたが、破片となる可能性もある。

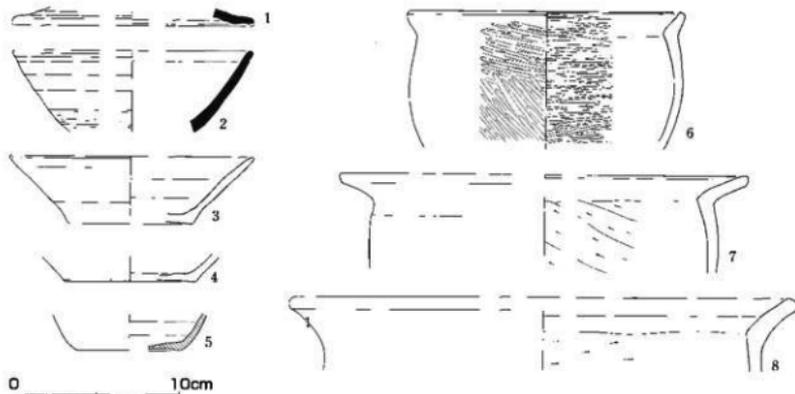


第134図 SK-29
実測図(1:30)

SK-30 (第140図)

上坑の時期は土師器に伴っていないことから、SK-28よりやや古くなる可能性がある。前記した土坑SK-30の北側に隣接する位置で検出された土坑で、コンテナ1箱分の土器が出土している。検出面で東西128cm、南北117cmを測る隅丸方形の平面形を持ち、深さは約30cmを測り、底面はほぼ水平、壁面は垂直に近い立ち上がりを持っている。堆積土は3層に分層できたが、1・2層は土質にほとんど差がなく、土器片の包含量の差で分離したものである。3層はほとんど遺物を含まず、埋土の可能性もある。底面に置かれた偏平な石材は上面が熱を受けており、注意された。

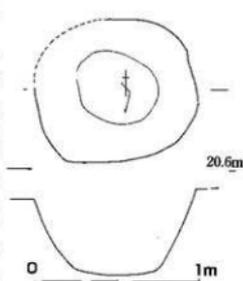
遺物(第138~139図)は竈窯焼成のものと同土師器の両方が見られる。須恵器の坏類は他の平安土坑出土のものと同大差ないが、土師器については、砂粒をあまり含まず精選された胎土を持ち、黄白~桃白色を呈し、特徴的なものを多く含んでいる。16~18の土師器は、高台が断面三角形で外面はそのま



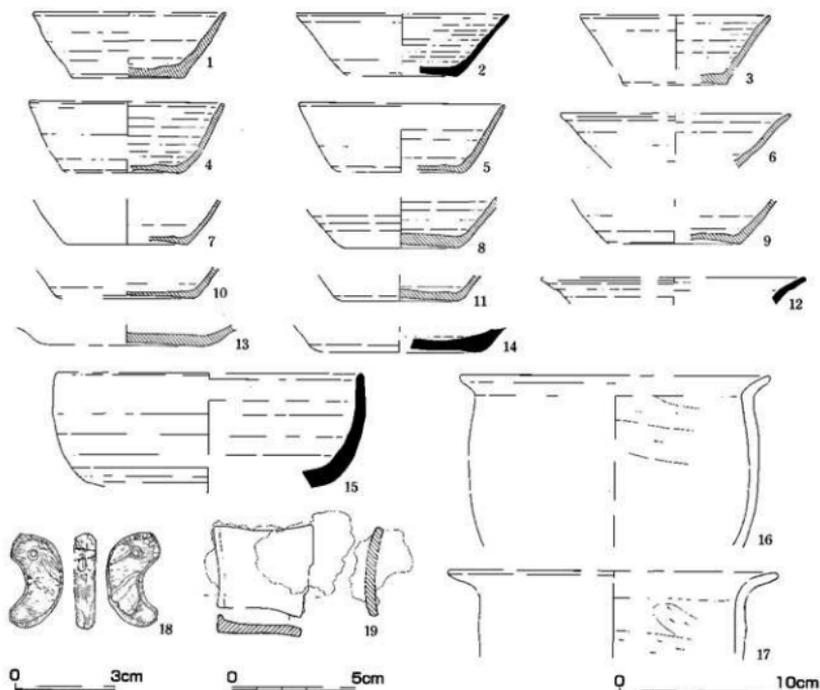
第135図 SK-29出土遺物実測図(1:3)

ま体部へとつながるタイプである。19は内面黒色の上師器底部小片である。内面は風化しているがヘラミガキの可能性が高い。20・21は土師器の耳環で胎十色調とも共通している。口縁折り返し部分は欠損しているため、波状を呈するかどうか不明である。22・23は須恵器の壺で、22は頸部下端に突帯を持つ。24は灰白色を呈する壺体部片で、外面にわずかに灰軸の痕跡が認められる。外向はヘラケズリ、内面は斜め方向のナデが施されており、灰軸陶器の可能性が高い。25～31は銅と考えられる土師器で、25は小型で浅いものと推定される。調整は風化しているため判然としないものが多いが、基本的に体部上半を横方向のヘラケズリ、上縁部は横ナデ、体部外面はナデと推定される。また大型品には頸部外面付近に指頭圧痕状の痕跡が認められるものがある。

本土坑は最終的に廃棄土坑としての性格が考えられるが、本来の機能は不明である。時期は出土した土器のうち土師器の占める割合が高く、遺跡内の平安期上坑群の中では相対的に新しいものと考えられ、10世紀前半～中頃の実年代を考えておきたい。



第136図 SK-30実測図
(1:30)



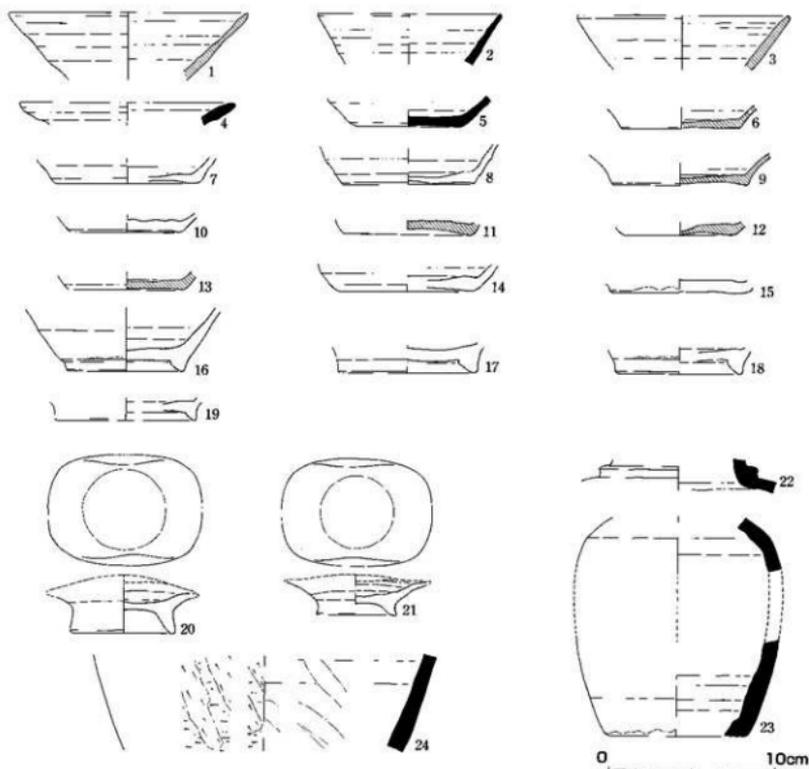
第137図 SK-30出土遺物実測図 (1:3, 18は2:3, 19は1:2)

SK-32 (第141図)

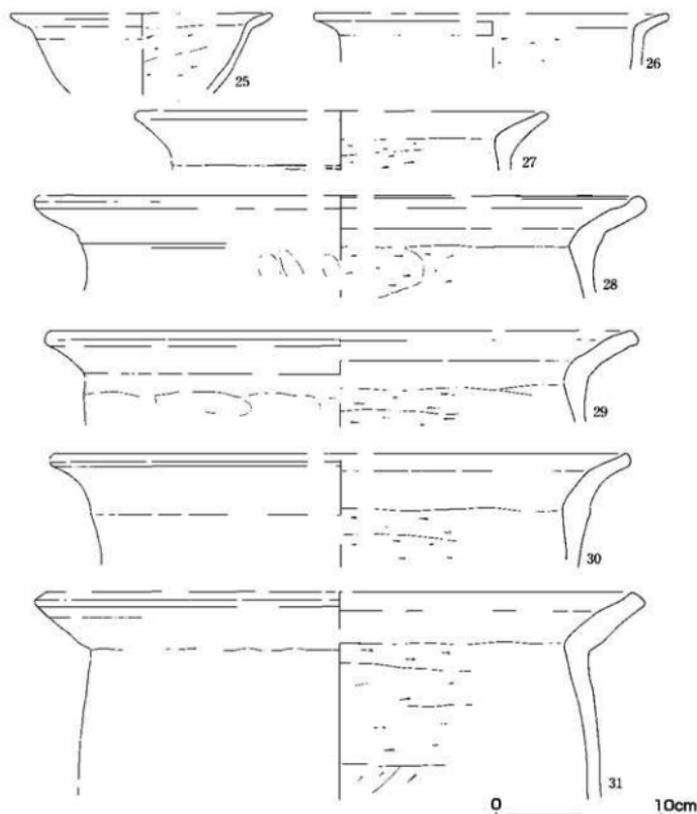
遺跡東端部で検出された土坑で、規模は検出面で東西 153cm、南北 100cm前後、深さ10cmを測る。平面はやや不整形な形状を持っており、現地では確認できなかったが、一辺約1mを測る二つの方形土坑が重複している可能性も捨て切れない。遺物は細片が少量出土したのみで、図化できたのは1点のみで、これ以外の細片で時期のわかるものはない。

1は須恵器の口縁部近くと推定されるもので、径はおおよそ14cm前後を測るものと思われる。欠損部分が口縁端部に近い位置と考えているが、傾きにもやや難があり、蓋となる可能性も捨て切れない。胎上は細砂を少量含み、明灰白色を呈す焼成良好なもので、一見すると灰軸陶器のそれに近いものである。

土坑の時期は出土した須恵器が9世紀から10世紀にかけてみられる特徴的な色調を持っていることから平安時代前半と考えているが、詳細な時期は不明と言わざるを得ない。また、土坑内の堆積土は周辺の奈良～平安期の遺構のものと同様であることも付け加えておく。



第138図 SK-31出土遺物実測図 (1) (1:3)



第139図 SK-31出土遺物実測図(2) (1:3)

須恵器窯1 (142図)

遺跡西端部に位置する須恵器の焼成窯で、調査区拡張の際最初に検出した遺構である。窯窯の立地する地形は非常に急峻な斜面で、後世に削平あるいは崖崩れを起こしている可能性が強い。いずれにせよ元の地形も急峻であったことは、下方の遺構や上方の古墳群の様子から間違いないようである。

調査は上層観察用の畔を縦断用1本、横断用3本設定して行なった。その結果窯は非常に浅く、基底部のみが遺存していることが判明した。規模は、窯道側は窯体の上端がほぼ残っているが、燃焼部から焚き口付近は大半が消失しており、残存長(平面距離、以下同) 258cm、最大幅 108cm前後を測る非常に小型の窯である。床面は縦断上層において標高25m付近に傾斜変換点が認められ、ここを境に下方が酸化焰のため赤色化、上方は床面に還元焰のため暗青灰色化した粘土の貼り付けが見られた。また、床面遺物はこの変換点の上方に集中していることから、この変換点から高い側を焼成部、

低い側を燃焼部と判断した。

燃焼部は削平のため遺存状態が悪く、平面的にはうまく検出できていないが、土層断面の観察から残存長52cmを測り、床面は下端部近くで傾斜が緩やかとなり水平に近いものとなっている。床面横断は焼成部よりやや内湾したものとなっているが、壁面の様子は不明である。床面上には炭化物を多く含んだ土が堆積している。

焼成部は長さ206cmを測り、床面は燃焼部側で32度前後、煙道側で45度前後を測り、余体として急角度で緩やかに立ち上がるものである。横断はわずかに内湾し、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。

床面・壁面とも厚さ1～2cmの粘土貼りが部分的に残っているが、上半部においては元から存在していない可能性もある。

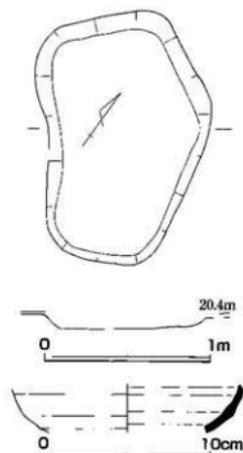
窯体内から須臾器がコンテナ2箱分出土しているが、大半は転落した状態で出土しており、床面に密着したものは少ない。またこれらには接合関係があるものも多く、ここでは以下に一括して説明した。ただし、床面に伏せた状態で置かれた焼き台と推定されるものについては出土状況図に図示しておいた。

須臾器（第143～145図）は大半が灰褐色を呈すもので、本来の須臾器焼成を呈すものは少ない。器種構成は大きく5分類でき、他に焼台と考えられる焼成良好な甍片が数点認められた。器種は器高が4.2cm以下で高台の付かない小型の坏（坏A）、器高が6cm以上の深い大型の坏（坏B）（碗形態を呈するものや、高台は付くものと付かないものがある）、器高が3cm以下の小型の皿（皿A）の他少数の大型の皿（皿B）、壺がある。このうち実測可能であったものについて量的比率を見ると坏Aが45%、坏Bが19%、皿Aが31%、皿B、壺が3%以下となり、坏Aが過半数を占め、壺はごくわずかである。この比率は全量分析でないため実際はやや変動するであろうが、おおよその傾向は示しているであろう。以下では各器種ごとに細分を試みたいが、破片であることや焼成時の変形が見られるものもあり、計測値は推定のものを含む。よってここではおおよその傾向をつかむ程度のもので考えていただきたい。

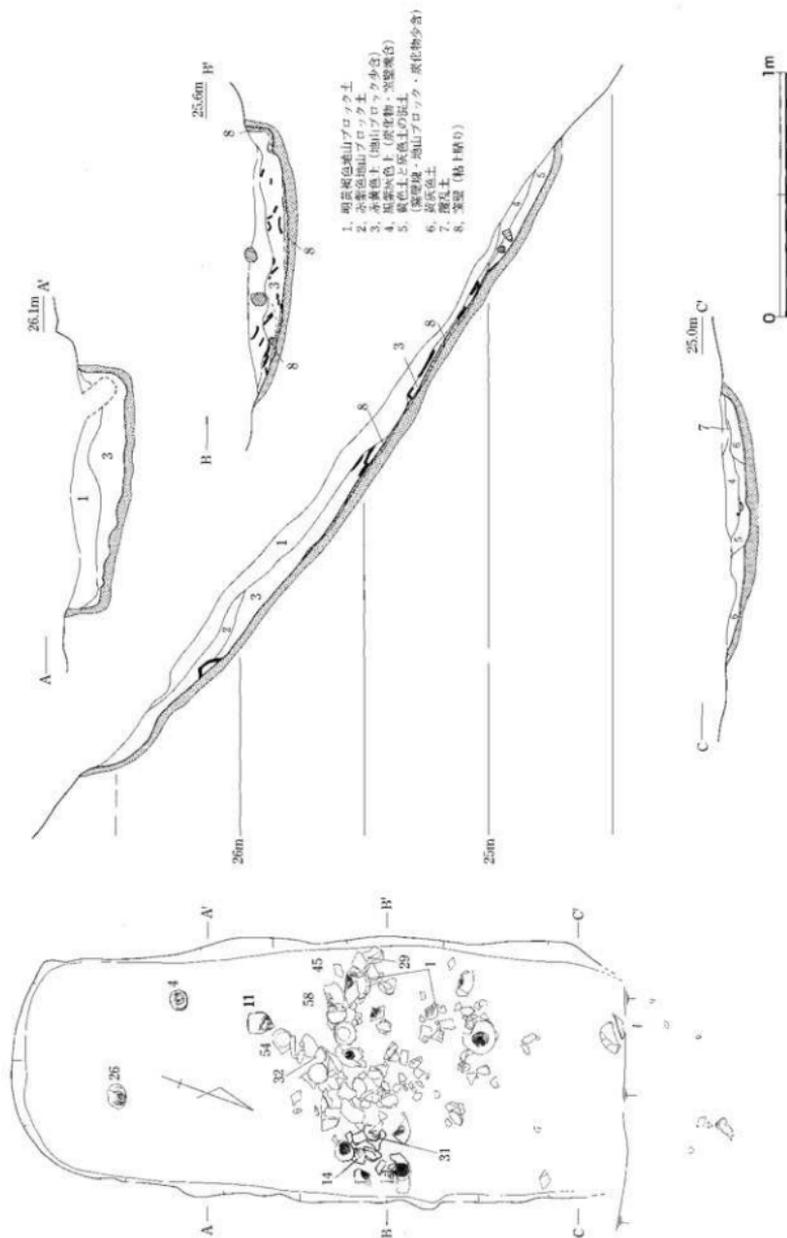
坏Aは1～3類に分類できる。A-1類（1～7）は口径12cm前後、器高4cm以上を測るやや深めで小型のもので、底径は7cm以下のものが多く、口縁部がやや開くものも存在する。A-2類（8・9・12）は口径が13.5cm以上、器高3.5cm以上のやや大型なもので、底径は8cm前後を測る。A-3（10・11・13～19）類は口径13.5cm以下、器高3.2～3.7cmを測るやや浅めのもので、底径



第140図 SK-31実測図
(1:30)



第141図 SK-32及び
SK-33実測図
(1:30, 遺物は1:3)



第142図 須恵器窯1実測図 (1:20)

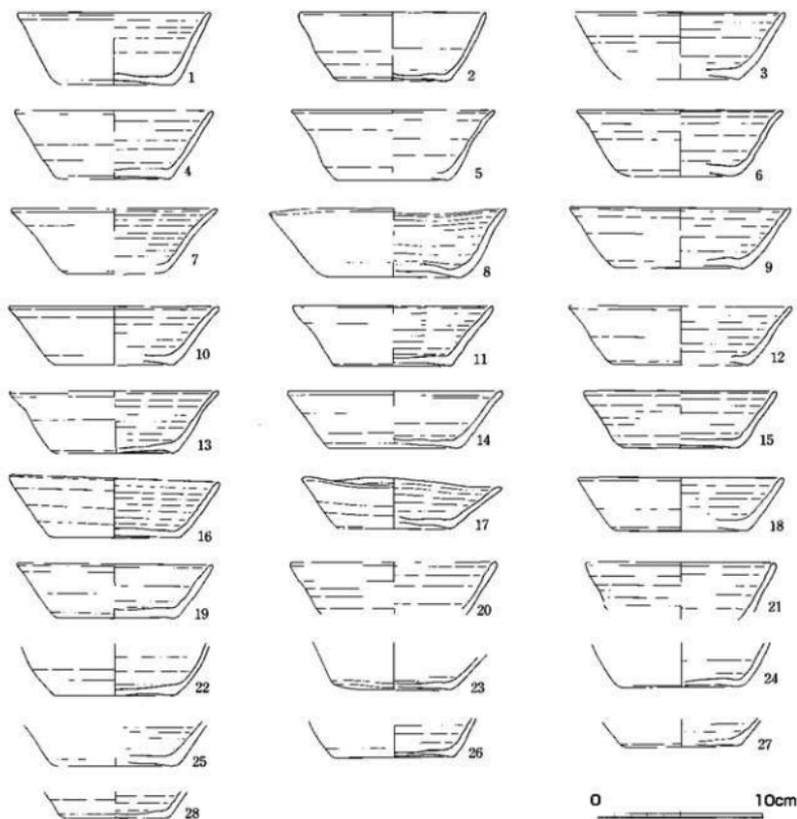
は7～8cmを測るものが多い。

坏Bは個体偏差が激しいのが特徴で、大半のものが高台を持つようである。ここでは体部の形態などから2類に分類した。B 1類(29・30・32・36・39など)は体部が直線的に開くもので、高台を持たないタイプも見られる。B-2類(31・33・34・37・38)は体部が碗状を呈すもので、高台を持たないものも存在する可能性がある。このうち38は体部下半に回転ヘラズリを施している点が注意される。

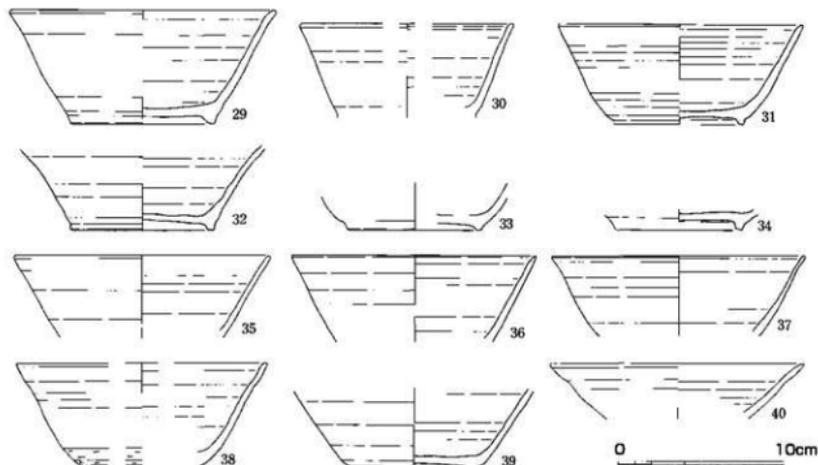
皿Aも個体偏差があるが、ここでは大まかに2分類しておく。A-1類は器高が2cm前後以下の浅いもの。A-2類は器高が2.5cm前後～3cmの深めのもの。

皿Bは1点のみしか認められていないが、全体のバランスは皿A-2類に近い。

甌は2点のみであり、全形は不明である。



第143図 須惠器窯1出土遺物実測図(1)(1:3)



第144図 須恵器窯1出土遺物実測図(2)(1:3)

このほか焼台と考えられる甕片は同一個体と推定されるものがほとんどで、外面は粗い平行タタキ、内面は同心円状のタタキをナテ消している。

これらの須恵器はほぼ一時期のものと考えられるが、坏A-1類や皿A-1類はやや新相を呈すものと考えている。後続する遺構で出土しているものはほとんどがこのタイプで、最終的には皿が欠知するものと推定している。

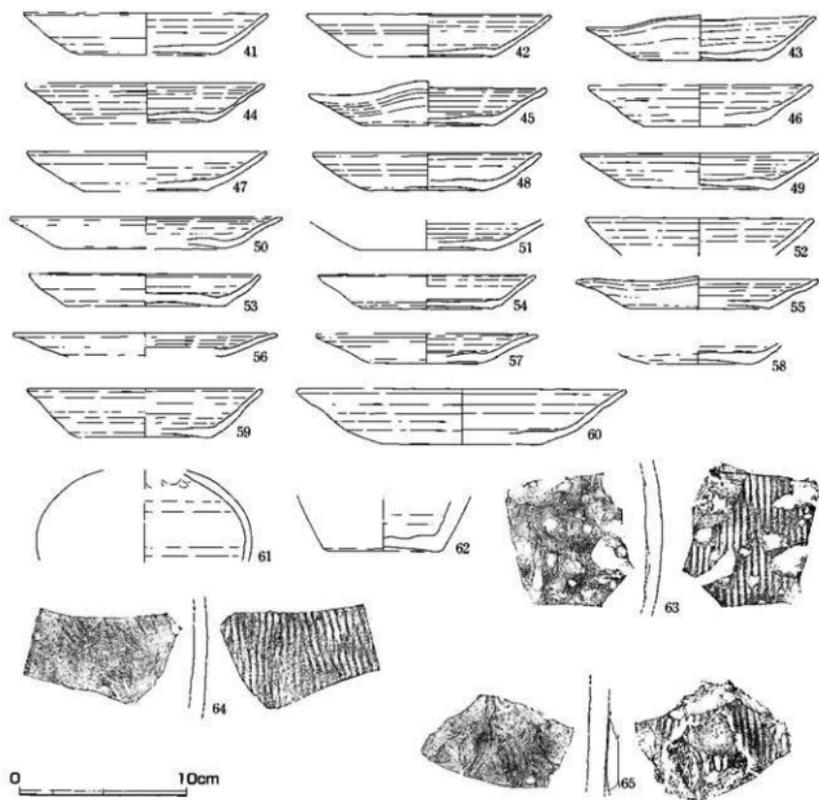
なお、隣接する洪山池古墳群では甕類のみを焼成したと考えられる別の須恵器窯が検出されており、考古地磁気測定の結果報告や胎土分析などと伴に、あらためて考察する予定である。

須恵器窯周辺出土遺物(第146図) 前述した須恵器窯周辺では灰原は検出できなかったが、土器が少量出土している。1~3はいずれも精選された胎土を持つ土師器で、前述した建物群に伴うものと推定される。4は体部に突帯を持つ焼成良好な須恵器の坏で、窯に伴う可能性もある。

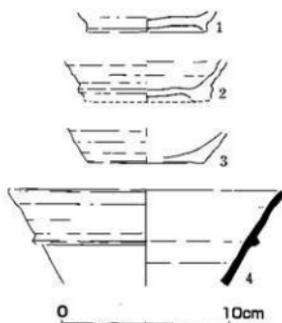
SK-33(第147図)

調査区南西端で検出された木棺墓と推定される土坑である。検出当初は重複する加工段の一部と考えていたため、床面付近まで掘り下げた段階で、木棺墓と認識したものである。規模は検出面で長さ173cm、幅60cm前後、深さ25cmを測る。木棺痕跡は検出できなかったが、形態や埋土状況、須恵器窯が落ち込んだ状態で出土したことなどから木棺墓と判断した。

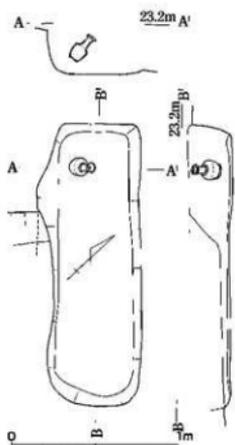
出土した須恵器(148図)は高台の一部が欠損するが、ほぼ完成品である。頸部下端の突帯や頸部がやや先細りとなる形状をもつ点が特徴で、今のところ類例を見ないものである。強いて言えば青磁水甕に近似した形態を持つものがあり、これを模倣したと考えることもできる。



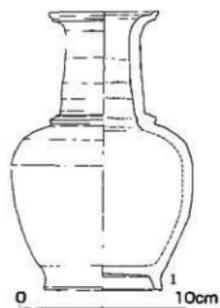
第145图 须惠器窯1出土遺物実測图 (3) (1:3)



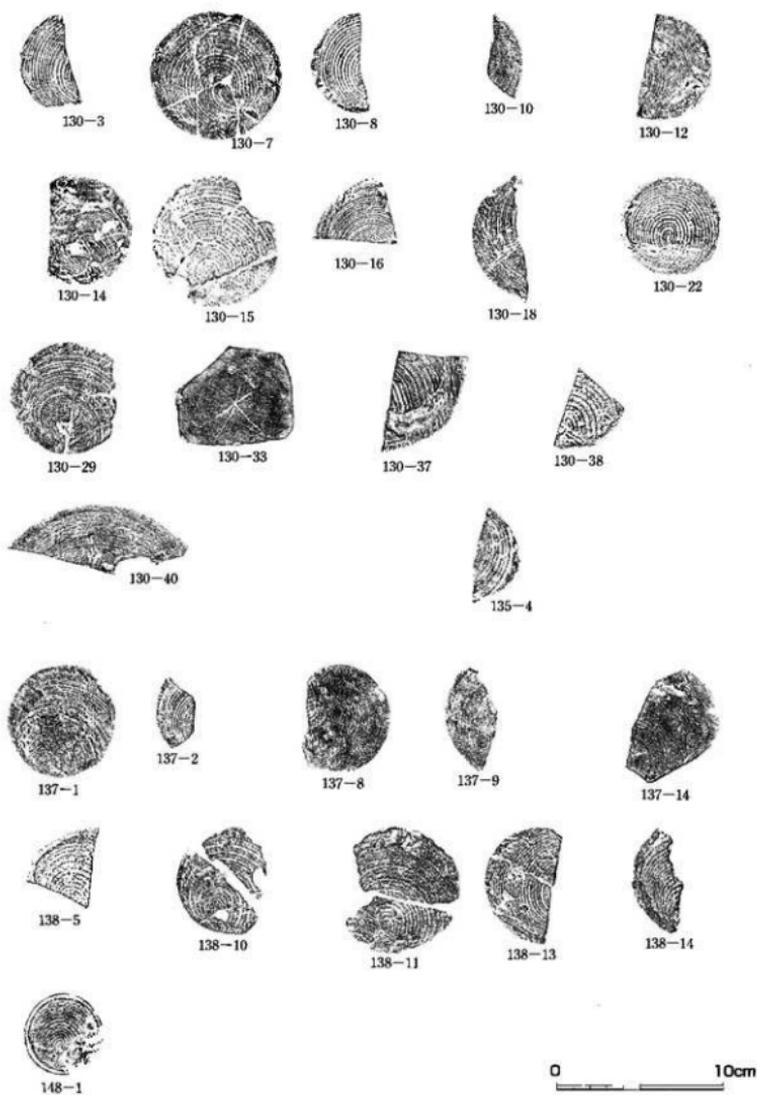
第146图 須惠器麻周辺
出土遺物実測図 (1:3)



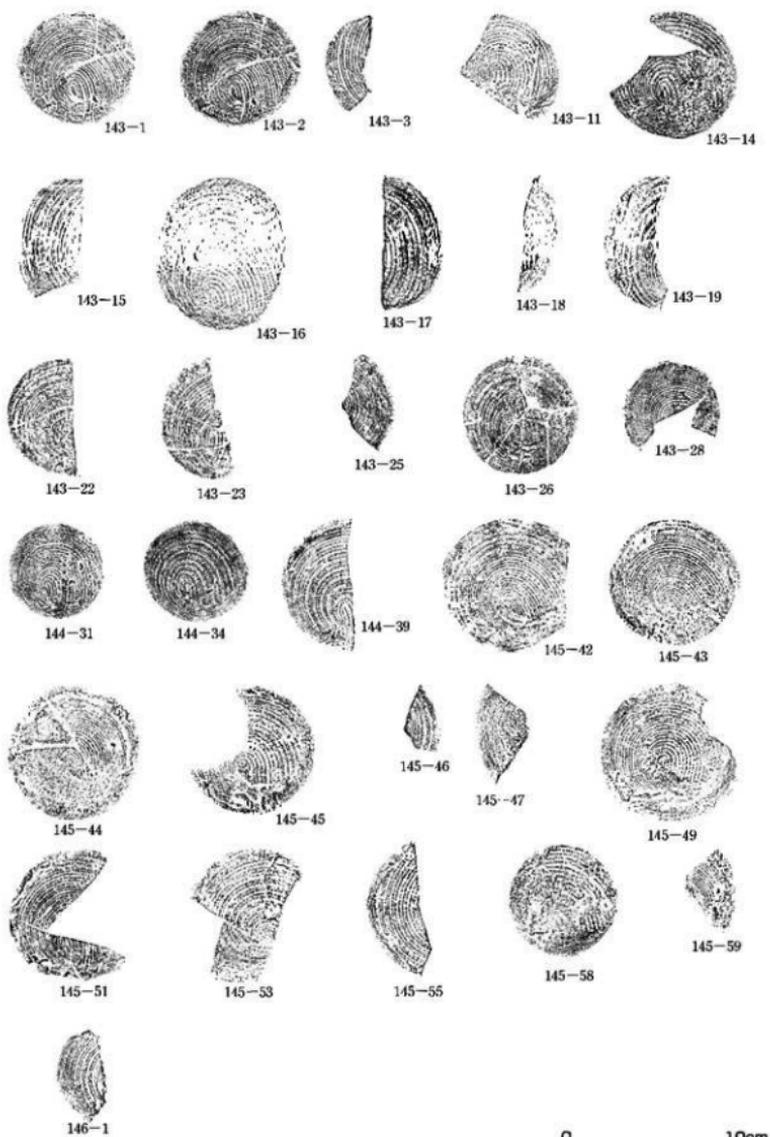
第147图 SK-33実測図 (1:30)



第148图 SK-33
出土遺物実測図 (1:3)



第149圖 平安時代土器底部拓本(1)(1:3)



第150圖 平安時代土器底部拓本 (2) (1:3)

第8節 時期不明の遺構

前節までに紹介した遺構は、供伴する出土遺物の時期が明確なものや、堆積土の様子からその時期が明らかなのものである。ここでは、遺物が全く存在しない遺構や、出土していても時期不明なものなどを記すことにするが、中には時期のわかる遺物が出土しているが時期決定に躊躇するものも含んでいる。これらについては可能な限りその所属時期を検討して行きたいが、遺跡、特に集落の変遷を考える上では、一つの遺構が大きな比重を占める場合が多々あるため、出来るだけ幅広い可能性を与えることとした。

時期不明な遺構はほとんどが柱穴と考えられるピット群である。そのうちここで紹介するのは建物として抽出できたものだけであり、それ以外の多数を占めるピットにはわずかではあるが、遺物を出したのもあるので、第6章の集落の変遷図においてそのおおよその分布を紹介した。

SB-29 (第151図)

調査区中央部南側 (I区) において検出した大型の建物跡である。この地点は果樹園造成時の削平が著しく、柱穴はほとんどが浅いものとなっていた。周辺の地形は緩やかな斜面となっており、本来なら建物に付随するはずの加工段も残存していない。

建物は4×2間以上の柱穴配置を持ち、1回の建て替えを行なっている。規模はいずれも東西8.3m、南北3.8m以上を測る遺跡内では最大級のものである。柱穴掘り方は、建て替え後のものを含めてほとんどのものが方形を指向しており、検出面での大きさは径55~75cm前後を測る大型のものである。柱穴底面は平坦に仕上げられており、底面レベルは南辺中間部のものが一段高くなっているのが特徴である。柱痕は6穴で検出され、検出面で径18~20cmを測り、断面は先端部のみやや細くなるように観察された。桁行きは南辺での柱間距離が、柱痕の心々距離で、西から1.85m、2.2m、2.2m、(1.85m)を測り、中央の2間が両側よりも35cmほど長くなっている。梁行きは推定1.85~1.90mと推定される。

出土した遺物は図示していないが、柱穴P-5の埋土(2層)中から須恵器の坏細片1点のみである。これは受け部が付く坏の口縁端部と推定されるもので、立ち上がりは約1cmを測る短いものである。この特徴は大谷編年5~6期頃のものと考えられ、建物の上限を示していることになろう。

本建物は遺跡内最大クラスの規模を持ち、柱穴の掘り方も整然としたもので、遺構としては非常に重要なものとなる。しかし、前記したように床面は削平され柱穴のみが残存しているため、明確な時期決定はできないものである。ここでは出土した須恵器細片の示す時期、そして柱穴はほとんどのものが方形を指向している点が、遺跡内の建物では大谷編年で言う6期のものに限られている点などを重視して、ほぼこの時期のものと考えておきたい。さらに本遺跡内では明確な建物が検出できていない大谷編年7~8期にまで下る可能性もあることを付け加えておく。実年代で言えば7世紀前半から8世紀前半頃までの時期幅で考えられる。

SB-30 (第152図)

調査区東の平坦部で検出した建物跡と推定されるものである。検出当初は南に隣接する堅穴建物S

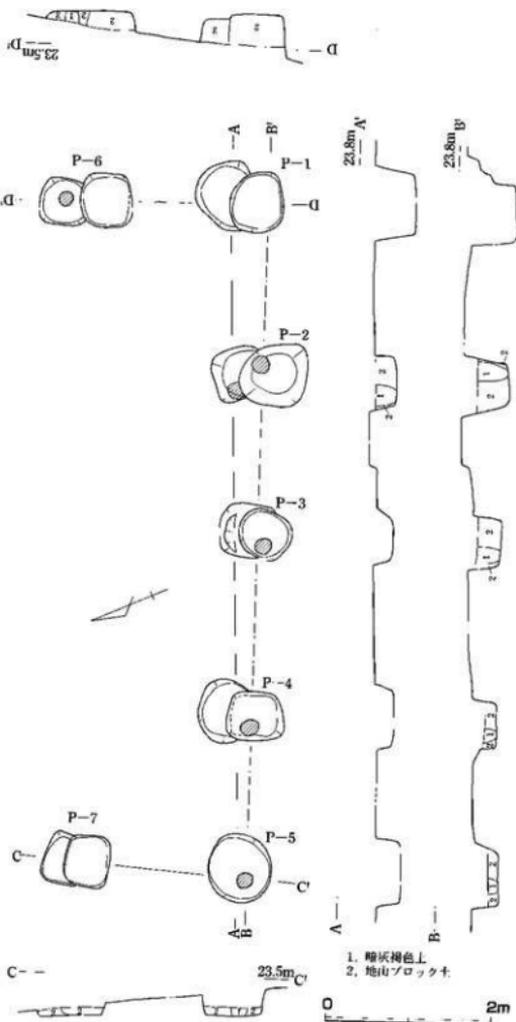
B-01の床面でやや大型の柱穴(P-7)を検出し、こちらはSB-01の建て替え痕跡としての建物(P-5~8)と判断していた。その後、北側の柱穴P-1~4が直線的に並ぶことに気がつき、この柱穴列のさらに北側に建物を想定して柱穴を探したが明確な建物が検出できなかった。

以上の理由から、調査時にはこれらが全体として一つの建物となりうることに全く気がつかなかったのである。もちろん現時点では検出できなかった柱穴について確かめる術もないが、ここでは検出した柱穴配置のバランスを重視して、P-1~4を北辺とする東西に長い3×2間の建物を想定した。その場合柱穴の重複度から、この建物は1~2回の建て替えを行なっているものと考えられる。

建物規模はおおよそ5.2×3.9mを測り、遺跡内では鍛冶工房SB-15とほぼ同規模となる。柱穴掘り方は一部にやや方形を意識した様子も見られるが、全体としては円形に近いものがほとんどである。柱穴底面のレベルはほぼ均一で、前記した建物SB-29のような特徴は見られない。

遺物は柱穴P-2から数点出土しているがいずれも細片である。図示(第152図-1)したもの以外には平瓶の体部片と推定されるものもある。1は口径不明の須恵器蓋で、大谷編年5~6期のものと考えられる。

以上の点から本建物は3×2間のものとなる可能性が強いもので、時期的には出土した須恵器の示す大谷編年5~6期を上限としておきたい。下限は不明と言わざるを得ないが、柱穴の大きさから平安時代のものとは考えにくく、奈良時代頃までのものとしておきたい。また、ほぼ同規模なものとして大谷編年7期頃の建物SB-16があることを付け加えておく。

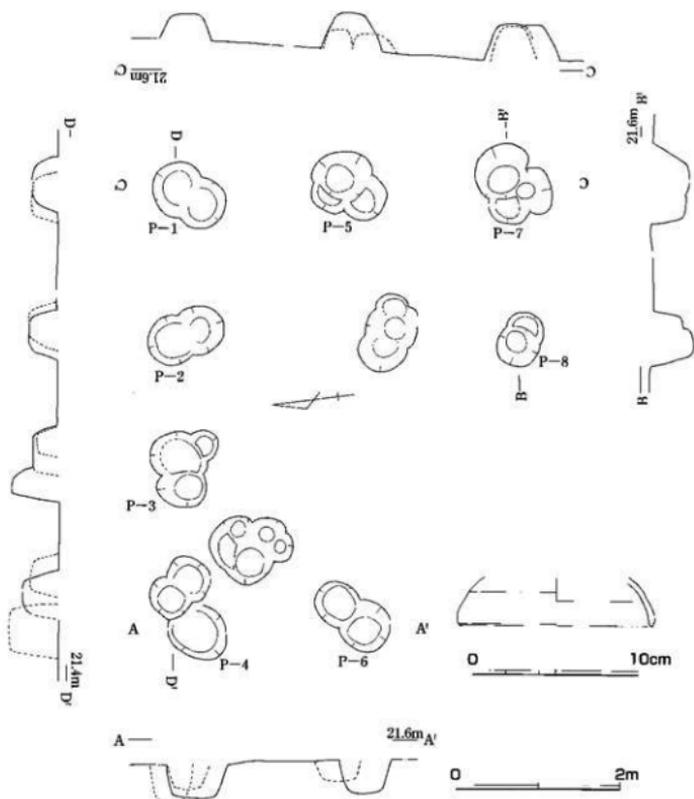


第151図 SB-29実測図(1:60)

SB-31 (第153図)

調査区西側の谷部に位置する建物跡で後世の畑地造成により、上部は著しく削平を受けており、柱穴基部がかろうじて残存していたものである。これに付随していたはずの加工段も全く検出できておらず、柱穴内から全く遺物が出土していないため、時期が決定できないものである。ただし、柱穴P-8は古墳時代終末期の加工段6の壁帯溝を切っており、これに後出することは明らかである。

建物は柱穴配置から、4間以上×3間で、規模は東西6.3m、南北3.45mを測るやや大型のものである。柱穴掘り方はほとんど全てが方形、あるいは方形を指向した平面形を持ち、遺跡内では最も整った形状を呈している。柱痕は一部が上層断面などで確認されており、柱径15-18cm前後を測るものと推定される。また全ての柱穴で柱痕跡を検出していないため断定はできないが、中間柱がやや径が小さくなる可能性を指摘しておきたい。柱穴底面は水平に近いものが多く、底面レベルはコーナー部のものが一段深く掘り込まれている点に注意されよう。柱穴の土層断面からは、P-4・6のよう

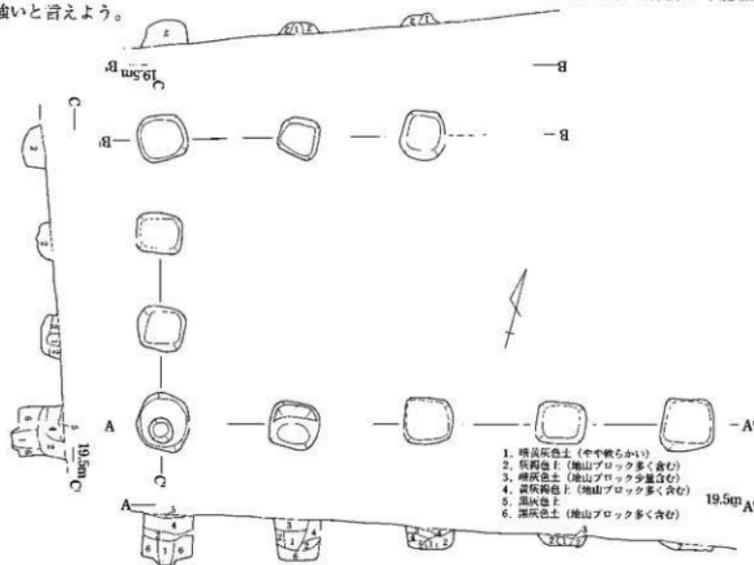


第152図 SB-30及び出土遺物実測図 (1:60, 遺物は1:3)

に一旦掘り下げた後、10cmほど埋め戻して柱を掘え付けたものがある。また、P-2～5では柱の抜き取り痕跡と推定される土層が認められることから、建物は最終的に解体されたと推定される。なお、柱穴掘り方の規模は径50～63cm、柱間距離の推定平均値は、桁行き1.58m、梁行き1.15mを測り、梁方向が非常に狭いものとなっている。

遺物は前述したように、全く出土していないが、周辺、特に北側下方に存在する加工段7上層の遺物は、大谷福年と言う5～6期頃のものが多く、奈良～平安時代のものは出土していない。

以上の点から、木建物は加工段6の時期より新しく、奈良時代にまでは下らないものと考えておきたい。さらに柱穴掘り方の形状が方形を指向している点から、大谷福年6期頃の可能性が強いと言えよう。

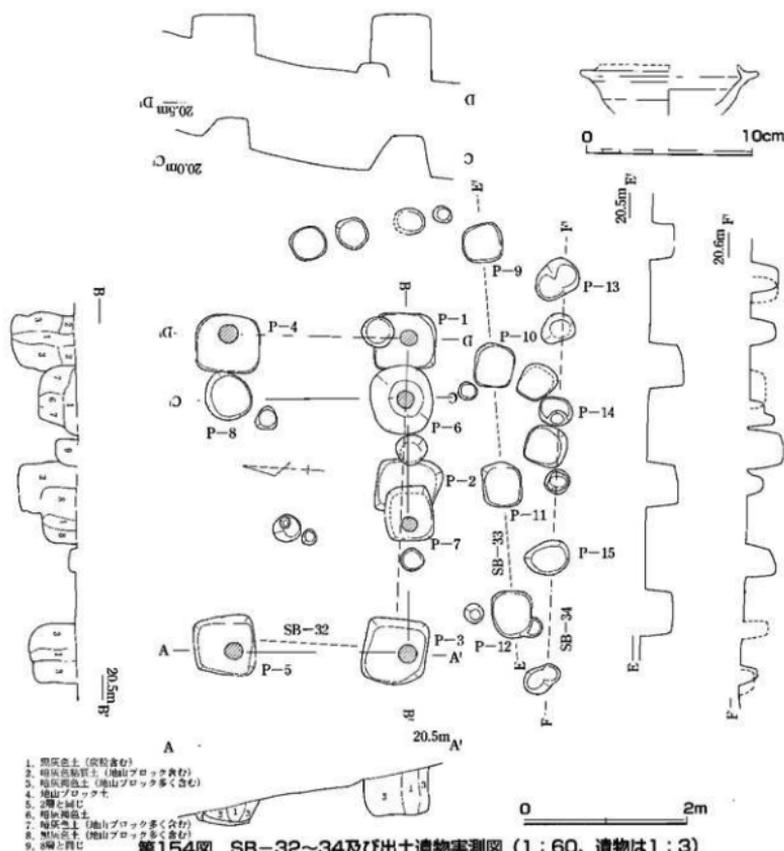


第153図 SB-31実測図 (1:60)

SB-32 (第154図)

この建物は調査区中央西寄りの斜面に位置し、後世の耕作により床面や加工段は削平され、柱穴の一部のみが残存していた。この周辺部には小ピットが集中しており、表土中からは古墳時代終末～平安時代の土器片が出土している。南側に隣接する建物もこのような状況の中から抽出したもので、これらがそれぞれどの時期に属しているのかは現地では検討できなかったものである。

建物は北半が消失しているが、周囲の地形から2×2間の柱穴配置を持つものと判断した。また、1回の建て替え痕跡が認められ、柱穴同士の切り合い関係から建て替え後は西側へ縮小していることが判明している。建物規模は建て替え前が東西約3.8m、南北4.3m、建て替え後が同3.1m、4.2mを測るものと推定され、南北方向はほとんど変化していないが、東西方向は約0.7m縮小している。柱穴掘り方は建て替え後の東辺以外は全て方形を呈していたものと考えられ、遺跡内で最も整った部類に属す。柱穴底面はほぼ平坦に作られており、底面レベルは建て替え後にやや高くなっていることが指摘できるが、中間部の柱穴が一段高くなる様子は見られない。柱径は検出された痕跡からおよそ18



~22cmと推定される。柱間距離は南辺1.9mが建て替え後1.55mに、南北方向は2.15mが2.1mに変化している。この他、建物に重複して径35cm前後を測る小さな柱穴が散在しており、うち2穴は切り合い関係が認められ、本建物に後出するものであることが明確となっている。

遺物は柱穴内から須恵器壺細片が出土してのほか、柱穴P-1を切り込んでいる小型の柱穴内からは須恵器の高坏と考えられる口縁部細片が出土している。

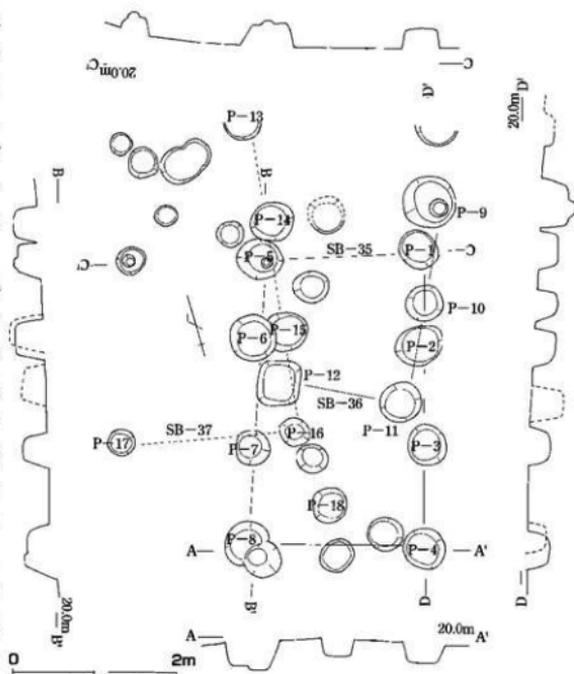
建物は時期のわかる遺物が全く出土していないため、周辺遺構や遺構そのものから推定するしかない。まず柱穴の形態であるが、こうした方形の柱穴を持つ建物はSB-15を代表とする、大谷福年6期に集中することから、この建物もこの時期に建てられた可能性が強いと考えている。ただし、明確な大谷福年7~8期頃の建物がほとんど見つからないため、この時期にまで下る可能性はある。次に後述する南側の建物SB-33の柱穴内に大谷福年6期頃の須恵器が作っていることから、建て替えが地形の高い方へ行なわれるとすれば、これに先行、もしくは同様な時期となる可能性を指摘できよう。

SB-33 (第154図)

前述した建物の南側に隣接するもので、南辺の柱穴列のみ残存している。規模は約4.5mを測り、柱間距離は推定1.1mを測る。柱穴は全て平面方形を呈しており、径50cm前後を測る。

遺物 (第154図) は柱穴 P-15内から須恵器の坏片が出土しており、これが唯一のものである。この坏は最大径10~11cmを測ると推定されるもので、口縁端部を欠くが、全体のプロポーションから非常に短い立ち上がりを持つと考えられる。

この建物は出土した須恵器から大谷編年6期を上限とする時期のものと言え、北側に隣接する建物SB-32に後出する可能性が強く、ここではこれと同じ時期幅の中で建てられたものと考えておきたい。また、北西部に位置する時期不明な建物SB-31と柱穴の規模・形態が極めて近似しており、これと同時期の可能性があることも付け加えておく。

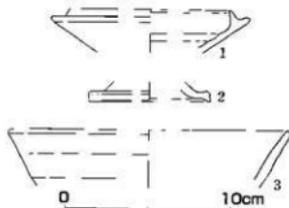


第155図 SB-35~37実測図 (1:60)

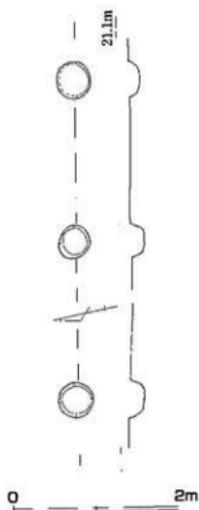
SB-34 (第154図)

前述したSB-33の南に隣接するもので、南辺の柱穴列のみ検出した。建物は東西4間の柱穴配置を持ち、規模は約4.9mを測る。柱穴は平面不整形形で、径25~40cmを測る。これらは報告書作成時に抽出したもので、周辺には同様な柱穴が多く存在するため、ここでは建物の可能性があるものとして取り上げた。柱穴の重複具合から1回の建て替えを行っているとみられる。

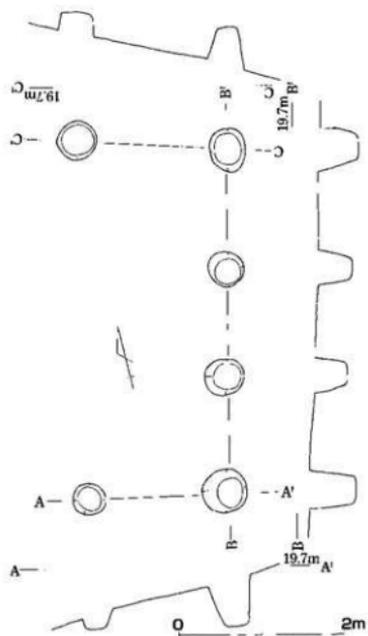
時期のわかる遺物は出土していないが、柱穴径が小さいことや北側に隣接する建物より新しいと推定されることから、ここでは奈良~平安時代のものと考えておきたい。



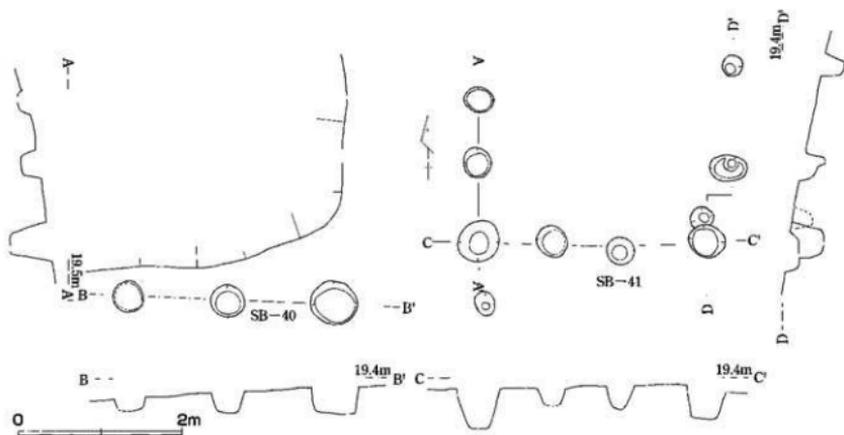
第156図 SB-35~37及び出土遺物実測図 (1:3)



第157圖 SB-38
実測圖 (1:60)



第158圖 SB-39実測圖 (1:60)



第159圖 SB-40・41実測圖 (1:60)

SB-35~37 (第155図)

調査区東側の平坦部北端に位置する建物群で、いずれも柱穴は浅く、上部は後世の削平を受けている。このうちSB-35は調査時に、他は報告書作成時に抽出したものであるが、柱穴群は北側にも広がり柱穴配置は異なる展開を見せる可能性があることを断っておきたい。

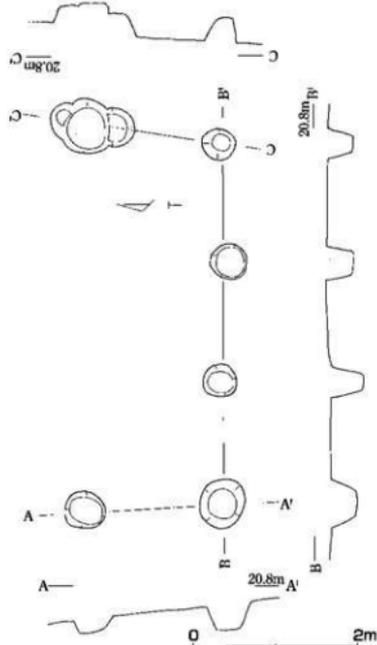
SB-35は3×1間の建物となる可能性があり、規模は約3.65×2.0mを測る。柱穴は平面門形で、径40~50cmを測る。

SB-36は3間以上×2間以上の建物となる可能性があり、規模は3.6×3.0m以上となる。柱穴はSB-35とほぼ同様であるが、P-12だけは方形を呈している。

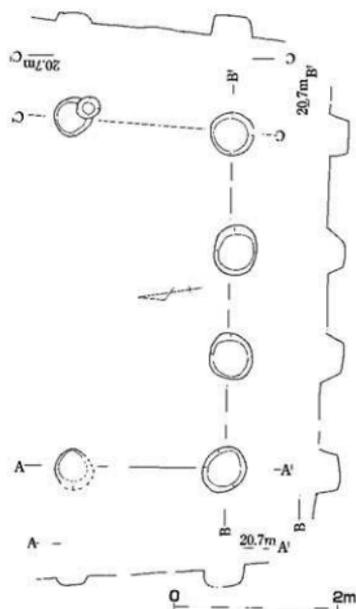
SB-37は3間以上×2間以上の建物となる可能性があり、規模は5.1×4.0m以上となる。柱穴は重複するものと同様な形態・規模を持っている。

遺物(第156図)は須恵器・土師器の細片のみで、図化できたものは少ないが、各柱穴内から出土しており、おおよそ二つの時期に限られている。1はSB-36 P-9出土の須恵器坏片で、大谷編年5期のもと考えられる。2・3は建物を構成できなかった柱穴P-18出土で、2は大谷編年5~6期頃の小型の高坏脚部、3は奈良時代の坏口縁部と考えらる、図示していないが、他にSB-35の柱穴内から大谷編年5期頃の須恵器が、SB-36 P-12土師器の甑底部などが出土している。

これらの建物群の時期は大谷編年5期頃の可能性が高いが、この一帯の表土中の土器には奈良時代の土器も多いことから、この時期の可能性も考慮しておきたい。



第160図 SB-42・43実測図 (1:60)

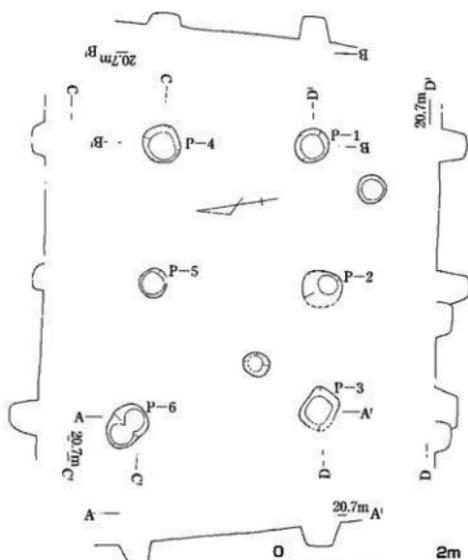


第161図 SB-43実測図 (1:60)

SB-38 (第157図)

この建物は調査区中央の谷部上方に位置し、畑地造成により著しい削平を受けており、柱穴基底部のみが残存していた。柱穴は3本2間分が検出されたのみで、本来の建物の南辺と考えられる。規模は3.9mで、柱間距離は1.95mを測る。柱穴掘り方は径40cm前後を測り、底面レベルはほぼ均一である。遺物は全く出土していない。

時期は全く不明であるが、柱穴形態、周辺部の遺構の様子から古墳時代終末期～奈良時代の可能性を指摘しておきたい。

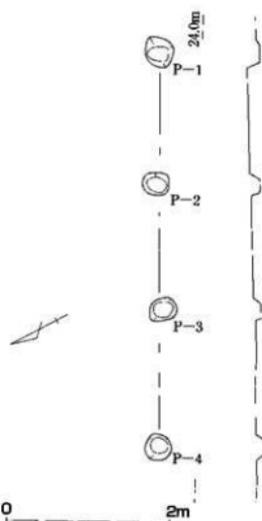


第162図 SB-44実測図 (1:60)

SB-39 (第158図)

調査区東側の谷部東斜面に位置するもので、柱穴の一部のみを検出した。建物は3×2間と推定されるもので、西側の柱穴は流出している。規模は4.2×(3.4)mで、柱間距離は桁行きで平均1.4m、梁行きで1.7m前後を測る。柱穴掘り方は径40～50cmを測り、桁行き中間柱は底面レベルが一段高いものとなっている。遺物は全く出土していないが、谷部包含層を除去中にこの建物下方付近からややまとまった数の土器が出土しており、図示していないが須恵器の時期は大谷福年4期を示している。

本建物は柱穴形態からは古墳時代終末期～奈良時代が、下方出土土器を重視すれば、大谷福年4期となる。さらにこの建物の平面規模・柱穴底面レベルの特徴が大谷4期のSB-07と全く同じことから、ここでは大谷福年4期の可能性が最も高いものとしておく。

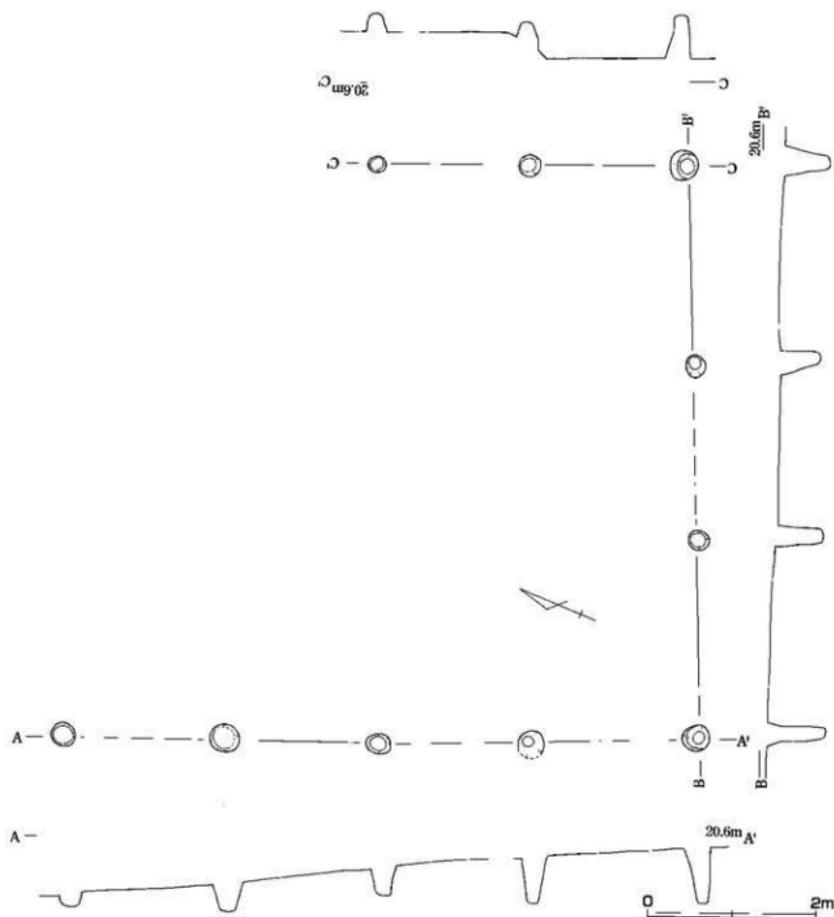


第163図 SB-45実測図 (1:60)

SB-40・41 (第159図)

古墳時代の建物SB-04の南東側で検出されたもので、2間分の柱穴列SB-40と3×2間以上の建物SB-41がある。いずれも全く同質の埋土を持っており、調査時には同時期のものと考えていた。規模はそれぞれ、約2.5m、2.7×1.7m以上を測り、非常に小型の建物と言える。

時期は遺物が全く出土していないため不明であるが、柱穴の規模や、下方に存在するSB-04上層の遺物から、奈良時代の可能性が強いと感じている。



第164図 SB-46実測図 (1:60)

SB-42 (第160図)

調査区東側の平坦部で検出された3×2間と推定される建物で、規模は4.4×3.2mを復元できる。柱穴は円形で径40～60cmを測る。柱穴底面レベルにはややばらつきがある。遺物は出土していない。建物の時期は不明であるが、柱穴の配役・形態から古墳時代終末～奈良時代を考慮しておきたい。

SB-43 (第161図)

SB-42の北東に隣接するもので、3×2間の柱穴配置を持ち、規模は4.1m×3.6mが推定される。柱穴は平面円形で、径50cm前後を測り、底面レベルはほぼ均一なものとなっている。

遺物は出土していないが、SB-42とほぼ同規模であることから古墳時代終末～奈良時代のものとしておきたい。また、前節で紹介した加工段Ⅰがこの建物に付随するものであるとすれば奈良時代の可能性が強くなる。

SB-44 (第162図)

前述したSB-32～34の南側に位置する建物で、2×1間の柱穴配置、3.3×2.1m前後の規模を持つものである。柱穴内の埋土は黒褐色を呈し、周辺に存在する平安期の土坑と近似していたため、調査時はこれと同時期のものと推定していた。柱穴P-2内からは平安時代のものと考えられる坏小片が出土している。焼成は悪く灰色を呈している。

本建物は時期的には平安時代としては間違いのないものと考えているが、柱穴配置が整然としていないため、ここでは建物の可能性があるものとしておきたい。

SB-45 (第163図)

前述した大型建物SB-29の西側に隣接するもので、3間、4.7mを測る柱穴列として残存していた。柱穴は径30cmの小型のもので、SB-29と同様上部は著しい削平を受けている。

時期については、柱穴P-1内から土師器壺細片が出土しているのみで、不明と言わざるを得ないが、柱穴の規模から平安時代のものと考えておきたい。

SB-46 (第164図)

調査区東北端に位置する建物跡で、北側は調査区外にあり、全容は明らかでない。建物は東西3間、南北4間以上の柱穴配置を持ち、規模はそれぞれ、6.9m、7.6m以上を測る大型なものとなる。柱穴掘り方は径が25cm前後を測る小型のもので、ほぼ柱の径に近いものと推定される。柱間距離は東西が2.4・2.1・2.4m、南北が1.8～1.9mを測る。

遺物は出土していないが、重複する奈良時代の建物SB-23に後出する可能性が高い点、柱穴径が小型であることなどから、平安時代のものと考えておきたい。

その他の遺構 (第5図、図版44)

このほか時期不明の溝状遺構SD-03、古道4～6などが存在するが、このうち古道4・5については路面に一部連続ピットが認められたため古代～中世に遡るものと推定している。特に古道4は現在まで利用されていたもので、数回の改修が判明している。

第5章 原ノ前遺跡

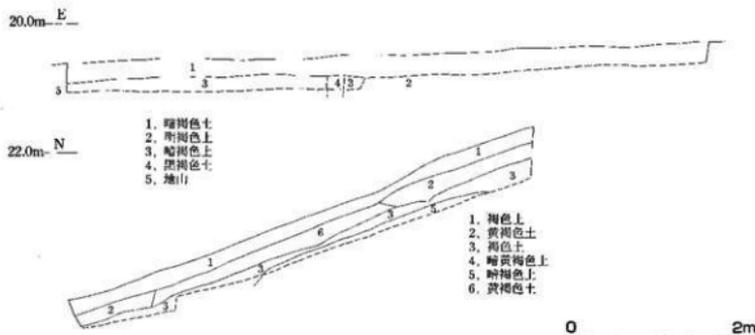
第1節 原ノ前遺跡の概要

原ノ前遺跡は、渋山池古墳群・渋山池遺跡の東に続く、標高約19m～30mの北向き斜面に位置する。調査区東側に南北に続く尾根が延びており、その東側には古墳時代中期の天作遺跡である四ツ廻Ⅱ遺跡がある。遺跡の範囲は北に向かって回り込む尾根の西斜面までだが、比較的緩やかな斜面が続く渋山池遺跡に比べ、急傾斜が続き平坦面は少ない。渋山池遺跡との境は明確ではなく、実体としては一つの遺跡として捉えうるものであるが、渋山池遺跡を北向きの谷地形の範囲とし、それより東側の斜面部分を原ノ前遺跡として便宜的に分けた。渋山池遺跡との境付近は、渋山池遺跡の谷地形の縁辺にあたる緩斜面が続くが、遺跡中程は急斜面になっている。遺跡東側は、遺跡の南側を東西に延びる尾根が北向きに進路を変えており、北西を向く谷地形となる。この谷地形の東側斜面には、上砂崩れの痕跡が随所に見られた。遺跡の北側には北西方向に向かう谷があり、その中央には、溜池と水田が見られる。遺跡の南側は尾根になっており、尾根より南側には、渋山池がある。尾根筋は1～2本の古道が通じている。

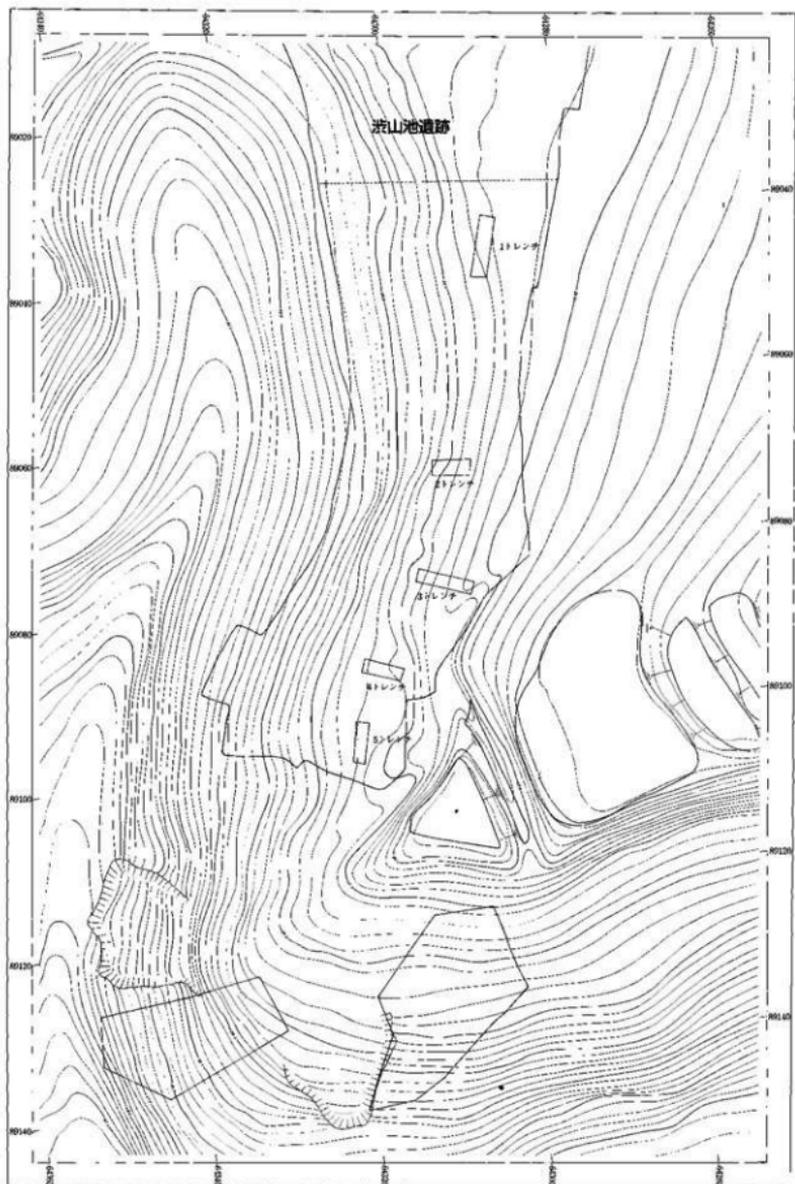
第2節 トレンチ調査と遺構の概要

原ノ前遺跡については、平成4年度にトレンチ調査を実施している。トレンチ調査では5本のトレンチを設定し、その位置は第166図に示すとおりである。

この内、第1トレンチでは堅穴建物跡を検出し、覆上中から弥生土器臺が出土している。第1トレンチで検出した堅穴建物跡はSB-02に当たる。また、第3トレンチからは糸切り底を持つ須恵器坏が、第4トレンチからは、七師器類の他、碧玉・瑪瑙等玉作関係の遺物が出土した。第4トレンチの位置は、本調査のSX-01に近く、古墳時代中期のものを中心に遺物量も豊富である。



第165図 原ノ前遺跡 第1・4トレンチ土層断面図 (1:60)



第166図 原ノ前遺跡トレンチ調査区配置図 (1 : 600)

第165図上段は第1トレンチ南壁の上層断面である。表土を含む暗褐色土が比較的厚く堆積しており、その直下は、明褐色土の地山面にあたる。東側に見られる暗褐色土と黒褐色土は、SB-02の埋土である。第1トレンチを設定した調査区東側は、渋山池遺跡との境にあたり、比較的緩斜面となっており、表土が厚いものの、その下層の埋土は薄く、表上直下が地山面となる範囲が広い。表土は、南側の尾根上が厚く、北側に下がるにつれて薄くなっている。

第165図下段は第4トレンチ東壁の十層断面である。表土を含む褐色土が比較的厚く堆積し、その下層には、黄褐色土が、重層的に見られる。地山面は、暗褐色土としているが、原ノ前遺跡の地山面は、場所によって変化しており、明褐色土・暗褐色土・橙色土が見られる。第4トレンチを設定した調査区東側の北西向き谷地形の内側は、少量の湧水が見られる他、周辺には土砂崩れの痕跡も多く、土層はやや複雑になる。

調査区東側の谷地形になった西向き斜面では、先行調査を行っている。土砂崩れの痕跡等もあり、それらを避けながら、2カ所で約520㎡を掘削したが、小炭窯1基を検出したのみで、遺構・遺物は見られなかった。この小炭窯は調査区内にも点々と見られるものと同様のものではなかった。

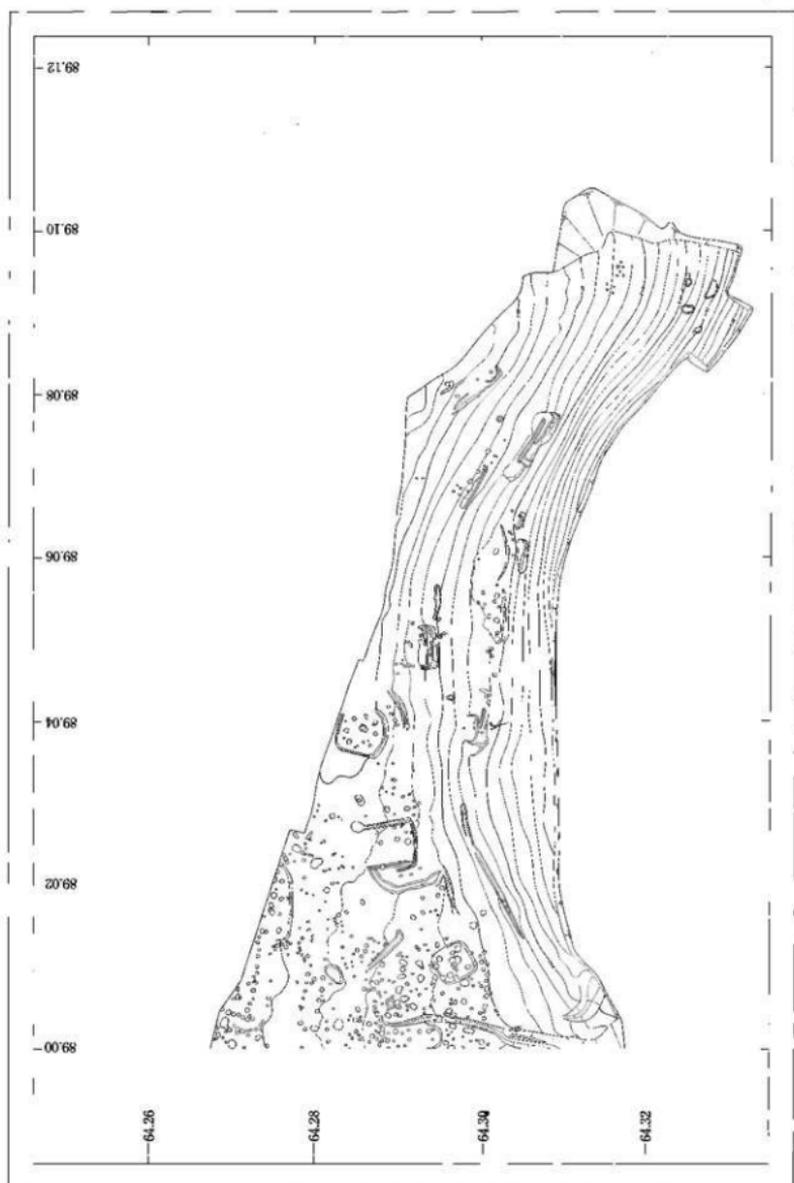
調査の概要

調査は、重機による表土掘削の後、遺構面の検出作業を調査区東側から開始した。調査は当初、遺跡全体を10mグリッドに区分し、南北方向を南からA・B・C、東西方向を東から1・2・3…とし、南東隅を基準にA1グリッド、B1グリッド…と呼んで遺物を取り上げていたが、調査の進展に伴い、遺物の出土状況が比較的まとまってきたことから、その後検出した大半の遺物について、遺跡調査システム“SITE”を使用しての点上げに切り替えた。

A1～B2グリッドの間では、小炭窯と考えられる焼土坑4基とビット10穴（ビット群）を検出した。焼土坑はそれぞれSK-01～04と呼ぶ。C列には明確な遺構を検出し得なかったが、湧水点から延びる谷地形内には、祭祀遺物と思われるものを含む、非常に多くの遺物が見られ、湧水点の東には平坦面も見られたことから祭祀遺構の可能性も推定され、SX-01とした。C列より東側には、住居跡の他、多くの加工段・溝が見られ、ビットも多く検出した。D列では、加工段1・2と焼土坑（SK-05）を検出している。加工段1は、調査区北端で検出した2本の溝を含む加工段とビットで、建物跡の可能性もある。その南側上方で、検出したのが加工段2で、溝と、竈状の遺構を含んでいる。竈状の遺構は埋土が非常に軟らかく新しいものと考えられる。その西側では、溝とそれに平行して並ぶビットを検出し、建物跡（SB-01）と考えた。

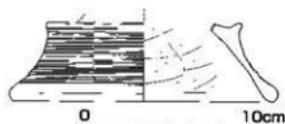
E列南側の標高24～26m付近には、加工段ビットが非常に多く見られた。この付近は、調査区内で最も広い平坦面があり、規模の大きな造成が伺われる。この付近の加工段は南東側から加工段4～8とした。加工段8の下方北側では、建物跡の肩を明確に確認し、SB-03とした。SB-03は、建て替えの痕跡が見られ、上下2層に分かれている。SB-03の東側には小さな溝が見られ、須恵器を含んでいる。建物跡の可能性もあり、SD-01とした。最も西側のF列では、加工段・ビットを非常に多く検出している。南側のものは、小さな加工段が少なくとも3段以上重なっており、残存状況も悪かったことから個々を区別することができず、まとめて加工段3とした。その下方には、小さな土壘（SK-06）が見られる。

調査区北西隅では、竈穴建物跡1棟（SB-02）を検出した。SB-02を検出した位置は、渋



第167圖 原ノ前遺跡地形測量圖 (1:600)

山池遺跡の谷地形の縁辺部にあたり、比較的緩斜面になっている。SB-02の南東側には、SB-02に平行するように溝(SD-02)・ピットが廻っており、SB-02との関係が何われる。



第168図 SB-01出土
弥生土器実測図(1:3)

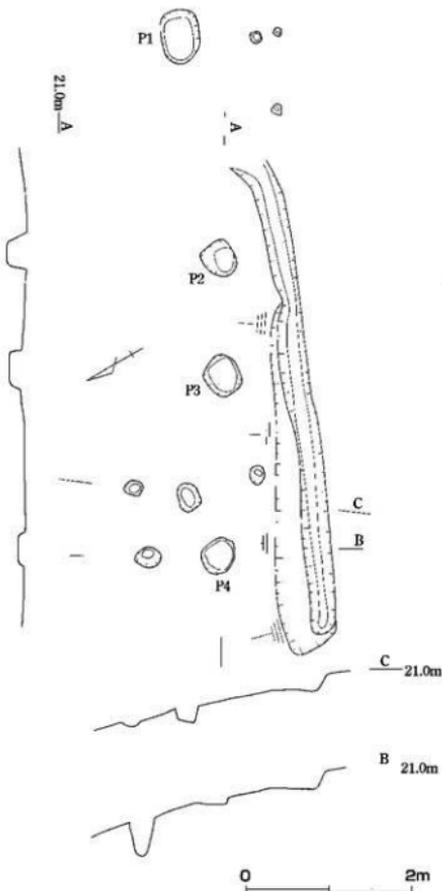
第3節 遺構の概要

SB-01 (第169図)

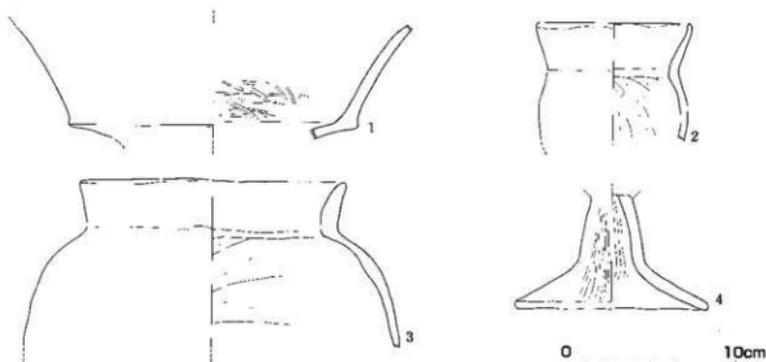
SB-01は、調査区中央で検出した掘立柱建物跡と考えられるものである。溝は、東西方向に延びており、幅約40cm、検出した長さは約6mである。溝の西側は、途切れる様子が見えるが、東側は、溝が開いたまま消失しており、その先に見られるピットの状況から、更に東へ続いていたものと考えられる。この溝の北側に約40cm幅の平坦面がかろうじて残っており、それより下方は流失したものと思われる。

溝の周囲で、ピット7穴と、ピット状の小さな落ち込み4穴を検出している。この内、最も大きなピット3穴(P2~P4)は、完全に溝に平行しており、掘立柱建物跡と考えられる。ピットの間隔は、西側より2.1m、1.3mを測り、不等であるが、ピット径は約40cmと共通している。この内、P2からは、鼓形器台が出土しており、SB01は、弥生時代後期のものと考えられる。

第168図は、P2から出土した鼓形器台の脚台部で、ピット内に半分落ち込むような形で検出した。脚端部は、肥厚して丸くなっており、脚台部外面には櫛による直線文が入る。内面は横方向を中心と



第169図 SB-01実測図(1:60)



第170図 SB-01出土土師器実測図 (1:3)

したヘラケズリが見られる。

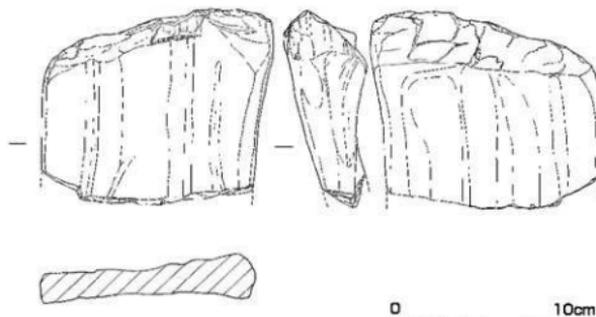
第170図は、SB 01の埋土中から出土した土師器である。これらの土師器は、床面から離れており、上方の加工段2等から転落してきたものと思われる。

170-1は、高坏の坏部と考えられる。外面は磨滅しており、調整は不明であるが、坏部中程に強い稜を持つ。内面は、横～斜め方向に細かいヘラミガキを施している。

170-2は、小型の甕である。胴部に大きな膨らみは見られず、底部は丸底を呈するものと思われる。頸部から口縁部にかけては、長く、直線的に延びるが、口縁端部は、内側に折れ曲がる。口縁部を内外面ともにヨコナデし、胴部の外面はナデ、内面は縦方向に強いヘラケズリを残す。

170-3は、甕である。胴部が丸みを持ち、肩部が強く張るものである。厚く作られた口縁部は、わずかに外傾して延び、端部は尖り気味にする。内面は頸部にわずかに面を持ち、頸部以下は横方向のヘラケズリである。外面の調整は、磨滅のため見えにくいですが、頸部にはハケメの痕跡をわずかに残している。

170-4は、高坏の脚部である。脚部上面は坏部が剥離した痕跡が残る。筒部は、坏部との接合面近くで、わずかに窄まるが、全体に直線的で、下方で折れ曲がり、裾が大きく広がる。脚端部は丸く納められる。外面は縦

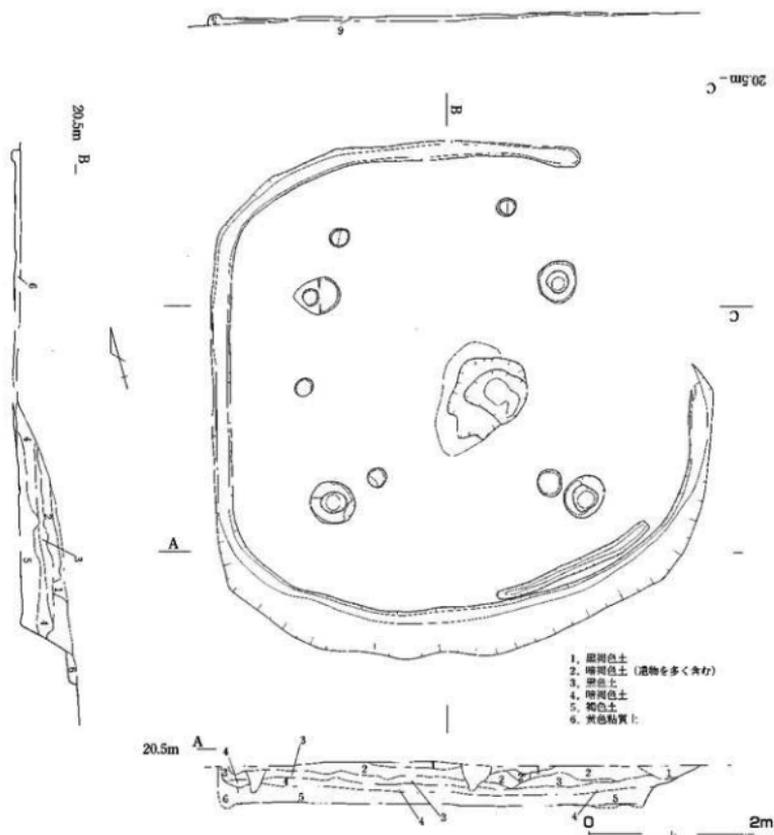


第171図 SB-01出土石製品実測図 (1:3)

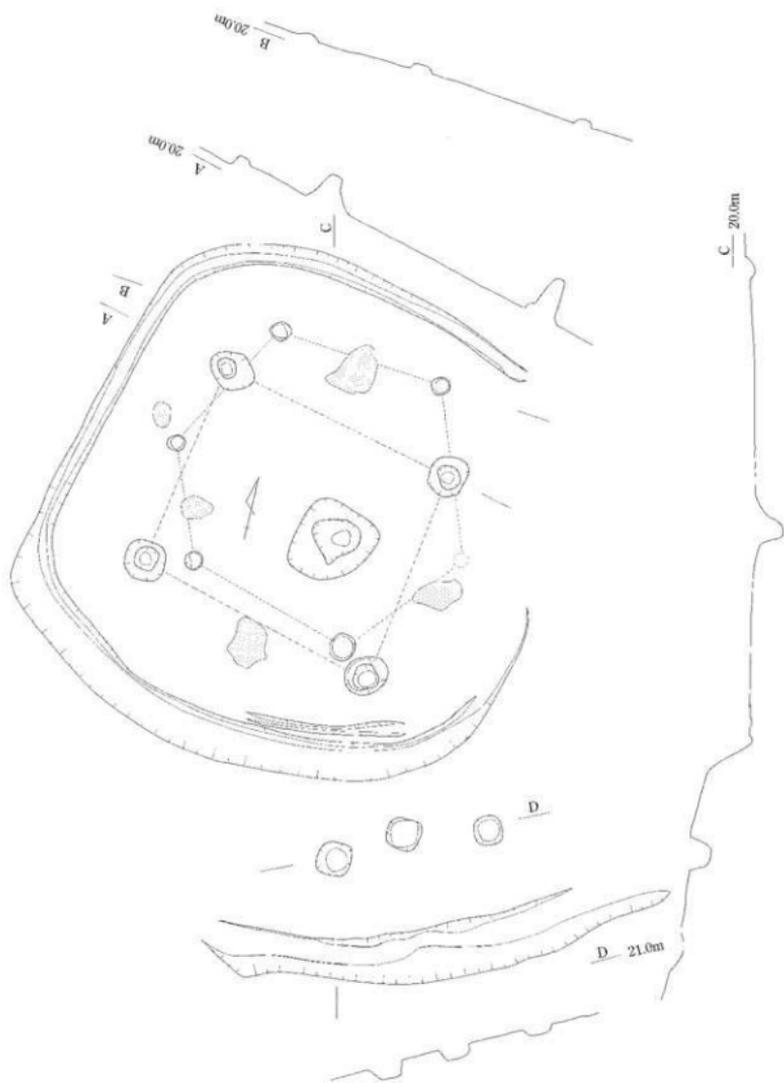
方向のハケメを明瞭に残している。筒部内面には絞り目が残っている。裾部は、荒くナデ調整するが、筒部近くには、絞り目の痕跡を残している。これらの土師器類は、古墳時代中期のものと考えられる。

第171図は、結晶片岩としては大きな石材を使用した、砥石である。一端を欠くが、少なくとも4面を研磨に使用している。この内、2面については、縦方向に溝が見られ、筋砥石として使用されているように見え、注目される。筋砥石として使用され、縦方向の溝として残る部分は、両面合わせ8条になり、側部の1面もわずかに窪んでいることから、同様の用途で使用された可能性が考えられる。筋の部分、砂岩製のものに比べ浅く、幅広い印象があるが、砂岩に比べ石材が硬質のためであろうか。筋の見えない2側面も研磨痕が残る平砥石として使用されているようである。

筋の形状が砂岩製の筋砥石と異なることから、当初、平砥石として使用され、使用による過程で、徐々に筋が形成された結果、筋砥石状に溝が付いた可能性も考えられ、筋砥石の名称を使用して良いかは今後の問題としたい。

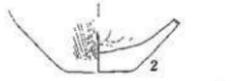


第172図 SB-02実測図 (1:60)



第173图 SB-02·SD-02实测图(1:60)

この砥石は、SB-01の溝の肩部から出土しており、上方より転落してきたものと思われる。SB-01からは、他には玉作関係遺物は出土していない。



0 10cm

SB-02 (第172図)

SB-02は、調査区北西隅で検出した竪穴建物跡で、トレンチ調査の第1トレンチはこの建物跡にあたったものと思われる。SB-02付近は、南から続く斜面が終わる位置にあたり、上方の別の遺構から転落してきたと思われる遺物が、表上直下から非常に多く見られた。上層断面からは、上層に別の遺構があった可能性も考えられるが、検出できなかった。

第174図 SB-02出土
弥生土器実測図 (1:3)

検出した遺構は、北東隅を欠くが、ほぼ一周した壁体溝、その内側の短い溝、ピット9穴、中央土坑等である。ピットは、大きな4穴が等間隔に並び、これが、中央土坑と、壁体溝を伴う、4本柱の竪穴建物と考えられる。4本の柱穴は全て2段に掘られており、中央土坑も何段かの礎を見せる。ピットの間の5カ所には、焼土(縄掛け部分)が見られる。

小さいピット5穴と短い溝は、いずれも非常に浅い。これは、この面よりも上層に建物跡があり、建て替えによって削平されたものと考えられ、点線で図示した位置にもう1穴ピットがあり、6本柱の竪穴建物跡があったものと考えられる。

建て替え後の4本柱の竪穴建物跡床面からは、174-1が出土しており、SB-02の4本柱の竪穴建物跡は、弥生時代後期のものと考えられる。



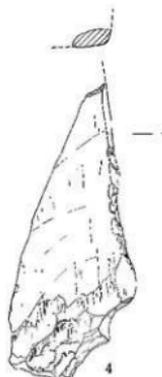
1



2



3



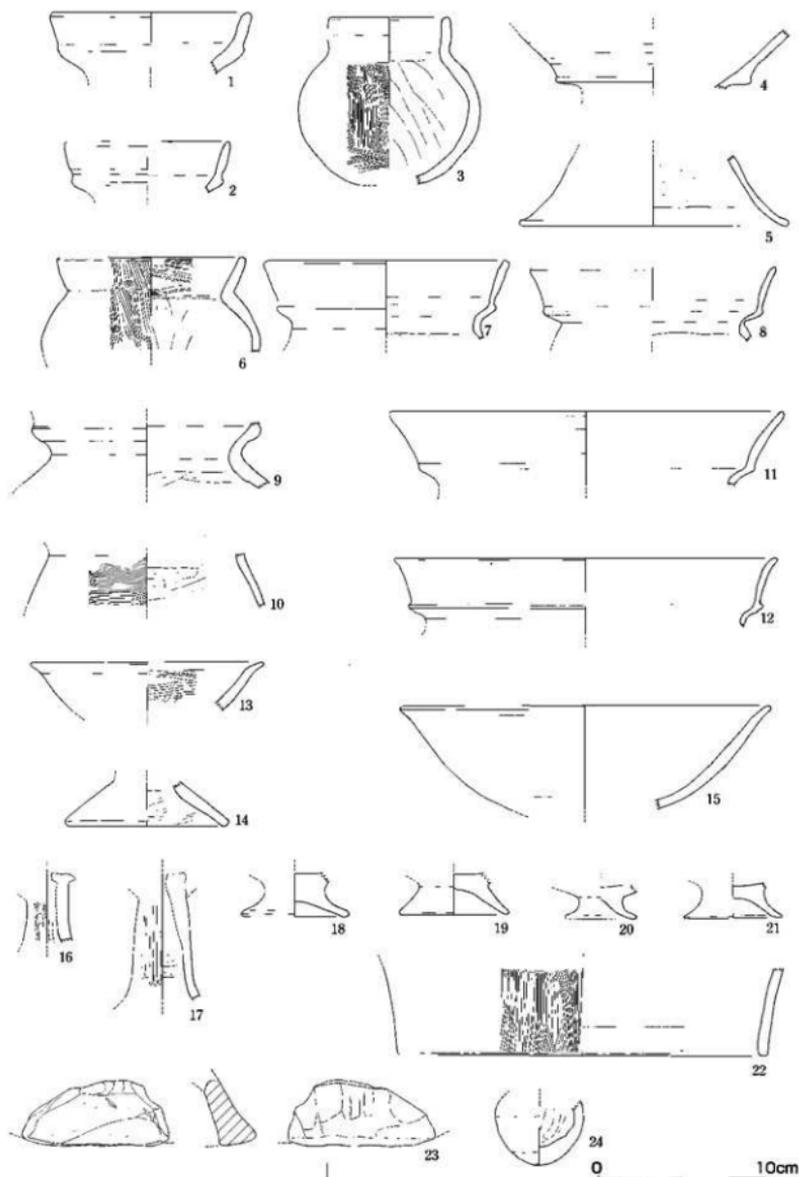
4

0 4cm

SB-02の南には、溝(SD-03)とピット3穴が見られる。これらは、レベルが非常に高く、SB-02に伴うものとは思えない。SB-02の上層に、更にもう1カ所の遺構が存在したのと考えられる。

174-1は、弥生土器である。複合口縁を持ち、内面にはケズリが見える。174-2は、SB-02の北側で、表上中から出土したもので、

第175図 SB-02出土土製実測図 (2:3)



第176图 SB-02埋土中出土土器実測图 (1:3)

弥生土器の底部である。外面には、縦方向のミガキが見られる。

第175図は玉作関係遺物である。SB-02に玉作を行った痕跡は見られず、別の遺構から転落してきたものと考えられ、上層の黒褐色土層から出土している。175-1・2は、碧玉製の勾玉木製品である。半月形に調整した石材の両面に研磨が行われている。

175-3・4は、結晶片岩の内磨砥石である。175-3は、石材に赤みのある部分が見られ、紅麻石と呼ばれるものである。両者とも側面だけでなく、両面も研磨痕が見られ、平砥石としての機能も見られる。これらの玉作関係遺物は、第176図の土師器類と同時に出土しており、上方の加工段3か、SD-02に伴うものであろう。

第176図は、SB-02の上層から出土した土師器である。これらの土師器類は比較的まとまって出土していることから、SD-02に伴う可能性が高いが、後述する加工段3から出土する土器相と似ており、両者の可能性が考えられる。

176-1・2は、壺の口縁部である。口縁部は退化した複合口縁になっており、両面をヨコナデする。古墳時代中期のものと考えられる。176-3は、小型の壺である。頸部がわずかにくびれ、口縁部は直口する。体部外面にはハケメを明瞭に残す。

176-4・5は、鼓形器台である。外面をヨコナデし、直線は見えない。

176-6は、小型の甕である。外面に縦方向のハケメを明瞭に残し、口縁部内面にも横方向のハケメが見られる。176-7~12は、複合口縁を持つと考えられる甕である。口縁部を残すものは、外面の調整はいずれもヨコナデである。176-10は、頸部下方に櫛による波状文を持つ。これらは、古墳時代前期のものと考えられる。

176-13~17は、高坏である。176-13は小型のもので、坏部内面に横方向のハケメを残す。176-15は、坏部の破片で、坏部中程の稜はほとんど無くなる。176-16・17は、脚部で、外面に縦方向のハケメが見られる。176-17脚部が長い。

176-18~21は、低脚坏の脚部である。脚内面にケズリを残すものは無い。古墳時代前期のものと考えられる。

176-22は、外面にハケメを残す基部の破片であるが、器種は不明である。非常に薄く作られており、内面にケズリは見えない。甗であろうか。

176-23も基部の小片で、厚手に作られ、内面にケズリを残す。強く内傾しており、器種は不明である。甗であろうか。

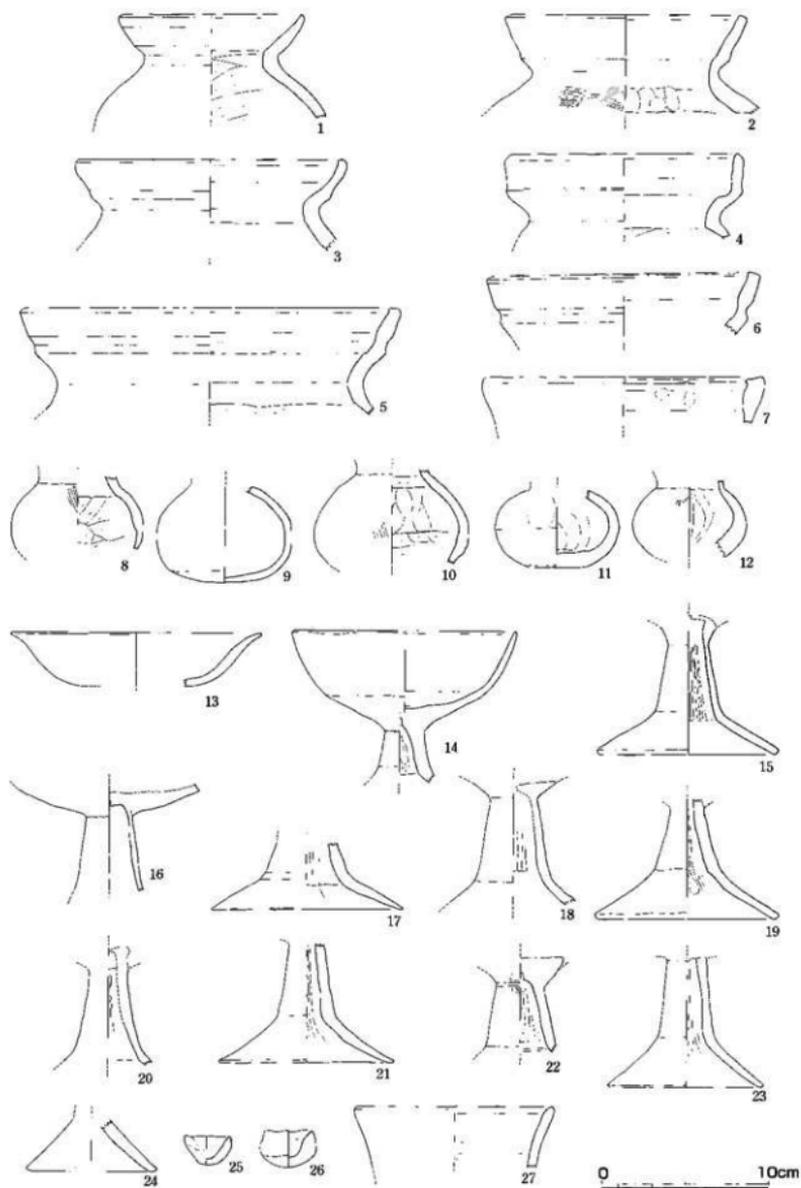
176-24ミニチュアの壺である。手づくねで成形され、内面には掻き取るような強いナデを残している。

SX-01 (第177図)

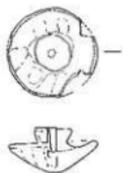
SX-01は、調査区東の谷地形内にある湧水地とその東にあるテラスである。付近は、地山に含まれる石が露出し、水の流れる部分では、拳大から人頭大の石が散乱している。テラスは幅約2m、検山長約7mで、調査区外側まで延びているが、南側の河の状況から、この付近で終わるものと思われる。テラス面には、ビット等は一切見られなかったが、湧水点周辺を中心に多くの遺物が見られた。これらの遺物の中には、ミニチュア土器などが含まれており、祭祀遺構を思わせるものである。



第177图 SX-01奥洲图 (1:60)



第178图 SX-01出土土器实测图(1:3)



0 5cm

第179図 SX-01出土
不明土製品実測図(1:3)

178-1~7は上師器整である。退化した複合口縁を持つものが多い。

178-1は、単純口縁を持つもので、口縁端部が内側に尖る。178-2は、外面にハケメを残している。

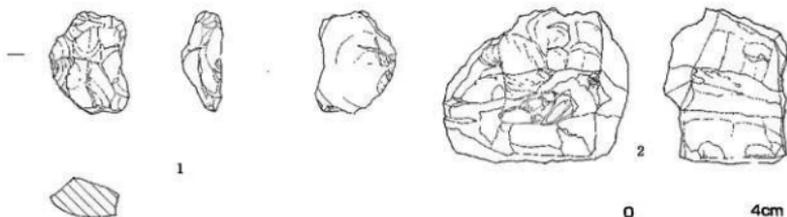
178-8~12は、小型丸底壺である。178-9は、内面まで丁寧に調整されるが、多くは、内面にケズリか強いナデによる成形痕を残す。178-8・10は、外面にハケメを残す。

178-13~24は、高坏である。坏部の残るものはいずれも体部中程の稜を持たないもので、丸みを持つ。脚部は比較的高いものが多い。

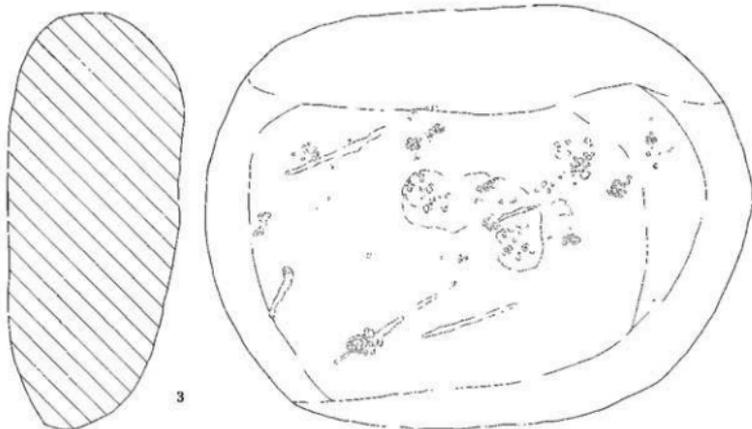
178-25・26は、ミニチュアの鉢である。手づくね成形される。

178-27は、須恵器である。比較的器壁が厚くわずかに外傾する。壺の口縁部であろうか。

第179図は、独楽形土製品とでも呼ぶべきものであろうか。下面を球面にした円盤状の体部に小さなつまみ状のものが付き、独楽の様な形状を呈する。つまみ状になった部分の上面からは、直径3mm程の穴が開けられており、つまみ状の部分を通すが本体部分には達していない。本体とは別作りで、接合されており、接合部はわずかに窪む。本体部分の上面は窪んでおり、強い指押さえによって



0 4cm



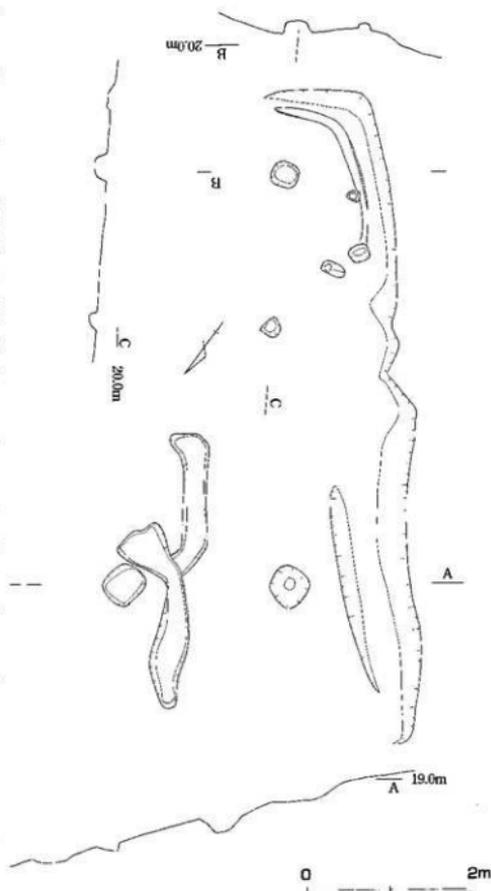
0 10cm

第180図 SX-01出土石製品実測図(1・2は2:3、3は1:3)

指頭圧痕が残る。本体下面は、一見ヘラミガキが施されたかのように滑らかで、何らかの用途での使用による研磨が考えられる。この土製品の用途としては、紡錘車か、土器成形用具の当て具が考えられる。上面に見られる穿孔が貫通していないことから、紡錘車としては使いにくいと思われるが、当て具としては、やや小さく、上面の穿孔の意味が不明である。酸化炎焼成され、赤褐色を呈し、硬い。

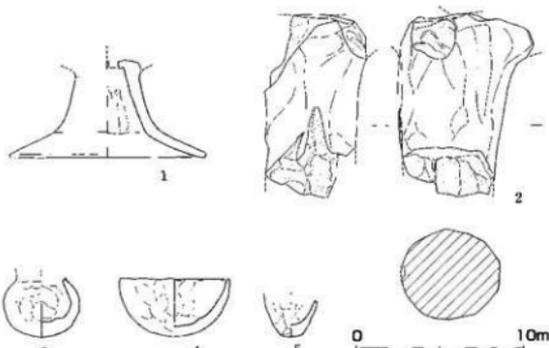
第180図に図示したものはSX-01で出土した石製品である。180-1は、碧玉製の勾玉未製品である。半月形からややC字形に成形されるが研磨痕は、全く見られない。石材には白色を呈する部分が非常に多い。180-2は、瑪瑙原石である。3面に割られた形跡があるが、細かい調整は見られない。石材中央には穴が見られる。穴の中心には、瑪瑙以外の石が取り込まれており、その周りが空洞となっている。空洞の周囲にはほとんど透明な石英が3mm程の幅で見られ、その周囲から表皮までの部分が褐色を呈する瑪瑙になっている。このため、大きな薄片が取り難かったのではないだろうか。180-1・2は、SX-01の遺物包含層である黒色粘質土の上面から出土したもので、SX-01に直接伴うものではない。また、SX-01周辺の黒色粘質土中からは、碧玉のチップが少量見られ、付近（加工段2?）で、玉作が行われていたようである。

180-3は、石皿である。原石はやや扁平な角の丸い石で、不純物の非常に多い砂岩を使用している。石皿としての使用面は、ほぼ全面であるが、扁平になった2面とも、使用頻度は少なかったようで、削痕は見られず、打痕も少ない。他の面は、わずかに打痕が見られる程度である。斜め方向に見える溝状に筋は、新しい傷である。180-3は、SX-01のテラスのやや下方の地山面直上から出土しており、SX-01に直接伴うものとは思えない。テラス上方に見られるピット群との関係が考えられる。



第181図 加工段1実測図(1:60)

加工段1(第181図)

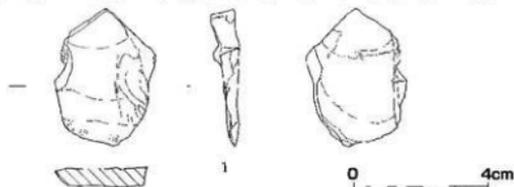


第182図 加工段1付近出土土器実測図(1:3)

溝になった部分の底面の幅は約15cm、深さは非常に浅く、最も深い場所でも約5cmであった。山側の肩は、中程で、大きく蛇行した場所が見られ、調査当初は、2カ所の別の加工段と考えていたが、湧水による流失であろう。加工段の内側には、ビット状の落ち込みが6カ所で見られるが、いずれも非常に浅く、並び方も不自然で、建物跡は確認できない。ビットの直径は、広いもので約50cm、小さいものでは約10cmしかない。深さはいずれも15cm程で、上面はかなり流失しているものと思われる。出土した遺物は少量で、いずれも溝中か、山側の肩の下方から出土している。

加工段の下方に見える交差した溝は、湧水によるものと思われ、きわめて浅く、肩や、切り合い関係が曖昧になっている。この付近からは遺物は出土していない。

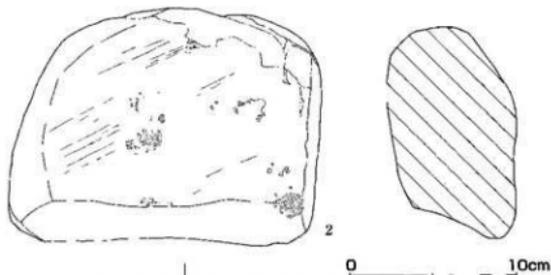
加工段1は、調査区北隅で検出したものであるが、調査区北側は、北東方向に向けて、大きく傾斜しており、その下方には、溜池のある深い谷がある。加工段1と同じレベルには、傾斜が緩やかになった部分が、更に北西方向



に続いているが、ビット状の落ち込み2穴を検出したのみで、明確な遺構・遺物は検出していない。

第182図は、加工段1から出土した土器類であるが、182-1を除き、加工段1に確実に伴うとは言い難い。

182-1は、高坏の脚部である。復元推定底径は約12cmあるが、筒部が大きく広がり、高さは低い。外面は磨滅が著しく、調整不明であるが、筒部内



第183図 加工段1付近出土石製品実測図(1は2:3、2は1:3)

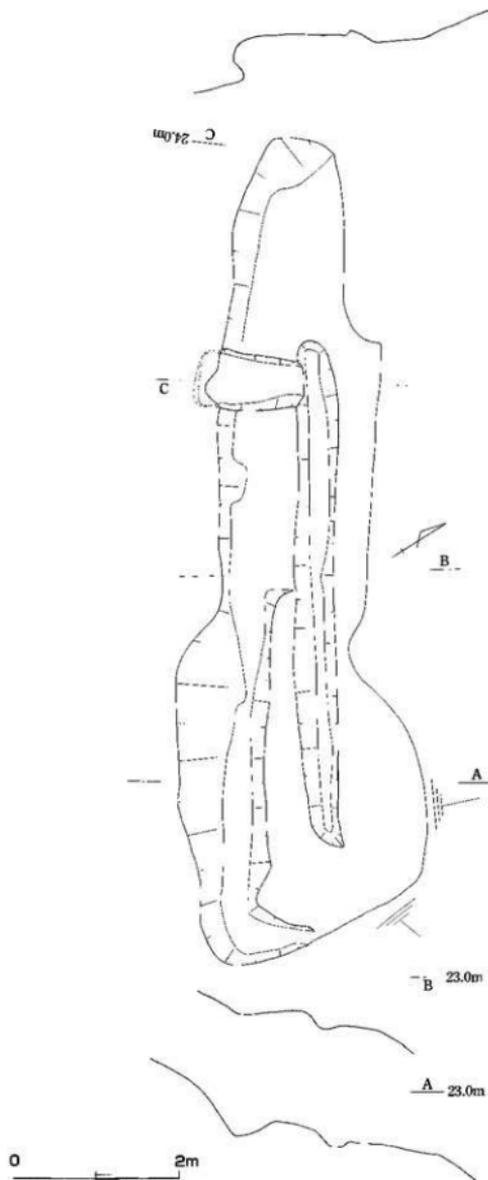
面には絞り目を残している。裾部の内面はナデであろうか。淡橙褐色を呈し、砂粒を多く含んでいる。古墳時代中期のものと考えられる。

182-2は、土製支脚の頭部の破片である。脚端部と突起の全てを欠く。後方の1本の突起は水平方向に伸びており、鏡形になるものであろうか。

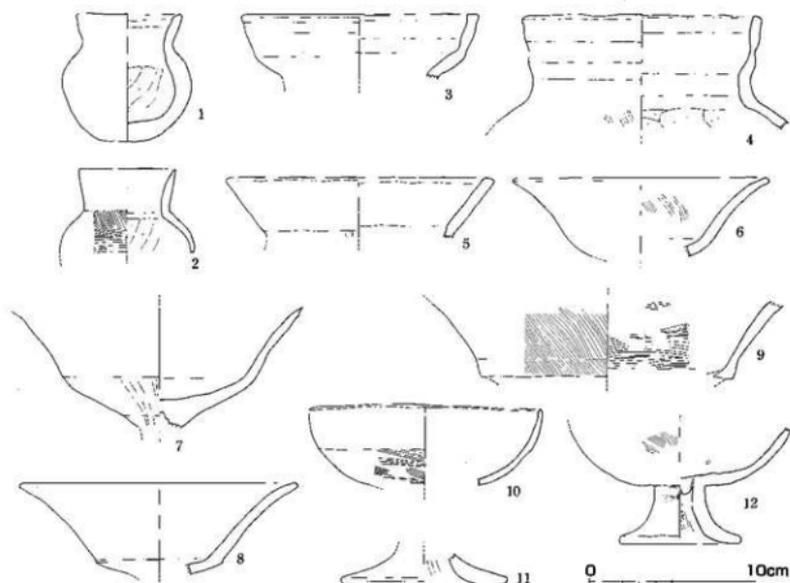
182-3~5は、ミニチュア土器で、182-4・5は鉢を模している。いずれも手ずくねで指頭止痕を残す。加工段1に伴うものとは思えず、SX-01のものか。

第183図は、加工段1で出土した石製品である。183-1は、碧玉の剥片である。厚さ4~6mmの板状に剥離されたもので、頂部・側部にわずかに加工痕が見られるが、大剥離面・主要剥離面の加工は行われておらず、研磨や成形は一切見られない。石材は、全体に濃い緑色を呈すが、白色になった部分が脈状に入っており、あまり上質なものとは言えない。加工段1では他に、玉作関係遺物は検出してない。

183-2は石皿である。平面台形に近い形状で、厚さは約8cmあり、両面の広さに対して、厚さがやや厚い印象がある。角の部分を中心に打痕が見られるが、面の部分の打痕は意外に少ない。面の部分には斜め方向にやや深い線が見え、擦痕と思われる。石材は砂岩質で、SX-01で出土した180-3に比べると格段に不純物が少ない。



第184図 加工段2実測図(1:60)



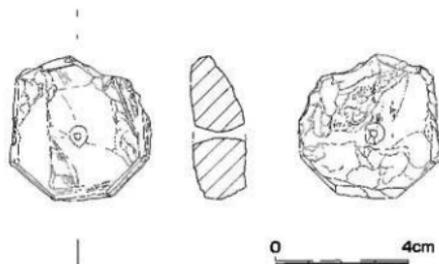
第185図 加工段2出土土師器実測図(1:3)

加工段2 (第184図)

加工段2は加工段1の真南、標高約23mの位置にある削平面と溝である。

加工段は幅約4.6m、奥行き約1.2mである。加工段中央に長さ約3m、幅約20cmの溝があり、その溝に続いて加工段の壁を削り貫くように、竈状の遺構が掘られている。竈状になった部分の内側は赤く焼けており、長時間にわたって火を受けている事が解る。この竈状遺構と溝は、埋土が非常に軟らかく、後世に掘られたことは確実である。溝の機能が不明であるが、竈状遺構は小炭窯と考えられる。

加工段の壁面直下には溝があったものと思われ、東側には幅約20cmの溝がわずかに残っており、小炭窯によって削平されたものと思われる。加工段からはピットは検出できなかったが、土師器を中心とした遺物が多く出土しており、古墳時代中期のものと思われる。



第186図 加工段2出土石製品実測図(2:3)

第185図には、加工段2から出土した土師器を図示している。185-1・2は、小型丸底壺である。頸部から口縁部にかけては直口し、内面はヘラで掻き取っている。185-2は、外面にハケメを残す。

185-3・4は、甕である。複合口縁が退化した口縁部を持ち、口縁部上面に面を持つ。185-5も同様のものだが、口縁部が大きく外傾する。185-3は、外面に黒

変が見られる。

185-6~12は、高坏である。この内、185-6~9は、口縁端部が外反し、坏部中程に稜を持つものである。磨滅しているものが多く、調整は不明な点が多いが、185-6は、内面にわずかにハケメを残す。185-7は、稜より下位に縦方向のヘラミガキが見える。185-9は、内外面に、非常に明瞭なハケメを残している。坏部中程の稜も最も明瞭で、大きい。

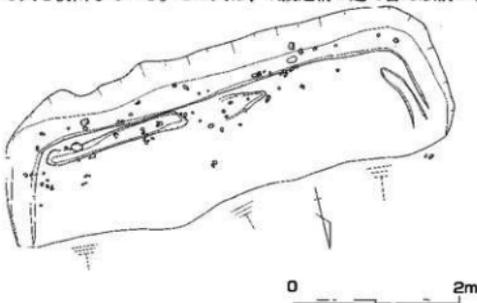
185-10・12は、坏部が丸く内湾する高坏である。口縁端部は丸く納め、口縁部よりやや下にわずかに稜を持つ。内面は丁寧なナデ、外面にはハケメを残す。185-12は、脚部も緩やかに外反し、稜を持たない。筒部外面にわずかにハケメを残す。坏部との接合により、脚内に充填した粘土が肥厚している。全面が磨滅しており、調整は不明である。淡橙色を呈し、軟質である。185-11は、脚端部の小片である。比較的小型で、やや厚手である。端部よりも内側に接地点があり、接地点付近が最も厚い。これらの土師器はいずれも古墳時代中期新相のもので、須恵器出現の直前のもと思われる。

第186図は、有孔円盤の未製品と考えられるものである。厚さ1.5cm、直径4.5cm前後の石材の周囲を六から八角形に、筋切りし、両面から穿孔されるものがある。両面にわずかに研磨痕が見られる。淡緑色を呈する石材で、碧玉とは異なる。滑石であろうか。第185図の土師器に伴うと思われる他、SB-01・SX-01等で見られる土作関係遺物も加工段2に伴うものと思われる。加工段2には、後世に小炭窯が構築されており、変更が著しく、ここでの遺物は、広範囲に流失しているものと思われる。

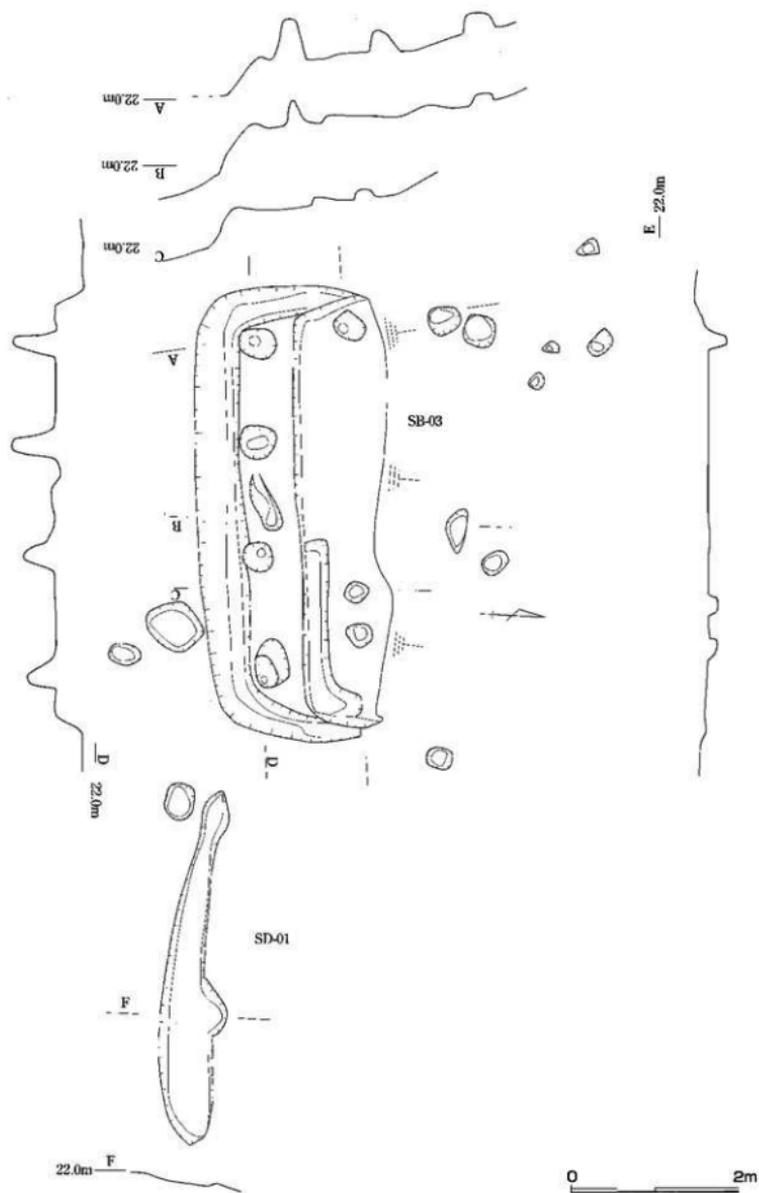
SB-03・SD-01 (第187・188図)

SB-03は、調査区西側の標高約21m付近で検出した加工段で、掘立柱建物跡と考えられる。遺構面では、少なくとも上下2面が存在するほか、上段遺構面は1回の建て替えを行っているようである。上段は、幅約5m、奥行き約2mを検出し、側壁から奥壁に沿って幅約20cmの溝が廻っている。溝の深さは3cm程で、残存状況は悪いが、ピット内を中心に多くの土器片が出土している。溝に平行して4穴のピットを検出した。ピットは直径40~60cm、深さ30~60cmで、約1.3m間隔で東西方向に一直線に並んでいる。加工段より北側は大きく傾斜しており、南北方向に対応するピットは、検出できなかった。また、溝で囲まれた内側にも、もう1層溝が在ったらしく、所々で溝状の線を確認している(第187図)。大半が削平されているが、建て替えにより拡張されたものと考えられる。2・3番面のピットの間には斜め方向に落ちる穴を検出している。この穴は、上段遺構の建て替え以前の、内側の溝と同時に検出されており、建て替え以前の溝に伴うものと考えられる。この穴の機能は不明である。上段遺構面の埋土からは、須恵器坏が出土しており、6世紀後半のものと考えられる。

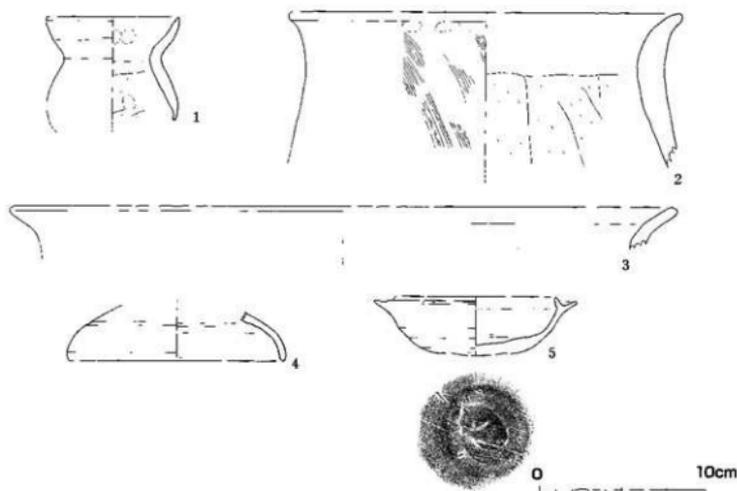
下段遺構面は、上段より約60cm北側にずれて検出した。検出したのは加工段のみで、幅約5m、奥行き



第187図 SB-03遺物出土状況(1:60)



第188图 SB-03·SD-01实测图(1:60)

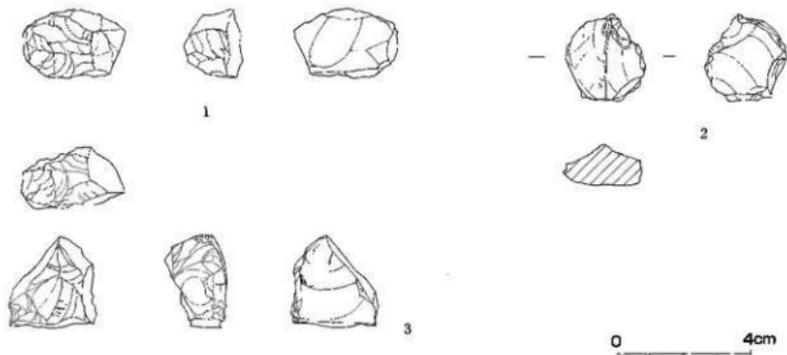


第189図 SB-03出土遺物実測図(1:3)

約90cmの平坦面に、一部で、溝が残っている。溝は、長さ約2mで、加工段の南側から東側にかけてL字形に残っている。幅約30cm、深さ約3cmで、削平が著しくそれ以上の検出はできなかった。南壁と平行に3穴のビットを検出しているが、いずれも浅く、間隔も不等である。

加工段より北側は大きく傾斜しており、この部分は、加工段造成時に、その土を盛って平坦面を広げたものと考えられるが、全て流失している。この部分は、ビット状の落ち込みを多数検出しており、何穴かは上段遺構面のビットと深さの一致するものも見られるが、その関係は不明である。

SB-03の東側には、浅い溝(SD-01)が見られる。検出した長さは約4mあるが、山側の片のみ明確に検出しており、深さ2~3cmの非常に浅いもので、谷間の両は、不明瞭なまま消失し



第190図 SB-03出土石製品実測図(2:3)



第191図 SD-01出土須恵器実測図
(1:3)

ている。溝状に検出したが、加工段の屑であった可能性もある。溝内から須恵器環(第191図)が出土しており、建物が建っていたものと思われるが、大半が流失しており、周囲にビット等は見えない。

SB-03・SD-01の上側にも3穴のビット状の落ち込みが見られ、いずれも各壁はしっかりしており、深さも30cm以上あったが、それぞれの性格は不明である。

第189図は、SB-03から出土した土器である。SB-03上段遺構の溝内からは、土器片が多く出土しているが、小片がほとんどで、接合できないものが多かった。

189-1は、小型丸底壺である。口縁部がわずかに内湾し、体部はやや下膨れ気味で、最大径が下位にある。口縁部はヨコナデで調整するが、内面にはわずかに指頭圧痕を残している。体部外面はナデており、内面にはケズリが見える。器壁はやや薄い。SB-03の加工段先端から出土したもので、下段遺構に伴う可能性が高い。

189-2は、壺である。器壁が非常に厚く、口縁部がわずかに外反し、頸部から口縁部の間が短い。口縁部下面にわずかに稜を持つ。頸部以下の内面は縦方向にケズリが入る。頸部から体部の外面には斜め方向にハケメを残す。

189-3は、甗であろうか、口縁部の小片のため、口径は実測図よりも小さい可能性が高い。頸部から口縁部は強く外反する。内外面ともにヨコナデで、外面にスガが付着しており、内面の器壁は荒れている。SB-03の埋土から出土しているが、上方から転落してきたものであろう。

189-4・5は、須恵器環である。189-4は蓋で、全面がナデられており、ケズリは見えない。体部中程の稜は見られず、沈胴状にわずかに窪んで表現される。189-5は坏身で、大きく内傾する低いカエリを持ち、ケズリは見えない。底面にヘラ状工具による傷が見える。189-3と共にSB-03上段遺構に伴うものと思われる。

第190図に図示したものはSB-03から出土した玉作関係遺物であるが、いずれも出土位置が高く、上方より転落してきたものと思われ、SB-03には伴わない。

190-1は、瑪瑙製の石核である。荒割り段階で、細かい調整は無い。

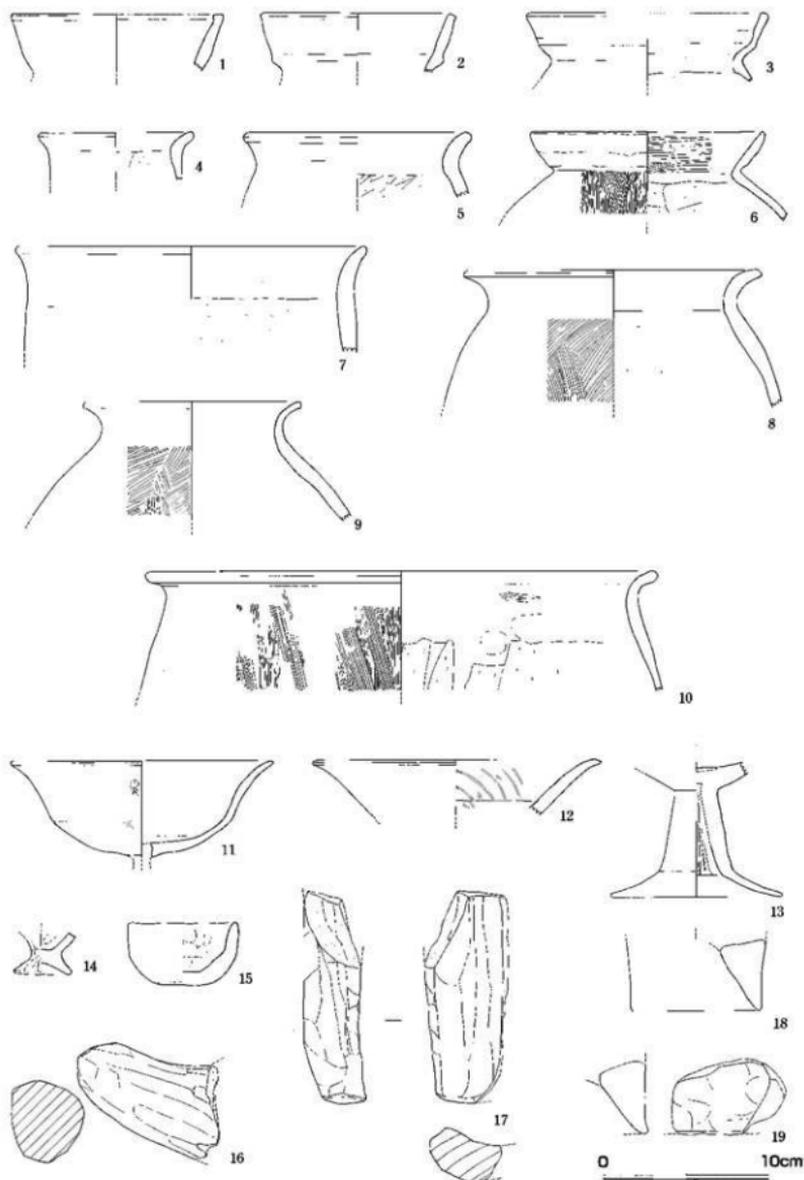
190-2は、碧玉製の剥片である。周囲には丸く成形しようとしているような剝離が見られる。研磨痕は見られない。

190-3も碧玉製の剥片である。荒割り後の石材の周囲を落としている段階のものと考えられ、三角形に近い形状に加工されている。研磨痕は見えない。

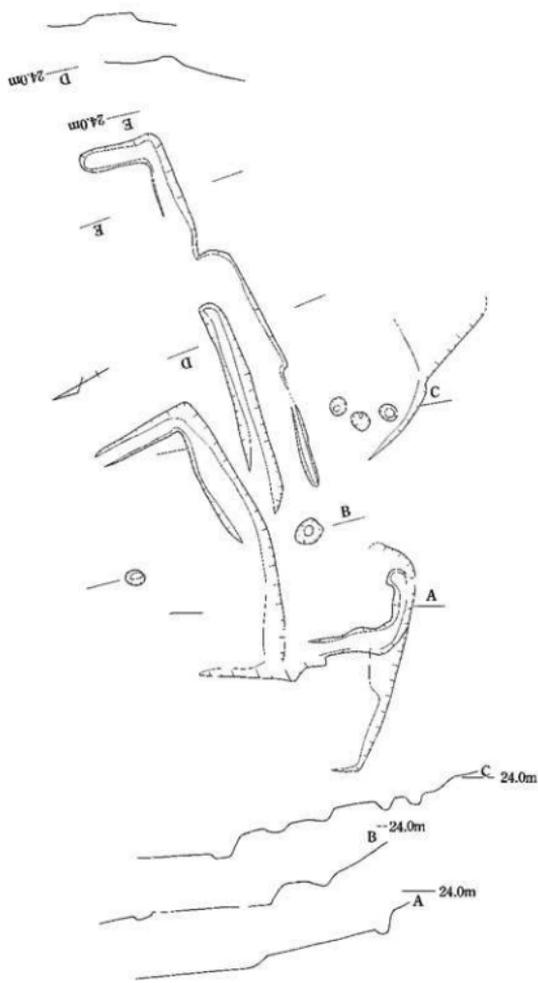
第191図は、SD-01から出土した須恵器環である。わずかに外反するやや高いカエリを持ち、口縁部はほぼ水平に延びる。体部は大きく外傾しており、器高は比較的低いものと思われる。全面回転ナデ調整され、ケズリは見えない。6世紀代のものと考えられる。

加工段3(第192図)

加工段3は調査区西端の、SB-02の上方、標高約23m付近に位置する。小さな加工段と溝が複雑に切り合っており、何段あるかは把握し得ない。全体としては、幅約8m、奥行き約4mの範囲で、

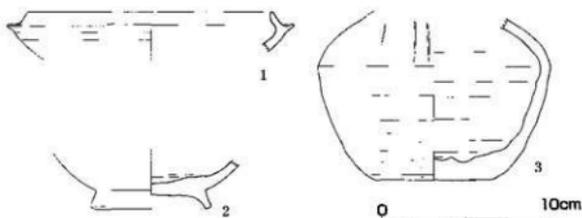


第193圖 加工段3出土土師器実測圖(1:3)



第192圖 加工段3寒測圖 (1 : 60)

L字形の溝が、少なくとも4本が見られる。溝は、幅15~30cmで、深さはいずれも非常に浅い。各溝は微妙に主軸を変えており、少なくとも3回以上の作り替えがあったものと思われる。ピット状の



第194図 加工段3出土須恵器実測図(1:3)

落ち込みが、5カ所で検出されているが、いずれも浅いもので、溝や加工段との関係は不明である。遺物が非常に多かったことから小加工段の内の何段かは建物が建っていたものと考えられる。加工段3から西側の淡山池遺跡では、同じレベルに東西方向に古道が検出されており、この加工段に通じるものと思われる。

加工段3の埋土からは、非常に多くの土器片が出土している。

第193図は加工段3から出土した土師器類である。

193-1~10は甕である。193-1~3は、退化した複合口縁を持つ。193-4は、小型のものである。器壁が厚く、口縁部は強く外反する。193-6は、口縁部が大きく開くものである。口縁部内面に横方向のハケメを残している。193-9は、頸部が窄まり、胴部が大きく膨らむものである。頸部以下の外面にはハケメを多く残している。

193-11~13は、高坏である。坏部中程の稜は不明瞭で、口縁端部は外反する。193-11は、坏部外面にわずかにハケメを残す。193-12は、坏部内面にハケメの後、荒いナデを施す。193-13は、脚部である。筒部は直線的で、脚端部は器壁が薄い。外面はナデである。

193-14・15は、ミニチュア土器である。193-14は低脚坏を、193-15は鉢を模したものである。いずれも手づくねで成形される。

193-16は、甕の取手である。193-17は、甕と考えられるものである。甕の焚き口の左鱗であろう。

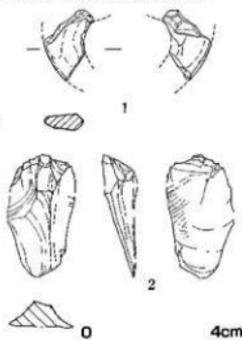
193-18・19は、十裂支脚か竈の脚端部と思われる。いずれも磨滅が著しく詳細は不明である。

第194図に図示したものは、加工段3から出土した須恵器である。

194-1は、坏である。大きく内傾した比較的高いカエリを持ち、口縁端部は短く細い。調整はナデである。

194-2は、高台を持つ坏である。高台は薄く作られており、比較的高い。外側に張り出すように斜めに取り付けられる。体部は丸みを持ち、緩やかに内湾しながら上方へ延びる。体部の器壁は比較的厚い。底部の切り難し痕をナデ消している。7世紀代のものである。

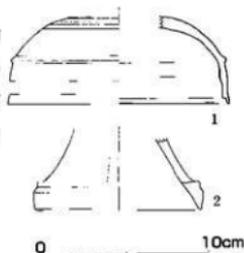
194-3は、壺である。頸部以上を欠くが、長頸壺になるものと思われる。内面は全て荒いナデで、外面も大半を回転ナデで調整するが、底部近くには回転ヘラケズリを残す。肩部にヘラ状工具で、縦方向に3本線を刻んでいる。194-1に伴い6世紀代のものか。



第195図 加工段3出土
石製品実測図(2:3)

第195図は加工段3から出土した玉作関係遺物である。195-1は勾玉で、ほぼ完成に近い段階の未製品と考えられる。頭部と尾部を欠いており、製作工程の最終段階で欠損し、放棄されたものであろう。石材は、明青灰色を呈し、白色の不純物を含むもので、滑石様のものである。各面に丁寧な研磨痕が見られる。

195-2は、碧玉の刮片である。全体に薄く調整刮片と考えられる。



加工段4～7 (第196図)

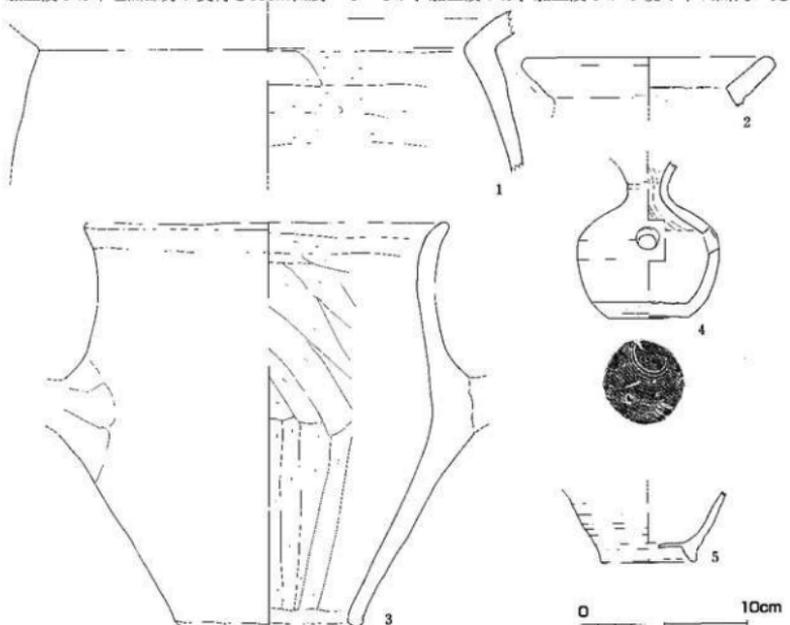
第197図 加工段5出土須恵器実測図(1:3)

加工段4～7は、調査区中程の標高23～25mに位置する4カ所の加工段である。すぐ西側には、原ノ前遺跡で最も広い加工段8が広がっており、それと切り合っているが、先後関係は不明である。

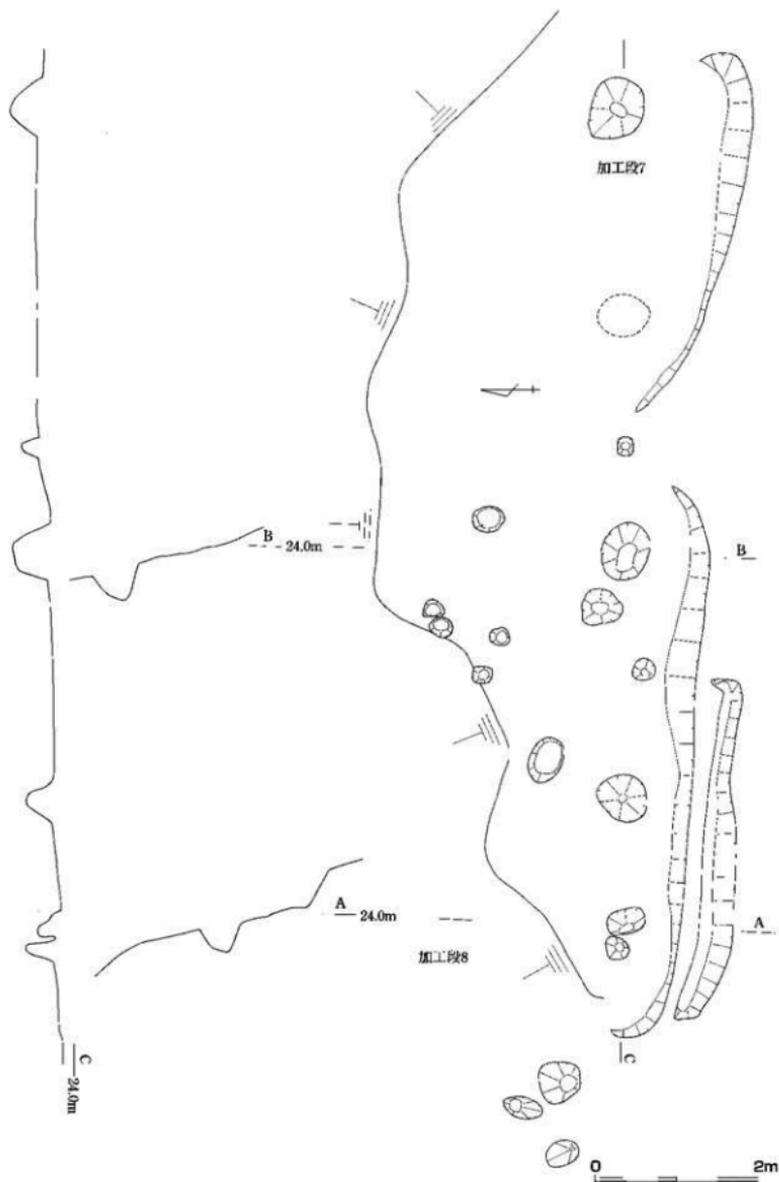
加工段4は最も東側のもので、標高24m付近にある。加工段とその下のL字形の溝で、約2mに亘って検出した。加工段4の下方には6カ所に小さなピットが見られるが、建物跡は確認できない。加工段4からは、遺物は出土しなかった。

加工段5は、加工段4の西側にある加工段で標高24.5m付近に位置する。幅約4m、奥行き約1mの加工段で、狭い溝を廻す。加工段下方にピット1穴を検出している。加工段中央で、甗(198-3)がつぶれた状態で出土している。

加工段6・7は、後述する加工段8に連続して見られるもので、標高約24m付近に延びる東西に長い加工段である。段の肩の部分のみを検出した。加工段6は約2.4m、加工段7は約4.7m続いている。加工段6は平坦面部分が奥行き30cm程残っているが、加工段7は、加工段8から続く平地面内に完



第198図 加工段6・7出土土器実測図(1:3)



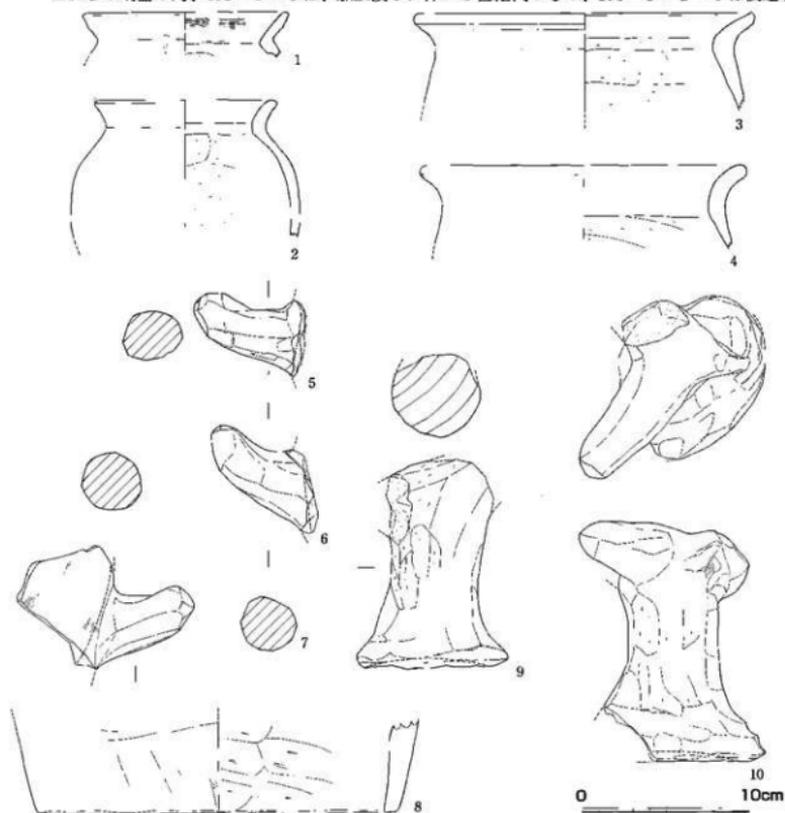
第199图 加工段7・8実測图(1:60)

全に取り込まれている。どちらも直接関わると思われるピットは見られなかった。加工段7に伴う遺物は見られなかったが、加工段6からは須恵器（197-1・2）が出土しており、5世紀末から6世紀初頭頃のものと考えられる。

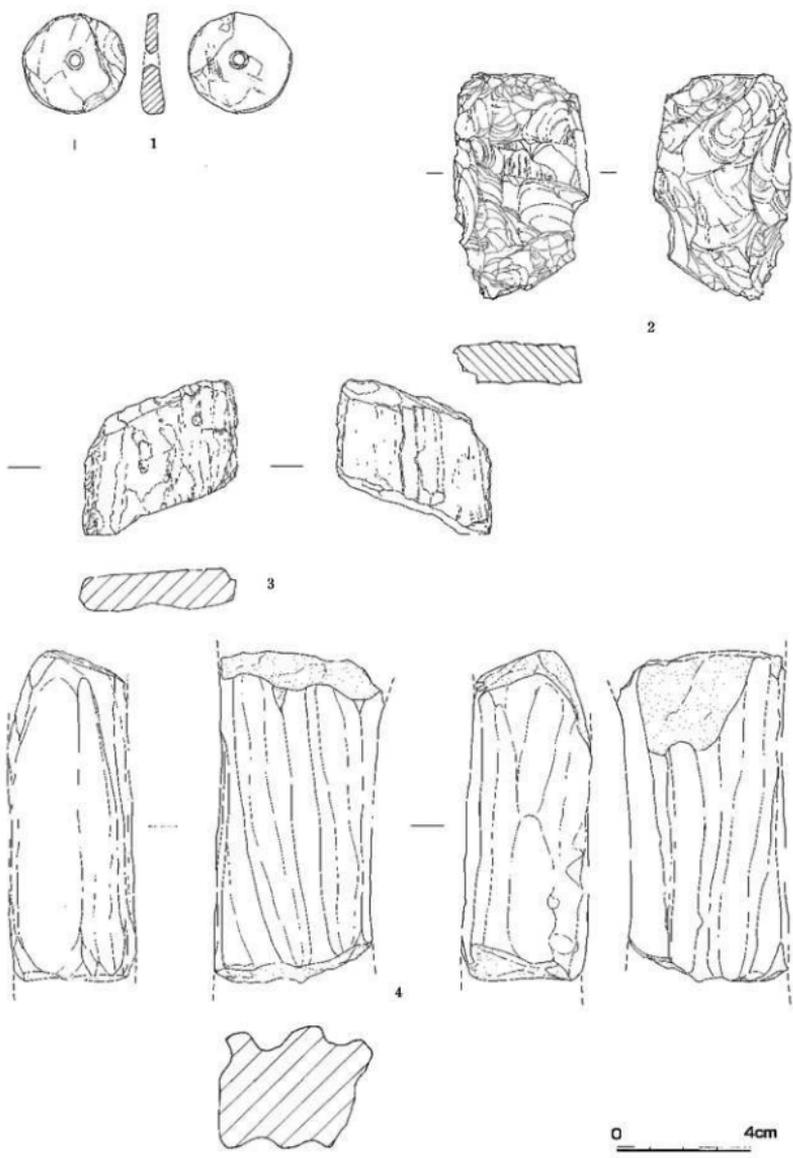
第197図は加工段6から出土した須恵器である。197-1は、蓋で、口縁端部内面に沈線があり、外面肩部に明瞭な稜を持つものである。頂部にはヘラケズリを残す。197-2は高坏の脚部で、長方形のスカシを持つものと思われる。

第198図は加工段5とその前方斜面から出土した土器である。198-1・2は甕で、口縁部が強く外反し、鍋と呼ぶべきものであろうか。198-3は、甕である。取手部分を欠くが、ほぼ全形の解るもので、底部が窄まり、口縁部がわずかに外反する。外面はナデ、内面は縦方向のケズリを施す。198-4は、須恵器である。底面には回転糸切り痕を未調整のまま残す。198-5は土師器坏である。断面三角形の高い高台を持ち、体部は直立気味で、直線的に延びる。

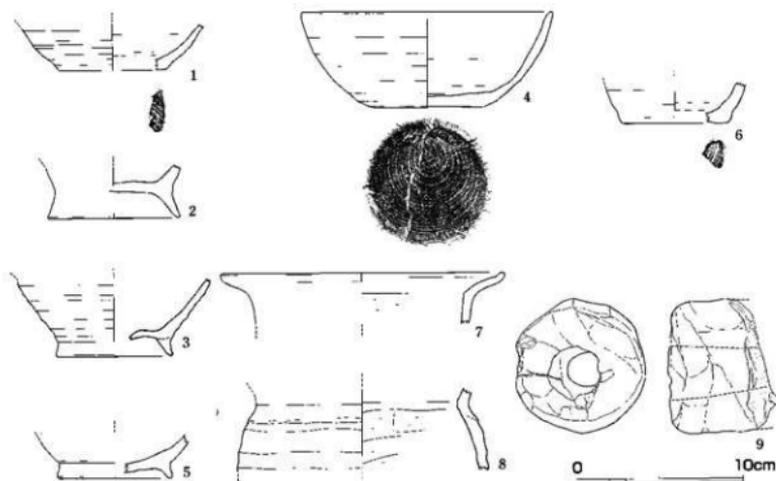
これらの土器の内、198-3・4は、加工段5に伴い8世紀代のもの、198-1・2・5は後述する



第200図 加工段8下層出土土師器実測図（1：3）



第201圖 加工段8下層出土石製品実測圖(2:3)



第202図 加工段8上層出土土器実測図(1:3)

加工段8に関係し、11世紀頃のものと考えられる。

加工段8 (第199図)

加工段8は、加工段7の西側に連続する、広い平坦面で、上下2段にわたると考えられる。上段側のものは長さ約4mに亘って検出したものであるが、そのほとんどを下段側の加工段に削平されている。下段側の加工段は肩の部分で、約6.6mあるが、連続する平坦面は更に広く、幅約12m、奥行き約4mある。ビット状の落ち込みも点々と見られ、この内ビット22から加工段に平行して並ぶ4穴が最もしっかりしており、建物が在ったものと思われる。この内、ビット22からは、202-1・2・4・6の土師器が出土しており、11世紀代のものと考えられる。

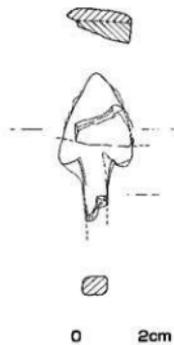
第200～203図は加工段8の平坦面から出土した遺物である。

200-1～4は、甕である。200-1は、小型のもので、口縁部内面に横方向のハケメが残る。200-2は、頸部から口縁部の間が短く、胴部が丸いものである。器壁が比較的厚く、口縁端部がわずかに外反する。200-3は口縁部が強く外反するもので、甕に含まれるものだろうか。200-4は、口縁部を丸く納め、体部の器壁が薄いものである。

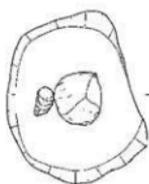
200-5～8は甕である。200-8は底部の破片で、内面には横方向のケズリが見える。

200-9・10は、土製支脚である。底部内面の彫り込みは少ない。後方側の小突起は輪になっており、小さな穴が開いている。

201-1は有孔円盤である。直径は約3cmを測り、ほぼ平面円形を



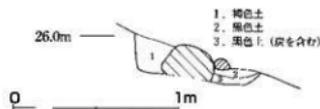
第203図 加工段8下層出土金属器実測図(2:3)



呈すが、厚さは3~6mmと不均等である。両面から穿孔が行われ、各面とも荒い研磨痕があり、最終段階の未製品であろう。青灰色の石材で、滑石であろうか。

201-3は、碧玉の石核である。細かい剥離で扁平に成形された、荒割り段階の未製品である。石材には白色を呈する部分が非常に多い。

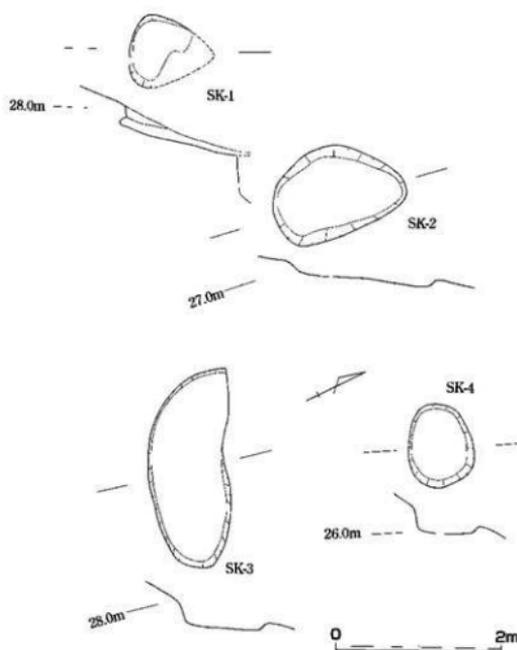
201-3は、結晶片岩製の砥石である。内磨砥石であるが、側部以外に両面にも研磨痕があり、平砥石としても使用されている。



第204図 SK-04 稜鏡出状況 (1:30)

201-4は、筋砥石である。白色を呈し、目の粗い砂岩を使用するもので、両端を欠くが、少なくとも4面を使用している。

202-1・2・4・6は、ビット22から出土した一括遺物で、全て上師器である。202-1は無高台の環である。底部には回転糸切り痕を残し、外面は回転ナデにより、稜が見える。202-2は、高台付きの環である。底部には回転糸切り痕を残し、比較的厚手の体部は、緩やかに内湾する。比較的器高が高く、あまり見かけない形状である。202-6は、無高台の環と考えられるものであるが、体部が直立気味になり、器壁が厚いものである。底部には回転糸切り痕を残している。



第205図 SK-1~4 実測図 (1:60)

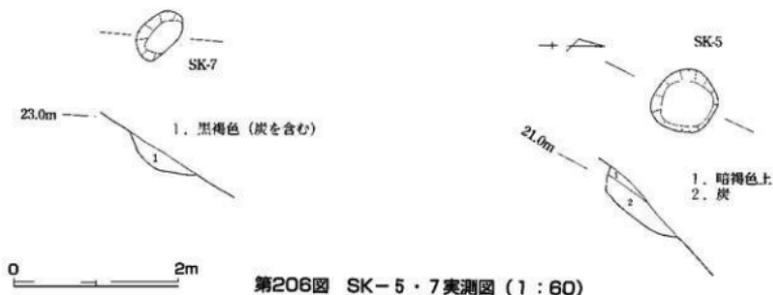
202-3は、加工段8の平坦面上から出土したもので、高台付きの環である。断面三角形の高い高台を持ち、体部は直線的に高く延びる。加工段5で出土した198-5と同じ器形である。

202-5は須恵器の壺の底部と考えられるものである。小さい高台を持ち、体部は緩やかに内湾して延びる。高台の周囲までナデしており、ケズリの痕跡は見えない。古墳時代後期のものであろうか。

202-7・8は、上師器の鍋である。頸部から口縁部は強く外反し、体部には強いナデを施す。

202-9は、フィゴの羽口である。断面円形を呈し、先端部はガラス化している。原ノ前遺跡での製鉄関係遺物は、他にスラグ1点(図版101下段左)が出土している。

第203図は、加工段8で山上した鉄鏡である。鏡身平面形は、三角形を呈



し、長頸のものであろう。鐵身部に別の鉄片が鑄着しており、これも同様の鉄鏃であったと思われる。加工段4～8で山上する遺物は、古墳時代中期新相(197-1・2)、奈良時代(198-3・4、200-5～10等)、平安時代(198-1・2・5、202-1～8)の、大きく3時期に分かれるようである。フイゴの羽口は、奈良時代のものの可能性がある。玉作関係遺物は、201-4が加工段8の下段遺構の溝内から出土しており、平安時代の遺物に含まれる可能性はある。

焼土坑 (第204～206図)

焼土坑は、調査区内で、6基を検出したほか、調査区東側の先行調査区でも1基を検出した。検出した焼土坑はいずれも東側に集中しており、SB-01より西側では検出されなかった。SK-01～04は、調査区東端の標高約26～28mの急斜面に見られるものである。長径約80cmから2mまでの楕円形を呈するもので、いずれも深さはない。壁面から床面が火を受けて赤変し、床面直上に炭の小片が層になって堆積する。SK-03・04は内部に石が転落しており、特にSK-04のものは、あたかも置いたかの様に中央に搦えられている。

SK-01は、山側の肩が残っており、横穴状に天井が延びていたことが伺われる。SK-01の炭層上面からは須恵器小片(207-13)が出土している。

SK-05・07は、加工段2の下方からSB-01近くで検出した焼土坑である。いずれも非常に小さく直径60cm程度しかない。床面は火を受けて赤変しているが、多量の炭の堆積はなく、埋土に炭を含む程度である。

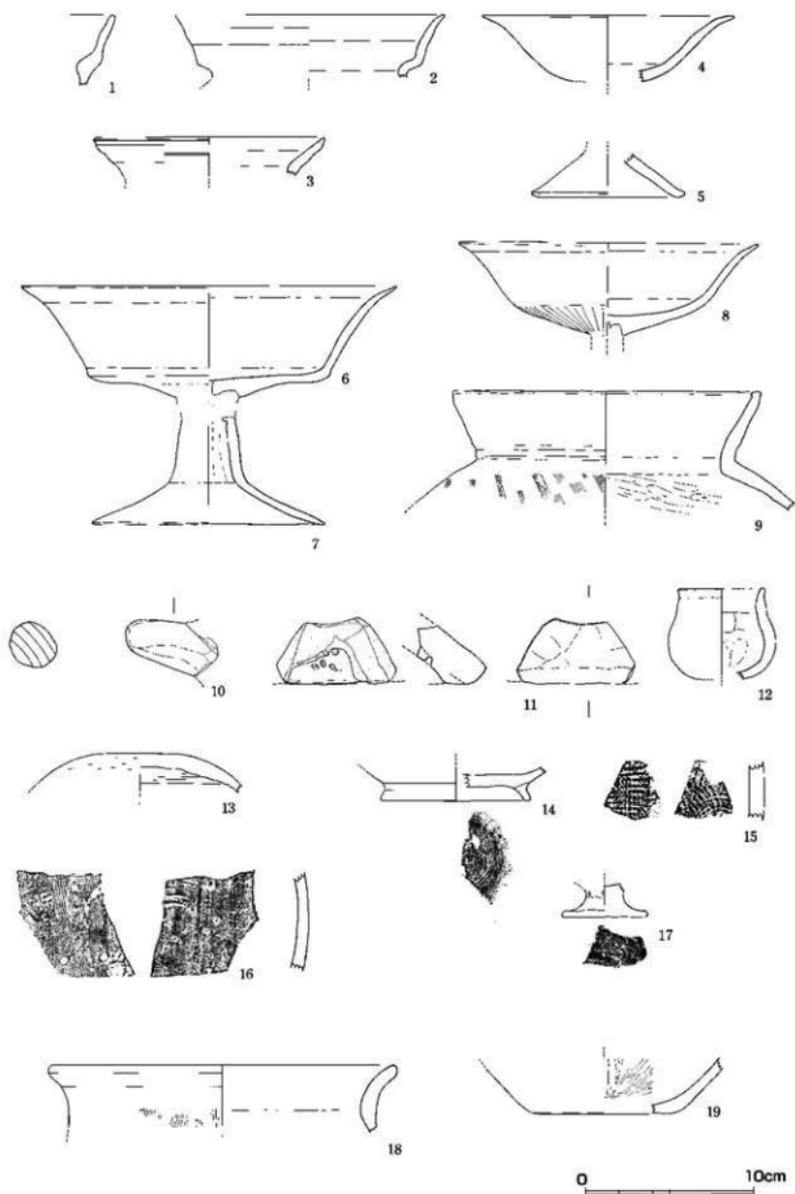
SK-08(図版88上段)は、調査区東側の先行調査区で検出したもので、直径約1mのほぼ円形を呈し、深さ50cmを測るものである。底面は非常によく焼けており、赤変した部分が層になって見られる。底面に厚さ3cmほどに層になって炭小片が堆積している。

これらの焼土坑の大半は、遺物を伴っておらずその所属時期は不明である。また、SK-01から出土した須恵器も後に転落してきたものと思われ、SK-01に伴うものとは思えない。

遺構に伴わない土器類 (第207図)

第207図に図示したものは、トレンチ調査と、遺構に伴わずに出土した土器類である。

207-1・2は、第1トレンチで出土した複合口縁を持つ甕である。206-1は、口縁部外面にわずかに擬凹線文が見え、206-2の口縁部は、内外面とヨコナデされる。頸部から複合口縁の部分には強い稜は持たず、口縁部はわずかに外傾し、端部を尖らす。弥生時代後期(約場～鍵尾式)のものと



第207図 遺構に伴わない遺物実測図(1:3)

考えられ、SB-02に伴う可能性がある。

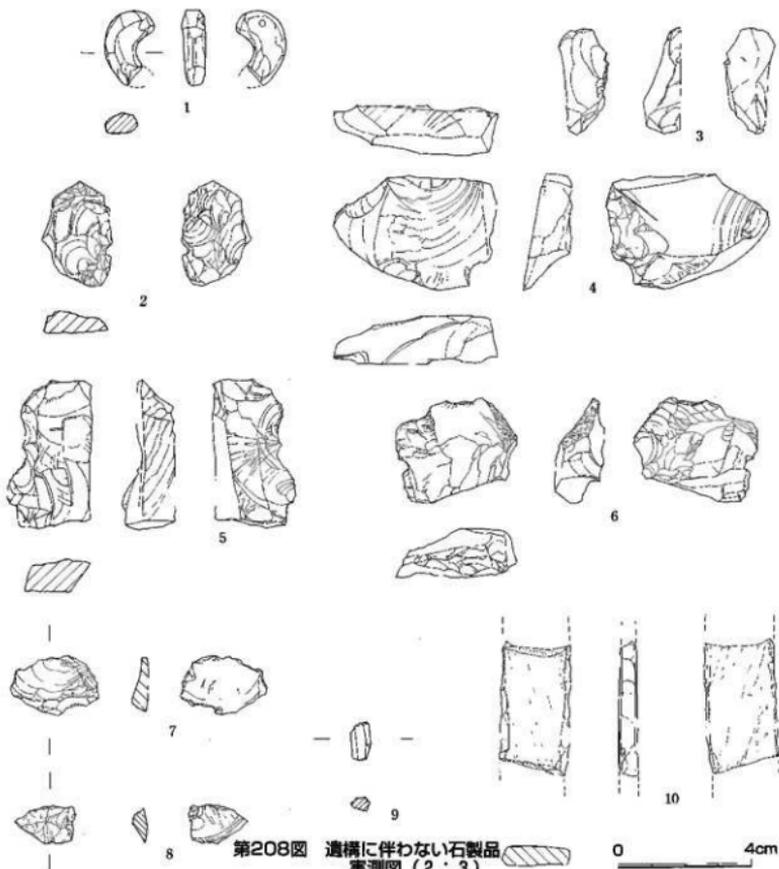
207-3は、上脩器壺の口縁部であろうか、口縁端部外面に沈線状のくぼみがある。

207-4～8は高環である。207-4・8は、坏部中程の稜がほとんど無く、丸みを持ち、11縁端部が外反する。207-6・7は、第4トレンチから出土したもので、同一個体の可能性がある。坏部中程に明瞭な稜があり、11縁部は外反して端部を尖らせる。207-5は、脚部の小片で、底径が小さい坏部は丸いものが伴うと思われる。これらの高環は、古墳時代中期のものと考えられる。

207-9は、第4トレンチで出土した甕である。器壁が厚く、11縁部上面に面を持つ。体部外面にはわずかにハケメを残している。古墳時代中期のものと思われる。

207-10は、上製支脚の前方の小突起と思われるものである。

207-11は、十製支脚の脚端部か、甕の端部であろうか。大きく内傾しており、器形は不明である。内面に棒状工具で付けられたと思われる穴が5カ所で見られる。断面では内面側に粘土を張り付けた



第208図 遺構に伴わない石製品
実測図 (2:3)

痕跡が見られる。

207-12は、ミニチュア土器壺である。全面手づくね成形され、内面には指頭圧痕を多く残す。外面はナデである。

207-13～16は、須恵器である。207-13は、須恵器壺である。頂部にケズリを残し、内面はナデである。SK-04から出土している。

207-14は、高台付きの坏である。底部の切り離しは回転系切りで、高台は斜めに張り出す。内面はナデである。8世紀代のものであろう。

207-15は、甕の胴部の小片である。外面は非常に細かい平行タタキを交互に施し、内面は深い同心円文の押さえ具の痕跡を残す。

207-16は、横瓶であろうか。外面にはカキメが、内面はナデにより同心円文の押さえ具の痕跡を消している。外面には2カ所の円形の剝離があり、2次焼成によって、表面が破裂したものとと思われる。

207-17は、柱状高台を持つ皿である。全体に磨滅しているが、底部の切り離しは回転系切りと思われる。高台と皿部の継ぎ目には細かい指頭圧痕が見られる。12～13世紀頃のものであろうか。

207-18は、上脣器壺である。口縁部は緩やかに外反し、外面にはハケメが見える。

207-19は、黒色土器A類の坏である。高台は無く、体部は直線的に立ち上がる。内面を黒色化処理し、ヘラミガキを施す。外面はナデで、淡褐色を呈している。胎土中に2mm前後の白色の砂粒を含んでいる。県内での黒色土器の出土例としては、松江市の石台遺跡、鹿島町の名分塚遺跡、安米市の陽徳寺遺跡が知られているほか、淡山池遺跡でも出土した。

208-1は、瑪瑙製の勾玉未製品である。尾部をわずかに欠いている。最終段階のもので、わずかに稜を残すものの、各面とも丁寧に研磨されている。片面から穿孔しようとしているが、深さ1mm程度までで止められている。

208-2～5は碧玉の剥片で、全て第4トレンチから出土したものである。208-2は、勾玉未製品と考えられるもので、C字形に成形された段階のものである。非常に薄く、完成するとかなり小さいものになると思われる。研磨は認められない。208-2～5は、いずれも石材に白色の部分を含んでいる。

208-6は、瑪瑙の剥片である。各面とも不定方向に打ち欠かれており、荒削り段階のものである。

208-8・9は、石英の剥片で、208-9は、単結晶である。

208-10は結晶片岩の内磨砥石である。両端を欠くが、扁平で、側部を中心に研磨痕が見られる。石材には赤みを帯びた部分が見られ、紅麩石と呼ばれるものである。

208-7は、淡緑色を呈する石材の一方に小さな剝離を連続するもので、何らかの石器と考えられるが器種は不明である。石材は非常に硬質で、白色の脈が見られる。A1グリッドで出土したもので、SX-01近くのビット群に関係するものとも思われるが、詳細は不明である。



0 4cm

第209図 原ノ前遺跡出土古銭実測図(2:3)

第209図には古銭を图示している。「寛永通寶」で、B1グリッド表上中から出土している。「寶」字の表現から「古寛永」と呼ばれるもので、1659年以前の鑄造である。

- 註1 広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古8号』1992年
 註2 鹿島町教育委員会『講武地区県営園地整備事業発掘調査報告書3』1987年
 註3 島根県教育委員会『徳見津遺跡・日廻遺跡・関徳寺遺跡』1996年

第4節 小結

原ノ前遺跡で検出した遺構・遺物を時期毎に概観して小結としたい。

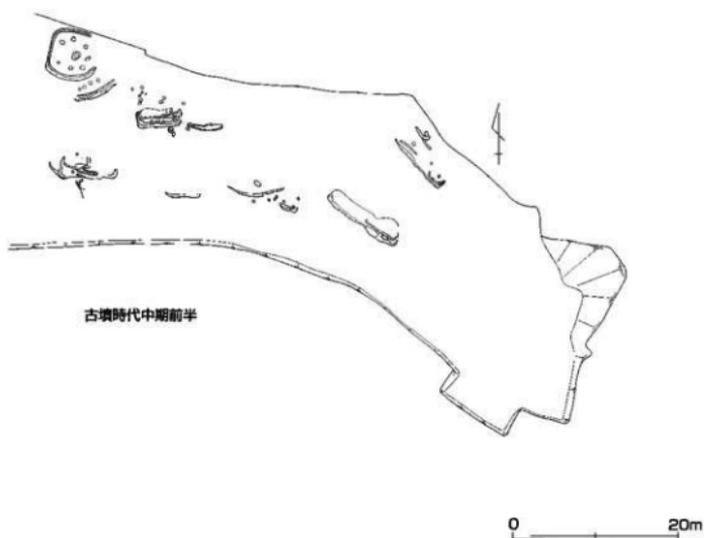
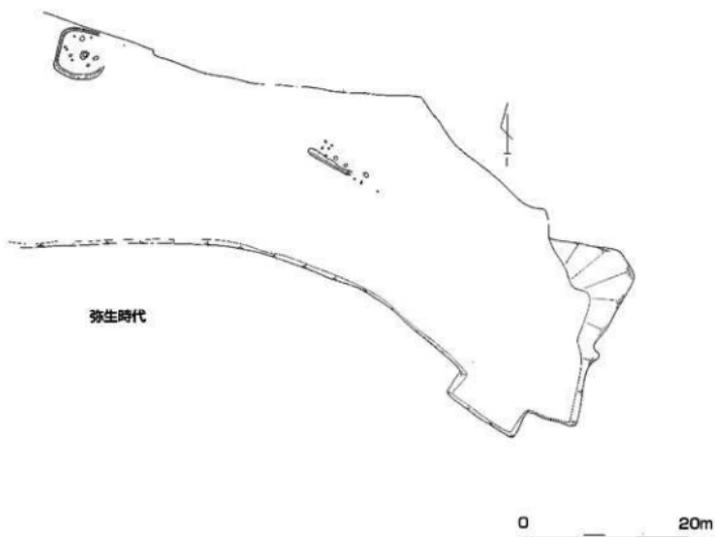
原ノ前遺跡で最も古いと考えられる遺物は、石材不明の石器(208-9)である。器種が不明で、伴出土器等も無いため時期決定の根拠が少ないが、黒曜石が十分に供給されるようになる縄文時代にこうした石材を使用するとは考えにくく、旧石器時代に遡る可能性がある。調査区東端のB2グリッドで検出したピット群は、遺物を伴っていないが、この石器はすぐ近くからの出土であり、このピット群に伴う可能性も考えられる。また、このピット群については、原ノ前遺跡では検出していないが、西側の浜山池遺跡では、落とし穴と考えられる土坑が非常に多く検出されており、こうしたものを伴う可能性がある。

原ノ前遺跡では縄文時代の遺構・遺物は確認していない。弥生時代の遺構・遺物は前期・中期のものも検出していないが、後期の竪穴建物跡(SB-02)と掘立柱建物跡(SB-01)になると思われるものを検出している。弥生時代の掘立柱建物は中期のものが、安米市の大原遺跡、松江市の石台遺跡、後期のものは、安米市の普請場遺跡・オノ神遺跡が知られている。しかし、これらのほとんどは、加工段の大半が流失し、梁間が確認できないもので、原ノ前遺跡SB-01も例外ではない。SB-01は、鼓形器台(168)が出土しており、その特徴から草田3期のものである。

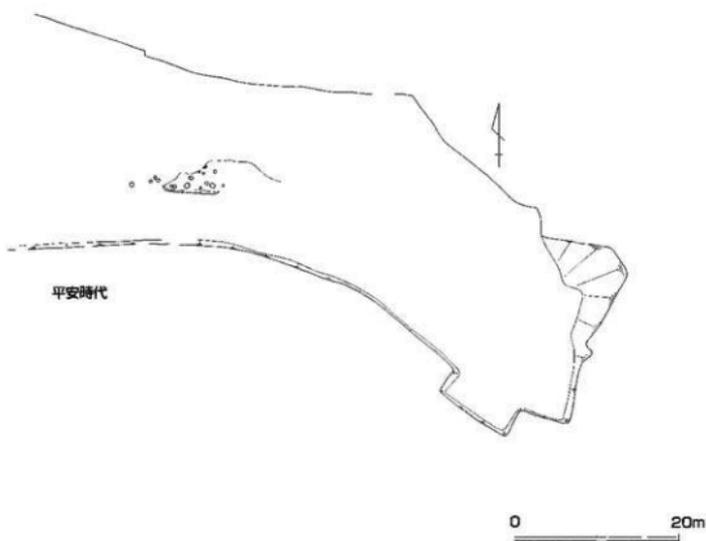
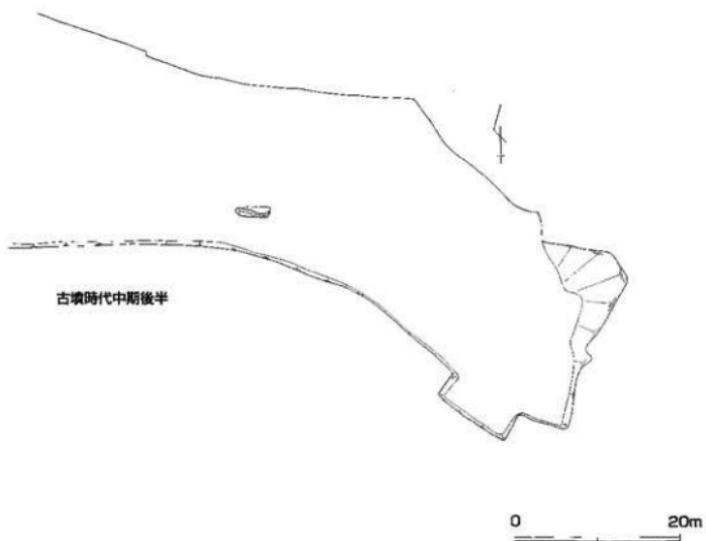
SB-02は、竪穴建物跡である。上層のSD-02を伴うと考えられるものを除いても床面には少なくとも1回以上の礎で替える痕跡が認められる。上面遺構は、4本柱で、隅丸方形を呈するが、下面遺構については残りが悪く、6本柱で、円形から多角形を呈することを想像するに留める。上面遺構は、第1トレンチ出土遺物等の特徴から、草田5期のものと考えられるが、下面遺構の時期は不明となっている。下面遺構からは、弥生土器製の小片が出土していたが、調査区内で最も低かった場所と云うこともあり、降雨による浸水で流失している。流失した土器は、複合口縁の口縁部外面に凹線文を施すもので、草田2期～3期のものだった。原ノ前遺跡SB-02から、浜山池遺跡側には、数棟の草田5期にあたる遺構が見られることから、SB-02は、集落に含まれる可能性がある。SB-02の位置は、浜山池遺跡に向かって北から入り込む谷の周縁部にあたり、北側に中心を持つ集落の縁辺だったと考えられる。

弥生時代の遺構は、まず、SB-02下面遺構が草田2～3期に作られ、草田3期には掘立柱建物(SB-01)が建てられる。その後、草田5期の段階で、竪穴建物がSB-02上面に建てられる。

古墳時代前期の遺物はきわめて少なく、この頃、原ノ前遺跡では活発な動きは見られないが、古墳時代中期になると、多くの加工段が作られ始め、加工段1～3、SB-03下層、SB-02上段のSD-02を伴う遺構などがある。これらの遺構の大半は、加工段としてしか確認できないが、検出状況から掘立柱建物跡と推定されるものである。また、この時期には、玉作を行っている可能性が高く、上記の遺構の内加工段1を除き、直接遺構に伴うと考えられる、玉作関係遺物が出土している。



第210図 原ノ前遺跡遺構変遷図 (1 : 600)



第211図 原ノ前遺跡遺構変遷図 (1 : 600)

出雲地方での玉類の生産は、弥生時代中期の西川津遺跡^(註1)、後期の布田遺跡^(註2)など原産地である花仙山を離れた集落内で始まったと考えられている。それが、古墳時代には一旦花仙山周辺地域に集中するが、古墳時代中期にはいと、爆発的に拡大し、出雲地方全域で玉作遺跡が知られるようになる^(註3)。この時期は、それまで、玉生産に主体的地位にあった北陸地方の玉生産が衰退に向かう時期と符合しており、玉類の需要と生産地の事情の関係から出雲地方での玉生産が拡大していったもの^(註4)と考えられる。以前は東山雲町内では玉作遺跡は知られておらず、玉湯町から松江市周辺と安来市の伯太川流域の間は空白地帯であったが、東山雲町内でも四ツ廻Ⅱ遺跡・勝負遺跡^(註5)などで、古墳時代中期の玉作関係遺物が出土しており、原ノ前遺跡例を含め、玉作遺跡の二つの分布域をつなげる結果になった。

原ノ前遺跡出土品を見ると、原石や荒割り段階のものが多く見られることが注意される。松江市の平所遺跡では、荒割り段階を屋外で行い、研磨・調整を屋内で行うなど場の機能の分化が指摘されているほか、安来市の大原遺跡では、原石・荒割り段階のものが少なく、遺跡間での機能分化の可能性が指摘されている。原ノ前遺跡での状況を見ると、確かに荒割り段階を中心的役割としていたことが想像される。また、東側の尾根を越えた四ツ廻Ⅱ遺跡^(註6)では、ほとんど同時期でありながら瑪瑙を主体的に使用しているのに対し、原ノ前遺跡や前述の大原遺跡では、碧玉が主体的である。作業工程だけでなく、使用石材にも遺跡毎の分化が存在したのではないだろうか。

古墳時代中期の遺物を出土している遺構にSX-01がある。建物跡とは思えず、ミニチュア上器の存在から、湧水地に関わる祭祀が行われた可能性がある。

以上の遺構は、古墳時代中期でも、須恵器を伴わないものであるが、加工段6には、TK-47併行期と考えられる須恵器が出土している。他の中期の遺構も、いずれも新朽であり、大きな時間差は無いものと思われる。

古墳時代後期になると、遺構・遺物は激減するが、加工段3から大谷4期の須恵器が、SD-01から大谷5期の須恵器が出土している。この時期は、すぐ西にある浪山池古墳群などで横穴墓を作っていた時期である。

奈良時代の遺物は、加工段5・8で見られる。この時代の遺構は隣の浪山池遺跡では多く見られ、浪山池遺跡を中心とする集落の縁辺だったと思われる。

平安時代の遺構は加工段8のピットがあり、掘立柱建物が在ったと思われる。この内、ピット22から出土した坏類は、一括性が高い。出雲地方では、10世紀初頭に須恵器坏類の生産が終わり、その後12世紀に白磁を伴う遺跡が急増する間にあたる遺跡が少なく、編年の空白を埋める一助になるかと思われる。

註1 『西川津遺跡発掘調査報告書V』島根県教育委員会 1989年

註2 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』

島根県教育委員会 1983年

『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VII』

島根県教育委員会 1991年

註3 『島根県生産遺跡分布調査報告書IV』島根県教育委員会 1987年

註4 関川尚功「玉とガラス」『古墳文化の研究 第5巻 生産と流通Ⅱ』1991年

註5 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II』

島根県教育委員会 1977年

註6 『コクリ遺跡・大原遺跡』島根県教育委員会 1994年

第6章 結 語

1. 洪山池・原ノ前遺跡の集落変遷について

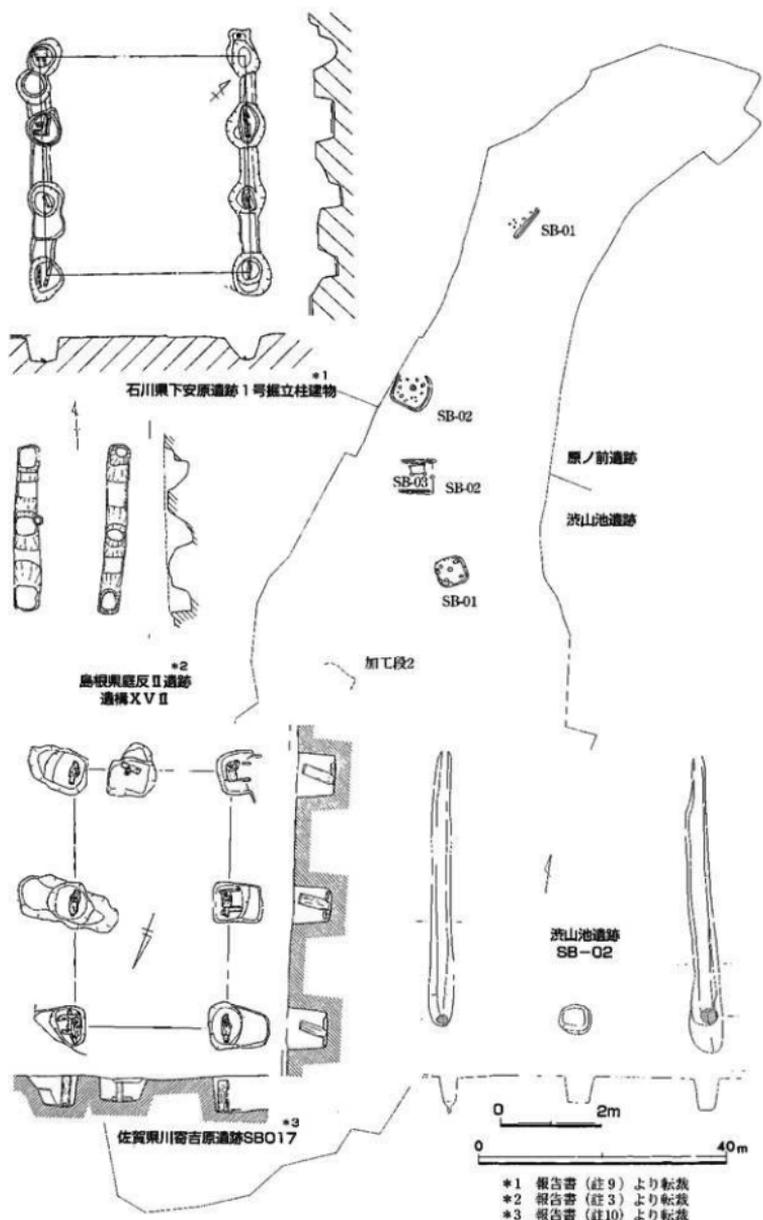
両遺跡は実体としては分離できないものであるため、ここでは一体のものとして集落の変遷や各遺構についてもう一度整理してみたい。

弥生時代後期

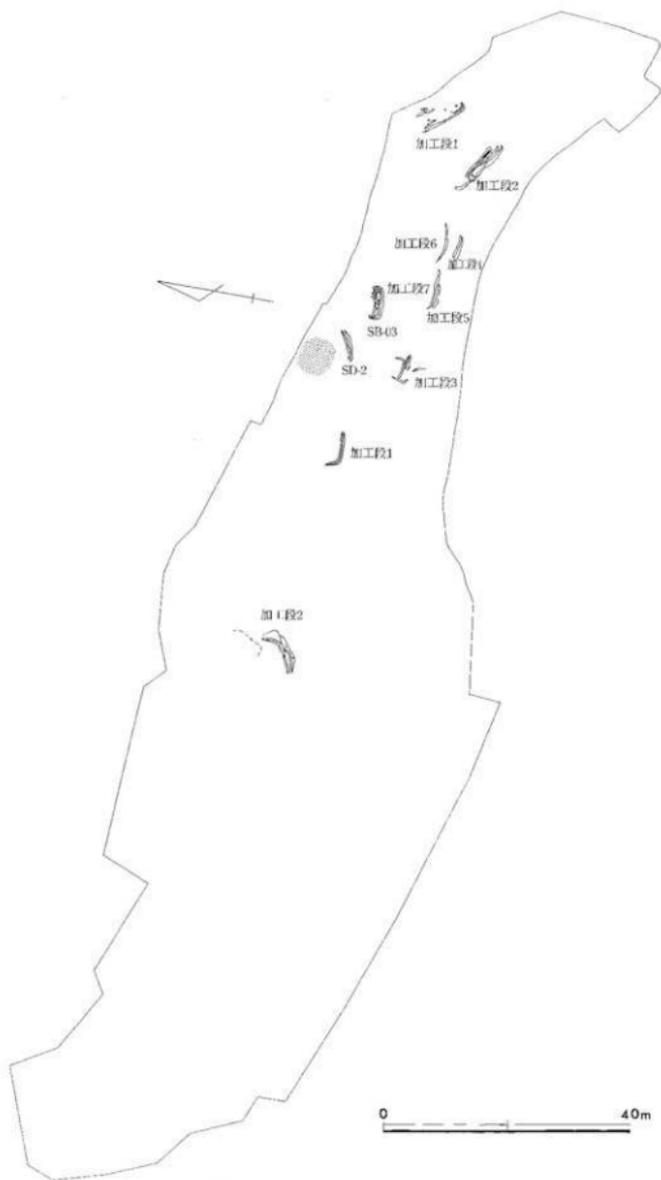
遺跡内で集落が出現するのはこの時期からで、竪穴建物2軒、掘立柱建物2軒、布堀建物1棟などが検出されている。これらは原ノ前側に分布しており、さらに調査区北側の緩斜面に広がっているものと推定される。出土土器はごく少量で、ある程度時期幅を認めるが、いずれも後期後半の中で理解できるものばかりである。

当地域では、この時期の集落が丘陵部で検出されることが通常で、中には高地性集落として認識されるものが存在することもすでに指摘されている⁽⁸²⁾。本遺跡例は丘陵部とは言えや低い位置に立地することから、平野部の集落を含めた当時の集落全体の中で、どう位置付けできるか検討することが必要であろう。しかし、現時点では平野部の集落の実体が明かでないため、この問題に対して答えを引き出すことは容易ではない。あえて手掛かりを見つけるとすれば、平野部で少なからず検出されている土器溜や、包含層出土品といった二次的資料を有効に使うことであろう。積極的な資料分析は行っていないが、今のところこの時期の土器は平野部で出土することが少ないように感じている。仮に当該期の集落の主要な部分が丘陵部に占地しているとすれば、本遺跡例はその一部を構成するものと考えてよいだろう。検出された建物構成は集落全体が見えない限り考察できないが、少なくとも複数種の建物で構成されることは間違いないようで、とくに洪山池で検出された梁行き2間の布堀建物SB02は今のところ類例の無いものである。ここではこれについて少し考察しておきたい。

県内でこれまでに見つかった布堀建物は庭反Ⅱ遺跡⁽⁷³⁾（鏡川郡湖陵町）遺構17、柳遺跡⁽⁷⁴⁾・竹ヶ崎遺跡⁽⁷⁵⁾（安来市荒島町）、野津原Ⅱ遺跡⁽⁷⁶⁾（八東郡六道町）などでも可能性のあるものが存在し⁽⁸³⁾、いずれも弥生時代後期のもので、梁行きは1間である。県外では同じ山陰の鳥取県東伯町の大峰遺跡⁽⁷⁷⁾、羽合町の長瀬高浜遺跡⁽⁷⁸⁾、鳥取市の久米・古郡家遺跡⁽⁷⁹⁾などに見られるほか、北陸の石川県下では多数検出されており、倉庫の可能性が指摘されている⁽⁸⁴⁾。ただし本遺跡例のように梁行き2間で、桁行き溝内に柱穴構造を持たないものは類例が無く、これらの中では大型の部類に属す点も注意される。注目しておきたいのは、これらの柱穴掘方が正~長方形を基調とするものが多い点で、中には石川県金沢市の下安原遺跡1号掘立柱建物のように⁽⁸⁵⁾、柱穴内に長い礎板を残すものが認められる。また布堀構造は持たないが、九州北部では弥生時代中期~後期に、倉庫あるいは物見櫓とされる長方形基調の柱穴掘方を持つ建物が見られ、やはり同様の礎板を持つ例が多い。これらを単純に結びつけることはできないが、少なくともこれらの建物は、上屋の重量を支えるために近似した方法で地下施設を作っていることは言えそうである。本遺跡例もこうした地下施設を伴う倉庫的な建物と推定され、柱穴が方形を呈することから樺持柱に礎板を、桁行きの溝に一体化した長い礎板を設置した可能性を指摘しておきたい。また、弥生時代後期で布堀構造を持つ建物例は、今のところ上記した山陰~北陸に偏在するようで、同時期に展開する四隅突出形墳丘墓の分布とどう関連するか興味深い点である。（樺）



第212図 弥生時代後期の集落



第213図 古墳時代中期の集落

古墳時代中期

古墳時代中期の遺構は加工段8箇所等が確認されており、原ノ前遺跡から渋山池遺跡の広い範囲で見られるが、ほとんどのものが加工段のみか、L字形の溝として確認されており、明確な建物跡は見られない。

川雲地方に置けるこの時期の遺跡では、竪穴建物が主流であり、一部に付随的に掘立柱建物が見られる程度である。この中で、安来市の柳Ⅱ遺跡では、掘立柱建物が主体的になっており、他の遺跡と比べ際立っている⁽⁴¹⁾。柳Ⅱ遺跡では、建て替え分を含め、7棟の掘立柱建物が見られるのに対し、竪穴建物はわずかに1棟であった。集落全体を調査したわけではないが、一定の傾向を反映したものであると思われる。もちろんこれ以前の集落でも掘立柱建物は存在するが、それらは、弥生時代の高床倉庫の伝統を引く、竪穴建物に付随したものと考えられており、住居として主体的に使用されたとは考えにくい。出雲地方平野部において、掘立柱建物が主体的となるのは、古墳時代後期以降であって、集落内に竪穴建物がほとんど見られなくなるのは、高広遺跡(Ⅱ区)や徳見津遺跡(Ⅳ区)など7～8世紀になってからのようである。掘立柱建物が竪穴建物の付属ではなく主体的位置を占める柳Ⅱ遺跡の状況は、掘立柱建物の先駆的な使用であり、柳Ⅱ遺跡を特徴付けるものになっていた。そうした状況の中で、渋山池・原ノ前遺跡では、加工段のみで、断定しがたいものもあるが、ほとんどが掘立柱建物と考えられ、竪穴建物である根拠を見いだせる遺構が存在しない。また、その出土土器を見ても、ほとんどの場合、中期新相ではあるが、須恵器を伴っていない時期のものであり、柳Ⅱ遺跡よりやや先行する可能性が高い。

竪穴建物に代わり、掘立柱建物跡が住居として主体的に使われ始める時期は、柳Ⅱ遺跡に見られるように、古墳時代中期の須恵器出現前後のことと考えられるが、それは、柳Ⅱ遺跡だけに見られる特異な現象ではなく、この時期の変化の一つであったと考えられるのである。ただし、渋山池・原ノ前遺跡の集落の中心は、更に北側の谷内に在るものと思われ、検出した遺構は集落の縁辺部にあたると思われるため、集落中心部の状況によっては、竪穴建物が主体的な住居である可能性はあり得る。

(林)

古墳時代終末期

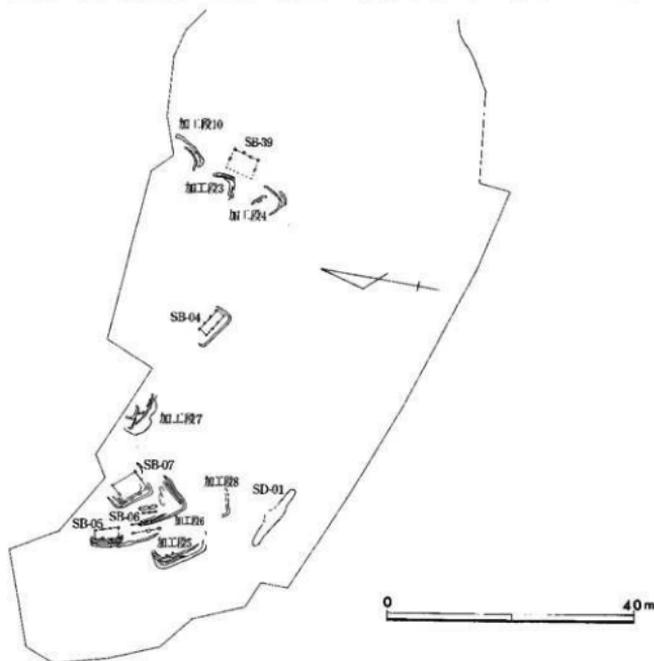
この時期については、本文中では大谷編年⁽⁴²⁾を目安として出来るだけ細分するよう心がけたが、この作業によって様々な事実が明らかとなっている。この編年案は現時点では最も信頼のおけるものと考えているが、基本的に後期～終末期「古墳」出土の須恵器を中心に作成しているため、当遺跡のような集落遺跡出土須恵器とは性格的に相容れない部分があると考えていた。理由は須恵器の出土状況が、古墳の副葬と集落での使用・廃棄とは異なる組成を示すと感じていたからである。また、造墓活動が停止し始める7世紀中頃以降(大谷編年6～B期～同8期)については、横穴墓の資料にも制約が見られ、量的に大きな比重を占めるのは集落出土資料であることも気になっていた。しかし、今回の作業を通してこの編年が集落の分析にも非常に有効なことがわかり、むしろ終末期古墳の動向と集落の動向が極めて密接に関連する証拠のものと言える可能性まで出てきたのである。ここでは実年代で6世紀末～8世紀初頭と考えられるこの時期を、集落の実情に合わせてA～Dの4期に分け、その中で新・古が抽出可能なものについては細分を試みたい。もちろん各須恵器の同定作業は大谷編年を参考としながら行ったものであるが、時期区分としては最終的に遺構全体を取り込んだ、全く別のものに還元されていると理解していただきたい。

A期（本文終末I期、大谷編年4期を中心とする）

この時期の遺構は出土須恵器が大谷編年4期に属するものとして抽出されたものであり、時代的には前方後方（円）墳が廃絶された直後の時期と言えるかも知れない。当該期は他時期と異なり、明確に集落構成を読み取ることが可能である。集落は淡山池遺跡の調査区の中で比較的低い斜面に偏在しており、東半に位置するAグループ、西半に集中するBグループに分離できる。

A・Bグループはいずれも2×3間の建物1棟、1×3間の建物1棟、1～2回の造り替えを行う加工段3カ所以上などで構成される。この遺構構成を1単位とすれば、少なくとも同時期に2単位以上、地形的に見て調査区外にさら1～2単位が存在する可能性があり、当時の集落構成をある程度イメージできる。

次に各遺構の性格についてであるが、後述するようにこの時期の加工段が平地式建物と同様のものであるとすれば、建物は少なくとも3種類に分けることができ、堅穴建物が存在しない点と合わせて、それぞれの機能を検討する必要がある。手掛かりは床面施設や、出土遺物から求めたいが、今のところ決め手を欠いており、さらに検討する必要がある。また加工段の建て替えの回数が多い点、掘立柱建物は柱穴堀方が小型で、方形を指向するものは全く見られない点も、機能・性格を考えるうえで参考となるであろう。その他に当時の集落の南高所で検出された溝上遺構があるが、これが「道」とすれば隣接する淡山池古墳群の同時期の横穴墓との関係が問題となろう。さらにこの道が最終的に



第214図 古墳時代終末A期の集落

土器溜によって廃絶している点は重視しておく必要がある。

出土遺物のうち土師器の甕、甗、土製支脚、移動式竈のセットは、当地域における7世紀代の煮炊き具としてひとつの様式をなすものであり、少なくともこの時期には完成された姿として出現しているようである。しかし、土製支脚と移動式竈はごく少量が認められるだけで、次の時期に比べてやや従的な使われ方をされていた可能性もある。

この時期の集落で検出された「単位」が、後出する集落を考察するうえで一つの基準となるものであり、今後は今のところ実体が明かでない先行する（大谷3期）時期の集落や、場合によっては弥生時代の単位集団との比較も可能かも知れない。いずれにせよ当地域の古墳時代集落の研究上、ひとつの定点を抽出できた点は大きな成果であった。また同時期の横穴墓のグループ構成とどう関連するのか、非常に興味深い点である。

B期（大谷編年5期を中心とする）

この時期の遺構は大谷編年5期の須恵器を指標として抽出したものであるが、集落構成は不明な部分が多い。明確に抽出できたものは浜山池西側の土器溜1、同2のほか、浜山池東半の加工段、原ノ前の建物SB-03で、そのほかに可能性のあるものが浜山池東半の平坦部に集中している。建物は2×3間、1×3間の柱穴配置を持ち、柱穴堀方は小型で確実に方形を呈するものは見られない。加工段は斜面部にわずかに見られるが、これが平地式建物とすれば、浜山池東半の平坦部にも存在していた可能性がある。

以上の点からこの時期の集落の中心は、浜山池東半～原ノ前に移動していることは間違いないようである。その場合、位置的に離れた土器溜1・2をどう理解するかが問題となろう。建物については不明確な部分が多いが、A期のものと同様なタイプのもので構成されている可能性が強いと考えている。その場合A期とB期とで集落の移動自体は意味を持つが、集落構造には大きな変化はなかった可能性が強いことになるだろう。さらに西側の浜山池古墳群には同時期の横穴墓群が存在し、この時期に大きな変化が認められるようであり、今後の整理・報告が待たれる。

C期（大谷編年6期を中心とする）

この時期は大谷編年6期を指標として抽出した集落で、建物はほとんどが浜山池の西半部に集中し、調査区外にあるものは少ないと感じている。建物は全て掘立柱建物で、2×2間、2×3間のほか可能性のあるものとして2間以上×4間のものが認められる。また倉庫と推定される2×2間の総柱建物（SB-17）や、総柱ではないが倉庫の可能性が強い建物（SB-22）なども出現し、A・B期で見られた（平地式建物と関連する）加工段は皆無である。建物柱穴は堀方が大型で方形を指向したものに变化しており、建物規模もやや大型になる傾向が指摘でき、柱間距離に35cmの単位が使用されている可能性もある。これらの建物やその構成状況はA・B期のものと大きく異なり、集落の移動と合わせて非常に注目される現象である。

この時期の煮炊き具は土製支脚・移動式竈の比重が増し、土師器甕も大型のものが出現するなど、総体として定型・規格的な様相を呈している。土器の更新も建物の建て替えと同時に進んでいる可能性があり、これらから古相を呈する一群（SB-11出土土器溜）、新相を呈する一群（SB-22出土土器溜、土器溜3～5）が抽出できる。しかしいずれも廃棄時の組成を示しており、ある時点までの複数の土器型式を含む塊として理解している。

A期で抽出できた「単位」はこの時期の中では積極的に抽出していないが、倉庫や鍛冶工房などが見られることから、単位を超えた機能を持つ建物が存在すると考えている。この点については今後とも検討する必要がある、最大の課題でもある。また建物や煮炊き具にいたるまで格一化している点は、一種の「統一された約束事」が存在したと考えるのが自然であろう。その意味において全国的に普遍的に見られる路面施設を持った古道の出現は重要な意味を持っていると考えている。

D期（大谷編年7・8期を中心とする）

この時期は輪状ツマミを持つ大型の壺が盛行する頃で、調査区内では洪山池の西南端にのみ遺構が認められている。集落はこの地点のほかさらに洪山池の調査区南側に広がっているものと推定されることから、遺跡内では最も高所に移動しているものと判断している。検出した遺構は加工段9と建物SB-16のみで、集落構成等は明かでないが、加工段の再出現と、やや簡略化しながらも方形指向の大型柱穴を持つ建物の継続を重視しておきたい。

須恵器は加工段9において、床面から出土した大型であるが不定型な輪状ツマミを持ち、内面にかえりを持つ壺をD-a期、上層から出土したツマミ形態が定型化し、かえりが消失する壺をD-b期として2時期に細分が可能である。D-b期には糸切り痕跡が残るものもあり、大谷編年ではこれを分離して8期を設定（横穴墓の築造、あるいは追葬の下限を意味する）している。

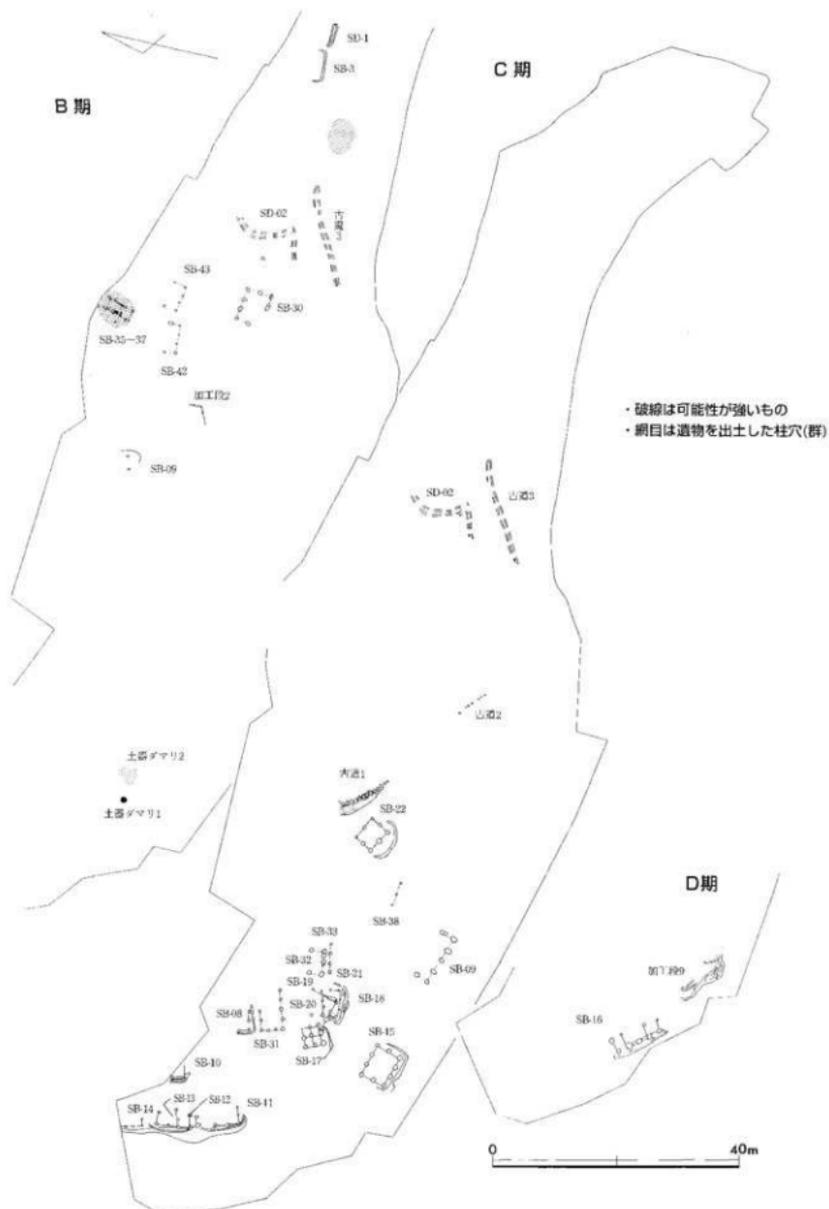
この時期の集落のイメージを得るためには、さらに周辺遺跡の資料を検討する必要があるが、今のところ丘陵高所に立地するものが多い点、大型建物が出現している可能性が強い点など注目すべき現象が見られる。また、煮炊き具等もこの時期のうちは同様の器種構成が続いているようであり注意しておきたい。またD-b期は奈良時代にまたがるものと理解しており、加工段9上層からも回転糸切りを持ち口縁端部が特徴的な一群が認められる。

奈良時代～平安時代

本文中では奈良時代の遺構と平安時代の遺構を便宜的に分けたが、その理由は担当者が当該期の須恵器編年に不馴れであること、集落の実体が大きく、つに分離できることによるもので、ここでは、各遺構や遺物の特徴は本文に譲り、この点をもう少し整理・修正しておきたい。

本文中で奈良時代としたものは、厳密に言えばこれまでの須恵器の編年観で8世紀後半～9世紀とされるもので、平安時代を含むことになる。平安時代としたものは同様に9世紀末～10世紀頃と推定されるもので、平安時代のごく一部にしか過ぎない。しかしこれらを本遺跡の時期区分として奈良・平安と言う時代区分で再分離することにはやや抵抗がある。理由は、この二つの時期が土器様式の面でも、建物・加工段・土坑などの形態や遺構構成などの面でも明確に分離できたからである。もちろん不明確な部分が多いことも事実であるが、少なくとも大きく、つに分離することで遺跡の「顔」を理解しやすくなったことは間違いない。その意味においては先行するD期についても一つの「顔」と理解しておく方が有効かも知れない。今後はこの二つの「顔相」がどのような意味を持ち、どう細分できるか検討して行きたい。

（梅）



第215図 古墳時代終末B~D期の集落

A期で抽出できた「単位」はこの時期の中では積極的に抽出していないが、倉庫や鍛冶工房などが見られることから、単位を超えた機能を持つ建物が存在すると考えている。この点については今後も検討する必要がある、最大の課題でもある。また建物や煮炊き具にいたるまで格一化している点は、一種の「統一された約束事」が存在したと考えるのが自然であろう。その意味において全国的に普遍的に見られる路面施設を持った古道の出現は重要な意味を持っていると考えている。

D期（大谷編年7・8期を中心とする）

この時期は輪状ツマミを持つ人型の蓋が盛行する頃で、調査区内では渋山池の西南端にのみ遺構が認められている。集落はこの地点のほかさらに渋山池の調査区南側に広がっているものと推定されることから、遺跡内では最も高所に移動しているものと判断している。検出した遺構は加工段9と建物SB-16のみで、集落構成等は明かでないが、加工段の再出現と、やや簡略化しながらも方形指向の人型柱穴を持つ建物の継続を重視しておきたい。

須恵器は加工段9において、床面から出土した大型であるが不定型な輪状ツマミを持ち、内面にかえりを持つ蓋をD-a期、上層から出土したツマミ形態が定型化し、かえりが消失する蓋をD-b期として2時期に細分が可能である。D-b期には糸切り痕跡が残るものもあり、大谷編年ではこれを分離して8期を設定（横穴墓の築造、あるいは追葬の下限を意味する）している。

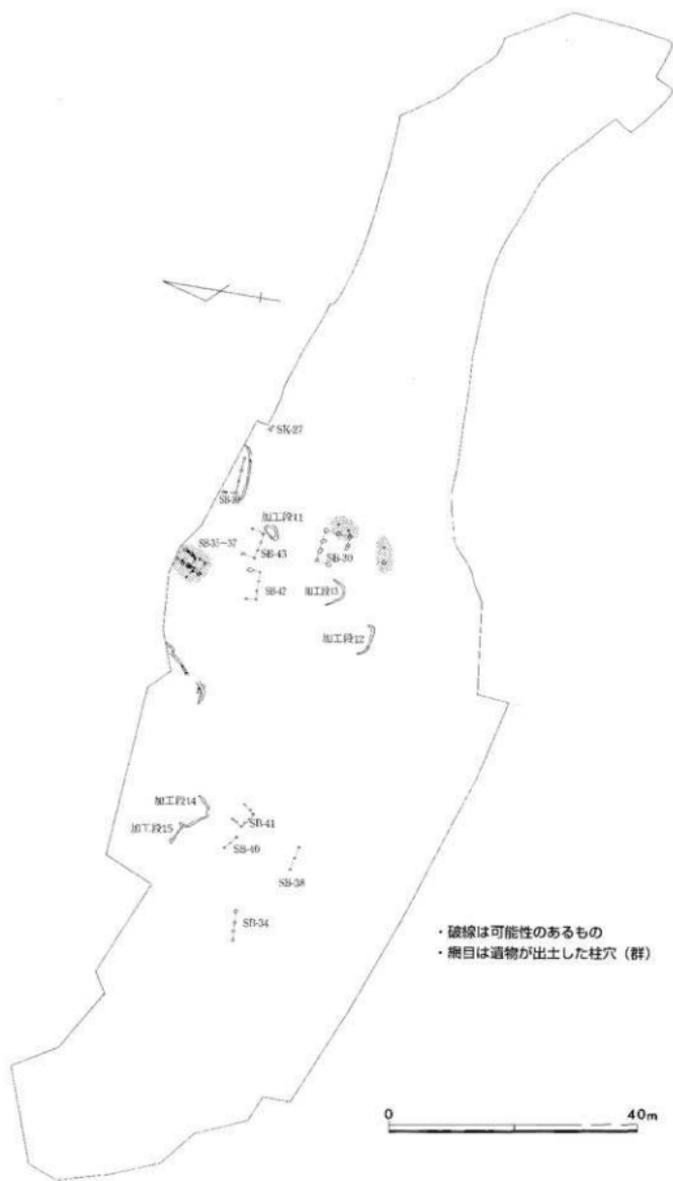
この時期の集落のイメージを得るためには、さらに周辺遺跡の資料を検討する必要があるが、今のところ丘陵高所に立地するものが多い点、大型建物が出現している可能性が高い点など注目すべき現象が見られる。また、煮炊き具等もこの時期のうちは同様の器種構成が続いているようであり注意しておきたい。またD-b期は奈良時代にまたがるものと理解しており、加工段9上層からも回転糸切りを持ち口縁端部が特徴的な一群が認められる。

奈良時代～平安時代

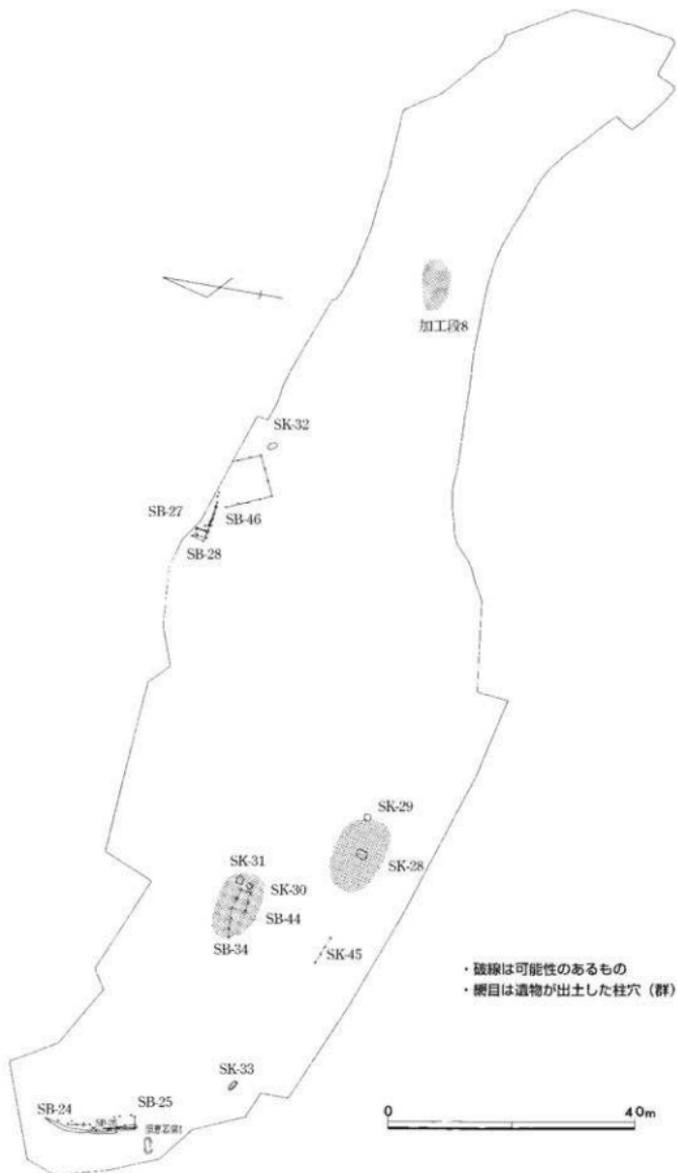
本文中では奈良時代の遺構と平安時代の遺構を便宜的に分けたが、その理由は担当者が当該期の須恵器編年に不馴れであること、集落の実体が大きく二つに分離できることによるもので、ここでは、各遺構や遺物の特徴は本文に譲り、この点をもう少し整理・修正しておきたい。

本文中で奈良時代としたものは、厳密に言えばこれまでの須恵器の編年観で8世紀後半～9世紀とされるもので、平安時代を含むことになる。平安時代としたものは同様に9世紀末～10世紀頃と推定されるもので、平安時代のごく一部にしか過ぎない。しかしこれらを本遺跡の時期区分として奈良・平安と言う時代区分で再分離することにはやや抵抗がある。理由は、この二つの時期が上層様式の面でも、建物・加工段・土坑などの形態や遺構構成などの面でも明確に分離できたからである。もちろん不明確な部分が多いことも事実であるが、少なくとも大きく二つに分離することで遺跡の「顔」を理解しやすくなったことは間違いない。その意味においては先行するD期についても一つの「顔」と理解しておく方が有効かも知れない。今後はこの三つの「顔相」がどのような意味を持ち、どう細分できるか検討して行きたい。

（椿）



第216図 奈良時代の集落



第217図 平安時代の集落

2. 加工段について

洪山池遺跡は丘陵部斜面に立地することから、「加工段」として認識した遺構が多数存在する。これらは遺構としては斜面を掘削して平坦面を形成したもので、その意味するところは何らかの生活あるいは作業空間と考えられる。もちろん建物を建てる場合にもこの「加工段」は必要不可欠のものと云えるが、ここでは柱穴を伴わないものについてのみ気づいた点を指摘しておきたい。

加工段には壁帯溝を伴うものⅠ類と、伴わないものⅡ類とがあり、いずれも貼り床、あるいはそれに類する土層が検出されている。Ⅰ類の壁帯溝については、細部は建物に付属する加工段と同様で、調査時の観察でもほとんど差異は認められなかった。平面形については、Ⅰ・Ⅱ類とも明確な直線線を持ちコの字状を呈すものⅠ類と、それ以外のやや不整形なものⅡ類があり、Ⅱ類にはコーナー部がほぼ直角を呈すものや、鋭角、あるいは鈍角を呈すものなど多様性が認められる点の特徴である。時期的には、Ⅰ-A類が古墳時代中期～奈良時代、Ⅰ-B類が古墳時代終末A期の一部に、Ⅱ類はほとんどが奈良時代のもので、古墳時代終末期に一部Ⅱ-A類が認められる。このうち床面に被熱部が認められたものはⅡ-A類のⅠ基のみである。

Ⅰ類は建物に付属する加工段と同様なものが多く、内部に柱穴を伴わない（もしくは検出しにくい極めて浅い柱穴を持つ）建物を想定することができる。古墳時代終末A期のものはその数において、建物数を大きく上回るものであり、立て替えの回数も同時期の掘り立て柱建物に比して非常に多い点が指摘できる。特にⅠ-B類はその傾向が強く、小型でもあることから比較的簡略な建物を想定しておきたい。

Ⅱ類、特に奈良時代のものについては、他と異なり、加工段の壁面が緩やかに立ち上がるもので、古曾志遺跡群においても同時期の加工段が多数検出されており、⁽¹⁰⁾ 時期的な特徴となるかも知れない。機能的には屋外の作業空間、あるいは非常に簡略な建物としての可能性を想定しておきたい。

「丘陵斜面において生活空間を確保するためには、建物の有無を問わず全て加工段（水平面）を形成しなければならない。」このことは、平地において検出不可能な生活空間を、斜面部では検出可能であることを意味し、平地集落の調査限界を示す一方で、斜面立地の集落の見直しを求めることになり、集落の調査・研究に非常に重要な問題を提起することになる。この点では近年明かとなりつつある群馬県下の「火山灰に埋もれた集落」の調査成果が、斜面集落においても検証できることを意味し、実際に木遺跡で検出された古墳時代終末A期の加工段は、平地式建物に対応する可能性が強いものと考えている。いずれにせよ当該地域では斜面集落の調査例が多く、今後留意すべき点として指摘しておきたい。

3. 古道について

遺跡内で検出した道跡のうち、古道Ⅰは最も遺存状況が良く、廃絶時期が押さえられた点や、路面の状況を細かく観察できた点から、これを中心に若干の考察を行いたい。

古道Ⅰは丘陵斜面を溝状に掘削した後、底面に楕円形の連続したピットを付設したものである。この特徴的な路面施設は、近年道路遺構に関連する施設として認識され始めたものである。県内でもこの路面施設を持つ古道が、甲ノ原遺跡⁽¹⁰⁾（隠岐郡西郷町）・朝酌荒神谷遺⁽¹¹⁾（松江市朝酌町）・福富遺跡⁽¹²⁾（同、乃木福富町）・島田池遺跡⁽¹³⁾（八東郡東出雲町）・奥才古墳群⁽¹⁴⁾（同、鹿島町）・柳Ⅱ遺跡⁽¹⁵⁾（安来

市荒島町)などで検出されているが、この他にも丘陵部や台地上で検出され「溝」と報告されたものの中に、写真では明らかな路面施設が見られるもの(下黒田遺跡⁽⁹²⁾、松江市)も存在し、類例はさらに増加すると考えられる。本例は1列のビットを持っているが、複数列のものや、長楕円のビットを持つものも多く発見されており、「波板状凹凸面⁽⁹³⁾」とも呼称されている。以下ではこの路面施設の機能について考察してみたい。

古道1の「路面連続ビット」は調査時の観察などから次のことが判明している。

- ①ピッチ(心々距離)は等間隔で60cm前後を測る。
- ②ビット底には硬化した灰色系の粘質土が認められ、部分的に砂利が含まれている。
- ③ビット内は廃絶時の堆積土で埋没しており、機能していた時点では硬化面が露出し、連続ビットは「見える状態」であったことが明らかである。

①は人の平均的歩幅に近く、単純に考えれば路面のステップ的な機能が想定できる。平野部の微高地で検出されたものにはピッチが70cm前後を測るものが存在することから⁽⁹⁴⁾、この場合ピッチは道路傾斜角と関係する可能性が指摘できる。しかし、平地でのステップは理解し難いものであり、斜面では結果的にステップとして機能したと考えたほうが良いかも知れない。

②は人の通行により踏み固められて硬化した、あるいは当初から人為的に叩き締められたかのいずれかと推定されるが、その見分けは困難であろう(古道3の石列部分は明らかに人為的なものである)。ただし、いずれの場合も結果的には路面の保護的機能を有していることは間違いないだろう。

③から連続ビットは道路の地下構造的なものではなく、明らかにその表面形態自体がなんらかの機能を有するものと考えられる。この表面形態は平野部の溝状遺構(大半は流水の激しい水路と推定されるもの)底面で見られる陥穴に類似している。この陥穴は調査記録に残すことは希であり、ピッチ等検討すべき点が多いが、明らかに自然の浸食作用によるものと推定され、硬化面も存在しないものである。

以上の点から、路面連続ビットを道路「面」保護のための施設と想定したい。理由はこの表面形態が少なくとも水流に対して極めて安定した形態と推定されるからである。水路底にできる陥穴は浸食作用によって自然に形成、つまり「安定した形態」と考えられ(例えば砂丘にできる風紋も一種の「安定した形態」である)、これを人為的に造ることで道路面を維持することができたと考えたい。これはこの施設が今のところ溝状に掘削された水流に弱い道路にともない、(版築状)盛土道路の路面で見つかっていないこと⁽⁹⁵⁾も整合する。もちろん実験等で検証する必要があるが、現在の山道で豪雨による深い溝状の浸食部分を目にする、部分的に陥穴状の窪みを形成しており、これを人為的に制御(安定)するためには、築造当初からこの形態を造ることが最も理にかなった方法とも言える。当時の道路維持管理は相当の労力を費やしたであろうことは想像に難しくなく、この仮説が正しければ、「波板状凹凸面」は道路維持・復旧作業を大幅に軽減した可能性があるかも知れない。

古道1は、路面に形成された上岩溜の須恵器が7世紀後半ごろ(概ね飛鳥II平行)と考えられることから、その廃絶時期はこれら土器群の使用停止時期と重なる。築造されたのは少なくとも7世紀中葉以前と推定され、7世紀前半期に起きた集落の変革と連動した可能性が強いと考えている。

(梅)

4. 平安時代の土器について

渋山池遺跡では、須恵器窯跡を検出したほか、土坑・加工段からの平安時代の土器の出土が多かった。また、原ノ前遺跡加工段8では、ビット22から一括性の高い土師器類を検出している。これらの土器は白磁等の貿易陶磁を伴っていないことから12世紀以前のものである可能性が高い。この時期は、編年的にも資料の少ない時期であり、実年代は決めがたいが、数種に分かれると思われる。

まず基準となるものは、渋山池遺跡須恵器窯跡出土資料である。窯跡焼成室内から出上で、主な器種としては、口径12cm前後の坏（坏Aと呼ぶ）、口径16cm前後の高台の付く坏（坏C、145-29等）、皿（皿A）が見られ、坏Aは器高4cm辺りを境に低いもの（坏A1、144-12等）、と高いもの（坏A2、144-1等）、皿は器高2cm辺りを境に、低いもの（皿A1、146-53等）と高いもの（皿A2、146-59等）に分けられる。SK-28・30等の土坑出土資料には、坏A1・皿A1は見られず、坏A2・C、皿A2と言う構成になっている。また、須恵器窯跡を切って成立するSB-24~26出土遺物には上記の器種は全く見られず、足高高台気味の坏（坏B2、127-1）、三角形の高台を持つ坏（坏B1、127-3等）、平高台の体部が外傾しない坏（坏A3、127-6等）、に黒色土器A類坏と銅が伴っている。この組み合わせは原ノ前遺跡加工段8の状況に近いもので、これらは近い時期のものであろう。原ノ前遺跡でも包含層中から黒色土器A類坏が出土している。原ノ前遺跡加工段8のビット22から出上する坏は、足高高台気味の坏B2であるが、加工段8付近から出上するものは坏B1で、時期差がある可能性がある。

以上の状況を整理すると、最も古い様相を持つ第1段階として、須恵器坏A1・須恵器皿A1、第2段階に須恵器坏A2・須恵器坏C・須恵器皿A2、第3段階に土師器坏B1他もの、第4段階に土師器坏B2他となる。この中で、第1段階と第2段階、第3段階と第4段階には器形の大きな変化が無く、時間差は短いものと考えられる。

第1段階の資料に近いものに古曾志平迫田4号窯跡⁽³²⁰⁾の資料がある。古曾志の器種構成には、渋山池・原ノ前遺跡の構成の他に口径の広い高台付きの坏がある。第2段階と同様のものに神田遺跡出土資料がある。坏Aの形態は、古曾志平迫田4号窯跡と大きな差は見られないが、坏Cの高台が、退化し、断面三角形を呈している点で、渋山池遺跡出土資料に近い。神田遺跡からは須恵器壺が出土しており、9世紀末から10世紀初頭と考えられている。第3段階に近い器形は、現段階では知らない。第4段階に近いものとしては、池ノ奥2号墳周溝内土壌出土資料⁽³²¹⁾があるほか、鳥取県長瀬高浜遺跡S F76川上⁽³²²⁾の坏が近い形状を呈している。

原ノ前遺跡ビット22出土遺物には、無高台の坏2種類が見られるが、202-4は、ほぼ深碗形になっており、第2段階の坏A2とは大きな差があるように感じられ、この間にもう1形式あると思われる。この間に入るべき資料としては、安来市才ノ神遺跡川上資料⁽³²³⁾がある。坏Aは、器高が非常に高くなり、皿と思われるものも渋山池遺跡皿Aとは異なる器形になっている。才ノ神遺跡の資料は緑釉の皿が見られることから10世紀中頃から後半のものと考えられる。

原ノ前遺跡第4段階の坏B2と池ノ奥・長瀬高浜遺跡資料とは高台の高さ、底部の作りに若干の違いが感じられ、原ノ前遺跡第4段階資料が先行するようと思われる。長瀬高浜遺跡S F76川上資料は11世紀代と考えられている。⁽³²⁴⁾

(林)

註

- 註1. 丹羽野 裕「頂上部で検出された弥生時代後期の堅穴住居跡群について」『陽徳遺跡・平らⅠ遺跡』島根県教育委員会1995年
- 註2. 例として夫敷遺跡山上資料がある。『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI』島根県教育委員会1989年
- 註3. 『庭反Ⅱ遺跡他』湖陵町教育委員会1985年
- 註4. 柳遺跡、竹ヶ崎遺跡、野津原Ⅱ遺跡で検出された布堀建物については、当文化財課（埋蔵文化財調査センター）の各担当者から教示を得た。
- 註5. 『大峰遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会1985年
- 註6. 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V』財団法人鳥取県教育文化財団1983年
- 註7. 『久木・古郡家遺跡発掘調査報告書』鳥取市教育委員会1974年
- 註8. 田嶋明人「北陸の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会1991年
- 註9. 『金沢市下安原遺跡』金沢市教育委員会1990年
- 註10. 七田忠昭「九州の掘立柱建物Ⅱ」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会1991年
- 註11. 池淵俊一「第3章 柳Ⅱ遺跡」『柳Ⅱ遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡』島根県教育委員会1996年
- 註12. 『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会1984年
- 註13. 『徳見津遺跡 陽徳寺遺跡』島根県教育委員会1996年
- 註14. 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会1994年
- 註15. 『古曾志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会 1989年、「オノ峠遺跡」『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』第VI集 島根県教育委員会1983年
- 註16. 足立克己・丹羽野 裕「第6章まとめ」『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会1984年
- 註17. 註12に同じ。
- 註18. 大塚昌彦「火山灰下の家屋」『家族と住まい』考古学による日本歴史15 雄山閣1996年
- 註19. 『甲ノ原遺跡発掘調査概報Ⅲ』隠岐島後教育委員会1982年
- 註20. 『朝野荒神谷遺跡』松江東工業団地内発掘調査報告書』松江市教育委員会1990年
- 註21. 松江道路建設予定地内での調査において検出。調査担当者の柳浦俊一氏から教示を得た。
- 註22. 安米道路建設予定地内での調査において検出。調査担当者の原田敏昭氏から教示を得た。
- 註23. 『奥才占墳群』鹿島町教育委員会1985年
- 註24. 前掲（註11）
- 註25. 『下黒田遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会1988年
- 註26. 近江俊秀「古代道路遺構の構造」『文化財学論集』1994年
- 註27. 『百間川原尾島遺跡4』岡山県教育委員会1995年
- 註28. 近江俊秀「道路伏遺構の構造に関する検討」『鴨神遺跡』奈良県立橿原考古学研究所1994年
- 註29. 『古曾志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会1989年
- 註30. 『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会1987年
- 註31. 『松江東工業団地内発掘調査報告書第1巻』松江市教育委員会1990年
- 註32. 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI』財団法人鳥取県教育文化財団1983年
- 註33. 『オノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷Ⅰ遺跡』島根県教育委員会1995年
- 註34. 橋本久和「埋蔵文化財研究会 特別講演（要旨）『山陰の古代中世土器の概要』」『鳥取県埋文ニュース No.36』鳥取県埋蔵文化財センター1993年

図 版

数字は図面の番号に対応



土坑SK-33出土遺物(1:3)

図版2 (渋山池遺跡)



渋山池遺跡・原ノ前遺跡遠景（手前は渋山池古墳群、西から）



同上（北から）



波山池遺跡調査前全景 (西から)



同 上 (東から)

図版4 (渋山池遺跡)



渋山池遺跡遠景 (手前は渋山池古墳群、西から)



同 上 (北東から)



茨山池遺跡全景 (西から)



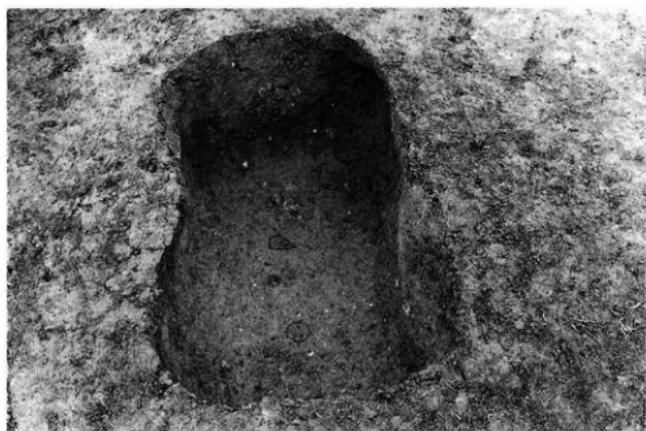
渋山池遺跡全景（東から）



落とし穴SK-03
(西から)



落とし穴SK-05
(南から)



落とし穴SK-06
(西から)



落とし穴SK-09
(南から)



落とし穴SK-14
(南から)



建物SB-01 (北西から)



同 上 (中央穴土層、北東から)

図版10 (波山池遺跡)



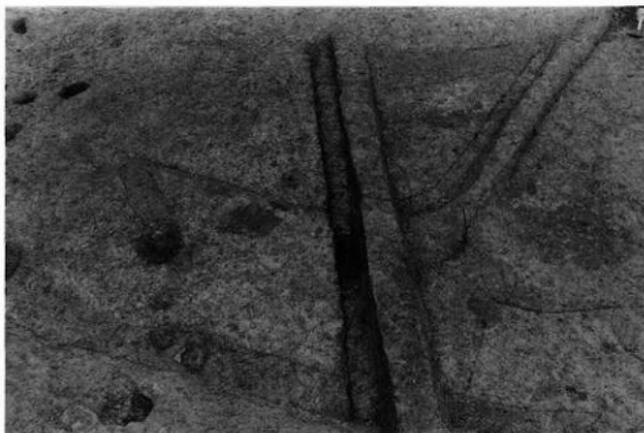
建物SB-02・03 (北から)



上 (柱痕、北から)



建物SB-02 (西側溝断面、北から)



加工段2
(溝検出状況、東から)



同 上
(土層、南西から)



同 上
(完掘状況、南から)



建物SB-04 (完掘状況、南から)



同 上 (西から)